

「国家統合におけるイスラーム教育の役割
：タイ深南部を事例として」

同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程

学位請求論文

グローバル・スタディーズ研究科グローバル・スタディーズ専攻

西 直美

目次

図目次	iii
表目次	iv
深南部の地図	v
序論	1
第一章 深南部問題の構成	11
第一節 マレー・ナショナリズムから「イスラーム主義」へ	11
第二節 民衆イスラームと聖典主義イスラーム	17
第三節 歴史解釈の温度差	24
第四節 暴力の遍在化と無差別化	27
第二章 帰属意識の再生産の場としてのイスラーム教育	35
第一節 国家統合と近代教育	35
第二節 仏教国の中のイスラーム	39
第三節 深南部におけるイスラーム教育の役割	44
第四節 帰属意識の再生産の場としてのイスラーム教育	49
第三章 学校教育と安全保障	52
第一節 仏教寺院を通じた国民教育の普及	52
第二節 公立学校におけるイスラーム教育	57
第三節 私立イスラーム教育の展開	60
第四節 学校教育と安全保障	65

第四章	タイの南、マレーシアの北-----	72
第一節	「パタニ」地域-----	72
第二節	教育機関の多様性-----	78
第三節	レッドゾーン・ヤバ-----	83
第四節	調査内容、問題と解決方法-----	87
第五章	アイデンティティのスペクトル-----	94
第一節	イスラーム教育と帰属意識-----	94
第二節	サーイ・マイとサーイ・カオ-----	97
第三節	2つの母語-----	103
第四節	イスラームを「学ぶ」ということ-----	109
第五節	紛争の激化と教育-----	112
終論	-----	117

図目次

図 1	深南部におけるテロ事件の発生件数と死傷者数-----	15
図 2	ルソの地図-----	84
図 3	アイデンティティのスペクトル-----	96
図 4	帰属意識と教育機関の関係-----	96
図 5	サーイ・マイの影響力の拡大-----	100

表目次

表 1	深南部に関する主な事件（2004 年）-----	16
表 2	タイにおける公教育とイスラーム教育・機関-----	39
表 3	タイの現行教育システム-----	53
表 4	南部国境県特別開発区における教育-----	68
表 5	南部国境県の公立学校におけるイスラーム教育支援プログラム	69

深南部の地図



出典： Human Rights Watch, The National Reconciliation Commission, Thailand

序論

タイ南部国境県は、パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県、サトゥン県、ソクラー県から構成されている。¹タイ深南部が注目されるようになったのは、とくに2004年以降「イスラーム過激派」によるものとされるテロが激化してからである。テロの影響を受けている地域は、パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県の3県とソクラー県の一部（以下深南部）であり、北部マレーシア方言に近い言葉（以下パタニ・マレー語）を母語とするマレー系のムスリムが8割を占めている。彼らは、言語、民族、宗教、慣習において、タイで多くを占める仏教徒とは異なっている。

ムスリムは、タイの人口の5パーセント程度を占めるマイノリティである。²タイのイスラーム社会は、中国系、インド系、チャム系、ペルシア系といった様々な背景をもつムスリムによって構成されており、多様性を特徴としている。中でも、マレー系は最も多数を占める。マレームスリムは、タイの枠組みで見ると民族的、宗教的マイノリティである。一方で、タイ南部、東南アジア、世界を視野に入れると、ムスリムはマジョリティであり、深南部のマレームスリムはイスラーム世界とも深い繋がりをもっている。

深南部では、2004年1月4日にナラティワート県の軍基地から大量の銃器が略奪される事件が起こってから、タイ政府と反政府武装組織との間での抗争が激化している。現在のタイ深南部に当たる地域には、かつて「メッカのベランダ」と呼ばれ、東南アジアにおけるイスラーム教育の中心地として知られていたパタニ王国が存在した。³タイは、列強諸国の東南アジア進出によって、北はフランス、南はイギリスと対峙することとなる。元来シンガポールという要衝を擁するマレー半島に位置する、いわばイギリスの後背地としての意味合いが強かった深南部地域は、1909年のイギリスとの領土確定

¹ この分類は、タイ王国教育省の分類に基づく。タイ南部の私立イスラーム教育を管轄する教育省事務局第12管区の管轄区域も、パッターニー、ヤラー、ナラティワート、ソクラー、サトゥンの5県である。紛争の文脈では、南部3県（パッターニー、ヤラー、ナラティワート）に加え、ソクラー県南部のチャナ、テーパー、ナーターウィー、サバーヨーイ郡が含まれる。

² National Statistical Office 2012. タイにおけるムスリムの人口は、論者によって5パーセントから10パーセントまで広がり存在している。Omar Farouk Bajunid. Islam, Nationalism, and the Thai State. In *Dynamic Diversity in Southern Thailand* edited by Wattana Sugnnasil (Chiang Mai: Silkworm Books, 2005), 4.

³ Irving Chan Johnson. The Buddha on Mecca's Verandah- Encounters, Mobilities, and Histories along the Malaysian-Thai Border (Chiang Mai: Silkworm Books, 2012), 5. 本稿では、パタニとした場合旧パタニ王国あるいはその地域を示すこととし、現在の県をパッターニーと表記する。

条約の制定によって仏教王国であるシャム⁴の領域に組み込まれることとなったのである。タイの支配に反対する勢力による反政府運動の歴史は、この時から始まっている。

タイは、その他のアジア・アフリカ諸国と異なり、列強諸国による植民地支配の経験がない。タイ政府は、深南部を国内の植民地として捉え、教育と開発政策を通じてマレームスリムの同化・統合を試みてきた。タイの同化・統合政策に反発する様々な分離独立派組織の勃興と衰退を経て、1990年代後半には、政府はマレームスリムの統合に成功し、深南部問題はもはや過去のものとみなされていた。

しかしながら、2004年以降の紛争の激化は、純粋なマレー・ナショナリズムに彩られたかつての分離独立運動とは様相を異にしている。⁵ジャングルにおけるタイ政府に対するゲリラ攻撃が中心であった武装組織による戦闘行為は、村落部・市街地で展開されるようになり、女性や子供までもが標的にされるようになった。犠牲者の半数以上が市民であることは、紛争の性質の根本的変化を物語っている。いまだ、武装組織の全貌や目的は明らかになっていないとは言えない。アル・カイダのような国際テロ組織の関与を疑う者もいれば、軍、警察、政治家の関与を信じる者もいる。⁶

一般市民を含む多くのマレームスリムの反発を引き起こしたのは、政府による1921年義務教育法の適用を始めとする、現地の教育への介入であった。以降、分離独立運動をはじめとする反政府運動が生じてきた。深南部には、タイの近代教育が導入される以前からの、イスラーム教育の歴史と伝統がある。近代化の過程で、深南部のマレームスリムは二重のジレンマを抱えてきた。一つはタイの近代教育制度との関係、もう一つはイスラーム教育の近代化という課題である。

アジアの多くの国において、国民教育は国家形成と軌を一にするものであった。教育は、近代国家の基盤である。国民教育の制度としての成立は、基本的にはナショナリズムの教化を目的としたものである。近代国家が公的教育を組織化した背景には、同質的

⁴ タイの旧名。タイ語並びにアルファベット表記 (Siam) では、発音はサヤムである。ここでは、国名がタイに変更される1939年以前についても基本的にタイ、タイ政府と記載する。文脈に応じて必要な場合はサヤムではなく、日本でタイの旧国名として一般的に用いられているシャムという表記を用いる。

⁵ Joseph Chingyong Liow and Don Pathan, "Confronting Ghosts: Thailand's Shapeless Southern Insurgency," (Sydney: Lowy Institute for International Policy, 2010) http://www.lowyinstitute.org/files/pubfiles/Liow_and_Pathan_Confronting_ghosts_web.pdf (Accessed May 20, 2016), Neil J Melvin, "Conflict in Southern Thailand: Islamism, violence and the state in the Patani insurgency" (Stockholm International Peace Research Institute, 2007) <http://books.sipri.org/files/PP/SIPRIIPP20.pdf> (Accessed May 15, 2016)

⁶ 東南アジアのテロの専門家であるザカリー・アブザの一連の論考は、タイ深南部における国際テロ組織の影響を指摘している。例えば、Zachary Abuza. "The Islamist Insurgency in Thailand." *Current Trends in Islamist Ideology* 4 (2006): 89-98. またデズモンド・ボールらは、事件発生件数と事件発生地域のデータから、紛争が長期化している背景として、分離独立派のみならずパラミリタリーや政府軍を含む武装組織間のあるいは個人間の報復行動の結果であることを実証的に示している。Desmond Ball, and Nicholas Farrelly. "Interpreting 10 Years of Violence in Thailand's Deep South." *Security Challenges* 8 (2) (2012): 1-18.

なイデオロギーを育成し、かつ産業化を支えるための一定水準の知的・技術的能力を持った人材を育成する、という要請が内在している。国民教育の歴史的な背景に言及するまでもなく、教育に対する政府の管理は、決してタイに特有の問題ではない。宗教教育も同様である。教育はマレームスリムの反発を引き起こしたきっかけであったのみならず、現在の紛争激化を読み解くための重要な要素の一つでもある。本研究では、深南部問題とは、マレームスリムとタイ政府との間で生じている武装闘争のみならず、社会・政治・経済問題の総称として用いるが、中心的に扱う問題は教育である。

深南部問題に関する先行研究では、深南部問題をタイによる同化・統合政策の歴史として取り上げる傾向がある。また、2004年以降に爆発的に増加したのが紛争研究である。深南部で激化した暴力の応酬をめぐり、ダンカン・マッカーゴ (Duncan McCargo) をはじめとする一連の研究がある。マッカーゴは、1960年代以降タイ政府は反共政策の一環としてマレームスリムの同化・統合政策を本格化したが、マイノリティであるマレーのアイデンティティを強化したため、タイ政府による統治の正統性が深南部地域において問われる結果となり、それが現在の混迷をもたらしているとした。⁷こうした観点からは、深南部の自治に近い特別な制度の確立が重視される。また、マーク・アスキュー (Mark Askew) は、深南部問題は、汚職や権力闘争、政治的暴力の問題が深刻になり複雑化している点を強調している。さらにアスキューは、一般のマレームスリムの間ではむしろタイ人としてのアイデンティティが持たれており、近年の暴力の背景に宗教という要素をみる必要性を指摘している。⁸

深南部の教育について論じた研究では、政治の問題として論じる研究、文化、言語、アイデンティティの問題として論じる研究が中心である。これらの研究は、タイ政府の教育政策に関する研究、深南部の伝統的教育機関がマレームスリムのアイデンティティの再生産に果たしている役割に関する研究の二つに大別できる。いずれの研究動向においても、深南部問題をタイ政府による教育政策の結果から生じた問題として捉える傾向がある。また、タイ政府の深南部地域におけるガバナンスの観点から「なぜマレームスリムは同化・統合されないのか」という統治側の論理か、「なぜマレームスリムは闘い続けているのか」というマイノリティ側の論理で深南部問題を論じる構図が従来の研究では主流となってきた。

そのような中で、紛争激化以後の深南部におけるイスラーム教育に注目した研究が、ジョセフ・リオウ (Joseph Chinyong Liow) の *Islam, Education and Reform in Southern Thailand* である。⁹ リオウはイスラーム教育と深南部における分離独立運動との関連に着

⁷ 代表的なものとして、Duncan McCargo, *Tearing apart the land: Islam and legitimacy in Southern Thailand*. (Ithaca: Cornell University Press, 2008)

⁸ Mark Askew, "Fighting with Ghosts: Querying Thailand's "Southern Fire"," *Contemporary Southeast Asia*, Vol. 32, No.2, (August, 2010): 117-155.

⁹ Joseph Chinyong Liow, *Islam, Education and Reform in Southern Thailand Tradition & Transformation* (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2010)

目し、イスラームに関する論考にも多くの紙面を割いている。深南部ムスリムコミュニティに対するワッハーブ派の影響の拡大を指摘するとともに、イスラームの教え自体が暴力と関係があるという訳ではなく、植民地主義や民族自決といった概念による暴力の正当化がなされていることを指摘した。

深南部問題は、タイ政府による同化・統合政策の結果であることは確かである。マレームスリムが「仏教徒タイ人と自分たちは異なる」という感覚を強く持っているのも明らかである。しかし、深南部問題の歴史において現在の状況が特異なのは、分離独立主義に基づくとされる暴力行為の犠牲者の多くに、マレームスリム市民が占めるようになってきているという事実である。¹⁰タイ仏教とマレーイスラームといった枠組みで議論することの限界がここに露呈している。

暴力が無差別化・遍在化し、暴力を行使する主体が見えにくくなった現在、国家による抑圧的な同化・統合政策という枠組みに加え、新たな視点が必要とされている。従来からのナショナリズムの枠組みに基づく議論では、深南部問題の性質がイデオログの言説に還元されて論じられるケースも散見される。そこでは、深南部は一つの統一体として論じられ、地域内部のダイナミズムが捨象されている。地域の人々を射程に入れた論考であっても、暴力の被害者としての市民、エンパワーメントされるべき弱者としての市民という側面が強調されるため、彼らの生活実践や宗教実践といった要素は等閑視されてしまう。また、深南部を特異な事例として扱うことによって、イスラームという要素が単なる変数の一部として扱われる傾向がある。

2004年以降の紛争の激化と暴力の応酬に際して、深南部の問題は仏教徒とムスリムの間での対立として描かれることも増えた。紛争が激化してから、仏教徒とムスリムの交流が少なくなったというのも一方では事実である。紛争の激化によって生み出された深刻な社会的対立によって、以前は安定していた両者の関係は、恐怖と猜疑心、そして怒りによって閉ざされてしまった。¹¹現在生じている暴力の応酬は、タイ政府の失策によるのか、マレームスリムの強靱な帰属意識によるのか、それともイスラームという宗教によるのか、これまでのナショナリズムに基づく枠組みでは説明できない点も増えてきている。

2001年9月11日にアメリカで生じた同時多発テロ以降の世界では、イスラーム教育に大きな注目が集まった。アフガニスタンのタリバーンが宗教学校の学生を中心に構成されていたことから、宗教学校でのイスラーム教育が安全保障上の脅威として捉えられる動きも加速した。イスラーム教育への関心は、イスラーム教育が前近代的な遅れたものであるのか、あるいはテロリズムの温床なのか、といった問題意識に裏付けられた論考の増加にも表れている。¹²

¹⁰ Deep South Watch <http://www.deepsouthwatch.org/node/728> , Liow, op cit, 8.

¹¹ Liow and Pathan, 2010.

¹² Holger Warnk, “Alternative Education or Teaching Radicalism? New Literature on Islamic Education in Southeast Asia”, *Journal of Current Southeast Asian Affairs*, Vol.28, No.4 (2009), 112.

イスラームの教えと実践を合理化し、改革していく「イスラームの近代化」の流れは、深南部を含めた東南アジア島嶼部イスラーム地域において 19 世紀後半から始まっている。これは、西欧列強諸国による植民地化に直面したイスラーム世界内部からの、改革の動きであった。ナショナリズムの興隆と相まって、宗教、民族の政治化が進んでいった時期でもあった。深南部は、植民地主義、ナショナリズム、イスラーム復興からの影響を受けてきた地域である。1980 年代頃からのイスラーム復興の第二の波と、グローバル化の流れを経て、深南部におけるイスラーム教育は過渡期にある。

2013 年以降のイスラーム国の台頭に見られるような中東地域の混迷は、世界中のイスラーム教徒との共生の問題に発展している。土着の慣習を排除しイスラームの本来の教えに則った形で改革を行おうとするイスラーム復興運動は体制側によって、脅威であるとみなされる場合が多い。しかし、タイではいわゆるイスラーム復興運動には、体制側との協調関係、少なくとも体制側が介入をしなかった事によって進展してきた背景がある。タイの文脈でサーイ・マイ (Saai Mai, タイ語でイスラーム改革派)¹³と呼ばれる人々は、暴力的な行為を用いた反政府運動を行う人々ではなく、暴力の犠牲になっている人々でもない。タイにおけるイスラームの動きは、イスラーム復興運動と体制側との関係性の逆転関係も見ることがある。なお、本研究では、純然たるイスラーム・テロリズム以外の潮流については、イデオロギーとしてはイスラーム主義、宗教社会現象としてはイスラーム復興という用語法に頼るべきだとする山内らの議論に依拠する。¹⁴

本稿では、現地でサーイ・マイと呼ばれていた、イスラーム復興運動の文脈で改革を進めようとする人々のことをイスラーム改革派と呼ぶ。本論で詳述するがサーイ・マイを知るための指標としては、①マレーの土着文化を非イスラーム的と見做しているか、②パタニ・マレー語をイスラームの言葉として重視している否か、あるいは言語に関してはタイ語、英語等でもイスラームに関する知識の伝授が可能であるとしているか、③何をビドア (Bid'ah, アラビア語でイスラームからの逸脱) とするか、たとえば普通科目を教えることを宗教的に問題としているか否か、④イスラームの知識を得る際に何(誰)を参照しているか、という 4 点にまとめられる。なお、イスラーム改革派には、サラフィー主義とタブリーギー・ジャマアト (Tablighi Jamaat, 以下タブリーグ) が含まれる。現地でタブリーグは特殊なネットワークを形成しており、伝統派、イスラーム改革派、タブリーグと分けて論じるべきであるが、深南部における影響力の観点から圧倒

¹³ 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて生じたイスラーム解釈や実践の近代化の試みがイスラーム改革主義 (Islamic Reformism)、1970 年代後半以降のイスラーム回帰現象についてイスラーム復興主義 (Islamic Revivalism) という用語法が一般的である。本研究では、イスラーム復興の担い手であるサーイ・マイを、イスラーム改革派と訳した。Esposito, John L. *The Islamic Threat: Myth or Reality?* (Oxford: Oxford University Press, 1992), 小杉泰 (1994) 『現代中東とイスラーム政治』、昭和堂、小杉泰編 (1996) 『イスラームに何がおきているか』、平凡社。

¹⁴ 山内昌之編 (1996) 『「イスラーム原理主義」とは何か』、岩波書店、9～10 頁。

的な存在感を持つのはサラフィー主義であり、サーイ・マイ（イスラーム改革派）とした時に本稿が扱うのは彼らの動きである。

紛争研究の視点からの深南部研究では、暴力のインパクトが強くならざるを得ない。治安問題として論じられる深南部問題では、過激派と政府の対立に焦点が当てられている。タイ政府のマレームスリムに対する同化・統合政策の一環としての教育政策は基本的に変化していないものの、2004年以降、深南部における暴力の応酬はこれまでにない形で激化している。政府による失策が契機であったとしても、マレームスリム社会で生じている何らかの変容が、深南部問題の性質変化の根本原因である可能性がある。

本研究では、現在の紛争の伏線として、タイ政府とマレームスリム、仏教徒とムスリム、といった二項対立的な構図ではなく、ムスリムコミュニティ内部の多様性に着目したいと考えている。深南部で生じている暴力の応酬の背景を理解しようとする際、紛争激化の結果として強化された治安の観点のみでは不十分だからである。治安問題として論じられている深南部問題では省みられることの少ない、武装組織にも治安部隊にも属さない人々が何を考えているのかを知るにあたって、本研究では現地におけるインタビュー調査を併せて実施した。

土着の慣習に否定的なサーイ・マイ（イスラーム改革派）と、土着の慣習を重視するサーイ・カオ（Sai Kao, 伝統派）に代表される現地のムスリムコミュニティ内部での対立は、当事者であるムスリムの多くが、ムスリムの間で対立や問題はない、と言うのと裏腹に明らかに存在している。これらの対立は、教育という場によく現れている。教育は、ナショナリズムをめぐるイデオロギーが日々再構成されていく場である。教育という場は、一見政治とは無関係なところで動いているマレームスリムたちの日常生活とハイ・ポリティックスが交わる部分でもある。

本研究の目的は、タイにおけるイスラーム教育の分析を通して、深南部マレームスリム社会の変容の実態を探るとともに、タイの国家統合におけるイスラーム教育の位置づけ、役割とメカニズムを解き明かすことである。

本研究では、深南部という呼称を用いる。タイでは、南部マレー地域は、南部国境県（タイ語で *Changwat Chaidaeen Pak Tai*）と呼ばれている。南部国境県にはマレーシアと国境を接するサトゥン県、ソクラー県、ヤラー県、ナラティワート県とパッターニー県が含まれる。¹⁵しかし、2004年の紛争激化以降、とくに紛争地域を指す言葉として、タイ語でサムチャンワット・チャイデーエン・パークターイ（*Sam Changwat Chaidaeen Pak Tai*, 南部国境3県）と呼ばれるようになり、現在に至っている。

深南部（*Deep South of Thailand*）という呼称は、パッターニー、ヤラー、ナラティワートの三県を指す用語として論文やレポートで用いられている。人々の間では、3県（タイ語で *Sam Changwat*）、又は南部国境県という言葉が用いられる。タイ語で深南部に相当する言葉はなく、タイ語では用いられていない。深南部が用いられる場合は、英語が

¹⁵ 正確には、パッターニー県はマレーシアと国境を接していない。

そのまま用いられる。深南部という名称を知っており、かつ用いるのは市民の間でも NGO 等との繋がりがあるエリート層である。国境県はもちろん、深南部という呼称も首都バンコクから見た辺境地域であるという観点を反映したものである。また、外国人やタイ人研究者が深南部という場合、ある種のエキゾチシズムが付随している。強権的なタイ国家と戦う抑圧された人々といったニュアンスや、タイとは異なるマレー文化を強調する地域主義的な側面が付随している。

本稿において主に議論の対象とするのは、2004 年以降に暴力の応酬が激化している南部国境 3 県、パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県とソンクラエ県の一部である。ここでは、あえて県という境界で区切られた領域を用いることで捨象されてしまう要素を取り込むという意味において、より伸縮性のある用語である深南部を用いたい。

調査の概要

本研究で用いるデータは、主に 2014 年の 10 月から 2016 年 2 月の間に、タイ王国において収集されたものである。¹⁶政策決定レベルの分析にあたっては、政府官公庁の資料、統計を中心とし、アーカイブデータや新聞記事も必要に応じて参照した。バンコクにおいては、チュラロンコーン大学図書館、タマサート大学図書館、教育省、外務省、深南部三県においては県、郡、村役所における一次資料収集を実施した。

また、本研究では文献調査に加えて、現地において教育関係者を中心にインタビュー調査を実施した。地域レベルにおける教育状況の分析は、パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県、ソンクラエ県において合計 7 カ月にわたって実施した現地調査のデータに基づく。とくに、ナラティワート県ルソ郡下の公立、私立学校の学校長や教員に対するインタビューによって得られたものである。

筆者はまず、バンコクにおいて先行研究の解読と共に、5 か月後を目途とした現地調査の計画を実施した（2014 年 10 月～2015 年 3 月）。大学図書館、教育省、NGO オフィスでの資料収集を実施するとともに、深南部問題を研究するタイ国内外の研究者や NGO 職員らに相談しながら現地調査計画を策定した。現地における受入担当教員は、深南部教育研究の権威である、ソンクラエナカリン大学パッターニー校イスラーム学研究所のイブラヒム・ナロンラクサケート（Ibrahim Narongraksakhet）准教授であった。

調査期間中、ラマダン月と重なることが予定された（2015 年 6 月 18 日～7 月 17 日）。ラマダン期間中に限っては、深南部マレームスリムの文化や生活に関する参与観察、並びに非構造インタビューを実施した。深南部において予定の突然の変更やキャンセルは日常的に生じるが、この時期インフォーマントとの約束を取る事がいつも以上に困難となったためである。祭などの年中行事をはじめ、ラマダン月の過ごし方、断食の明かし方、断食に対する考え方に始まり、家族観や社会観など、マレームスリム社会の根底を

¹⁶ 2014 年 10 月から 2015 年 10 月までの 1 年間は、チュラロンコーン大学人口学研究所（バンコク）に客員研究員として在籍した。

成す思想に関わる知見が得られた。

2015年のラマダン明けより、調査地であるナラティワート県ルソ郡に16週間滞在しながら、インタビュー調査を実施した。本研究では、質的調査の基本となるインタビュー調査を中心としている。なお、本研究では、深南部に関する研究の多くが利用しているインフォーマントを大学やホテル等に招待するという方法ではなく、全ての学校を訪問し当該学校のインフラストラクチャー並びに村落の様子調査も同時に実施した。現地の私立教育委員会や郡役所が保有するデータは、学校自身に作成させているものが多く、不完全である事例が散見される。自ら訪問する意義は、まず、登録されている書類の情報から得られるイメージと実際の規模の相違や、教室、職員室、運動場、食堂の様子、学校施設の維持管理の状況や問題点、さらに児童の様子と教授風景について確認できる点にある。

調査地における私立イスラーム学校校長と当該学校における一般科目の教員¹⁷、宗教教員¹⁸、私立学校校長と教員、地理的条件に応じて選んだ公立学校の学校長及び教員へのインタビューを実施した。インフォーマントとの信頼関係の構築のため、当該学校には数度訪れるようにした。知人に当該学校関係者がいる際は事前にその人物を通じて学校長の許可を得たが、知り合いなどがいない場合には直接学校を訪れて学校長の許可を得てから調査を実施した。

インタビューは、インフォーマントが英語での実施を指定した時以外は全てタイ語で行った。筆者は、パタニ・マレー語を話すことはできないため、学校訪問に際しては、最低1名の現地マレームスリムのアシスタントの同行が適切であると判断した。大学卒の資格を持っていること、タイ語、マレー語を母語とし、英語での必要なコミュニケーションが可能である、という条件を設定し、アシスタントの選定を実施した。

インタビューを行う際インフォーマントに対しては、日本において日本語で書かれる博士論文のためのインタビューであり、その他の目的に用いられることは無い旨を伝えた上で、名前の公表の可否、レコーダーによる録音の可否をたずねた。レコーダーによる録音が許可された場合、英語の文字起こしは自分で行い、タイ語、マレー語はアシスタントによって行われた。録音が拒否された際は、インフォーマントに確認しながらノートに書き留め、インタビュー終了後ただちにアシスタントとの話し合いの上でまとめる作業を行った。記録された内容については、再度インフォーマントに間違いがないかの確認作業を行った。

¹⁷ タイ語では、先生のことをアチャー(Chan)と呼ぶ。日本語における先生と同様、どのレベルの学校の教員に対しても使うことができ、教職についていない有識者等もアチャーと呼ぶことができる。

¹⁸ アラビア語で教員のことをウスタズ(Ustas, 女性は Ustasa)という。深南部では、一般的に宗教を教える教員のことをウスタズと呼ぶ。一方で、一般科目を教える教員のことをアチャーと呼び分けるのが一般的である。

論文の構成

本研究の目的は、タイにおけるイスラーム教育の分析を通して、深南部マレームスリム社会の変容の実態を明らかにし、タイの国家統合におけるイスラーム教育の位置づけ、役割とメカニズムを解き明かすことである。深南部問題の背景要因の一つとしての教育に着目し、文献調査とインタビュー調査を併せることで、ムスリムコミュニティ内部の多様性を論じる。タイの深南部問題を教育の観点から見た場合、タイ政府は深南部のムスリム人口を排除しようとして来たというよりかは、包摂を試みて来たことも明らかである。2004年の紛争の激化と性質変化の背景について、過激派と政府の対立といった治安問題としての側面を強調するのみでは不十分である。

本研究では、タイ政府によって脅威とみなされてきたイスラーム教育であるが、イスラーム教育は結果的にマレームスリムのタイへの統合を推進したのではないか、という仮説の下で、タイ政府のイスラーム教育政策を分析すると共に、以下の3点の問題意識を念頭に議論を進めていく。①あらゆるナショナリズムに対して否定的なイスラーム改革派の深南部における動向をどのように評価するか、②マレー・ナショナリズムの要素が強いとされる深南部において、人々のタイ政府の教育政策に対する認識はどのようなものなのか、③2004年以降の紛争の激化はどのような変化を及ぼしているのか、である。

第一章では、深南部問題を理解する際の鍵となる概念について、近年の紛争の性質変化、聖典主義イスラームと民衆イスラーム、タイと深南部の関係史、タイの政治構造の特徴に分けて考察する。第一章の考察に基づいて、第二章では、教育とナショナリズム、宗教、深南部研究から自らの研究を位置づける。教育は近代国家の基盤であり、国民教育は国家形成と軌を一にするものであった。タイでは、近代国家の形成過程において、仏教徒である国王の下で、仏教の理念に基づく教育の導入が行われた。先行研究では、こうした事実から、タイの同化・統合政策が深南部のマレームスリムを周縁化し、阻害してきた様子を描き出している。しかし、公立学校におけるイスラーム教育が公式的に認められ、ムスリムとして宗教を实践する権利が認められている現在において、暴力の応酬が泥沼化している背景を考察する必要がある。そこで、タイ政府がマレームスリムの同化・統合を目的に行ってきた国民教育のみならず、タイ政府側とマレームスリム側の双方が実施してきたイスラーム教育に着目する。教育とは、帰属意識を日々生産する場でもある。イスラーム教育がマレームスリムの統合に果たす役割・メカニズムを考察することで、本研究の目的であるマレームスリム社会変容の実態を明らかにすることが可能となる。

第三章では、タイにおけるイスラーム教育政策を歴史的観点から検討する。タイ政府は1909年に深南部を行政上統合した後に、常に上からの抑圧を行ってきたという訳ではなく、マレームスリムのタイ社会への包摂を試みて来た。タイ政府の政策に積極的に応じるマレームスリムの動きが存在したことは明らかである。現在では、私立学校のみ

ならず公立学校でもイスラーム教育が認められるようになっていく。第四章以降では、深南部マレームスリム社会について、現地調査のデータを中心に検討を行っていく。一枚岩的に論じられがちな深南部であるが、地域によって歴史的背景も、地理的環境も異なる。第四章では、深南部の特徴を示した上で、調査地であるナラティワート県ルソ郡を選択した理由を提示する。また、本研究でキーワードとなるサーイ・マイとサーイ・カオの現地調査における判定基準を明らかにし、インタビュー調査の詳細、問題点と解決方法を明示する。

ルソ郡は、深南部において最も強力であるとされる分離独立派組織である BRN (Barisan Revolusi Nasional, 民族革命戦線) の影響力が強く、人々のマレームスリムとしての帰属意識が強い地域として知られる。第五章では現地における教育関係者に対するインタビュー調査について、イスラーム教育と帰属意識、サーイ・マイとサーイ・カオ、2つの母語、イスラームを学ぶということ、紛争が教育に及ぼした影響という、5つのテーマ毎に再構成しながら描く。サーイ・マイ (イスラーム改革派) とサーイ・カオ (伝統派) を2つの極として便宜的に設定することで、人々の帰属意識の多様性をスペクトル上の分布として理解することを試みる。

深南部では、公立学校、私立学校、伝統的教育機関において、イスラーム教育が実施されている。政府が、伝統的教育機関に対して否定的であったことは否定できないものの、深南部におけるイスラーム教育が抱える問題は、学校教育制度内でイスラーム教育を行う事に伴う問題とも密接に関わりあっている。タイのイスラーム教育の展開は、深南部がタイの植民地的な位置付けにあった事実と、イスラーム教育自体の近代化という2つの問題が絡み合っている点で複雑である。

マレームスリム社会で影響力を伸ばすサーイ・マイは、マレー・ナショナリズムから距離を置く傾向がある。タイ語を用いることにも抵抗が少なく、イスラームに関する知識をタイ語で得ているという特徴も存在する。一方で、伝統教育機関が置かれた社会的状況は、それほど変わっていない。イスラーム教育をめぐる問題を検討することで、マレームスリムのタイに対する距離感と共に、イスラーム教育と国家統合との関連も明らかとなってくる。本研究では、マレームスリム社会の変容に裏付けられた暴力の質の変化を、イスラーム教育の多様性から読み解くための視座を構築することを試みる。

本文中の外国語表記に関して、初出の際にローマ字表記を付した。タイ語のローマ字表記は、国際連合の基準に準拠する¹⁹。タイ語のカタカナ表記に関しては参照可能な基準が存在しないため、現地での発音を尊重した。人名・地名に関しては、慣用的に用いられている表記を優先的に用いる。また、本文中に登場する承諾を得られた人物以外は全て仮名とした。

¹⁹ UNGEGN Working Group on Romanization Systems. 2013. "Report on the Current Status of United Nations Romanization Systems for Geographical Names"

第一章 深南部問題の構成

第一節 マレー・ナショナリズムから「イスラーム主義」へ

文化的多元性を特徴としているタイのイスラーム社会の中で、マレー系は最大の民族集団である。マレームスリムの間では、マレー文化を保持していることと、ムスリムとしての純粋性が結び付けて考えられてきた。マレームスリムの一部には、タイ語の学習を宗教的な罪として捉える傾向も、近年に至るまで強かった。²⁰

深南部において、今でも語り継がれる象徴的人物がハジ・スロン・アブドゥル・カディール (Haji Sulong Abdur Kadir Al-Fatani) である。1927年にメッカ留学を終えて帰郷したハジ・スロンは、タイにおけるイスラーム復興運動の流れの最初期に位置付けられる。²¹ハジ・スロンは、土着の信仰と混じりあったイスラームを実践する故郷の人々の後進性を嘆き、教育改革の必要性を訴えた。深南部において初めてのマドラサは、彼によって現在のパッターニー県に建設されたものである。クラス、進級システムを取り入れ、学生を整列させるなどそれまでにはなかった方式を取り入れ、当時のマレームスリム社会に驚きをもって迎えられたことが伝えられている。タイ政府とも密接なかかわりがあり、政治活動も積極的に行ったハジ・スロンの動きは、民衆の支持を集めた一方で、保守的な現地のエリートとの間に対立を生じさせた。²²

1945年日本が無条件降伏したのちのタイ、インドシナ、マラヤ、スマトラ、ジャワ地域はイギリスの暫定統治下に入った。世界各地でナショナリズムが興隆するなか、タイでは、1945年に公布された「イスラームの擁護に関する法律」に基づいて、イスラーム教徒が多くを占める県にイスラーム評議会が設置されていた。1947年、パッターニー県イスラーム評議会議長であったハジ・スロンはタイ政府に対して、自治に関する7つの要求を提出している。

- 1) 南部4県²³の統治に関して全権を保持する、南部4県出身のムスリムを選挙に

²⁰ 橋本卓 (1987) 「タイ南部国境県問題とマレー・ムスリム統合政策」『東南アジア研究』25巻2号、245頁。調査の際、父親が家ではタイ語を話すことを許さなかったと証言するものが相当数存在した。中部タイのムスリムや同じマレームスリムであっても西側のアンダマン海側のムスリムの間では、深南部のマレームスリムに対して融通が利かないというイメージが持たれている。例えば、Wanni W. Anderson. *Mapping Thai Muslims*. (Chiang Mai: Siliworm Books, 2010)

²¹ イスラーム改革派については、本章第二項で詳述する。

²² ハジ・スロンに代表されるような、現地の伝統をイスラームの教えに応じて改革すべきとする改革派と、現地の文化や歴史を護持すべきだとする伝統派との対立は、現在でもタイのムスリムコミュニティにおいて深刻な問題であり続けている。

²³ 南部4県とは、パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県にサトゥン県を加えたものである。アンダマン海側に位置するサトゥン県は、深南部と同様マレームスリムが居住

より任命する。

- 2) 南部4県で集められた税金は、地域のために用いられる。
- 3) マレー語（パタニ・マレー語）による教育を支援する。
- 4) 公務員の80%を南部4県の出身者とする。
- 5) タイ語に加えて、行政におけるパタニ・マレー語の使用を認める。
- 6) イスラーム評議会に対して、南部4県におけるイスラームの儀礼や慣習に関して立法を行う権限を与える。
- 7) 南部4県において、宗教裁判所を別置する。²⁴

ハジ・スロンはその後の分離独立運動に多大な影響を与え、現在でも彼の地域政策に対するアイデアは多くの人々に共有されている。

第二次世界大戦中、当時のプレーク・ピブーン・ソクラーム政権（1938-1944）は日本と同盟を結び、強権的ナショナリスト政策を行っていた。タイ・ムスリムという呼称が用いられるようになり、マレー式の服装やパタニ・マレー語が禁止されるなど、マレームスリムの間でも大きな反発を生じさせていた。反日・反政府地下組織であったセーリータイ（Seri Thai, 自由タイ運動）の活躍によって、タイは戦勝国として第二次世界大戦を迎える。セーリータイを率いていたプリーディ・パノムヨンが新政権の首相となり、ハジ・スロンの描いた深南部における自治は実現されるかに見えた。しかし、共産主義の台頭、そしてマヒドン王の怪死事件の後、タイ国内情勢は大きく変化する。クーデターによって、ピブーンが政権に返り咲く事態を生んだのである。戦後の民主政権のもとで、マレームスリムの権利の伸長を試みたハジ・スロンの試みは、ここに終焉を迎えた。

第二期ピブーン政権（1948-1957）下で、ハジ・スロンはタイの国家統合に対する脅威であるとみなされ、1948年に国家反逆罪で逮捕された（ハジ・スロンの反乱）。4年8カ月の刑期を終えたのち、出所後に行方不明となっている。警察によって、殺害されたとされるものの、遺体はいまだに見つかっていない。深南部の人々をまとめうるカリスマ的人物を失ったことは、タイ政府、分離独立運動双方にとって不幸なことであったのは確かである。

1940年代後半、パタニ王国の伝統的支配者層がイギリス宛に領土回復の嘆願書を提出している。1948年に結成された大パタニ・マレー連合（Gabungan Melayu Patani Raya:

している地域である。ムスリム人口は約6割であるが、深南部地域とは異なり歴史的にタイの王朝との間で通婚を繰り返してきたため、文化圏的には多少異なっている。アンダマン海側のマレームスリムも、パタニ・マレー語を話すが、南部3県ほどではない。2004年以降の深南部紛争の文脈では、サトゥン県が加えられることはない。深南部において多発しているタイプの銃撃事件や爆弾事件は、起こっていないためである。

²⁴ Ibrahim Syukri. *Sejarah Kerajaan Melayu Patani* [History of Malay Kingdom of Patani], (Chiang Mai: Silkworm Books, 1985), 94.

GAMPAR) は国際連合やアラブ連盟への訴えを行ったが、領土回復の見込みは無きに等しかった。当時イギリスにとってタイが生産する米の方が戦略的に重要であり、アメリカにとってタイは同盟国であり反共政策の最前線でもあった。こうして、マレームスリムの権利要求運動は、分離独立運動のラベルが貼られ、徹底的に弾圧されることとなる。この時期、多くが難民としてマレーシアやサウジアラビアに逃れている。多くの分離独立組織は、マレーシアやメッカに本拠地を置き、海外からの資金と現地の人々からの寄付によって運動を続けていた。

マレームスリムに対する同化・統合政策が本格化したのは 1960 年代以降である。政府は当時、国内における共産主義運動のみならず、学生運動や反政府運動を厳しく弾圧していた。その中で、数多くの活動家が南部へと流入し、タイ共産党、マラヤ共産党などの共産主義運動や分離独立運動と合流する状況も生じた。こうした状況に対処すべく政府は、貧困地域であった東北部と並んで、深南部も重点的な開発政策の対象としている。

深南部において、政府が開発政策と同様に注力したのは、教育であった。政府は、伝統的寄宿宗教塾であるポーノを国家安全保障にとっての脅威であるとみなし、管理統制を強化している。1961 年に制定された教育省規則により、ポーノは教育省への登録を義務付けられた。登録されたポーノは私立イスラーム学校として、普通・職業教育やタイ語教育を始めとしてタイ人としての教育が実施されることとなった。政府は未登録のポーノへの法的規制と、登録したポーノへの報奨金といった金銭的なインセンティブによって、南部における教育機関の管理を試みたのである。

既存の教育機関に高度なイスラーム教育が期待できなくなったために、マレーシアや中東への留学生が増加したとされる。²⁵一方、私立イスラーム学校の卒業生は、中学・高等学校の卒業資格が得られるようになった。私立イスラーム学校がマドラサ・システム(クラス・学年制、進級制)を導入したことによって、イスラーム諸国の大学への留学が容易になったという点も指摘されている。²⁶奨学金制度、大学等の入学優先枠や、官吏登用制度における優先的採用によって、深南部各地で官吏になる者も少しずつ増えた。²⁷マレームスリムのタイ社会への同化が進む一方で、深南部においては依然として分離独立運動が支持される状況が存在していた。

ポーノの教育省への登録の義務付けは、人々の大きな反発を生み出した。ポーノやイスラームに関する初等教育を行うタディカは、深南部のマレー・アイデンティティを象徴するものであり、現在でもそれは変わらない。パタニ民族解放戦線 (Barisan Nasional Pembebasan Patani: BNPP)、パタニ統一解放機構 (Patani United Liberation Organization:

²⁵ Joseph Chingyong Liow, 'The Truth about Pondok Schools in Thailand', *Asia Times*, 3 Sep. 2004.

²⁶ 尾中文哉 (2002) 『地域文化と学校—三つのタイ農村における「進学」の比較社会学』北樹出版、110 頁。

²⁷ 橋本、前掲、243 頁。

PULO) やパタニ民族革命戦線 (Barisan Revolusi Nasional: BRN) が設立されたのはこの時期である。いずれも階層組織を特徴とし、「パタニ・マレー」のアイデンティティを掲げ、タイからの分離独立を訴えていた。

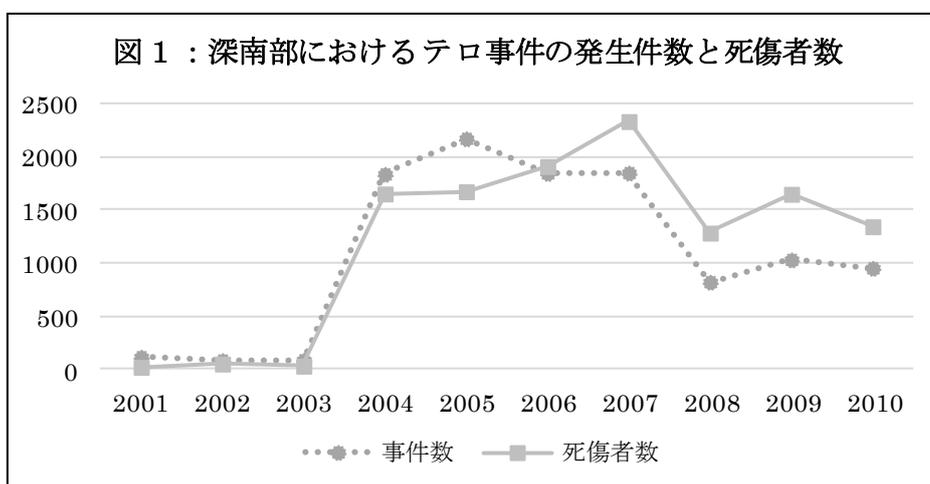
1980年に誕生したプレーム・ティンスラーノン政権は、国内における反政府運動への対応を、それまでの武力的解決から政治的解決へと大きく舵を切った。1981年、開発行政を統括し住民と政府をつなぐ役割を果たす機関として、南部国境県行政センター (Southern Border Provinces Administrative Center: 以下 SBPAC) を設立している(首相命令 8/2524)。国家安全保障局 (National Security Council: 以下 NSC) は同時に、実施機関である市民・警察・軍タスクフォース (Civil-Police-Military Task Force 43: CPM43) を設置した。1980年代、行政と住民との間の対話の増加、マレームスリムの政治参加の拡大、持続的な経済成長によって、しだいに過激な破壊活動は人々の理解を得られなくなっていった。

こうした流れに大きな影響を与えたのが、タイ・マレーシア関係である。²⁸1997年以降マレーシアの政策が地域の安定化を重視する方向へと転換し、タイとの軍事協定が成立したことを受け、分離独立組織の指導者がマレーシア国内で逮捕された。1998年にタイで分離独立主義者に対する恩赦を定めた首相命令が発布される頃には、タイの人々の間では分離独立運動は過去のもの認識されつつあった。民主化の進展とともにムスリムの政治参加は増大し、政治家はムスリム票獲得の重要性を認識するようになっていた。

2004年以降激化した政府と反政府武装組織の間での抗争は、かつての分離独立運動とは様相を異にしている。かつてジャングルにおけるゲリラ闘争が中心であったのが、村や都市で行われるようになり、戦闘方法はより残虐なものとなった。女性や子供を含む市民までもが標的にされるようになり、頭部切断事件などタリバーンの影響を疑わせる事件も生じた。武装組織間の協力関係は流動的であり、上下関係もないようである。宗教、民族アイデンティティ、社会経済格差、政治家の権力闘争、組織犯罪などが様々な原因が指摘される中で、全ての論者が同意するのは、タックシン政権下 (2001-2006) における強権的な政策が紛争激化のきっかけを作ったという点である。

²⁸ 1967年の東南アジア諸国連合 (ASEAN) 設立以降も、タイ・マレーシア関係は度々悪化した。タイはマレーシアが深南部における分離独立運動を支援しているとし、マレーシアはタイがマラヤ共産党のタイ国内における活動を黙認していると考えたためである。マレーシア初代首相トUNK・アブドゥル・ラフマンは、タイへの留学経験を持ちタイ人女性を母親とする人物であった。1971年当時、ラフマン首相はイスラーム諸国会議機構 (OIC) 事務局長を務めていた。ラフマン首相による仲介を得て、タイはイスラーム諸国との連携が可能となり、深南部問題に対する他のイスラーム諸国の介入が防ぐことができたといわれている。また、冷戦終結後の新たな地域主義の流れで、マレーシア、インドネシア、タイ南部を含むサブ地域における経済自由化と ASEAN 地域統合を促進するものとして、1993年インドネシア・マレーシア・タイ成長の三角地帯 (Indonesia-Malaysia-Thailand Growth Triangle : IMT-GT) が発足した。

タックシンの登場は、タイのその後の政治を大きく変えた。これほどタックシンが大きな影響を持つようになったのは、タックシンがタイ政治にとってパンドラの匣であった「王室」というタブーに触れたことが最も大きな原因であろう。



出典：Deep South Watch 等より筆者作成

タックシン率いるタイ愛国党は2001年の選挙で連立政権を樹立し2005年の選挙ではタイ政治史上初めて、単独過半数を獲得して再選している。外交ではアメリカのテロとの戦いに加わり、内政では強い指導力の下で政治経済改革と共に強権的な政策を断行していった。タックシンによって、テロとの戦いと一体化して実施された政策が、麻薬撲滅キャンペーンである。²⁹タックシン首相の深南部問題に対する立場は、明確であった。深南部の問題は、民族主義やイスラーム主義に基づく政治運動ではなく、関わっているのはただの犯罪者であるというものである。深南部では、いわゆる国境地域が一般的に経験する問題を抱えてきたのも事実である。若者の間で蔓延する麻薬問題はかなり深刻であり、人身売買、密貿易など多くの犯罪行為が行われてきた。そして実際、こうした犯罪に関わるものとテロリストとを区別するのはかなり困難である。

²⁹ 麻薬撲滅キャンペーンのもとタイ全土で麻薬の売人、犯罪組織の取り締まりが実施された。麻薬取引容疑者とされた者は、裁判にかけられることもないまま警察関係者によって路上で殺害された。その数は、数千人にもものぼるといふ。麻薬取引に深く関わっていた警察官や政治家が、実際には口封じを行ったり、混乱にまぎれて政敵を殺したりしたのだとも噂されている。麻薬撲滅キャンペーンにおける人権侵害の報告は多数存在するが、主なものに Jonathan Choen. “Thailand Not Enough Graves: The War on Drugs, HIV/AIDS, and the violations of Human Rights,” *Human Rights Watch*, Vol.16, No.8 (July, 2004), <https://www.hrw.org/report/2004/07/07/not-enough-graves/war-drugs-hiv/aids-and-violations-human-rights> (Accessed January 23)が存在する。

2001 年頃から警察と武装組織の衝突が生じていたものの、事件の数自体は多くはなかった。2004 年 1 月、ナラティワート県の軍基地から、大量の銃器が略奪される事件を境にして、深南部情勢は悪化の一途を辿っている。クルセ・モスク事件やタークバイ事件など、タクシン政権の強権的な対応によって多くのムスリムの命が奪われる事件も生じた（図 1）。³⁰

表 1：深南部に関する主な事件（2004 年）

	内 容
1 月 4 日	ナラティワート県内の学校等 22 か所が放火されると同時に、軍基地が襲撃され、兵士 4 名が死亡。403 丁の火器・銃器が略奪される。
3 月 12 日	ムスリムの人権活動家ソムチャイ・ニラパイチット弁護士がバンコクで行方不明となる。警察による殺害が噂されている。（ソムチャイ事件）
4 月 28 日	パッターニー県の歴史的遺産でもあるクルセ・モスクで、立てこもったムスリムに対して軍が銃撃。105 名のムスリムと 5 名の治安部隊が死亡。（クルセ・モスク事件）
10 月 25 日	ナラティワート県において、逮捕された 6 名のムスリムの釈放を求める大規模デモが行われた。デモ隊に対して、軍・警察が発砲し 7 名が死亡、1300 名におよぶ逮捕者が出た。移送過程で、逮捕者のうち 78 名が窒息死した。（タークバイ事件）

出典：筆者作成

深南部紛争の激化がアメリカで生じた同時多発テロを契機とした、アメリカとアメリカの同盟国に対するジハードに触発されたものであるか否かについては、確たる証拠は存在しない。ただ、タイの国家安全保障委員会が認めていたように、中東諸国、インドネシア、マレーシアやフィリピンとの繋がりを持つ、新たなイスラーム組織の存在が背景にあったことは指摘されている。³¹「ポーノを基盤とする」反政府運動であり³²、新世代の反政府運動では宗教が動機として用いられるようになっていることも事実であ

³⁰ 4 月 28 日、パッターニー県の歴史的遺産であるクルセ・モスクに立てこもった軽武装のムスリムに対して軍が発砲、105 名のムスリムと 5 名の治安部隊が死亡した（クルセ・モスク事件）。同年 10 月 25 日、ナラティワート県において、当局により逮捕されたムスリムの釈放を求める大規模デモが行われた。デモ隊に対して、軍・警察が発砲し、7 名が死亡、1300 名にもおよぶ逮捕者を出した。逮捕者を軍基地に移送する過程で、78 名が窒息死した（タークバイ事件）。いずれも、軍をはじめとする関係者の責任が問われることはなかった。タクシン政権の一連の対応は、深南部のムスリムに深い禍根を残している。

³¹ Zachary Abuza, 91.

³² “Muslim Teachers Extend Cautious Welcome to Aree,” The Nation, October 8.

る。それまで無かった仏教寺院の破壊、仏教寺院における僧侶と少年僧の殺害と頭部切断事件(2005年10月16日)が発生すると共に、パタニ・ダルサラーム(Patani Darussalam, イスラーム国パタニ)の構築、カーフィル(Kafir, 不信心者)の排除といった言説が頻繁に用いられるようになったのである。³³

タックシン政権は2005年、国民和解委員会を設置した。以来、各政権下において様々な和平会談が行われてきた。2005年末には、マハティール前マレーシア首相のイニシアティブのもとでランカウイ・プロセスとして知られる会談が実施されている。アフガニスタンのムジャヒディンに参加していたメンバーが設立したパタニ・イスラーム・ムジャヒディン運動(Gerakan Mujahideen Islam Patani, GMIP)、PULO、BRN、といった分離独立派組織の指導者が集まり、自治や教育、開発について議論された。

新世代の武装闘争には、ユーウェーと呼ばれる武装集団(員)が関わっているとされる。ユーウェーは分権的な性格を有しており、様々な組織や分離独立派リーダーと協力関係にあるともいわれる。³⁴上記のいずれの和平交渉にも、ユーウェーと最も緊密な関係を築いているとされる、BRN コーディネート派が参加していない。³⁵一方で、PULOは、一部の亡命した指導者がスウェーデンを拠点として人権NGO等にロビー活動を行っている。2014年以降、BRNやPULOなどの構成員が集まって結成されたMARA Pataniと呼ばれる組織が、政府との和平交渉にあたっている。しかし、政府側の消極姿勢や、BRN内部で武装部門の一部からの賛同を得られていないといった原因で、交渉は行き詰まっている。かつて、武装闘争の正当化原理として用いられていたパタニ・マレーのナショナリズムであった。これをイスラーム主義の浸透と評価するか否かはさておき、少なくとも外見上においては、イスラームの用語を用いた暴力の正当化がなされるようになっている事実が存在する。

第二節 民衆イスラームと聖典主義イスラーム

深南部のイスラーム社会を理解するにあたって、タイ政府の上からの抑圧という観点だけでは見落としてしまう部分がある。それは、イスラーム社会内部からの改革の動きである。マレー社会におけるイスラームは、古いヒンドゥー文化と習合したものである。³⁶19世紀後半のタイで仏教教義の合理化が行われたのと同じ時期に、イスラームの内部

³³ Virginie Andre, ““Southern Thailand: A Cosmic War?” In *Radicalisation Crossing Borders: New Directions in Islamist and Jihadist Political, Intellectual and Theological Thought and Practice Conference Proceeding*, 169-189, Monash University-School of Political & Social Inquiry-Global Terrorism Centre, 2008.

³⁴ Patani Forum. *Kan Cheracha Santiphap Rawang Muslim Malayu lae Rat Thai* [マレー系ムスリムとタイ政府との和平交渉] (Patani: Patani Forum, 2012), 71.

³⁵ Ibid, 79-80.

³⁶ たとえば、マレーシアやインドネシアにおけるアダット(慣習法)について、数多くの研究が存在している。深南部では、主にモスクや伝統的家屋の建築様式にヒンドゥー文化

からも教義の合理化の動きがあった。西欧列強諸国によって次々と分割されるイスラーム世界を前に、イスラームを近代化し、世界のムスリムの連帯を訴える汎イスラーム主義が生じた。1970年代後半のイラン革命やソ連のアフガニスタン侵攻を契機として再び大きな力を持つようになったイスラーム復興運動の波は、現在にいたるまで世界のイスラーム社会に大きな影響を与えている。

イスラーム復興運動研究の権威である小杉は、イスラーム復興運動をイスラーム覚醒という個人レベルにおけるイスラーム化が社会レベルで実践されること、として定義している。³⁷山内はさらに、イスラーム復興運動を、集団レベルで生じる「イスラーム復興現象」と、社会的実践を伴う「イスラーム復興運動」の2段階に分類している。³⁸大塚は、イスラーム復興とは生活の中でイスラーム的と認識される象徴や行為が以前よりも顕在化し、ムスリムの生き方のさまざまな側面により影響を及ぼすようになる現象を指し、急進的なイスラーム主義運動のみならず、それ以外の穏健な宗教復興の諸潮流も包摂するものである、としている。³⁹本研究では、イデオロギーとしてはイスラーム主義を、宗教社会現象としてはイスラーム復興という用語を用いることとする。

深南部並びにタイにおいて、イスラーム復興の担い手であるサーイ・マイ（イスラーム改革派）とよばれる人々が「イスラーム的ではない」として改革しようとしているのはどういった点なのだろうか。タイにおいてサーイ・マイやサーイ・カオ（伝統派）が意味するものは状況依存的であって、民衆レベルにおける理解はかなり曖昧でもある。ここでは、東南アジアのイスラームを特徴づける要素を概観し、本稿でいう伝統派を民衆イスラーム、イスラーム改革派を聖典主義イスラームとして整理していく。

東南アジアにおけるイスラームの拡張に対して、スーフィズムが果たした影響が大きいことはよく知られている。13世紀のアッパース朝のカリフの崩壊以降、急速に東南アジアにおいてイスラームが拡大しており、書物とともに世界中に離散していったスーフィーの影響が指摘される。東南アジアにおけるイスラームは、インド亜大陸からもたらされたとされる。東南アジアのイスラームに柔軟でかつ勢いがあり、スーフィー的である、という特徴を与えたのはこの、インドから来たムスリムであるとされる。⁴⁰ルイス・ゴロンブ（Golomb Louis）は、20世紀初頭に至るまでマレー人の中に正統なスンニ派に属する人々はほとんどおらず、むしろマレーの伝統と親和性のあるスーフィー的神秘主義に彩られたイスラームの実践を行ってきたとしている。⁴¹

の影響を確認することができる。

³⁷ 小杉、1994、147頁。

³⁸ 山内、1996、9頁。

³⁹ 大塚和夫（2000）『イスラーム的—世界化時代の中で』、日本放送出版協会、130頁。

⁴⁰ F.A Noor, "Pathans to the East! The development of the Tablighi Jama'at Movement in Northern Malaysia and Southern Thailand," *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East*, Vol.27, No.1, (May, 2007), 10-12.

⁴¹ Golomb Louis. *Anthropology of curing in multi-ethnic Thailand*. (Urbana: University of Illinois Press, 1985), 9.

植民地期以降現在に至るまで、多くのイスラーム学者によって、スーフィーの伝統が、アダット (Adat, マレー語で慣習、慣習法) をイスラームに取り込んだ元凶であると否定的に捉えられてきた。アダットが、イスラーム法と対置されている事実にも表れている。マレー社会におけるイスラームは、マレー社会に存在する様々な意味世界と混ざり合いながら成立している。植民地期に開始されたアダット研究によって、それまで宗教と渾然一体として理解されていたアダットが、宗教と異なるものとして概念化され、イスラーム的でないものとしてスーフィーの伝統やアダットが捉えられるようになった。ただ、東南アジアにおける初期のスーフィー教団が土着の慣習に寛容であったのは確かであるが、決して土着の慣習を積極的に取り込んだという訳ではないという点も指摘されている。⁴²

イスラーム神秘主義はイスラームを構成する重要な要素である。初期のイスラームの伝播の歴史に限らず、冷戦が崩壊した後の中央アジアやアフリカにおいて、ナクシュバンディー教団やカーディリー教団の影響が大きかったことはよく知られている。⁴³イスラームにおいては、法はイスラーム法学者 (ウラマーウ) が、政治はウマラーウ (王侯、武人) が、宗教はスーフィーが担うかたちで社会が分化してきた。⁴⁴シャリーアとはイスラームにおける法システムであり、宗教ではない。シャリーアを伝達によらずに体現する人々、とはスーフィーを指すとされる。一般のムスリムとは異なり、靈感 (イルハーム) というかたちで神とコミュニケーションを取ることができる神に近い存在であり、一般の信徒と神の間の仲介者であるとみなされる。スーフィズムは、神との間に仲介者を認めないワッハーブ派やサラフィー主義からは、ビドア (イスラームからの逸脱) として排除される。

イスラーム世界の動向を知るにあたってイスラーム復興運動の動きを知る必要があるのと同様に、タイのイスラーム社会を考えるにあたってサーイ・マイについて知る必要がある。サーイ・マイとは、直訳すると新しい側、新しい集団といった意味である。深南部でサーイ・マイと呼ばれる人々の実態は、サウジアラビアのワッハーブ派からの影響を受けた人々を指している。⁴⁵ワッハーブ派とは一般的に、イスラーム改革派に属する人々を貶めるための他称である。深南部においても、“ワッハビー(Wahhabi, アラビア語でワッハーブ派の人のこと)”といわれる際は必ず、否定的なニュアンスが込められ

⁴² Ahmad Fauzi Abdul Hamid, “The Impact of Sufism on Muslims in Pre-colonial Malaysia: An Overview of Interpretations”, *Islamic Studies*, Vol.41, No.3 (Autumn, 2002): 467-493.

⁴³ スーフィーは商人集団とともに布教組織を構成していたとされている。東南アジアにおけるカーディリー教団とナクシュバンディー教団のもつ重要性について論じ論じたものとして、A. H. Johns. Sufism as a category in Indonesian literature and history. *Journal of Southeast Asian History*, Vol.2, No.2, (July, 1961): 10-23, Syed Muhhamad Naguib Al-Attas. *Preliminary Statement on a General Theory of the Islamisation of the Malay-Indonesian Archipelago*. (Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1969)

⁴⁴ 中田考 (2016) 『イスラーム法とは何か?』作品社、158 頁。

⁴⁵ 深南部およびタイにおいて、会話のレベルではワッハビー、ワッハビーヤと呼ばれるが、本稿においてはワッハーブ派という表記を用いる。

ている。サーイ・マイが自らを称する場合は、アハリ・スンナ・ワ・ジャマアト (Ahl Al-Sunna Wal-Jamaa)、アラビア語でクルアーンとスンナ (預言者ムハンマドの言行録) とムハンマドの仲間の行動に従う人々、又はサラフィー (Sarafi) と呼ぶ。

イスラームの歴史を振り返ると、多様性を包摂する解釈と多様性を排除する解釈との間を振り子のように行き来してきた。ワッハーブ派を含むサラフィー主義とは、クルアーンとスンナというイスラームの根本に還ろうという運動で、初期イスラーム以降の中世的なイスラームの伝統を否定している。ここでは、神と人間との間には一切の仲介者が存在しない。スンナ派の中でも神と人間との間に中間的な存在を認める宇宙観を持っていた伝統的イスラームは、世俗化の過程で墮落した結果、求心力を失ってしまったとされている。⁴⁶アハリ・スンナという場合、深南部の文脈では対抗言説としての意味合いが付されているものの、元々のアラビア語ではスンナの徒という意味であり、スンニ派に属する人々の大部分を指し示す言葉として広く用いられている。サーイ・マイという言葉には、否定的なニュアンスと肯定的なニュアンスの双方が含まれており、文脈に応じて読み分ける必要がある。

タイのイスラーム関連団体のなかで最も組織化されているのが、1964年に設立されたタイ青年ムスリム協会 (Young Muslim Association of Thailand) であろう。タイのムスリムが直面する問題に対して幅広く論じており、コミュニティ活動なども行っている。1980年代以降のイスラーム復興のなかで、エジプトのムスリム同胞団などの影響を受けたイスラーム改革派、サラフィー主義的思想をもつムスリムが登場したが、YMATの活動は特定の思想の教化を目指すものではないことが明白にうたわれている。本稿では組織化という観点からは目立たないものの、コミュニティに対する影響力が大きいサーイ・マイについて、とくにイスマイル・ルトゥフィ氏をめぐる現地の状況に注目していきたい。

サーイ・マイに、サウジアラビアの影響があることは確かである。80年代にサウジアラビアに留学したアブドゥルハリム・アフマド・サイシン博士 (Dr. Abdulhalim Ahmad Saising)、イスマイル・アリ博士 (Dr. Ismail Ali) らが、イスラーム指導者らが、タイのサラフィー主義をけん引してきた。なかでも、1989年に留学を終えて帰国したイスマイル・ルトゥフィ・チャパルキヤ (Islamil Rutfi Japakiya) 博士は、タイにおいてイスラーム復興の流れを率いるリーダー的な存在であり、深南部のみならずタイのムスリムコミュニティの中で最も影響力のある指導者の一人である。

ルトゥフィ氏の一族は、パッターニー県にあるバムルーン・イスラーム・ウィタヤー学校 (Rongrien Bamrung Islam Witya) を経営している。私立イスラーム学校として登録される前は伝統的なポーノであり、ルトゥフィ氏の父親は伝統的なポーノでバーボー (Babo, 宗教指導者) として宗教教育を行ってきた。ルトゥフィ氏は学士から博士に至

⁴⁶ 内藤正典、中田考『イスラームとの講和 文明の共存をめざして』集英社新書、47頁。

るまでをサウジアラビアで過ごしたのち、タイに帰国している。⁴⁷現在では、バムルー
ン・イスラーム・ウィッタヤー校は、ワッハーブ派の学校として知られている。⁴⁸ルト
ウフィ氏は、最新のテクノロジーを駆使し、テレビ、ラジオや YouTube といったメデ
ィアにも頻繁に出演している。

氏はタイ南部イスラーム教育基金の諮問委員会会長であり、90年代には国会議員を、
さらにタイ王国のアミール・ハッジ（メッカ巡礼の引率者）を務めた経験も持ち、政府
や王室との繋がりも強い。氏の思想には、サラフィー主義的、ワッハーブ主義的な要素
が反映されている。例えば、人間であるウラマーが無謬であるとは限らないとして、ク
ルアーンとスンナに従うことを基本とすべきであるとしている点や、ムハンマドの知識
や行為をできる限り反映するためのイスラーム教育の近代化といった点は、イスラーム
改革派に特徴的な点である。⁴⁹彼はジハード主義などの戦闘的なイスラームに対する反
対を表明し続けている数少ない学者でもある。サウジアラビアをはじめとする湾岸諸国
からの支援を得て、タイで初のイスラーム大学であるヤラーイスラーム大学（現ファ
ートニー大学）を建設した。

1980年代以降、イスラーム復興の影響を受けて、いわゆる原理主義的な思想を持つ
世代が登場した。これらの世代に特徴的なのが、知識のイスラーム化である。深南部に
おける教育研究を行ってきたリオウ（Joseph Chinyong Liow）が、ルトウフィ氏を評し
て一般的なワッハーブ派とは異なっているとしたのとは対照的に、イスラーム研究者で
あるユスフはルトウフィ氏をサウジアラビア方式のサラフィー主義であるとしている。
⁵⁰ユスフ（Imitiyaz Yusuf）はルトウフィ氏には、ワッハーブ主義に顕著にみられる厳格
な直解主義、違いに対する不寛容、狭量な覇権主義、女性運動に対する制限、非合理性、
芸術的表現に対する敵対的態度、という特徴がみられると評価する。結果として、南タ
イではイスラームのアラブ化が進んだと評価した。さらに、ユスフはルトウフィの偏狭
で民族中心的な世界観に基づくワッハーブ主義は深南部のマレームスリムの民族宗教
的なイスラームの世界観と似ていると指摘している。⁵¹

深南部における私立イスラーム学校から、ソクラーナカリン大学イスラーム学研
究所などの高等教育機関まで、サーイ・マイの影響は主に高等教育機関において見られる。
ルフティ氏自身に対する人々の評価は多様である。ルトウフィ氏自身をワッハーブ派で

⁴⁷ ルフティ教授は、アル・イマーム・モハメッド・イブン・サウド・イスラーム大学から
比較イスラーム法学で博士号を取得している。修士号も比較イスラーム法学でイブンサウ
ド大学から得ており、学士号はマディナ大学から得ている。

⁴⁸ Christopher M. Joll. *Muslim Merit-Making in Thailand's Far-South*, (Springer, 2010), 50.

⁴⁹ Ismail Lufty Japakiya, “Status and Roles of Ulama in the Holy Qur’an and Sunna”, in *Holding
Fast to the Ideology of Harmony among Thais*, edited by Maulid Klang Organizing Committee of
Thailand. (Bangkok: Islamic Committee of Thailand, 2006), 21.

⁵⁰ Yusuf, Imitiyaz. *Faces of Islamism in Southern Thailand*. (Washington DC: East-West Center
Washington, 2007), 12.

⁵¹ Yusuf, 2007, op cit.

サウジアラビアの手先であるとして嫌う人、ルトゥフィ氏自身は認めつつもその周囲にいる者たちを批判する人、ルトゥフィ氏を手放しで評価する人まで様々である。サーイ・マイに関してサウジアラビアの影響が強いことは確かであるものの、資金源の多角化には細心の注意を払っている。⁵²ルトゥフィ氏およびその影響力を受けた人々を代表として、サーイ・マイとタイ政府との関係は良好である。

タイにおいてしばしばサーイ・マイに分類されるのが、タブリーギー・ジャマアトである。これまで説明してきたワッハーブ派と呼ばれる人々とは、イスラームに対する思想も布教の戦略も異なっている。タブリーグは、1927年にイスラーム学者のマウラーナー・ムハンマド・イリヤース (Maulana Muhammad Ilyas Kandhlawi, 1885–1944) により北インドのメワートで始められた。非政治的な宗教運動で、個人の改革と精神的な向上を強調する、宣教を活動の中心に据えた組織である。預言者ムハンマドと彼に献身した教友たちが送った信仰生活を、ムスリムが従うべき規範とみなしている。それを実現するために、モスクにおける一定期間の共同生活を中心とした超俗的な宣教活動を行っている。⁵³

タブリーグは、1920年代にパキスタン系の移民によってバンコクで設立されたとされるが⁵⁴、タブリーグが拡大したのが第二次世界大戦後であることを考慮すると、タイで活動を開始したのはハッジ・ユースフ・カーンが居住地であった北部ターク県のメーソット郡で宣教を始めた1966年という説が有力であろう。⁵⁵タイにおける南アジアからの移民は、1855年のボーリング条約締結後に増加した。英領インド圏からきた南アジア系移民は、タイにおける治外法権が認められると共に、1909年の英国シャム条約の後には、タイ国内における自由な交易が認められている。南アジア系移民のネットワークの存在が、タブリーグの拡大の背景にあるといえよう。深南部におけるタブリーグの影響は、北部マレーシアとくにケランタンからの影響も考慮しなくてはならない。タブリーグにおいて重要な役割を果たしたとされるのが、パキスタン系移民で医者ハイダール・アリ・タジュディン (Haydar Ali Tajuddin bin Fateh Muhammad) である。彼の父は

⁵² イスマイル・ルトゥフィ教授に対するインタビュー (ヤラー県スロン町、2014年11月13日)

⁵³ タブリーグの6つの柱は、Kalimah (アッラーの他に神がないことを証言する。ムハンマドはアッラーの使者であると証言すること)、Salaat (一日5回の祈り)、Ilm と Dhikr (知と、神の名を唱え、思念を神に集中すること)、Ikram-i-Muslim (同胞であるムスリムに対する敬意)、Ikhlas-i-Niyat (意図と真摯さの修正、すなわち自分の人間としての行いを全てアッラーと自己改革のために実施しなくてはならない)、Tafrih-i-Waqt (時間を割くこと、すなわち布教のために自分の時間を使うこと) とされている。新しいメンバーは、4か月、あるいは40日、自己改革とイスラームの知識を学ぶことに費やさなければならぬ。Jan Ali, "Islamic Revivalism: The Case of the Tablighi Jamaat", *Journal of Muslim Minority Affairs*, Vol.23, No.1 (April, 2003): 173-181.

⁵⁴ Raymond Scupin, "Muslim Accommodation in Thai Society", *Journal of Islamic Studies*, Vol.9, No.2, (July, 1998): 229-258, 245.

⁵⁵ Chitmuat, Saowani. 1988. *Klum Chatphan: Chao Thai Muslim* [Ethnic Group: Thai Muslim People], Bangkok: Kongthun Sangaruchiraamphon, 239.

衣類商人で、英国保護領時代から北部マレーシア、深南部にもネットワークをもっていた。1974年、ハイダールによって、ケランタンにタブリーグ活動が紹介されている。1977年、ナラティワート県にある国境の町、スンガイコーロックにタブリーグの活動拠点としてマスジッド・ムハンマディヤが設立されている。深南部においては、タイに帰化したパキスタン系タイ人によって運営されるパキスタン・モスクがタブリーグの活動拠点となっていた。⁵⁶

世界的に支持を広げていったタブリーグは、1980年代以降のタイ経済の発展やタブリーグに対する国家の寛容な姿勢を背景にさらに支持者を増やし、活動地域も都市部から地方へと拡大した。⁵⁷タブリーグというイスラーム改革運動の担い手となっていたのは、都市・中間層であった。世界中で活動を行っているタブリーグ教団の特徴としては、政治には一切関わらず、非ムスリムや実践を行わないムスリムに対するイスラームの基本的な知識の伝授を行っていることである。

リオウは、南部におけるタブリーグの活動は、機動的、分権的かつ国際的であるとしている。⁵⁸タブリーグのネットワークは800のモスクと、127のハラカ（アラビア語で円を意味する。ここでは、宗教の学習グループを指す）が含まれているといわれる。⁵⁹彼らは、ムスリムコミュニティとの直接的な接触を基本としており、明確に非政治を掲げている。宗教的な論争を避け、ムスリムとしての基本を伝える草の根運動である。したがって、イスラーム復興運動ではあるものの、ワッハーブ派のように既存の体制と結びつくことは稀である。タブリーグは家族を捨てて布教活動をしている、来世にしか関心がないと、現地では否定的に評価される事もある。深南部におけるタブリーグは、サーイ・マイとされる人々もサーイ・カオとされる人々も含まれている。

サーイ・マイの特徴としては、パタニ・マレーの土着文化をイスラームではないとして否定する傾向にある点、そして西欧を起源とする近代テクノロジー教育をイスラーム的な観点からも肯定的にみる点である。知識のイスラーム化、あるいはイスラーム的に読み替える作業を経ることによって、理論的・感情的に矛盾をきたすことなく西欧、あるいはタイの近代的なシステムに参入、対抗していこうとする思想が背景にあると考えられる。サーイ・カオ（伝統派）は、サーイ・マイに対応する用語である。サーイ・カオに属すとされる人は、伝統的な教育機関の関係者である。サーイ・マイに属さない人を、サーイ・カオであるとも定義できるが、中にはサーイ・クラーン（中立派）を自称

⁵⁶ Joll, 2010, 48.

⁵⁷ Alexander Horstmann, "The Inculturation of a Transitional Islamic Missionary Movement: Tablighi Jamaat al-Dawa and Muslim Society in Southern Thailand," *Journal of Social Issues in Southeast Asia*, Vol. 22, No.1 (April, 2007): 107-30.

⁵⁸ Joseph Chinyong Liow, "Local Networks and Transnational Islam in Thailand (with emphasis on southernmost provinces), in *Transnational Islam in South and Southeast Asia: Movements, Networks, and Conflict Dynamics*, (Singapore: National Bureau of Asian Research, 2009), 196.

⁵⁹ Liow, 2009, 197.

する者もいる。伝統派と中立派は、ほぼ重なりあっている状況である。⁶⁰

サーイ・カオの人々は、サーイ・マイを否定的に捉えるという共通点が挙げられるが、最も大きな特徴としては地域の伝統に重きを置いているという点である。パタニ地域では、ラマダン月の終わりのハリラヤ (Hari Raya) は、マレー語でクーボーと呼ばれる墓地を訪れて皆で食事をしたり、親類縁者の家を訪ねる。ハリラヤの前後3日程度は休暇を取って家族で過ごすのが一般的である。そして、ハリラヤの1週間後、ラーヨーネー (Hari Raya Enam) と呼ばれる日も祝われるのが一般的である。ラーヨーネーに関しては土着の慣習であり、サーイ・マイはイスラームではないと否定している。しかし、サーイ・カオの人々は、イスラームの教えに反していない限り、イスラームにはない現地の慣習を実践することは構わないと考える。

東南アジアのマレー社会において、民衆イスラームと聖典主義イスラームという言葉で論じられてきた内容が、同様の緊張感をよく示している。本稿で伝統派と呼んでいる人たちのあり方と対応する民衆イスラームとは、よりイスラーム的でないことを表立って非難し、相手に恥をかかせることをタブーとするイスラームの在り方である。一方で、イスラーム改革派と対応する聖典主義イスラームとは、ムスリムの日々の実践や理念において、よりイスラーム的であることを賞賛し、自らも絶えずそれを目指そうとする志向性のことを示している。「よりイスラーム的」であることが賞賛される一方で、「よりイスラーム的」でないからといって非難されないというのが、伝統的なマレーイスラームの在り方である。このような両者のダイナミズムは、社会構造のみならず、マレームスリム一人ひとりのうちにも存在している。⁶¹

第三節 歴史解釈の温度差

歴史学者は、東南アジア大陸部で初めての国民国家、スコータイ王朝の建設を行ったのが中国南部から移動をしてきたタイ族であるとしている。スコータイ王朝はその後、アユタヤ王朝 (1351-1767)、トンブリ王朝 (1767-1782)、チャクリ王朝 (1782-現在) と続き現在に至っている。タイの歴史教科書では、深南部にあったパタニ王国はスコータイ王朝時代から、タイの影響下にあったとされている。

民族名であるところのタイ (Tai) とは、今日のタイ人、ラオス人、ミャンマーのシャン族、より広域的にはベトナム、中国を含む地域に居住するタイ族を意味している。⁶²13世紀以降、様々な民族背景を持つ各王朝下で、中国系などとの混交を経て、現在の

⁶⁰ エジプト、スーダン、その他のアラブ諸国で学んだ人々は、タイ政府の教育政策に対して批判的ではあるものの、普通科目教育と宗教教育双方の必要性については認識している。興味深いのが、パキスタン、インド留学経験者である。とくにパキスタンで宗教教育を治めた者は、よりマレー・ナショナリズムに偏る傾向が存在していた。

⁶¹ 多和田裕司 (1993) 「イスラーム化と社会変化」『民族学研究』58巻2号、131頁。

⁶² David K. Wyatt, *Thailand: A Short History* (New Heaven: Yale University Press, 1984), 2

タイ民族 (Thai) が構築されてきた。19 世紀以降の近代的な国民国家建設の過程で、タイは「プラマハーカサット (国王)・サーサナー (宗教)・チャート (国民)」の 3 本柱の下で国家統合を進めてきた。ここでチャートの意味するところは、タイ民族 (Thai) であった。

現在のタイ王国の領域へのイスラームの到来に関しては、スコータイ王朝以前に、すなわち中国南部からのタイ族 (Tai) の移動が開始される以前に、既に確立されていたことが指摘されている。⁶³20 世紀の前半、バンコクにおいて深南部はタイではなく「ケーク」として知られていた。チャクリ王朝化の文献において、深南部のマレームスリムたちは、ケーク (Kheak, 客)、ケーク・ムスリム (Kheak Muslim, ムスリムの訪問者)、ケーク・マラユ (Kheak Malayu, マレーの訪問者) と記されている。⁶⁴

明治天皇とほぼ時を同じくして即位したラーマ 5 世 (チュラロンコーン、1853-1910、在位 1868-1910) の「チャクリ改革」のもとで、タイは近代国民国家としての道を歩み始めた。当時、インドシナを次々と植民地化していったフランスと、マレー半島を植民地化していったイギリスと対峙するかたちで、タイは近代国民国家システムに基づく「線」による領土確定が課題となっていた。1902 年、かつて深南部に存在したパタニ王国は、シャム王国の直轄統治下に置かれ、1909 年に英国シャム条約によって領土変更が行われた。それまで、シンガポールという要衝をもつマレー半島におけるイギリスの後背地としての意味合いが強かった深南部は、仏教王国シャムの領土となった。深南部における分離独立運動の歴史は、ここから始まっている。

東南アジアにおけるマンダラ国家と呼ばれる伝統的国家では、領域に基づかず、王都 (点) を中心とした円状の緩やかな統治体制が築かれていた。⁶⁵王は諸侯と主従関係を結ぶことで各地を支配していた。各地域は諸侯によって治められていたのである。マレー王国パタニは、100 年ほどにわたりアユタヤ王国の朝貢国であった。山田長政の伝説で知られるリゴール (現在のナコンシータンマラート) は、アユタヤ王国の南部における拠点であった。アユタヤがパタニを支配していたとする研究者もいるが、アユタヤがパタニに対して政治的、文化的に強力な影響力を及ぼしていたという記録はほぼ見当たらない。⁶⁶スルタナ・ヒジャウ (Sultana Hijau, 1584-1616) が、アユタヤにブンガ・マス

⁶³ Imron Maluleem, *Wikrok Kwam Khatyaek Rawang Rathaban Thai kap Muslim nai Prathet Thai* (Bangkok: Islamic Academy, 1995), 3-4

⁶⁴ Chaiwat Satha-anand, “Buranakarn Thang Sangkhom Kap Khwam Mankhong Khong Rat [Social Integration and National Security]” in *Roirauw Nai Sangkhom Thai? Buranakarn Kap Khwam Mankhong Khong Chart [Cleavage in Thai Society? Integration and National Security]*, ed. Khusuma Sanitwong Na Ayudhya (Bangkok: Faculty of Political Science, 1988), 67

⁶⁵ オリバー・ウォルターズは、1982 年に出版された *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives* の中で、植民地期以前の東南アジアにおける政治権力を説明する概念として「マンダラ」を提起した。同様の概念として、スタンレー・タンパイアは 1976 年に *World Conqueror and World Renouncer : A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background* で銀河政体 (galactic polity) を提唱している。

⁶⁶ Wan Kadir Che Man, “Patani: From Sovereign Sultanate to Subnation”, *Journal of Muslim*

(Bunga Mas, マレー語で金の花)⁶⁷を送った記録があるものの、宗教実践や文化的な側面では独立状態を保っていた。パタニ王国は、14世紀中頃には、マラッカ王国とも朝貢関係にあったとされている。

マレー系のスルタン王国パタニは、パタニ王朝とケラントアン王朝とに分けられる。1547年から1688年までの間続いたパタニ王朝では、5人のスルタンと4人のスルタナ(女王)によって統治された。ケラントアン王室の血筋であるスルタナ・クニンが跡継ぎのないままに亡くなると、ケラントアン王朝から支配者を迎えることとなった。⁶⁸

パタニとアユタヤとの朝貢関係は、1767年にアユタヤ王国がビルマによって滅ぼされるのと同時に終焉を迎えた。1782年にチャクリ王朝を開始した初代国王ラーマ1世は、パタニを併合している。現在のクルセ・モスクのある地域にあったパタニの王宮や町、港はシャム軍によって完全に破壊された。1791年から、パタニはソクラーによって統治されることになるが、ほぼ完全な独立状況を保っていた。⁶⁹

マンダラ国家が西欧列強の植民地化により解体されていく過程で、国境線が生み出され、王都に代わって首都の中央政府による中央集権的な支配が行われるようになる。深南部地域は、タイ王国における東北部(イサーン)や北部(ラーナー)と同様の辺境として、同化政策の対象となっていった。ラーマ5世の統治下において、近代国家の要となる官僚育成と国民教育のため、近代的な教育制度の構築も行われている。タイの場合、仏教徒である国王のもとで国家統合が進められた。チュラロンコーンの政策はフランスとイギリスによる植民地化を防ぐための、国内植民地化(Internal Colonialism)政策であると説明される。⁷⁰

国民国家形成とそれに伴う近代化の過程で、宗教の合理化と規格化が進められた。ラーマ5世は、1902年仏教サンガ法を施行し、全国の僧侶に対して寺院への登録を義務付け、中央を頂点とする階層組織に組み込んでいった。さらに、全国の仏教寺院を中心として、男子に対する国民教育を開始した。1909年に英国シャム条約(Anglo-Siamese Treaty)によって、領土が確定された後も北部マレー州との民族、宗教的、そして地理的な一体性は残った。近代国家を形成するタイのナショナリズムと、マレーのナショナリズムは、この新たな境界の上で衝突することとなる。⁷¹

ラーマ5世の後継者であるラーマ6世(ワチラーウット、1881-1925、在位1910-1925)

Minority Affairs, Vol.14, Issue 1-2 (January, 1993): 116-123, 117.

⁶⁷ ブンガ・マスは、クダ、ケラントアン、トレンガヌ、パタニ地域の各州のスルタンが3年毎に、当時のサヤーム王に対して友好関係を示すために送ったものである。ブンガ・マスの習慣は、北部州がシャムからイギリスの保護領下に入るまで続いた。

⁶⁸ Che Man, 1993, 117.

⁶⁹ 黒田景子(2014)「ソクラーの発展とパタニの衰退—19世紀におけるマレー半島部港市の淘汰と海路の再編—」『鹿児島大学文学部紀要人文学科論集』79号、9-26頁。

⁷⁰ Wan Kadir Che Man. *Muslim Separatism: The Moros of Southern Philippines and the Malays of Southern Thailand*. (Singapore: Oxford University Press, 1990), 7.

⁷¹ Joll, 2010, 38.

は、「民族、国王、仏教」という国家の柱となるアイデンティティを構築した。⁷²1921年に義務教育法が設定されたものの、農村部では1930年代頃に至るまで公教育が普及しなかった。学校教育が徴兵制と結びつけられて考えられたことに加え、教育の必要性自体への無理解が背景にある。パタニ地域も例外ではなく、マレームスリムの間でタイの公立学校への進学する者はなかった。

1911年の国王による布告によって、結婚と相続に関するイスラーム法の適用は認められていたが、司法省は1929年にイスラーム家族法と相続法のタイ語訳を命じている。⁷³裁判におけるタイ語の使用に対して、マレームスリムは非協力的であった。タイ語の使用を進めることによって、タイ語をイスラームの言葉として確立しようとしているという疑念があったとされる。⁷⁴1932年、立憲革命によって絶対王政が廃止され、タイは立憲君主制国家となり、モントーン制度は廃止された。1938年に軍事クーデターのちにピブーン政権が成立すると、数々のナショナリスト政策が実施された。

タイ国民国家形成の中で、タイ民族主義的イデオロギーが推進された時期は、ラーマ6世（在位、1910-1925年）とピブーン政権期（1938-44年）である。ピブーン政権期では、ラッタニヨム（Rattaniyom, 国民信条）が公布された。ラッタニヨムにおいては、シャムからタイへと国名が変更され、服装規定やタイ・ムスリムという呼称の使用などが強制された。ここで目指されたのは、西洋化であったといえる。「地位が高い人の場合は、公務員用のシャツを使用し、靴下と靴も着用しても良い。このような形にしたら、世界共用の形に早く達することができる。チョンカベーン（筆者注：タイ族の民族衣装）の使用を復活させない方がいい。元の慣習に反する上に、南部のパッターニー等タイの中でも使用できない地域があるからである」。⁷⁵

1945年、プリーディ・パノムヨン率いる民主政権のもとで、ピブーンのナショナリスト政策は撤回された。同年制定されたのが、「仏歴2488年イスラームの擁護に関する勅令」である。タイの国王をイスラームの擁護者として位置づけると共に、チュラーラ

⁷² W. F. Vella, *Chaiyo! King Vajiravudh and the Development of Thai Nationalism*, (Honolulu: University of Hawaii Press, 1978). サーサナーの意味するものについては、タイ王国下の全ての宗教と仏教という意味の双方を含んできたが、この時点では仏教を意味していたことが明らかである。

⁷³ 裁判所で適用されるイスラーム法として「家族及び相続に関するイスラーム法原則」が策定されたのは、1941年であった。法律としての効力は無いものの、イスラーム法が適用される案件に関して、現在でも参照されている。今泉慎也（2003）「第8章 タイ司法裁判所におけるダト・ユティタム（イスラーム法裁判官）の役割」『アジア諸国の紛争処理制度』、225-256頁

⁷⁴ Surin Pitswan. *Islam and Malay Nationalism*, 136.

⁷⁵ 服装規定に関しては、上からの要請ではなく、下からの要望があったといわれている。ピヤワン・アサワラシャン（2007）「ピブーン政権期（1938~44年）における服装政策」、『アジア・アフリカ地域研究』第6-2号、319頁。タイ族の民族衣装であるチョンカベーンは、現在に至るまで、公務員並びに、学校教育現場で着用が行われる事がある。引用文にも示されているように、この時期に目指されたのは、復古主義的な改革ではなく、いわば西洋化であったという。

一チャモントリ（Chularachamontri）を頂点とする中央イスラーム委員会、その下に県イスラーム委員会が設置され、全国のムスリムを管理する階層的な組織が構築された。アユタヤ朝以降イスラームにかかわる事項について国王に助言を行ってきた、チュラーラーチャモントリという役職を復活させてタイのイスラーム共同体の頂点とし、全国のムスリムのモスク単位の管理が目指されたのである。⁷⁶ 仏教におけるサンガ法と比較されるものの、一定の手続きを経てサンガ組織に加入する出家者と異なり、イスラームの場合イマームといえども一般人である。モスク単位でのムスリムの管理は、ほぼ不可能に等しかった。⁷⁷

タイ政府とマレームスリムとの間には、タイとパタニ王国との歴史的関係についての解釈に温度差が存在している。マレームスリムにとってパタニは独立したスルタン王国としての栄光の歴史と捉えられる一方で、タイの歴史の中でパタニはタイの支配下にあった朝貢国であった。また、アユタヤ朝以降助言を行ってきたのはペルシア系のシーア派ムスリムであったことや、1945年以降チュラーラーチャモントリを務めたムスリムの中にマレー系がいないことからわかるように、チュラーラーチャモントリは、タイ王国におけるイスラーム共同体のリーダーであるとはいえ、政府の諮問組織としての役割しかもたない。マレームスリムに限らず、一般のムスリムに及ぼす影響は表層的である。

第四節 暴力の遍在化と無差別化

1990年代以降に本格化したタイの民主化の流れに、2006年のクーデターが終止符をうった。タイでは、絶対王政を打倒した1932年の立憲革命以降、未遂を含めると30年以上のクーデターが生じている。2014年5月には、2006年以降深刻化してきた国内政治対立を解消するためのクーデターが生じた。

タイでは、国王は国家統合の要であり、絶対不可侵かつ法、政治を超えた存在として君臨している。とくにラーマ9世（プーミポン・アドゥンヤデード王、在位：1946–2016）は、第二次世界大戦後のタイにおいて政治的にも重要な役割を果たしてきた。第二次世界大戦後の歴史の中で、国王と、王室の守護者と自らを位置付ける軍という関係が構築された。国政を代表する首相に関しては、民主的な正当性よりも、君主の権威を脅かさないことが重視されてきたといえる。

⁷⁶ これに加え、深南部では、「仏歴2489年（1946年）パッターニー県、ナラティワート県、ヤラー県及びサトゥン県におけるイスラーム法の適用に関する法律」が適用されている。タイにはシャリーア裁判所は存在しないものの、同法によってムスリムを当事者とする家族法、相続法に関わる紛争についてイスラーム法の適用が認められている。司法裁判所にダト・ユティタムと呼ばれるイスラーム裁判官を設置し、裁判官の審判補助を行う。

⁷⁷ 石井米雄（1977）「タイ国における《イスラーム擁護》に関する覚書」『東南アジア研究』第15巻3号。

こうした構造を支える重要な制度のひとつが、枢密院である。枢密院は、国王によって指名された有識者によって構成される、国王の諮問機関である。有識者は、軍人、学者などから構成されおり、1980年から1989年まで首相をつとめたプレーム・ティンサーラーノンが1998年以降、2016年10月のプーミポン国王崩御後、現在に至るまで議長を務めている。枢密院は、国王と議会、内閣、軍、警察との間に位置づけられる組織で、国王のスポークスマンとして直接・間接的に政治的影響力を及ぼしてきた。⁷⁸

一方、タイ警察の歴史について、まとめられた文献は多くない。⁷⁹19世紀末にチュラロンコーンの下で整備された警察組織は、中央集権的な近代統治制度の確立過程で地方に拡充されていった。1960年ごろに至るまで、バンコクを中心とするタイ国内の中国人並びに共産主義者の叛乱への対応と、深南部のマレームスリムの分離独立運動の取り締まりを主な目的としていた。とくに、第二次世界大戦期の公安警察による政治犯の取り締まりの強化とともに、警察組織の規模と権限は強化された。⁸⁰

米ソ冷戦の始まりとともに、タイはアメリカの東南アジアにおける反共政策の最前線として重視されるようになっていた。当時、アメリカの反共政策の一翼を担い、国内の共産主義運動、反政府運動、麻薬犯罪の取締りを実施していたのは、軍ではなく警察であった。CIAは、武器や資金、装備をタイ警察に対して供給している。アメリカは1950年代当時、軍のサリット・タナラットと比較し、警視総監であったパオ・シーヤノンの方がアメリカの反共政策を担う人物として相応しいとみなしていたとされる。地方行政制度の拡充と共に発展したタイ警察は、タイ王国全土に展開しており、バンコクを中心とするタイ王国軍よりも効果的な対応ができることとされたのである。⁸¹

パオ・シーヤノンの時代、警察に権力が集中し、軍と警察の対立関係は深刻化していた。1957年のサリット・タナラットのクーデターの後、サリットは警察組織内人事の配置転換によって警察権力を解体すると共に、警察装備を軍へと移行している。サリット政権もとで、「国王、宗教、国民」というタイ国家統合の3本柱が設定され、軍の強力なイニシアティブのもとで国家統合が進められた。軍の優位が確立されたこの時期に、

⁷⁸ なお、枢密院がどの程度政治的影響力を及ぼしてきたかについては、議論の余地がある。ハードリーは国王との関係の程度によって、すなわち国王の枢密院に対する態度の良し悪しに、枢密院が及ぼしうる政治的影響力の大きさが関わっていることを明らかにした。Paul Handly, "Princes, Politicians, Bureaucrats, Generals: The Evolution of the Privy Council under the Constitutional Monarchy", Paper for the 10th International Conference on Thai Studies, Thammasat University, Bangkok, January 9-11, 2008.

⁷⁹ Swan Suwanwecho. *Prawat lae Wiwatthanakan khong Tamruat Thai* [タイ警察の歴史と発展] (Bangkok: Khrusapa Latplao, 1989)

⁸⁰ 水谷康弘 (2005) 「タイ近代国家の蹉跎：人民党政権による警察改革の試みをめぐって」『東南アジア研究』43巻2号: 191-209.

⁸¹ Thomas Lobe. *United States National Security Policy and Aid to the Thailand Police*, Monograph Series in World Affairs, (Denver: Graduate School of International Studies, University of Denver, 1977)

国王と軍、官僚、を中心とするタイの政治制度の基盤が築かれたといえよう。⁸²

タイ王国軍もチュラロンコーンのもとで、国内外の脅威から王室を護持することを目的として1884年に設立された。1932年の立憲革命で絶対王政が打倒されたものの、第二次世界大戦後、プーミポン王を利用する形で軍は政治的影響力を構築してきた。同時に、王室プロジェクトや独自の開発政策の実施を通じて社会的にも影響力を及ぼしてきた。軍は王室との関わり合いの歴史の中で、最優先課題として王室の保護を設定するようになった。⁸³

深南部問題はタイの近代国民国家形成初期から、つねに安全保障上の問題として認識されてきた。冷戦期において、軍と警察は国内政治不安の解消という目的を共有しており、競合する役割を担っていた。サリット・タナラットによって確立された「軍の優位」の維持が可能となった背景には、1980年に成立したプレーム・ティンスラーノン政権の存在がある。軍人であるプレームは、国王と国軍の支持のもと、長期安定政権を維持した。この時期、政党活動と選挙が認められたことから、しばしば「半分の民主主義 (Prachathipatai Khruengbai)」と形容される。1980年「共産主義に勝利するための政策」のもとで政治的解決が模索され、1984年には政府の勝利と内戦終結を宣言している。この、プレーム政権下でSBPACとCPM 43が設置され、ここに深南部行政制度が確立した。

深南部に関わる政治制度で重要なのは、民主党とワダ・グループ (Klum Wahda) である。プレーム政権下で構築された深南部行政の運営はタックシンが政権に就くまでのあいだ、軍と民主党が両輪となっていた。1947年に結成された民主党は、南部に盤石な基盤を有している。2001年、タックシンの圧倒的強さを前にしても揺るぐことがなかった。一方のワダ・グループは、1986年にハジ・スロンの息子であるデン・トミナーによって、マレームスリムの権利拡張を目指して結成された政治集団である。

ワダ・グループは、ムスリム女性の公共の場におけるスカーフ着用権、メッカ巡礼に対する補助、イスラーム銀行設立など多くの政策を実現している。90年代の地方分権化が進展し、1997年にはワダ・グループの提唱により県イスラーム評議会にも選挙が導入されている。

ワダ・グループが優勢であった2001年までの時期、民主党が獲得できた議席は、深南部に割り当てられる議席の半分以下であった。90年代、チャワリット・ヨンチャイユット大将率いる新希望党と協力関係を構築することで、ワダ・グループは台頭してきた。新希望党が、タックシン率いるタイ愛国党と合併した2002年以降、タックシン政権下で、ワダ・グループのメンバーは下院議長や大臣を務めるなど大きく活躍する。90

⁸² 軍が国王との蜜月関係のもとで、どのようにしてタイの政治制度を形作ってきたかに関してはThak Chaloeontiarana. *Thailand: The Politics of Despotism Paternalism*, (Chiang Mai: Silkworm Books, 1989)に詳しく描かれている。

⁸³ 軍人の目標には、王室への忠誠、国家へのゆるぎない奉仕、民主主義の擁護、軍の誇りと名声を守ることと記されている。Chambers ed., 85.

年代の民主党政権下では副大臣職が最高で、マレームスリムに対して大臣職が与えられたことはない。深南部における紛争の伏線として、南部を基盤とする民主党と深南部の間の亀裂も指摘できよう。

元警察官僚であるタックシンは多くの部分で、パオ・シーヤノンと共通している。タックシンは、セキュリティ分野の要職に士官学校時代の同期や仲間を任命することで、軍の政治的権力を削減し、警察勢力の強化を試みた。タックシンの義兄は、2003年の麻薬撲滅キャンペーンの際にタックシンによってタイ警察麻薬取締局の長官に任命されており、警察庁長官補佐に昇進している。そして、士官学校の同期を犯罪取締局の長官に任命するなど、縁故主義に基づいた配置転換を行った。

2002年、深南部において住民と行政を繋ぐ役割を果たしてきた SBPAC と CPM43 が廃止され（首相命令 123/2545）、深南部の治安業務は通常の内務省ライン（警察）に移された。プレーム元首相（1920-）は、軍の人事に対する影響も強く、2016年に国王が崩御するまで枢密院の長を務める国王の側近中の側近であり、国王が亡くなった後は摂政としての役割を果たしている。タックシン首相は、プレーム元首相とライバル政党である民主党を中心として行われてきた深南部行政に挑戦した、ともいえよう。既存の政治行政制度への挑戦は、結果的に深南部に関する正確な情報を得るルートを絶ててしまった。⁸⁴タックシン時代の各種制度変更は、権力の真空を生み出し、1960年代以降構築されてきた組織間の均衡関係を大きく崩すこととなった。

2006年のクーデターは、タイを再び王室護持ナショナリズムを背景とする政治へと向かわせた。しかし、軍の影響力の再構築そして強化は、冷戦期のような組織間の安定的関係をもたらすことはなかった。1950年代の東西冷戦初期と、2000年代のテロとの戦い初期において、タイでは警察権力の台頭が起こっている。タックシン政権下における警察権力の台頭は、既存の組織間の均衡関係を崩し、その後の軍の揺り戻しに貢献した。この、軍の揺り戻しの時期に生じた事態は、軍の警察化であった。テロとの戦いの際して、警察権力の台頭が起こった後、軍の政治介入メカニズムがどのように再構築されたのか。

深南部問題を含め、政治的不安への対応として多用されるのは、戒厳令と首相緊急命令である。軍が支配権限を掌握する戒厳令下では、分離独立運動に関わっていると疑われた容疑者を逮捕状の請求なく7日間拘留することが可能である。また、首相緊急命令では、同様に証拠収集や捜査が実施される間、容疑者の最大30日間の拘留が認められている。これら2つの法規を合わせると、全体で37日間の拘留が可能となり、深南部におけるセキュリティ部門による職権濫用と人権侵害につながっている。

深南部行政は現在に至るまで主に、国家安全保障局（NSC）のもと、国内治安維持司

⁸⁴ この点について、アスキューは SBPAC が既に 90 年代には情報収集能力を失っていたという点を指摘している。Mark Askew. *Conspiracy, Politics, and Disorderly Border: The Struggle to Comeprehend Insurgency in Thailand's Deep South*, (Washington: East-West Center, 2007), 4.

令部 (Internal Security Operation Command: ISOC) と南部国境県行政センター (SBPAC) が軸となって実施されており、相互の力関係は時期によって微妙に異なっている。タックシン政権以降、深南部行政について、全体的かつ統合的な対応が必要だという認識のもと、数々の政策提言や制度変更が行われてきた。これらの制度変更は必ずしも、権限を現地機関に委譲するというものではなく、既存の組織の再配置もしくは新たな政府機関への委譲を伴うものでしかなかった。

2003 年頃から、警察と武装組織の対立が増加したことを受け、タックシンは、南部国境県問題解決の為にアドホック委員会を設置した (首相命令 154/2546) もの、政策は実施されなかった。2004 年 5 月、タックシン首相は、政策決定体と政策実施体から構成される南部国境県平和構築司令部 (Southern Border Provinces Peace Building Command: SBPPC) の設置を決定している (首相命令 68/2547、69/2547)。同年 10 月、NSC の管轄下に再組織し、最終的には副首相が管轄する南部国境県平和構築政策委員会を設置すると共に SBPPC を第 4 軍管区の管轄下に置いた。

紛争の激化に際して、民主党は言うまでもなく、ワダ・グループも効果的な対応をすることができなかった。バンコクを中心の政治活動の中で、深南部との住民との交流は少なくなっており、ワダ・グループは深南部における影響力を失っている。⁸⁵また、紛争の激化は、国会議員や軍の地域政治への介入を引き起こした。県イスラーム委員会の選挙過程で起こった票の買収や贈収賄は、宗教指導者の権威の低下の一因ともなっている。⁸⁶テロ行為を批判すると、武装組織によって政府の手先だと疑われる。黙認すると、政府によって武装組織に協力的だとみなされてしまう。宗教、政治いずれの指導者も政府と武装組織との間で身動き取り難い状況となっている。

2006 年クーデター後、SBPPC に代わって SBPAC が再構築された。軍が政治への影響力を及ぼすための制度的基盤として最も注目されるのが、2008 年国内治安維持法 (Internal Security Act: ISA) のもとで設置された国内治安維持司令部 (ISOC) である。ISOC は、1960 年代に設立された反共組織を母体とする。共産主義の脅威が減少するとともに、開発や国境警備など広範に及ぶ役割を担っていたものの、その存在意義は曖昧であった。2008 年、ISA は改正され、ISOC の権限はより強力なものへと変更されたのである。スラユッド政権は、サイバーテロなど新たな脅威、そして深南部の反政府運動に効果的に対応するために、安全保障に関わる官僚組織を統合し強化する必要性を認識していた。

スラユッドは全体的な政策立案権限を NSC へ、より具体的な戦略立案権限を ISOC へと委譲している。そして、ISOC の監督下で、SBPAC を開発に関わる計画の立案と実

⁸⁵ 2005 年の選挙では、南部の議席 54 席中 52 席を民主党が占め、ワダ・グループは 1 議席しか得られなかった。2011 年の選挙では、深南部における議席の 9 割を民主党が確保している。しかし投票率は低く、深南部の政治情勢は極めて流動的である。

⁸⁶ Duncan McCargo, "Co-option and resistance in Thailand's Muslim South: The Changing Role of Islamic Council Elections", *Government and Opposition*, Vol.45, Issue.1 (January 2010): 99-113.

施、CPM43は安全保障に関する権限が付与された（首相命令 206/2549）。首相が長官を務める ISOC の任務の一つは、国内の治安に対する潜在的脅威を監視することとされる（ISA 第 7 条 1 項）。ISOC はすなわち、非常時に事態を收拾するだけでなく、常時から監視組織としても機能するということである。国家レベルの委員会では、軍が採用した官僚の数が文民を上回っており、事実上 ISOC の方針や活動に関して軍が影響力を及ぼすことのできる構造となっている。⁸⁷また、ISA は ISOC の地方、地域支部の設置を認めており（ISA 第 11 条、13 条）、地方軍管区の長が地域支部の長を兼任する。

同首相命令において、第 4 軍管区は現地における政策の実施支援を行うこととされた。2008 年に第 4 軍管区によって、深南部における組織間協力の強化のため、平和センターが設立されている。既存の行政組織やプロジェクトを統合し、重複を避けることが目指された。利害関係者を招いてのアイデアの共有や、分離独立派への共感を抱いているとみなされた若者をキャンプに招き職業訓練が実施された。⁸⁸

深南部では従来から実施されてきた開発政策、メディア戦略に加え、教師、生徒の護衛等、多岐にわたる治安維持政策が実施されている。しかし、住民との意思疎通が取れていないことはもちろん、SBPAC と ISOC の間で機能の分担がうまくいっていないとはいえず、組織内で業務実行に至るまでの処理に時間がかかるため、現地情勢に迅速に対応できていない。⁸⁹

2009 年、民主党のアピシット・ウィチャチワー政権は、深南部政策への軍の影響力の削減を試みた。南部国境県行政法を施行し、SBPAC を首相の直属下に置くと共に、南部国境県開発戦略委員会の設置を定めた。SBPAC の機能を、より開発や正義の実現を重視したものに変更している。しかし、2010 年に深刻化したタックシン支持派と反タックシン派との間の政治対立に際して、政府は軍の力への依存を脱することができなかった。

治安維持勢力としては、職業軍人から構成される軍（Thahan）と警察（Tamruat）に加え、軍の組織であるパラミリタリー（Thahan Phran）、防衛省管轄下の村落守備ボランティア（Or Ror Bor）、国境警備警察（Thor Chor Dor）、内務省管轄下で郡長（Nai Amphoe）が長を務める領域防衛ボランティア（Or Sor）、市民防衛ボランティア（Or Por Phor Ror）、国家防衛ボランティア（Thor Sor Por Chor）そして ISOC が作戦の指揮を行う村落自衛ボランティア（Chor Ror Bor）、国境警備警察の協力下にインドシナ共産化を受けて 70 年代に台頭した右翼集団である、ビレッジ・スカウト（Luk Suea）が存在する。

オーローポー（2004 年設立）、オーポーポーロー（2007 年設立）を除いて、冷戦下

⁸⁷ Paul Chambers ed. *Knights of the Realm: Thailand's Military and Police, Then and Now*. (Bangkok: White Lotus Press, 2013), 46-52.

⁸⁸ しかし、これらの政策がどの程度成功したのかは未知数である。Duncan McCargo, *Tearing Apart the Land: Islam and Legitimacy in Southern Thailand* (Ithaca and New York: Cornell University Press, 2008), 91-92.

⁸⁹ Ora-Orn Poocharoen, "The Bureaucracy: Problem of Solution to Thailand's Far South Flames?," *Contemporary Southeast Asia*, Vol.32, No.2 (August 2010), 191.

における共産ゲリラ対策のために設置された組織である。オーポーポーローは、深南部を除くと麻薬対策を中心にコミュニティの治安維持を行っている。オーローポーは王妃によって結成された深南部の仏教徒保護のための治安要員であり、防衛省の王室侍従局によって管轄されている。ボランティアのうち、オーソーには給与が支払われている。

90

合計すると、およそ 16 万人の治安維持部隊が深南部において展開している。⁹¹深南部の人口がおよそ 200 万人であることを考慮すると、人口の 1 割近くを治安維持勢力が占めているのが現状である。深南部では、共産主義と戦っていた時代から続く組織と、紛争激化以後新たに構成された組織が存在し、管轄する省や部署も異なっている。軍の予算、正規軍の人員とともに、2004 年以降こうした民間兵の数も増加している。⁹²治安要員のオーバープレゼンス状態が、紛争の性質の変化と反政府勢力による暴力の遍在性・無差別性をもたらした実質的・直接的な要因の一つであると考えられよう。

「軍の警察化」というキーワードから考察すると、タイでは軍の機能が警察化し、治安要員がオーバープレゼンス状態にあることが明らかである。冷戦期を通じて、軍の政治介入を可能とする政治構造が確立された。世界情勢が変化した今でも、そうした政治構造は新たな装いの下に再生産され続けている。国家によるか反政府勢力によるかに関わらず、暴力行為はテロであることには変わりはなく、政府を支持するか分離独立派を支持するかという単純な問題ではない。

開発と教育政策を通じて行われてきた同化・統合政策の結果、タイ語を不自由なく操る人が増え、パタニ・マレー語の話者が減っている。こうした現状を見ると、タイ政府のマレームスリムに対する同化・統合政策は成功した、とも捉えられる。

本章では、深南部問題を理解するためのキーワードとなる概念並びに背景について考察してきた。次章では、教育、宗教、深南部研究それぞれの中での本研究の位置づけを、より詳細に検討していく。

⁹⁰ Sarosi, Diana and Janjira Sombutpoonsiri. *Rule by the Gun: Armed Civilians and Firearms Proliferation in Southern Thailand*, (Bangkok: Nonviolence International Southeast Asia, 2009), 14.

⁹¹ Srisompob Jitpiromsri. “The New Challenge of Thailand’s Security Forces in the Southern Frontiers” in *Knights of the Realm: Thailand’s Military and Police, Then and Now*, edited by Paul Chambers (Bangkok: White Lotus Press, 2013), 563.

⁹² Coalition to Stop the Use of Child Soldiers, “Priority to Protect Preventing Children’s Association with Village Defense Militias in Southern Thailand”, http://www.child-soldiers.org/research_report_reader.php?id=291, (Accessed January 20, 2016), 4.

第二章 帰属意識の再生産の場としてのイスラーム教育

第一節 国家統合と近代教育

主権国家の成立以降、政治における主要な問題は、一定の地理的領域内の秩序の再生産であった。どのような主権国家も、いかに統合を強化するかという問題を抱えている。一たび主権を有するものとして認知された国家が、その後、内部崩壊と外国からの侵略の双方の脅威に晒される事はよくある。国民的感情が発達する程度に応じて、これらの脅威は減少していくとされる。⁹³民族や宗教は、秩序の維持や再生産という機能を果たすとともに、国家統合を正当化するために用いられてきた。

列強諸国による植民地支配を受けることが無かったタイでは、仏教徒の国王の下で国家主義的かつ中央集権国家的な国家を形成してきた。19世紀後半に周辺諸国が植民地化されていくと、タイは北はインドシナを影響下に治めたフランス、南はマレー半島を支配下においたイギリスと対峙することとなった。タイでは、近代国民国家の確立と不平等条約の改正が喫緊の課題とされた。この時、イギリスとの領土確定条約に基づいて引かれた国境線によって、南部のマレーイスラーム地域は仏教王国であるタイの領土に組み込まれたのである。

深南部問題は、ナショナリズムと宗教の問題が複雑に絡み合う問題である。国民という共同体は、まさに定義しようとした瞬間にその定義から逃れてしまう⁹⁴といわれるように、国民を概念的に捉えることは困難である。先行研究は深南部問題の本質をマレー・ナショナリズムに見出しており、主権国家タイと、マイノリティ集団であるマレームスリムを前提として議論が進められている。また、ナショナリズムといった時に、タイの国家としてのナショナリズムを指すのか、マレーの民族としてのナショナリズムを指すのかといった点も注意して見なくてはならない。こうした状況は、学術的ブームとしてのナショナリズム研究の乱立と、日常会話のレベルから学術レベルまで「ナショナリズム」という言葉の持つある種の利便性を反映したものでもある。

近代的国民国家の形成過程において、国民を作り出すための諸装置が導入されてきた。国民を作り出すためのイデオロギー装置として重要な役割を果たすのが、学校という場であり、制度である。教育機能を教会から奪取するために熾烈な争いを経たヨーロッパ諸国とは異なり、非西欧諸国の多くでは国民教育と宗教が密接に結び付く形で実施されてきた。

タイでは、1878年にチェンマイで生じたキリスト教布教妨害事件に際して、ラーマ5

⁹³ バリバール、エティエンヌ、イマニュエル・ウォーラーステイン（1997）『人種・国民・階級 揺らぐアイデンティティ』大村書店、149頁。

⁹⁴ 大澤真幸（2007）『ナショナリズムの由来』講談社、78頁。

世（チュラロンコーン、1853-1910、在位 1868-1910）はキリスト教の布教の自由を認める、「宗教寛容令（Edict of Religious Toleration）」を發布し、国民の信仰の自由を認めている。⁹⁵国民の信仰の自由を認めていたとはいえ、国民国家の創出にあたっては、仏教徒である国王のもとで、既存の仏教寺院のネットワークを用いた国民教育の導入が行われた。1902年「仏教サンガ法」を施行し、全国の僧侶に対して寺院への登録を義務付け、中央を頂点とする階層組織に組み込んでいった。⁹⁶さらに、全国の仏教寺院を中心として、男子に対する国民教育を開始している。

一般に、国民教育制度は近代的国民国家を形成するプロセスの一部として作られた。「国民教育制度の歴史は、国民国家の形成史」である。⁹⁷国民教育の目的とは、政治的には国民意識の育成、経済的には工業化社会に相応しい人材の育成である。工業化にあたって、最低限の読み書きができる能力や、時間通りに行動できる、集団行動ができる、といった行動様式の獲得が必要とされるようになった。現代社会の学校は、①校長、教頭などの職位の階梯をもち、②権限の階層化がみられ、③一定の専門的訓練を経て（教員養成）、資格をもったスタッフ（教員）が、④分業して（教科担当制など）職務を遂行している、という特徴をもっている。⁹⁸制度としての学校の特徴を挙げることは可能であるが、学校制度が生み出すものは決して価値中立的ではない。

学校制度を用いた国民教育の普及は、国民の管理統制を目指したものである。学校教育が全ての国民に開かれており、価値中立的であるかのようにみえる先進諸国においても、教育は就職や収入、そして社会階層の再生産と深く結びついていることが明らかになっている。深南部においては、教育と政治・経済的地位の関係は顕著となる。マレームスリムは、パタニ・マレー語を母語としている。現在でも、一定の年齢以上の人の中にはタイ語を話すことができない者もおり、行政関係の事務処理、例えば免許取得のための試験が受けられずバイクの免許が取れない、という話が現地でよく聞かれた。タイ語を話すことが社会進出の条件となるタイにおいて、マレームスリムが長らく周縁化され続けてきた原因でもある。

学校とは、公然とした支配、統制の方策を用いることなく、日常的活動の中で支配体制に相応しい意識形態の再生産を行う装置である。⁹⁹そこでは、学校における「かくれたカリキュラム」、すなわち「表立っては語られることなく、暗黙の了解のもとで潜在的に教師から生徒へ伝達されるところの規範、価値、信念の体系」の存在が指摘される。

⁹⁵ Kenneth E Wells. *History of Protestant Work in Thailand 1828-1958*. (Bangkok: Church of Christ in Thailand, 1958), 59-64.

⁹⁶ 石井米雄（1975年）『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』創文社、（1991）『タイ仏教入門』めこん

⁹⁷ アンディ・グリーン（2000）『教育・グローバリゼーション・国民国家』太田直子訳、東京大学出版会、174頁。

⁹⁸ 柴山昌山・菊池城司・竹内洋（1992）『教育社会学』有斐閣ブックス、76頁。

⁹⁹ M. W Apple. *Ideology and Curriculum*. (New York: Routledge Curzon, 1979)

言語は単なるコミュニケーション手段ではない。¹⁰¹深南部においてタイ語は他者の言語、人によっては支配者の言語とも捉えられる。深南部では、パタニ・マレー語と音声記号として、アラビア語のアルファベットを使うヤーウィ文字を用いている。村落部では、パタニ・マレー語とヤーウィ文字をイスラームの言葉（Phasa Islam）と呼ぶ者が多い。深南部において、宗教と言語とは人々の認識レベルで深く結びついている。

軍や警察力の投入といった意味ではあからさまではなくとも、日常レベルにおけるヘゲモニーの行使という要素は、少なくともタイ語を用い、タイの文化を反映したカリキュラムで教育を行う公立学校においては明らかである。逆にいえば、伝統的な宗教教育機関においては、この「かくれたカリキュラム」は、マレームスリムとしての民族意識の再生産、強化という役割を果たしたといえる。

人や場、環境を媒介にして伝えられる「かくれた」カリキュラムにも、社会構造・意識構造の再生産という機能がある。「かくれていない」カリキュラムに関わる決定事項はなおさら、共同体の再生産に影響するものである。教育社会学の分野で明らかにされてきたように、教育の問題は、知識の社会学、権力に関する哲学など、社会学の重要なテーマとして扱われてきた。社会全体を支配するような権力のみではなく、権力の諸関係が存在しており、それらは多様な形態をもつ。家族関係の中で、制度、行政の中でも作用しうるのである。こうした意味において、日々行われる国家教育は、遂行されている権力であり、国家による戦略の一部でもある。「教育の形態、内容、アクセス、機会における諸格差は、経済的に重大な結果を持つだけでなく、これらの格差は、自己革新や動機付けやイメージを生み出す働きにも影響を与える。こうしてそれらの格差は、民主主義に対する経済的・文化的な脅威となりうるし、しばしばそうなっているのである」。

102

学校制度が社会学において重要な論点となったのは、社会構造の再生産とメンタルな構造の再生産に力をもつメカニズムに迫ることができるからである。「メンタルな構造は、客観的構造と生成的かつ構造的に結びついているが故に、客観的構造の真実の誤認、そしてそのことを通じてそれらの正統性の認知＝承認を、促進するのである...（中略）...分化した社会において観察される社会空間の構造は、経済資本と文化資本という二つの根本的な差異化の原理の産物であるので、文化資本の分布＝配分の再生産およびその再生産を通じての社会空間の構造の再生産において決定的な役割を果たす学校制度は、

¹⁰⁰ 柴山ほか、1992、61頁。

¹⁰¹ Imitiyaz Yusuf. “The Southern Thailand Conflict and the Muslim World”, *Journal of Muslim Minority Affairs*, Vol.27, No.2 (September, 2007): 319-339, 325. 本研究でも見ていくように、マレームスリムの同化・統合政策の過程で、タイ語を話させるということがいかに重視されてきたかという点からも明らかである。

¹⁰² バジル・バーンステイン（2011）『〈教育〉の社会学理論—象徴統制、〈教育〉の言説、アイデンティティ』久富善之、長谷川裕、山崎鎮親、小玉重夫、小澤浩明訳、18頁。

支配的な地位の独占への闘争における中心的な争点の一つ」になっている。¹⁰³

タイにおける教育は、国家の安全保障観を強く反映している。第二次世界大戦までのバンコクにとって、脅威として認識されていたのはインドシナで勢力を拡大するフランスとマレー半島を支配下に置きつつあるイギリスであった。第二次世界大戦中、旧パタニ王国のエリート層は戦後の独立を目標にイギリスに協力し、日本軍と闘った者もいた。しかし、大戦末期から共産主義と対峙したイギリス、アメリカは、反共政策の最前線としてのタイを重視したため、深南部のタイからの独立のみならず、マレー連邦への加盟も絶望的となり、マレームスリムのエリート層にとって状況は不利になっていった。

深南部ではイスラーム伝統教育機関の管理・統制とタイ語教育の普及が図られ、同化政策が実施されてきた。マレームスリムに対する同化政策が強化された1960年代以降、宗教指導者等によって、数々の分離独立派組織が結成された。1980年代以降、政府は共産主義、分離独立主義に対して、それまでの武力による解決から政治的解決に舵を切り、公立学校におけるイスラーム教育の導入も漸進的に認められるようになった。タイ人化する同化政策ではなく、マレームスリムをタイ社会の一部に組み込む統合政策が重視されるようになったといえよう。

タイ語が普及した現在では、とくにグローバル化を反映する形で、グローバル人材の育成という点がタイの教育政策における主要な論点となっている。しかし、2004年以降政府と反政府武装組織との間での抗争が激化したことと、2006年、2014年のクーデターによって、1990年代以降の民主化の流れが遮断されると共に、タイの教育は自由主義的なものから、王室護持を至上命題とする国家主義的な観点を反映したものへと揺り戻しが生じている。

現在の深南部における教育は、学校教育制度と伝統教育制度に分けられる。学校には、公立学校と私立学校がある。双方、イスラーム教育を重点的に行う学校と、そうでなく普通教育のみを行う学校が存在する。そして、ポーノ、タディカという伝統的イスラーム初等教育機関がある。

タイでは、前初等教育課程としてアヌバーン (Anuban)、初等教育としてプラトムスクサー (Phrathom Sueksa)、前期中等教育としてマタヨムトン (Mathayom Ton)、後期中等教育としてマタヨムプラーイ (Mathayom Phlai)、高等教育としてはマハーウィタヤライ (Mahawittyalai) が存在する。一方のイスラーム教育に関しては、前初等教育としてラウダ、初等教育としてイプティダイ (Ibtidai)、ムタワシィ (Mutawasit)、中等教育機関としてサナウィ (Sanawi) が存在している。

¹⁰³ ピエール・ブルデュー (2012年)『国家貴族』I、藤原書店、16～17頁。

表2 タイにおける公教育とイスラーム教育制度

タイ教育制度		イスラーム教育制度		伝統教育
課程	機関	課程	機関	
アヌバーン 1~3	幼稚園	ラウダ	タディカ	モスク
プラトム 1~6	小学校	イプティダイ 1~4 (1~6)*	私立イスラーム学校	
マタヨムトン 7~9	中学校	ムタワシィ 5~7 (7~9)	私立イスラーム学校	ポーノ
マタヨムプラーイ 10~12	高校	サナウイ 8~10 (10~12)	私立イスラーム学校	
マハーウィタヤライ 1~4	大学	国内外大学機関、イスラーム伝統教育機関		

*イスラーム初等教育であるイプティダイでは、タイの公教育制度のプラトムに合わせて6段階のカリキュラムを用いることになっているものの、1~4段階を用いている学校も見られる。

出典：筆者作成

インフォーマル教育としては、モスクにおけるクルアーン教育、伝統的なポーノにおける教育がある。ただ、伝統的な教育機関であるポーノも、現在ではほぼ全てが教育省に登録されており、ノン・フォーマル教育機関として位置づけられる。タディカは、かつて小学生レベルの児童を対象とした初等イスラーム教育を行うインフォーマル教育機関であったが、現在の制度上の位置づけとしてはノン・フォーマル教育機関である。¹⁰⁴ポーノは政府から少額ではあるものの資金が援助されるようになった。タディカ教員に対する給与の支払いがなされるようになり、カリキュラムも政府のものが用いられるようになった。公立・私立学校と比較すると程度は大きくないものの、いずれも政府による管理統制を受けるようになっている。教育制度外の教育としては通称コーソーノー (Kor Sor Nor, Kansuaeksa Nok Rongrien) と呼ばれるノン・フォーマル教育制度があり、学校教育を受ける機会を持たなかった市民に対する教育を提供している。ポーノの中にはコーソーノーのカリキュラムを導入している学校も存在する。

深南部におけるイスラーム教育は、大きく変わりつつある。教育の場は、メンタル構造や社会構造の再生産の場であるとともに、当該社会の変容を反映している。イスラーム教育に対する考察から、教育が深南部においてどのような権力作用を及ぼしているのか、そして現在マレームスリム社会に生じている変容に対する知見を得ることが可能となる。

第二節 仏教国の中のイスラーム

国家は宗教とどのように関わるべきか、国家と宗教の距離はどのように取られるべきなのかという難問について、国の歴史や文化、政治の文脈に応じて数多くの議論がなさ

¹⁰⁴ 「2007年私立教育法」第4項。

れてきた。これまでの政教分離に関する議論では、フランス的に社会的な力に絡めとられる個人を国家の力、法律によって解放するか、アメリカ的に国家からの自由の枠内で中間団体が自由に競争し、国家の運用に直接関与することを是とするか、といった点が主な論点となってきた。

近代における国家形成課程に仏教的要素が深く組み込まれてきたタイでは、政教分離という概念自体、国家と宗教の関係を考察するための分析枠組みとして使うには困難が伴う。かつて、タイでも公務員や学生のスカーフ等の着用は禁止されていた。ムスリム女性は、スカーフだけでなく、足を隠す丈の長いスカートの着用も許されていなかった。これは決して、政教分離という点が意識されていたという訳ではない。政府のムスリムに対する無理解という点だけではなく、ほんの30年前にはまだムスリム女性がスカーフを着用する慣習は一般的ではなかったという点と、イスラーム復興の影響が及ぶ前であったという事も大きい。1980年代以降のイスラーム復興の影響や、深南部の学生を中心としたスカーフ着用デモを受けて、1995年には公的空間における宗教的シンボルの着用が認められている。

タイにおいて国王は全ての宗教、すなわちタイ国民が信仰している全ての宗教の擁護者であり、支持者でもある。宗教の擁護者としての国王という位置づけがなされているものの、国王は仏教徒でなくてはならないため、実質的には仏教国であるといっても過言ではない。深南部におけるマレームスリムは、マイノリティとして同化・統合政策の対象となってきた。仏教的なタイ文化に対抗するという点からも、実践レベルにおいては伝統的な要素が守られてきたと考えられる。

東南アジア的なものが芯にあり、そこにヒンドゥー的要素や、イスラームが加わったというような考え方がしばしばなされる。しかし、東南アジアにおけるイスラームは、東南アジアのイスラーム化として捉えるのではなく、イスラームの東南アジアにおける定着という観点から見る必要がある。イスラームは形式の遵守によって支えられており、形式を守ることが宗教的とみなされる側面が大きい。深南部のマレームスリムにとっては、土着の信仰と融合する形で受容されたイスラームは、既に伝統となっている。深南部のマレームスリムの日常生活は、こうした土地のイスラームの宗教実践に基づいて行われている。¹⁰⁵

タイでは、王権と宗教とが互いに支えあう関係を構成してきた。¹⁰⁶タイは植民地化を受けず、第二次世界大戦前後で政治的な断絶を経験することもなかった。近代国民国家形成以後、一貫して王制を維持してきた。そして、王制は仏教サンガによって支えられてきた。過去からの歴史的連続性を加味した検討が可能となる所以である。

初期仏典によると、世界は自然発生的であって、神による創造ではない。社会を秩序

¹⁰⁵ Imitiyaz, op cit, 324.

¹⁰⁶ この点については、Stanley Jeyaraja Tambiah. *World conqueror and world renouncer: A study of Buddhism and polity in Thailand against a historical background.* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976)に詳しい。

づけたのは神ではなく、人々に選出された王である。ラージャ（王）が神によるダルマ（秩序）を体现するのではなく、ダルマ（秩序）を社会にもたらしたのがラージャ（王）である。マウリヤ朝のアショーカ王は、仏教に基づく統治を行い、仏教を広めた王としても名高い。アショーカ王の統治パラダイムは、宇宙の法としてのダルマに基づく統治であり、このアショーカ王統治が転輪聖王モデルとなって、後の東南アジアの王権へとつながっていった。¹⁰⁷タイにおいて、こうしたダルマ・ラージャとしての王権という概念が確立されたのが、ラーマ1世期である。

「アンナと王様」のモチーフとなったラーマ4世王（モンクット、1804–1868、在位1851–1868）の時代、西欧近代との出会いを契機として仏教復興運動が生じた。モンクットは、バラモン教や未開宗教と習合した仏教を批判し、正しい聖典に準拠し、神話的要素や呪術的要素を排除した仏教解釈を重視するタンマユット派を創設している。¹⁰⁸モンクットの改革は、精神主義（真の仏典に戻る）、知性主義（迷信の排除）、神話史実主義（神話、史実を反映した比喩として解釈することで、国家あるいは国民の統合をはかる）、合理主義（仏教の教理と科学の調和をはかる）、宗派主義（タンマユット派の創設）、仏教の大衆化（単純化された教理問答集を用いて仏教の布教をはかる）¹⁰⁹という特徴もっている。モンクットの時代は、周辺国の植民地化とキリスト教伝道の圧力に対抗するべく、タイの国家統合の文化的基盤としての仏教の再興が目指された時代であった。

インドや中国が西洋によって支配されていくと、近代以前のタイにおいて権力を意味づけていた地理的秩序のイデオロギーが急速に崩壊していった。¹¹⁰タイの「文明化」は、タイの領土内における文明（エリート）と野蛮（少数民族）といった地理的・社会的区分を生み出し、いわゆる、国内植民地化政策が行われていった。¹¹¹

19世紀には国王によって2度のサンガ改革が行われており、20世紀に入ってからサンガ法の改正が3度行われている。タイが近代国民国家としての歩みを始めた1902年、ラーマ5世によって「サンガ法」が制定された。サンガ法の制定は、地方に初等教育を広める組織としての地方の僧院の再編成という意味合いもあった。仏教サンガ組織の編成によって、全国レベルで均一のヒエラルキーが成立するとともに、官僚組織と並んで国家統治機構の一部を形成するようになった。

2度目のサンガ法の改正が行われたのは、1941年である。1932年の立憲革命にともなう、タイの政治体制は絶対王政から立憲君主制へと移行している。「仏歴2484(1941)年サンガ法」に基づくサンガ組織は民主主義的な価値観を反映し、形式的には立法、行

¹⁰⁷ Ibid. Chapter 6.

¹⁰⁸ 矢野秀武 (2014) 「タイにおける宗教研究の光と影—文明化される「宗教」と不在化する「宗教学」—」 駒澤大学『文化』第32号、7頁。

¹⁰⁹ Tamibah, op cit, Chapter 17.

¹¹⁰ Thongchai Winichakul. *Siam Mapped A History of the Geo-Body of a Nation*. (Chiang Mai: Silkworm Books, 1994), 102-103.

¹¹¹ David Brown. *The State and Ethnic Politics in Southeast Asia*, (New York: Routledge Curzon, 1994), 167.

政、司法の三権分立に基づく形となった。¹¹²個々の僧院長の権限が強化され、ヒエラルキーがより強固なものとなった。しかし、民主的統治機構に基づくサンガ組織の運営が内部の派閥抗争によって停滞したことから、1958年にクーデターによって政権を握ったサリット政権下でサンガ組織改革が実施される。現行のサンガ組織は1963年に発効した「仏歴2505(1962)年サンガ法」に則ったものである。1941年の三権分立的な組織編制は廃止され、頂点に立つサンカラートに権限が一極集中するような制度が構築された。¹¹³結果、サンガ組織は国王を頂点とし、教育省宗務局の管轄下に置かれる中央集権的組織となった。

1930年代は、モンクットとチュラロンコーンの改革によって、広範な地域に教育が行き渡るようになっていった時代でもあった。絶対王政が打倒された1932年の立憲革命後も、仏教に強く影響を受けた支配原理は継承された。1930年代以降の国家統合と支配原理の関係で注目されるのが、第二次世界大戦前後のプレーク・ピブーン・ソングラム政権(1938-1944、1948-1957)と、1960年代のサリット・タナラット政権(1958-1963)、そしてプレーム・ティンスラーノン政権(1980-1988)である。いずれも軍人であるが、1980年代のプレーム政権下では、議会の半分が民選、半分が軍・文官官僚という半分の民主主義体制が築かれた。

第一次ピブーン政権(1938-1944)は、国家主義政策を実施したことで知られている。ピブーンはフランスへの留学経験があり、西欧式の民主主義思想に慣れ親しんでいた。ピブーン政権では、王権と政権の関係はむしろ競争的であった。ピブーンが支配の正当化原理として用いたのが、国家そのものであった。ラッタニヨム(ra国民信条)と呼ばれる政策は、1939年からのべ9回に亘って布告されている。第一条では、国名をシャムからタイへと改める旨が記されている。ラッタニヨムの主な目的は華僑の脅威に対処することにあつたが、一般的に認識されているような排華政策というよりかは、タイ国内における華僑並びにマイノリティ集団の強制的なタイ人化政策を推し進めるものであった。¹¹⁴

1957年クーデターによって政権を奪取したサリット(1958-1963)は、陸軍士官学校出身で、海外留学の経験はない。彼は、スコタイ時代のポーケン(慈父)思想と転輪王思想を合体させることで、軍人を含む官僚による独裁的行政制度の正当化原理を確立した。¹¹⁵ラーマ6世(ワチラーウット、1881-1925、在位1910-1925)によって論じられ、1929年にクン・ウィチットマートラーの『ラックタイ』において萌芽が見られた「国王・宗教・国民」というラックタイ(タイの基礎)原理が利用された。¹¹⁶

¹¹² 石井米雄(1991)『タイ仏教入門』152頁。

¹¹³ 前掲、57～58頁。

¹¹⁴ 村嶋英治(2002)「タイにおける華僑・華人問題」『アジア太平洋討究』、38～39頁。

¹¹⁵ Thak Chaloemtiarana. *Thailand: The Politics of Despotic Paternalism*, (Chiang Mai: Silkworm Books, 1989), 107.

¹¹⁶ 矢野秀武(2013)「タイを流れる欧米宗教学の微風 サーサナー(宗教)とReligionをめ

ラックタイ的な秩序とは、国王が元首として君臨し、仏教が繁栄し、国王を国民が敬慕し、仏教を信奉するような状態を指している。¹¹⁷ラックタイは憲法上でも明記されてきた。¹¹⁸タイでは、公的な次元において宗教の保護と維持がうたわれてきた。宗教を個人的、私的領域に位置づける西洋的な思想とは、異なるものである。タイにおいては、国王が宗教の擁護者と記されている。諸宗教の擁護という場合の擁護とは、支援者、パトロンという意味であり、支援の対象に介入する可能性もありうる。¹¹⁹

サリットは、王室を政治的に利用することで支配の正当化を行った。タイ政治のその後を大きく規定するメカニズムは、ここに誕生したのである。タック (Thak Chaloemtiarana) は、この点について以下のように記している。「サリットは、そうした意図を抱いていなかったのかもしれないが、彼の死後に国王が政府から独り立ちして役割を果たしうるほど強力になることを可能にしたのである。サリットの後継者たちが、政治的に比較的弱体であったため、国王はより一層明確に政治の舞台の中心に躍り出ることとなった」。¹²⁰

1960年代に政府による統制が強まったのと同じ時期、分離独立運動が盛んになった。仏教的な要素がかなり強いものであったタイによる同化・統合政策を、マレームスリムたちはタイによる彼らの文化の解体の試みであるとみなした。¹²¹さらに、軍事政権下においてタイ・ナショナリズムに基づく国家統合が行われたが故に、そこで対置されたのがマレー・ナショナリズムであったともいえよう。

宗教への帰属意識に基づく民族という意味において、これまでもイスラームは重要であった。1980年代以降の世界的なイスラーム復興の影響により、深南部におけるイスラームの実践レベルにおいては、マレーの伝統や民族の側面ではなくイスラーム自体が強調されるようになってきている。イスラーム復興の担い手とされるのが、タイ語でサーイ・マイと呼ばれる人々である。¹²²一見、世界のイスラームをめぐる趨勢とは関係ないかのように見えるタイの状況であるが、決して世界から孤立した周縁のイスラームであるという訳ではない。とくに、ファートニーとしてアラブ世界でも古くから知られる深南部は、イスラーム世界と直接的かつ密接な繋がりがある。

タイにおけるイスラーム復興運動は、高等教育を受けたエリート層、中間層によって

ぐるタイ宗教学の模索」『東京大学・宗教学年報』XXX号(特別号)51-70頁、62頁

¹¹⁷ 長谷川啓之、上原秀樹(2009)『現代アジア事典』1242頁。

¹¹⁸ 一例として、タックシンを追放した2006年のクーデターの後に制定された2007年憲法においては、「人は本憲法に基づきチャート(民族)、サーサナー(宗教)、プラマハーカサット(国王)、および国王を元首とする民主主義政体を保護し維持する義務を負う」(仏歴2550年タイ王国憲法 第4章「タイ国民の義務」第70条)と記されていた。

¹¹⁹ 矢野秀武、2014年、22頁。

¹²⁰ Thak, 218.

¹²¹ Surin Pitswan. *Islam and Malay Nationalism: A Case Study of Malay-Muslims of Southern Thailand*. (Bangkok: Thai Khadi Institute, Thammasat University, 1985), 8-12

¹²² サーイ・マイとは、直訳すると新しいライン、新しい集団といった意味になる。

担われている。イスラーム復興が語られる際、しばしば問題とされるのがジハーディスト思想との関連である。一般的に、異教徒の侵略者と戦う人間がジハーディと呼ばれる。これは全てのムスリムがそうあるべきであるため、イスラーム法学者の中田考は、ジハーディを異教徒ではなく、ムスリム内部にいるムルタッド（Murtaḍ, 背教者）の支配者と戦う人間を指すとしている。したがって、イスラーム世界の中でジハードを行い、イスラーム世界をイスラーム法が施行される地に戻そうとする者をとくに指しているとしている。¹²³

サラフィー主義やワッハーブ主義などイスラーム改革派は、一般的に王権や政権に対して否定的な態度を取るため、政府によって安全保障上の脅威とみなされる。現在の中東の混迷は、本来暴力性を持たなかったイスラーム復興運動を体制の維持にとって障害になるとして弾圧してきた結果であるとされる。一方で、タイにおいてサーイ・マイと呼ばれる人々と政府との関係は良好である。深南部でも、タイ政府やタイ政府に協力的なムスリムに対するジハードを主張する者がいるのは確かである。しかし、現時点において、ジハーディスト思想に潜在的に共鳴しやすい、あるいは既に共鳴している者は、タイの文脈でサーイ・マイに分類される人であるというよりかは、サーイ・カオ（伝統派）に分類される人である。

このようなタイ深南部におけるイスラーム社会内部のダイナミズムを考察するにあたって、イスラームの宗教実践に対する認識と、政権に対する距離という要素から、ある程度の地図を描くことが可能となる。本研究では、サーイ・マイ（イスラーム改革派）とサーイ・カオ（伝統派）を2つの指標としつつも、先行研究で見られるように二項対立的に捉えるのではなく、人々のイスラームに対する認識を、スペクトル上の分布として理解する視座を構築したい。

第三節 深南部におけるイスラーム教育の役割

民主主義とグローバル化の進展は、アイデンティティと国家の結びつきにより生じる暴力を減少させることはなかった。むしろ民主化の結果、個人やコミュニティレベルで生じるミクロの暴力と国家レベルでのマクロの暴力との継続性が強固ものになっている。¹²⁴近代国家は絶対主義の時代以降、暴力を正統に独占し、同時に暴力を最も組織的かつ効率的に行使する主体として自己形成してきた。国内に政治不安を抱える発展途上国においては、しばしば軍隊をはじめとする暴力装置は国外の脅威ではなく国内の脅威への対処が主たる目的とされ、国内の治安を維持するために用いられてきた。ここでは軍事行動は、治安維持のための脅威の排除という警察行動に近づく。

王権との蜜月関係を構築した軍は、タイの政治、経済、文化全ての側面で大きなプレ

¹²³ 中田考（2016）『イスラーム法とは何か？』作品社、51頁。

¹²⁴ 清水耕介（2013）『寛容と暴力 国際関係における自由主義』ナカニシヤ出版、158頁。

ゼンスを有している。¹²⁵治安部隊が深南部の人口のおよそ1割近くを占める深南部においては、なおさらである。民衆レベルにおいて、軍は政治家や警察よりかは清廉で、国家と国民を守るための組織であるとみなされる場合も多く、軍の優位が再生産されてきた要因でもある。¹²⁶実際に、深南部のマレームスリムを含む人々の正規軍に対するイメージは意外なほど良い。軍はいまだにタイの政治において、深南部においてはとくに、行政機能の一部を担い続けている。

深南部について論じた先行研究を分類すると、タイ政府の開発・教育政策がもたらした、格差を問題とするもの（政治）、パタニの歴史に関するもの（歴史）、深南部のマレームスリムコミュニティ独自の宗教実践や文化に注目するもの（文化）、イスラームの思想的動向に関するもの（宗教）が存在する。全ての論者が同意しているのは、深南部問題がマレー・ナショナリズムに基づいているという点と、タックシン政権（2001-2006）による、クルセ・モスク事件やタークバイ事件における強権的対応が、紛争激化のきっかけを作り出したという点である。さらに、タックシン政権下では、テロの温床とみなされてきた伝統的なイスラーム教育機関に対する統制が強められている。

本研究は深南部研究の中でも、最も分量の多い政治研究の一端に位置付けられる。深南部問題に関する先行研究では、深南部問題をタイによる同化・統合政策の歴史として取り上げる傾向がある。1980年代は、マレー・ナショナリズムに基づく分離独立主義に注目した研究が拡大した時代であった。深南部マレームスリム研究の嚆矢ともいえるのが、前ASEAN事務局長を務めたスリン・ピッサワン（Surin Piswan）が1982年にハーバード大学に提出した博士論文である。彼自身もムスリムであるピッサワンは、深南部における分離独立運動は政治運動というよりかは、民族宗教的紛争であることを強調している。マレームスリムの間でイスラームとマレー民族性が、原初的な集団的自意識を構成していることを指摘し、マレームスリムを繋ぐ最も強い紐帯がイスラームであると結論付けた。また、タイのイスラーム研究の第一人者でもあるレイモンド・スキューピン（Raymond Scupin）は、マレー分離独立主義の原因をタイ・ナショナリズムに求めており、オマール・ファルーク（Omar Farouk）は反射的ナショナリズムとしてのマレー・ナショナリズムに求めている。¹²⁷1990年代は、依然として文化的、民族宗教的な観点に基づく議論が多数を占めていたものの、分離独立主義運動や反政府運動の象徴的

¹²⁵ この点については、第二章参照。

¹²⁶ 深南部における軍のイメージを扱ったものとして、Streicher, Ruth. “Fashioning the Gentlemanly State: The Curious Charm of the Military Uniform in Southern Thailand.” *International Feminist Journal of Politics* 14 (4) (2012): 470-488.

¹²⁷ 例えば、Raymond Scupin. “Thailand as a Plural Society: Ethnic Interaction in a Buddhist Kingdom”. *Crossroads* Vol. 2, No.2 (1986): 115-140, Omar Farouk. “The Origins and Evolution of Malay-Muslim Ethnic Nationalism in Southern Thailand,” in *Islam and Society in Southeast Asia* edited by Taufik Abdullah and Sharon Siddique (Pasir Panjang: Institute of Southeast Asian Studies, 1988)

な面に着目する議論や、人々の宗教・社会実践に注目した人類学的な議論が増加した時代である。¹²⁸

2004年以降に爆発的に増加したのが紛争研究である。深南部で激化した暴力の応酬をめぐって、ダンカン・マッカーゴ (Duncan McCargo) をはじめとする一連の研究がある。マッカーゴは、反共政策の一環として1960年代以降タイ政府は同化・統合政策を本格化した。マイノリティであるマレーのアイデンティティを強化したため、タイ政府による統治の正統性が深南部地域において問われる結果となり、それが現在の混迷をもたらしているとした。¹²⁹こうした観点からは、深南部の自治に近い特別な制度の確立が重視される。また、マーク・アスキュー (Mark Askew) は、深南部問題は、汚職や権力闘争、政治的暴力の問題が深刻になり複雑化している点を強調している。¹³⁰さらにアスキューは、一般のマレームスリムの間ではむしろタイ人としてのアイデンティティが持たれており、近年の暴力の背景に宗教という要素をみる必要性を指摘している。

深南部の教育について論じた研究では、政治の問題として論じる研究、文化、言語、アイデンティティの問題として論じる研究が中心である。これらの研究は、タイ政府の教育政策に関する研究、深南部の伝統的教育機関がマレームスリムのアイデンティティの再生産に果たしている役割に関する研究の二つに大別できる。いずれの研究動向においても、深南部問題をタイ政府による教育政策の結果から生じた問題として捉える傾向がある。実務者レベルによる教育研究では、深南部における子供の学力の問題や教授言語、多文化主義教育、平和教育に関する議論がみられる。

ウタイ・ドゥルヤカセム (Uthai Dulyakasem) による *Education and Ethnic Nationalism: A Study of the Muslim Malays in Southern Siam* は初期の重要な研究である。¹³¹量的研究と質的研究を併せて行ったウタイは、生態的競争モデルを提示している。政治経済の近代化は、民族という概念が中央による侵略に対抗するための最も実用的かつ効果的な政治的手段であるとの認識を人々の間で生じさせたと論じ、近代教育の普及が民族紛争を激化させた側面を指摘した。一方で、民族的政治紛争が結果として近代教育の普及に貢献していることを明らかにしている。

同様に、カニガ・サチャクン (Kanniga Sachakul) は、タイ政府が行った中国系とマレー系に対する同化・統合政策を検討している。彼女は政府の教育政策が、安全保障と複雑に関わる政治的な力に影響されている点を指摘した。その上で、政府は完全な

¹²⁸ 例えば、Wan Kadir Che Man. *Muslim Separatism: The Moros of Southern Philippines and the Malays of Southern Thailand*, (Singapore: Oxford University Press, 1990), Chaiwat Satha-Anand. "Krue-ze: A Theatre for Renegotiating Muslim Identity," *Sojourn*, Vol.8, No.1 (1993): 195-218

¹²⁹ 代表的なものとして、Duncan McCargo. *Tearing apart the land: Islam and legitimacy in Southern Thailand*. (Ithaca: Cornell University Press, 2008)

¹³⁰ Mark Askew, "Fighting with Ghosts: Querying Thailand's "Southern Fire"," *Contemporary Southeast Asia*, Vol. 32, No.2, (August, 2010): 117-155.

¹³¹ Dulyakasem, Uthai. "Education and Ethnic Nationalism: A Study of the Muslim Malays in Southern Siam" (PhD Dissertation, Stanford University, 1981)

同化政策ではなく、統合に向けた教育の提供を行うべきであると提言を行っている。¹³² また、パタニにおけるポーノの歴史研究者であるハサン・マドマーン (Hasan Madmarn) は、深南部における伝統的な教育機関の変遷について論じた博士論文で、政府による教育改革を受け入れることで、私立イスラーム学校の学生はタイ語とマレー語の双方の能力を発達させることができたとして一定の評価をした。¹³³

タイ政府の深南部地域におけるガバナンスの観点から「なぜマレームスリムは同化・統合されないのか」という統治の側からの論理、あるいは「マレームスリムがなぜ戦い続けているのか」というマイノリティの側からの論理で深南部問題を論じる構図が従来の研究では主流となってきた。そのような中で、紛争激化以降の深南部におけるイスラーム教育に注目した研究が、ジョセフ・リオウ (Joseph Chinyong Liow) の *Islam, Education and Reform in Southern Thailand* である。¹³⁴ リオウはイスラーム教育と深南部における分離独立運動との関連に着目し、イスラーム改革派に関する論考にも多くを割いている。イスラームの教え自体が暴力と関係があるという訳ではなく、植民地主義や民族自決といった概念による暴力の正当化がなされていることを指摘した。また、ルフティ氏に代表されるイスラーム改革派の台頭によって、伝統的な教育が変化を余儀なくされていることを指摘している。

2004年1月4日、20の公立学校が同時多発的に放火される事件が生じてから、深南部の学校の置かれた事態は深刻化した。DSWによると2004年の1月から2012年の9月までの間に全部で12,377の暴力事件があり、14,890人の犠牲者があつた。市民の犠牲者のうち、157名が教師であつた。とくに2012年には学校長や教員が狙われる事件が頻発した。¹³⁵ 学校に対する放火事件が相次ぎ、公立学校への軍隊の駐留も行われた。武装組織は、駐留する治安部隊を狙った爆弾攻撃などを行ったため、人々の間に恐怖を蔓延させた。狙撃事件や爆弾、放火事件の被害者は、学生、教員、用務員、警備員、スクールバスの運転手なども含まれる。イスラーム学校が報復として狙われる事件も生じ、軍やパラミリタリーがこれらの事件に関わっているとして非難された。

タイ政府は1960年代以降、ポーノの教育省への登録を進めてきたが、応じないポーノも多かった。教育省は、タイ語と普通科目教育実施の代償として、資金的な援助を提供してきた。政府の資金援助の開始とともに、伝統的なポーノからタイ語を用いた普通

¹³² Sachakul, Kanniga. "Education as a Means for National Integration: Historical and Comparative Study of Chinese and Muslim Assimilation in Thailand" (PhD Dissertation, University of Michigan, 1984)

¹³³ Madmarn, Hasan. "Traditional Muslim Institutions in Southern Thailand: A Critical Study of Islamic Education and Arabic Influence in the Pondok and Madrasah Systems of Patani" (PhD Dissertation, University of Utah, 1990)

¹³⁴ Joseph Chinyong Liow, *Islam, Education and Reform in Southern Thailand Tradition & Transformation* (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2010)

¹³⁵ International Crises Group, "Thailand, the Evolving Conflict in the South", <http://www.crisisgroup.org/~media/Files/asia/south-east-asia/thailand/241-thailand-the-evolving-conflict-in-the-south.pdf> (Accessed May 19, 2016)

科目の教育を行う私立イスラーム学校へと転換する学校も増えた。一方で、マレームスリムは、自らの文化、言葉、そして宗教への理解に欠ける中央政府に対して、長らく不満を持ってきたのも事実である。公立学校における初等・中等教育に対しては、武力を用いている訳ではないものの、上からの強制的な同化・統合政策には変わらないという意識が持たれていた。¹³⁶

分離独立派組織と関わりがある、又は、あったとされる人々の多くは、ポーノやタディカといった伝統教育機関ではなく、タイ政府の教育改革を受け入れた公式的な教育機関である私立イスラーム学校の関係者であったとされる。¹³⁷分離独立派組織の一つであるパタニ解放軍は、タイの教育制度を、マレームスリムのアイデンティティに対する抑圧の象徴であるとし、タイの教育機関を主な標的として掲げていた。タイの教育は、大量同化兵器 (Weapon of Mass Assimilation) であり、深南部における教育の不均衡な発展によって、人的・社会的資本は影響を受けてきた。教育は、政治的、経済的発展とも深く結びついているのである。¹³⁸

一部の研究者や政府関係者は、ポーノや私立イスラーム学校が分離独立派組織の構成員のリクルートの場として用いられていると批判している。宗教教員はしばしば、リクルート要員としての役割を果たしており、宗教熱心で操りやすい若者を選んでいとされる。¹³⁹分離独立派組織のメンバーは、リクルートした若者を集め小さなグループを作る。友人関係の構築に始まり、議論や祈りの集団への参加をもちかける。分離独立主義の理想を受け入れそうなものに対して、運動への参加を呼びかけるのである。¹⁴⁰

タイの教育制度を、仏教国タイによる抑圧のシンボルとして捉える反政府武装組織は、公立学校の放火や爆破、公立学校教員に対する嫌がらせ、ひどい場合は殺害を行った。殺害された教員の多くが、タイ人の仏教徒であった。さらに、武装組織は、公立学校におけるムスリムの教員や、学校の利用に反対する私立イスラーム学校も標的にした。地域によっては、マレームスリムの家族に対して、子供を公立学校に通わせないように圧力をかけた所もある。

国王を頂点とし、軍の優位を可能とするタイの政治構造によって、深南部問題は安全保障の問題として解釈し続けられてきた。教育に対しても、安全保障の枠組みから解釈され、深南部におけるイスラーム教育の文脈に対する理解を欠いたままイスラーム教育全体を標的にするような政策がなされたのも事実である。ポーノやタディカに代表

¹³⁶ UNICEF East Asia and Pacific Regional Office. 2012. *Thailand Case Study in Education, Conflict and Social Cohesion*, http://learningforpeace.unicef.org/wp-content/uploads/2015/01/PBEA_Thailand-Case-Study.pdf (Accessed May 20, 2016), 9.

¹³⁷ Liow, 41.

¹³⁸ Otto Fon Feigenblatt et al, "Weapons of Mass Assimilation: A Critical Analysis of the Use of Education in Thailand, *Journal of Asia Pacific Studies*, Vol.1, No.2, (May, 2010), 293

¹³⁹ Liow and Pathan, 2010, 45.

¹⁴⁰ International Crises Group, op cit.

される伝統的なイスラーム教育機関は、マレームスリムの人々にとっては教育機関以上の意味をもつのである。イスラーム教育は、マレームスリムのあるいは「パタニ」のアイデンティティと歴史を守る砦でもある。一方で、開発と教育政策を通じて行われてきた同化・統合政策の結果として、タイ語を不自由なく操る人が増え、若年層にはパタニ・マレー語を話すことができない者も増えてきた。こうした現状からみると、タイ政府のマレームスリムに対する同化・統合政策は成功した、とも捉えることができそうである。

第四節 帰属意識の再生産の場としてのイスラーム教育

タイ深南部は100年に及ぶ歴史の中で、植民地主義、ナショナリズム、共産主義、イスラーム主義、グローバル化という、近代政治史において思いつく限りのイデオロギーの影響を受けてきた。深南部問題は、論者によって本質の捉え方が異なり、それに応じた議論が繰り広げられている。深南部問題は、タイの安全保障問題として論じられてきたものの、深南部問題はその始まりの時点から、タイ一国の地域研究的な観点のみでは理解できない問題であった。

先行研究においてタイの深南部問題は、マレー・ナショナリズムに基づくものであるとされている。実際に、政治的暴力の影響を受けている地域は、南部3県（パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県）並びにソクラー県の一部であり、以北でテロ活動はほとんど生じていない。自爆テロが生じたことはなく、政府関係者や公共施設を狙った爆弾テロもしくは、狙撃が主流である。グローバルなイスラーム主義に基づく運動であるとするならば、闘いの場は必ずしも領域に縛られる必要はない。確かに、中東やヨーロッパで生じているような暴力ではないのは事実である。

一方で、近年の深南部問題に特徴的なのは、マレームスリム市民の犠牲者が増加していることである。マレー・ナショナリズムに基づく分離独立主義であるとするならば、マレームスリム市民が犠牲になっている原因の説明は困難となる。もはや、民族（マレー）か宗教（イスラーム）かという二項対立的な想定限界が露呈している。イスラームは、マレームスリムにとって最も重要な要素であり、イスラームに帰属意識をもつ共同体としての民族から、イスラームにのみ帰属意識をもつ世界市民性を備えた個々人まで、スペクトルとして理解する必要がある。

ただ、市民の多くによって支持されるのは、様々な形で理論的武装をした学術的言説ではなく、直感的に理解できるような簡単な構図で語られる政治的言説である。¹⁴¹2004年の紛争の激化以後、正規軍を筆頭としてパラミリタリー等多くの治安部隊が駐留するようになり、治安部隊による暴力の犠牲になる市民が増えた。同時に、武装組織によって標的にされるムスリムの数も増えている。こうして、一般の人々の間では、集団的な被害者意識とも呼べるものが共有されるようになった。その結果、様々な言説が飛び交

¹⁴¹ 清水、前掲、8頁。

っている。全て政府が仕組んでいる、政治家や麻薬組織が上で操っている、といった陰謀論の応酬は、仏教徒住民とムスリム住民の間の亀裂のみならず、ムスリムコミュニティ内部における亀裂も深化させている。

人々の間では、暴力を行使する主体に対する憎しみや疑念はある。イスラーム／仏教徒、政府／分離独立派組織といった対立構図は一面では現状を描いている。しかし、分離独立派組織を支持している、政府を支持しているといった二者択一の問題ではなくなっている。2015年から2016年の時点では、武装組織の戦闘方法が、軍やパラミリタリー等のハードターゲットに集中しており、暴力事件件数も減っている。政府にとって、分離独立派組織や武装組織にとっても、人々の支持を得られるかどうかという点が課題であると認識されるようになってきていると考えられる。

一見こうしたハイ・ポリティクスと、人々の日常生活は関係が無いように見える。こうしたハイ・ポリティクスと日常をつなぐものが、教育という場である。深南部で生じている紛争は「アイデンティティの紛争 (Identity-based Conflict)」ともいわれる。¹⁴² これまでも政府の教育政策や、現地の伝統教育への政府の介入は、紛争の原因として指摘されてきた。深南部教育研究は、深南部の伝統的教育機関がマレームスリムとしてのアイデンティティの維持に果たした役割を論じるか、タイ政府の教育政策の効果を論じるものに大別される。いずれも、「なぜマレームスリムは戦い続けているのか」、「なぜ同化しないのか」という観点から、統治側の論理で論じられる構図、あるいは、強権的なタイ政府と抑圧されるマレームスリムというマイノリティの論理で論じられる構図が主流であった。

本研究の目的は、タイにおけるイスラーム教育の分析を通して、深南部マレームスリム社会の変容の実態を探るとともに、タイの国家統合におけるイスラーム教育の位置づけ、役割とメカニズムを解き明かすことである。本研究は、深南部問題を国家レベルからそして地域レベルの双方から分析を行う。100年の歴史の中でマレームスリム社会も大きく変化し、イスラームをめぐる世界情勢も流動的になっている。マレームスリム社会の現状をできるだけ正確にふまえた議論が必要となっている。イスラーム教育が国家統合において果たす役割とメカニズムを明らかにするという問題意識を持つことで、イデオログの言説に絡めとられることを避け、深南部マレームスリム社会の実態を加味した考察が可能となる。

ここでは、国家統合とはマクロレベルのみならず、ミクロレベルからの考察も含んでいる。マクロレベルからの分析では、タイの国家統合の文脈からイスラーム教育を分析することで、タイ政府とムスリム、タイ政府と深南部の関係性に関する考察を行う。ミクロレベルからは、深南部の文脈からイスラーム教育をめぐる状況を考察し、現地にお

¹⁴² Sobhi Tawil and Alexandra Harley eds., “Education and Identity Based Conflict: Assessing Policy for Social and Civic Reconstruction”, in *Education Conflict and Social Cohesion*, UNESCO International Bureau of Education, Geneva 2004, http://www.ibe.unesco.org/conflict/educ_ind_01.pdf (Accessed September 23, 2016), 11.

ける国民統合の実態と国民としてのアイデンティティの多様性を描く。

本研究ではイスラーム教育を、帰属意識を再生産する場であり、こうした帰属意識やナショナリズムとは日常生活の中で再生産されるものであると捉える。そのことによって、一枚岩に捉えられがちな深南部内部におけるダイナミズムを描き出すことが可能となる。国民や民族としての帰属意識とは、戦争などの危機に際して生じてくるものというよりは、日常的に再生産されるものである。我々は、日常のナショナリズムによって自らのナショナリティを無意識的に再生産している。¹⁴³日常生活は、風土や地理的環境、インフラストラクチャーにも大きく影響を受けている。都市的環境か農村か、海に面しているか山に囲まれているか、鉄道駅の近くか港の近くかによって、人々の繋がり方やネットワークも変わってくる。

さらに、注意して見ていく必要があるのは、深南部では 2004 年以降人口構成が大きく変わっている点である。非ムスリム住民の域外への移住によって 100 パーセントムスリムの地域が増えており、たとえ仏教徒との関わりがあったとしても、そのほとんどが武器を携帯する軍人あるいは治安要員である。日常的に治安部隊のオーバープレゼンス状態にあること、紛争状態に置かれていることによって、人々の帰属意識の再生産プロセスも大きく影響を受けていると考えて間違いはないだろう。

¹⁴³ 欧米諸国のナショナリズムについて論じたビリッグは、日常生活の中で繰り返されるナショナル・アイデンティティの想起は、無意識のうちに起こるものであって慣習となることを論じている。Michael Billig, *Banal Nationalism*. (London: Sage, 1995)

第三章 学校教育と安全保障

第一節 仏教寺院を通じた国民教育の普及

1990年代、グローバル化とASEAN地域統合が進展するなかで、タイでは時代の要請に対応すべく教育改革が進められた。そこでキーワードとなったのが、タイ人らしさ（Khvam Pen Thai）、タイネス（Thainess）である。¹⁴⁴「タイ人らしさ」とは何を意味するのか、タイ人とは誰なのか、その意味するところはかなり曖昧である。この時期、山岳部の少数民族に対する政策が見直されるとともに、深南部のマレームスリムに対応すべく実施されてきたイスラーム教育は広く、タイのムスリム全体を対象としたものに変更されている。¹⁴⁵タイは、近代化の歴史の中でタイの意味してきたものを再考するとともに、変容させていく必要に迫られたといえよう。

タイでは、「仏歴 2542（1999）年国家教育法」の下で、グローバル化に対応すべく、抜本的な教育改革が進められた。その後、「仏歴 2544（2001）年基礎教育カリキュラム」が設定され、改革が実施に移されていった。「人間が生涯学習していくための基礎となる知識、価値そして技能を獲得することを目的とする活動」と定義される基礎教育は、「万人の為の教育世界会議」（1990年）以降、途上国の教育開発の課題として認識されるようになった概念である。¹⁴⁶

タイにおいては、基礎教育を、高等教育以前の教育と規定しており（1999年国家教育法第4条）、12年間の基礎教育を、全ての人を対象に、質を維持しつつ無償で提供しなければならないことが定められている（同法第10条）。基礎教育改革の過程で、公立学校におけるイスラーム教育カリキュラムも整備された。公立学校におけるイスラーム教育が公式的に認められ、促進されるようになった今、深南部におけるイスラーム教育も変容を遂げつつある。本章では、タイにおけるイスラーム教育政策の歴史を概観し、タイ政府がイスラーム教育をどのように捉え、対応してきたかについて検討する。

表3 タイの現行教育システム

¹⁴⁴ タイネスという概念は、ASEAN地域統合が進んだ1990年代に對外政策上においてASEANの一員としてのタイという位置づけが強調されるようになったのと同じ時期に、それまでのタイ民族至上主義的な用法とは異なる形で、学問上、メディア上とくに観光の分野で用いられるようになっていく。

¹⁴⁵ 深南部マレームスリムがタイ国家建設過程の最初期から、タイ国民としての市民権を認められてきたのとは対照的に、北部・東北部の国境地帯に位置する山岳少数民族の中には、無国籍並びに市民権を持たない者が多数存在した。この時期、タイは「単一民族」国家タイから、「多様性に富む」国家タイという転換がなされている。外国人の政治的権利について論じたものに、河原祐馬・植村和秀（2006）『外国人参政権問題の国際比較』昭和堂。

¹⁴⁶ 鈴木康郎（2005）「タイの基礎教育改革におけるイスラームへの対応」『比較教育学研究』第31号、118頁。

年齢	学年	教育レベル	職業教育	無償教育
3		前初等教育		
4				
5				
6	1	初等教育		*義務教育
7	2			*
8	3			*
9	4			*
10	5			*
11	6			*
12	1	前期中等教育		*
13	2			*
14	3			*
15	4	後期中等教育	初等職業教育	
16	5			
17	6			
18	1	大学	高等職業教育	
19	2			
20	3			
21	4			

出典：Office of the Education Council 2004 より筆者作成

タイにおける教育政策の歴史を見て行くにあたり、指標となる年代がある。1921年の義務教育法の制定、1932年の立憲革命から第二次世界大戦前後、1973年の学生革命、1980年代の半分の民主主義期、そして1990年代以降の教育改革である。イスラーム教育政策の変容は、タイにおける国民教育の政策の変容と重なっている。タイにおけるイスラーム教育に関わる問題は、深南部のマレームスリムを主なターゲットとして展開してきたという事実から、対マレームスリム政策としての側面が強くならざるを得ない。本章では、タイ政府のイスラーム教育政策の検討を通して、対マレームスリム政策の変容を考察していく。

タイにおける近代教育の整備は19世紀後半に始まった。チュラロンコーン王（ラーマ5世:1868年~1910年）の統治下において、タイの教育制度の中央集権化が図られた。同時に、民族に関わらずタイ人としてのナショナル・アイデンティティの確立を目的と

して、教育省が設立されている。¹⁴⁷タイで最初の学校は、1871年にチュラロンコーン王によって設立された、近代的官僚を養成するための王宮学校である。1880年代、ダムロン親王の計画によって、初めて王宮外に公立の学校が開設された。1892年に設立されていた教育・宗教省は地方への国民教育の普及を目指す「地方教育整備に関する布告」を1889年11月に公布し、地方教育を地方寺院の僧侶にゆだねる政策を打ち出している。12月に作成された「地方教育整備に関する計画書」では、「全ての寺院を教育の場とする」(第7項)と規定しており、仏教寺院を学校とし、仏教僧を教師としてタイ語の読み書き、算数、仏教倫理、実業の4教科を教える政策が導入された。¹⁴⁸ここでは1870年代以降の西洋式の教育の拡大ではなく、寺院、僧侶、サンガ組織を利用した近代学校の地方普及が試みられた。

モントーン・パッターニー(パッターニー地域)における初めての公立学校は、1898年ノーンチック地域、パッターニー市街地の2つの寺院に設置されたものである。¹⁴⁹サッキー寺に設置された学校には、合計55人の学生が登録をしたものの、参加した学生は8名しかいなかったとの記録が残っている。¹⁵⁰キース・ワトソン(Keith Watson)の分類によると、バンコク政府から教科書やカリキュラムを受け取った寺院学校は、地域学校として分類されている。¹⁵¹タイにおける初期の国民教育は、地域学校、すなわち寺院学校によって担われていた。仏教僧による仏教寺院における教育は、近代的な教育制度の確立からは程遠いものであった。1922年から1932年までの間に設置された公立学校のうちで、寺院学校は7~8割に及んでいる。1932年の時点において全ての公立学校のうち7割は寺院内にあった。¹⁵²タイにおける教育は、仏教と深く結びついて展開した。政府による国民教育の普及の試みは、様々な形で深南部マレームスリムの反抗を引き起こした。

19世紀後半以降、近代的な学校制度が整備され始めたとはいえ、バンコク周辺以外の地域では、学校制度の普及は遅れていた。例えば、1911年の時点において、バンコク近郊のチャンタブリ県において就学年齢にある男子児童のうち71パーセントが教育を受けられていたのに対して、東北地方のウドン県では13パーセント、パッターニー県では9パーセントしか教育を受ける機会がなかった。¹⁵³1913年には、全国に共通の

¹⁴⁷ Otto Von Feigenblatt, "Weapons of Mass Assimilation: A Critical Analysis of the Use of Education in Thailand." *Journal of Asia Pacific Studies*, vol.1, no.2. (May, 2010), 292-311.

¹⁴⁸ 村田翼夫(2007)『タイにおける教育発展—国民統合・文化・教育協力—』東信堂、33頁。

¹⁴⁹ Medrano, Anthony David. 2007. 'Education Creates Unrest': State Schooling and Muslim Society in Thailand and the Philippines. Master Thesis, University of Hawaii, 49.

¹⁵⁰ Dulyakasem, Uthai. 1981. Education and Ethnic Nationalism: A Study of the Muslim-Malays in Southern Siam. PhD Dissertation, Stanford University, 152.

¹⁵¹ Keith Watson, *Educational Development in Thailand* (Singapore: Heinemann Asia. 1980), 100

¹⁵² Watson, 106.

¹⁵³ David K. Wyatt, *The Politics of Reform in Thailand: Education in the Reign of King Chulalongkorn*. (New Heaven: Yale University Press, 1969), 374.

学校制度が設立されている。1915年には、深南部地域において、およそ2636名の学生が公立学校に通っていた。当時就学年齢にあった子供の人口は87,034名であるとされており、公立学校への進学は一般的とはいえなかった。¹⁵⁴

教育の近代化がすすめられたのは、1921年に義務教育法が制定されてからである。深南部のマレームスリムに対しても、4年間の義務教育が課せられた。1921年義務教育法の下では、原則7歳から14歳までの児童の就学が義務化されている。パッターニー県では、他県に先んじて義務教育法の施行が開始された。¹⁵⁵義務教育法の制定の後、マレームスリムの就学率は低下の一途を辿った。教育省の担当官によると、高額の罰金を払ってでも、学校に通わせない親、中には月に一日だけ子供を学校にやり、罰金を免れる者もいたと報告されている。¹⁵⁶

マレームスリムの反感を買ったのが、1921年の義務教育令の公布に従って1921年初頭から始められた、16歳から60歳までの全ての人民に対する1～3パーツの教育費の徴収であった。徴収が免除されたのは、生活費が稼げない者、僧侶や聖職者、軍人、学校の経営者である。児童がタイ語を学ぶことへのマレームスリムの反感を考慮して、1917年モントーン・パッターニーは児童の学校への参加を強制するとともに、教育費を毎年1パーツ徴収する特別措置の設定を提案している。¹⁵⁷パッターニーの提案は結果として、1921年の義務教育法に取り入れられることとなった。1930年に当該規定が無くなるまで、モントーン・パッターニーでは人々から年間1パーツの教育費が徴収された。教育費の徴収を理由として、モントーン・パッターニー前知事のトゥンク・アブドゥル・カディール (Tunk Abdul Kadir) らの指導の下で反政府運動が組織された。当時のモントーン・パッターニー知事は、トゥンク・アブドゥル・カディールが率いた反乱について、毎年教育費の徴収が原因であることを指摘し、マレームスリム児童の学校への参加を強制する規則を緩和する必要性を書き送っている。¹⁵⁸義務教育法の制定の結果、深南部から英領マラヤへと移住するマレームスリムが増加した。当時のナコンシータンマラート県の警察筋によると、こうした移動の要因として、①税金、②厳しい教育管理、③義務教育法の制定の3つが指摘されている。¹⁵⁹

ラーマ6世王(ワチラウット:在位1910-1925)は、こうしたマレームスリムの反乱を受けて、南部のマレームスリムへの対応に関するガイドラインを制定した。その中には、イスラームの教えに反する規則や慣習は全て廃止する、新たな規則はイスラームに則ったものにする、マレームスリムに対する税率は英領マラヤの人々を超えてはならない、さらに公務員には正直で丁寧でなくてはならないとし、罰として深南部へ左遷する

¹⁵⁴ M. L. Manich Jumsai, *Compulsory Education*. (Bangkok: UNESCO, 1958), 141.

¹⁵⁵ 1921年義務教育法が制定され、同年10月1日に発効した。初年度はパッターニーを含む、5つの地域にのみ適用されている。Sachakul, *Education as*, 213.

¹⁵⁶ Uthai, 153.

¹⁵⁷ Sachakul, 217.

¹⁵⁸ Ibid, 218.

¹⁵⁹ Ibid, 213.

という慣習を辞めるべきである、といった内容が含まれている。¹⁶⁰

深南部における教育問題に対応するため、ダムロン親王は 1906 年に深南部の公立学校においてマレー語教育を導入した。ダムロン親王はラーマ五世王によって最も重用された王族の一人である。マレームスリムが多くを占める公立学校において、1 年生に対する週 5 時間の、2 年生に対する週 2 時間の、3 年生に対する週 1 時間のマレー語教育を行う事を提案している¹⁶¹。その他の学校においても、マレー人教員により、仏教徒の学生を含めた 4~6 年生に対して、週 1 時間のマレー語教育が行われた。¹⁶²

1931 年、勅令によってモントーン・パッターニーが廃止され、モントーン・ナコンシータンマラートに統合される。パッターニーとナコンシータンマラートは、義務教育法が施行された最初期の地域であるにも関わらず、依然として児童の就学率は低く、試験の結果は常に国家平均を下回っていた。1923 年の 2 月、義務教育法の強制施行に対する反対運動が行われた。現地政府がマレーの土着のコーラン学校を強制的に閉鎖したことを受けて、義務教育法はマレームスリムをシャム化する措置であるとみなされたのである。

1932 年の立憲革命によって絶対王政が打倒されると、指導者たちは国内の民族的マイノリティを刺激しないよう、介入を控える方針を採用した。しかし、1935 年ピブーン・ソクラームが政権を握ると、パッターニー地域に対する政策は、国家主義的かつ強権的なものへと変化する。

「全ての児童は、性別、血統、宗教、人種、階級に関わらず、7 歳から 14 歳までの間、学校に通わなくてはならない。万一 14 歳までにタイ語の読み書きができない場合には、その後も学校に残らなくてはならない。身体的、精神的な障害を持つ、又は慢性疾患、伝染病である、無償教育を受けることのできる小学校から離れた場所に住んでいる、両親や保護者を支えなければならない、これらの 3 つの場合を除いて全ての児童は例外なく就学しなくてはならない。例外が認められるにあたっては、地域の行政官による証明書の発行がなくてはならない」。¹⁶³

1933 年から 1939 年のプラヤー・パホンポンパユハセナー政権下では、県レベルからの代表が議会へと送られたものの、代表性とは程遠いものであった。とはいえ、1937 年と翌 1938 年には深南部、パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県から代表が当選している。この時期、国家教育制度が徐々に構築されていく。1932 年と 4 年後の 1936 年の国家教育計画においては、全てのマレームスリムに対して、公立小学校におけるタイ語学習が要求されている。¹⁶⁴

¹⁶⁰ Nantawan Haemindra, "The Problem of Thai Muslims in the Four Southern Provinces of Thailand," *Journal of Southeast Asian Studies*, Vol.2, No.7 (September, 1976), 205.

¹⁶¹ The Royal Gazette, 1931 sited in Sachakul, 219.

¹⁶² Sachakul, 219.

¹⁶³ Jumsai, 65.

¹⁶⁴ Neil J. Melvin, "Conflict in Southern Thailand, Islamism, Violence, and the State in the Patani Insurgency," SIPRI Policy Paper No.20, (Stockholm: International Peace Research Institute, 2007)

1933年、全ての行政地域は、1933年の「シャム王国官僚制度に関する勅令」によって廃止された。モントーン・パッターニーと呼ばれた地域は、パッターニー、ヤラー、ナラティワートの3つの県に分割された。行政改革の結果、深南部地域の公立学校におけるマレー語教育は廃止されている。1947年以降に再開されたものの、1951年以降は、全ての県に対して統一政策が適用されたために再び廃止された。深南部では、1950年代に至っても依然として就学率が低く、結果として社会的経済的な後退を招くこととなった。

1939年12月、ピブーン政権が成立すると、数々のナショナリスト政策が実施された。ピブーンは反対勢力を反乱罪を適用することで排除し、文化、社会倫理、生活様式、宗教の4つの観点から総合的な社会文化改革を行った。¹⁶⁵ 仏教が国家の宗教とされたため、仏教徒になることができない者は、すなわち愛国的な市民としての義務を果たすことに失敗しているということと同義であるとみなされる。¹⁶⁶ 公務員は仏教徒でなくてはならないといった規則と相まって、支配者としての仏教徒、被支配者・被害者としてのマレームスリムという構図が構築されていった。こうして、深南部における問題は仏教とイスラームという宗教間対立として認識されるに至る。¹⁶⁷

第二節 公立学校におけるイスラーム教育

深南部において公立学校が普及し始めた1960年代以降、国民教育は前初等教育から開始されている。学生たちは、朝礼でタイ王国の国家斉唱並びに国旗掲揚を行い、授業では仏教の道德や倫理、スコータイ王朝が深南部地域を支配下に置いたといった、タイの歴史観が教えられた。

1973年10月14日、タノム・キッティカチョーン率いる軍事独裁政権が、学生決起によって打倒された。社会改革の要求が高まり、政府は教育を含む各種の改革を実施した。革命に続くサンヤー・タンマサック内閣(1973—1975)では、人々の政府への不信感を回復し、国家への帰属意識を高める教育の必要性が認識された。1975年には義務教育が延長され、中等教育をより広く人々に開かれたものにするのが目指されている。1960年の国家教育計画に基づき学校制度は7-5-4制、義務教育は4年間とされていた。学校体系は、6-3-3制へと移行し、義務教育は4年から6年に拡充された。

教育改革において問題とされたのは、教育行政管理の統一性、教育の不正・不平等、カリキュラムであった。当時、バンコク以外の地域における初等教育は内務省によって

¹⁶⁵ Noi Wong, Ornanong. *Political Integration Policies and Strategies of the Thai Government toward the Mala-Muslims of Southernmost Thailand (1973-2000)*. PhD Dissertation, Northern Illinois University, 94.

¹⁶⁶ Kobukua Suwannathat-Pian, *Thailand's Durable Premier: Phibun through Three Decades, 1932-1957*. (Oxford: Oxford University Press, 1995), 130.

¹⁶⁷ Noi Wong, 96.

担われていた。教育省は中等教育を、大学等の高等教育は大学行政省が担当していた。この時期に行われた教育改革では、こうした教育行政上の非効率性の解消が目指された。それと共に、1973年学生革命が生じた背景でもある社会的不公正の是正が重要な課題とされ、軍事政権時代の厳格で制約の多いカリキュラムではなく、より開放的なカリキュラムの制定が目指された。¹⁶⁸

1974年に設置されたカリキュラム作成委員会の下で、1975年に新カリキュラム案が作成され、1976年から1978年の試験期間を経て公布された。民主化時代に相応しい教育の必要性、タイ国民の生活および社会発展のための教育、教育の質の向上と地域の特性を生かした教育の必要性を背景として改訂された。¹⁶⁹

しかし、1976年10月に周辺諸国の共産主義化とそれに伴う国内世論の変化を背景としてクーデターが生じると、タイでは再び軍事政権が復活した。1977年の国家教育計画では、「民族、宗教、国家への忠誠を育むとともに、国王を元首とする民主的君主国の政治における市民の役割を理解させる」「タイ民族への帰属感を助長し、民族の誇りおよび国家の安全と防衛に対する関心を抱かせる」などと規定され¹⁷⁰、宗教教育、正確には仏教倫理の教育が重視されることとなった。1978年の初等カリキュラムでは目的として「教育は一致協力により国家の統一を目指すこと」が、「国民としての権利、義務、責任の重要性を理解させる」「教育は大衆のためのもの」「教育は生活にとって有用なもの」と並んで目的の一つに掲げられている。¹⁷¹各学校の自由裁量が認められるようになり、弾力的な運用の余地が作られた。小学校のカリキュラムは、①基礎技能、②生活経験、③性格教育、④作業経験の4つのグループに統合された。¹⁷²基礎技能とは国語と算数が、生活経験は社会、理科、保健が統合されたものである。また、性格教育は、道徳、芸術、体育、音楽などを、作業経験は家庭、農業、工作を統合したものである。

こうした中、タイ政府はマレームスリムの政治的社会的な課題に直面する。成人の再社会化、そして若年層への教育である。既に、強権的な同化政策が実施された後であり、成人の再社会化にはかなり困難が伴った。そこで期待されたのが、若年層に対する教育であった。政府は、マレームスリムの学生に対して、国立大学や警察学校などの機関で学ぶための奨学金を支給するなど、アフターマティブアクション政策が取られた。こうした政府の試みの結果、マレームスリムの中で高等教育を受け、公務員等にな

¹⁶⁸ Gerald W. Fry. “The Evolution of Educational Reform in Thailand” (paper presented at the second international forum on education reform: key factors in effective implementation, Bangkok, Thailand, September 2-5, 2002), 12-13, Oonta Napakun. Thai Concept of Khit-Pen for Adult, and Non-Formal Education. (Bangkok: Grungsayma Kaanphim, 1985), 10-16.

¹⁶⁹ 平田利文 (1989) 「第三世界のカリキュラム改革—タイの場合」『比較教育学』1989 巻15号、47～61頁、49頁。

¹⁷⁰ 1977年国家教育計画。村田前掲、147頁。

¹⁷¹ 同上。

¹⁷² 平田前掲、50頁。

るエリート層が出てきたのである。¹⁷³

1975年の教育省令によって、課外教科として週5時間以内のイスラーム教育の導入が認められた。1976年より、深南部の第二教育区（パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県、サトゥン県）のムスリム児童が過半数を占める小学校において、イスラーム教育が課外授業として試験的に実施されることとなった。1976年に定められた「仏歴2519年（1976年）イスラーム教育カリキュラム」、1978年1月24日に承認された「南部国境県に関する国家安全保障政策」は、深南部に関する包括的な政策の嚆矢である。人々にタイ語を話させる、人々にタイ語を話すことを好きにさせるという目標が記されていた。1987年11月8日に制定された第二次安全保障政策でも、引き続きこの目標が優先課題とされている。

1980年、内閣での閣議を経て、1981年から教育行政改革が実施された。初等教育は内務省から教育省の監督下に移行した。初等・中等教育は教育省の管轄下となり、とくに初等教育に関しては初等教育委員会を通じた管理が行われることとなった。1981年の教育省令により「仏歴2523年（1980）年初等教育段階におけるイスラーム教育カリキュラム」が告示され、イスラーム教育が南部の小学校で正規の必修科目として認可された。公立学校におけるムスリム児童に対して、週2時間のタイ語を用いたイスラーム教育が公式的に認められたのである。この時点では、いまだムスリム女性のスカーフやムスリム男性の伝統帽であるソンゴック、コピヤなど、宗教的なシンボルの着用は禁止されていた。

1990年代、急速な社会変化と経済発展、1997年のアジア経済危機を経て、民主憲法が制定された。1997年民主憲法に基づいて制定された1999年の国家教育法では、グローバル化と急速な社会変化に対応するための個々人の能力の向上という要素が色濃く出たものとなった。1997年の民主憲法第43条では、タイ国民全てが等しく12年間の基礎教育を無料で受ける権利が定められた。憲法第81条では、経済と社会変化に合わせて教育を発展させていくという政府の目標が記されている。

1999年国家教育法第27条に基づき、基礎教育委員会によって基礎教育カリキュラムが制定されている。基礎教育カリキュラムは、3学年単位で第一段階から第四段階まで区分されており、8つの学習内容グループ（Pet Klum Wicha）から構成されている。すなわち、①タイ語、②数学、③科学、④社会科・宗教・文化、⑤保健体育、⑥芸術、⑧職業、技術、⑧外国語である。基礎教育カリキュラムでは、各学校が独自カリキュラム「教育機関別カリキュラム」を編成する際の基準が提示されるなど、より各学校の裁量に任される部分が大きくなっている。政府によって制定された基礎教育カリキュラムを基本として、地域の伝統や知恵を強調したカリキュラムの設定が推奨されている。¹⁷⁴

1999年国家教育法では、タイが多様性に富んだ国であることに鑑み、宗教と文化と

¹⁷³ Noi Wong, 138.

¹⁷⁴ Rung Kaewdeang, *Patiwat Kaansuksaa Thai 2540*, 210-213.

教育の統合が強調された。この基礎教育カリキュラムには、イスラーム教育に関する具体的規定はなされていない。イスラーム教育は、8つのグループのうち、④社会科・宗教・文化グループに含まれるとされ、自らの信仰する宗教の狭義を学び、信仰を日々の生活で実践し、多様な価値観の平和的共生の基盤とする、という記述に基づいて策定・実施されることとなった。2002年4月に開始された、イスラーム教育カリキュラム策定ガイドライン協会では、教育省の担当官、イスラーム委員会、私立イスラーム学校や大学教員なども参加し、官民一体で策定が進められた。協議会では、これまで、深南部のマレームスリムに限って実施されていたイスラーム教育を広く、タイ全土のムスリムが享受できるように改革することが重要視された。

2003年8月「仏歴2544年(2001)年基礎教育カリキュラムに基づく社会科・宗教・文化学習内容グループにおけるイスラーム教育の学習内容」が告示され、イスラーム教育担当講師の研修が開始された。公立学校のイスラーム教育については、①信仰原理、②イスラーム法、③道徳、④イスラーム史、⑤クルアーン、⑥アラビア語、マレー語の6つの領域によって構成される。学習形態においては、これらの6つの領域を網羅した統合型学習を実施するように定められている。

「イスラーム学習内容」は「教育機関別カリキュラム」編成のためのガイドラインとして位置づけられているが、各領域における単元目標や学習内容等が詳細に示されている。イスラーム教育担当教員の責務についても示され、基礎教育の原理や目標に合った教育計画を立てるように示されている。実際のところは、自由裁量が大きい訳ではなく、必ずしもニーズに応じたイスラーム教育の編成が推進されているとは言い難い点にも留意する必要がある。

第三節 私立イスラーム教育の展開

タイにおける私立学校の歴史は、中国系の教育機関の管理統制として始まった。1918年の私立学校法の制定とともに、私立教育機関は20世紀の初頭に増加していった。ほとんどの私立学校が、中国系の移民によって始められた学校であった。中国人を「東洋のユダヤ人」と称し、安全保障上の脅威として認識していたラーマ6世王は、勅令によって王国内にある全ての私立学校がタイ王国の法規に則ったものでなくてはならない旨を定めている。¹⁷⁵私立イスラーム学校として認可されるためには、教育省への登録が義務付けられた。

私立学校法では、以下のような要件を定めている。①既に設立された、もしくは今建設中の全ての私立学校は、教育省に登録を行い教育省の監督に従う、②私立学校はタイ語の読み書きを教える必要がある。学生に対して市民としての義務及びタイの地理歴史について教え、タイへの忠誠心を養わなくてはならない、③外国人の教員、すなわ

¹⁷⁵ 仏歴2461(1918)年私立学校法, 110.

ち中国人、西洋人、宣教師は、教授開始6か月前もしくは1年前までにタイ語の語学試験に合格しなくてはならない、④学校長は小学校教員の学位、高校卒業、又はそれ相当の資格を持ち、タイ語の実用的な知識を有していなければならない、⑤カリキュラムには、最低週3時間のタイ語を盛り込まなくてはならない、⑥教育大臣は私立学校における、国家倫理に反する、もしくは国家の平和に対する脅威となりうる教科書の使用を禁止できる。

私立学校法に従って登録を実施したイスラーム教育機関の数は、決して多くは無かった。¹⁷⁶とくに深南部においては、ポーノの私立学校としての登録が無かったことから、私立学校法の影響はほぼなかったと考えられる。私立学校法が制定された3年後の1921年、義務教育法が制定され、深南部のイスラーム伝統的教育機関も私立学校としての登録が義務付けられた。しかし、上述のタイ語要件を満たすことは困難であり、1、2年の間に要件を満たすことができなかつた時には、前初等教育機関とみなされるか、閉鎖に追い込まれた。

深南部における最初期の私立イスラーム学校を設立したのは、ハジ・スロン・アブドゥルカディールであった。1927年にメッカにおける留学を終えてパッターニーに戻った彼は、マドラサ・アルマアリフ・アルワタニヤ (Madrasa Al-Ma'alif Al-Wataniya) を1933年に正式に開講した。しかし、2年後の1935年に違法な集会を促進しているとして、政府によって閉鎖されている。

私立イスラーム学校が増加したのは、第二次世界大戦後である。第二世代の私立イスラーム学校は、主に中東諸国や北アフリカ、インドネシアやマレーシア等のイスラーム諸国で学んだ卒業生によって設立されたものである。1918年に制定された私立学校法は、その後1936年、1954年、1975年、1982年に改正されており、それと共に私立イスラーム学校を含めた私立学校の数は増加していった。

深南部において、タイの初等教育が普及し始めたのは1960年代以降であった。サリット・タナラット政権の第一次国家経済開発計画 (1961-1966年) に伴って、深南部は開発重点地域として指定された。東北タイとともに重点的な社会経済開発の対象となった深南部でも、初等教育機関が急速に整備されていった。1960年の国家教育計画に基づき、全ての国民に対して4年間の初等教育が課されるようになる。しかし、タイ語を教授言語とするタイの国民教育は、仏教並びに仏教文化と結びつけて考えられたために、マレームスリムには依然として疑念をもって受け取られていた。¹⁷⁷1921年の義務教育法の制定時に見られたように、教員に賄賂を支払って学校へ行かせないようにする者や、マレーシアに子弟を送る者もいたのである。¹⁷⁸興味深い現象としては、深南部での初等教育の普及と軌を一にするようにして、タマン・ディディカン・カナック・カナック

¹⁷⁶ Hayimasae, Numan, "Malay-Muslim Educational Institutions in South Thailand (1930-1990)", PhD dissertation, University of Science, Malaysia, 2010. 158

¹⁷⁷ Noiwong, 108

¹⁷⁸ Ibid.

(Taman Didikan Kanak Kanak)、通称タディカ (Tadika) と呼ばれる、初等イスラーム教育機関が普及したことである。多くがモスクに付属しており、子供たちは放課後や休日にイスラームについての基礎知識を学んでいた。

タイ政府の正統性を危機に陥れたのは、イスラーム高等教育機関であるポーノに対する管理統制であった。ポーノに対する管理統制の措置は、1957年にクーデターによって成立したサリット・タナラット政権下で進められた。1960年に「南タイ4県のイスラーム教徒の教育問題に関する委員会」が設けられ、マレームスリムの分離・独立運動の温床とみなされたポーノに対する登録が開始された。1961年の「第2教育管区におけるポーノ改編推進に関する教育省規則」により、教育省への登録並びにタイ語と職業訓練の教員の派遣が開始されている。これは強制ではなく、金銭的な支援をインセンティブとした自発的登録を促すものであった。教育省制定のカリキュラムに基づき、前期課程(4年)、中期課程(3年)、後期課程(2年)に分けて教育を行うものとされ、成果を挙げたポーノには国王が褒賞を与えることとされた。

1966年には、国家安全保障委員会の勧告に応じて、新たなポーノの設立禁止が内閣において合意された。既存の全てのポーノに対して、半年以内、すなわち1966年12月31日までに私立学校として登録することが義務付けられた。さらに、1971年の6月15日までに1954年私立学校法の基準に基づく私立学校に順次改編していくことを義務付け、未登録のものは並行処分にするなどの措置を取った。1965年には、初年度は1万バーツ、次年度から2年間にわたって年間3千バーツを支給する政策が開始され、普通科目を教授するタイ人教員の提供も行っている。¹⁷⁹1969年までに登録を行った学校に対して、金銭的支援を約束することで登録を促していった。

登録したポーノは私立イスラーム学校 (Rongrien Ekachon Son Sasana Islam) と改称された。1968年には、ポーノは私立イスラーム学校へと改編されていった。政府は、ポーノに対して週4時間の社会科とタイ語の授業を義務付けるとともに、イスラーム教育の教科書、カリキュラムの標準化の作業に乗り出している。同年、教育省によって、『マレー語を話す児童のためのタイ語読本』が発行された。¹⁸⁰また、1970年に作成された「私立イスラーム学校援助計画」に基づいて、南部地域開発計画に則った普通教育の改善も試みられた。

宗教指導者の中には、タイ政府による近代的なセキュラー教育の普及を、ポーノが深南部において伝統的に果たしてきた役割に対する脅威であり、地域の教育とマレー文化、イスラームの破壊を試みるものであるとみなした者も多かった。1960年代以降、宗教指導者たちによって分離独立運動が組織されたのは、マレームスリムに対する政府の政策に対する不支持を示すものであったといえよう。

1973年の学生革命に関わらず、ポーノ並びに私立イスラーム学校に対する管理・統

¹⁷⁹ Noiwong, 164.

¹⁸⁰ 赤木攻 (1989年) 『タイの政治文化—剛と柔—』 勁草書房、81頁。

制は維持された。1970年から1976年までの間、「イスラーム教育を実施する私立学校に関する計画」が実施されている。タイ側のエリートの見解では、イスラーム教育機関における教育が、タイ政府のマレームスリムに対する同化政策を阻害する要因であった。したがって、私立イスラーム学校に対しては、金銭的支援と法的な強制を通じた管理・統制が行われたのである。ポーノについては、カリキュラムを通じた統制を行う事が不可能であったため、ヤラーに所在する教育省地域教育事務所に対する教員・学生の登録と活動の報告を要請した。かたくなに登録を拒否する宗教指導者がいる一方で、私立イスラーム学校を志向する指導者によって様々な試みがなされ始めたのもこの時期であった。ポーノの伝統教育を午前中のみ限定し、午後はタイ語による一般科目の講義を行う学校、ポーノを維持しながらコーソーノー（学校外教育制度）のカリキュラムを用いた集中講義を行う学校などがみられた。¹⁸¹

教育省の私立教育委員会は、1976年の内閣の閣議決定に基づいて、1977年から1981年の間にイスラーム教育を行う私立学校に対する支援計画を策定している。主な目的は、私立イスラーム学校における教育の質の向上であった。1977年から1981年にかけて実施された私立イスラーム学校補助金計画では、私立イスラーム学校が補助金を受け取るために満たすべき要件が定められた。校舎等のインフラストラクチャー、教材、校則、そして学力の評価方法等の制度の整備である。後に、この計画は1982年から1986年に延長された。

1982年私立学校法では、私立学校の設立を行おうとする者は出生によってタイ国籍を有していなければならない旨が明記された。さらに、学校経営に携わるステークホルダーの最低半数がタイ国籍を持っていることが義務付けられている。1982年私立学校法に基づき、こうした要件が満たされた私立イスラーム学校について政府は、私立学校法の第15条2項学校から、普通の私立学校と同様の第15条1項校に格上を行っている。第15条1項の要件を満たす学校に対しては、学生一人当たり1万バーツの補助金が支給される。この制度によって、私立イスラーム学校間の学生獲得競争が激化した。学費を無料にする学校や、学生の送迎バスの運行を行う学校も現れた。1985年には新たな私立イスラーム学校の設立が禁止されたが、1990年代に再度許可されている。

1990年代以降、民主化の流れとともに、マレームスリムの政治参加も進展し、しだいにムスリムの権利が拡大してきた。ラーチャパットヤラー大学の学生を中心とするスカーフ着用デモを経て、1995年10月7日に教育省の決定によって、ムスリムの教員と学生に対するスカーフの着用が認められた。1997年の教育省規則の改訂によって、学校における宗教的シンボルの着用が許可された。同年、それまでは深南部に限って認められていたイスラーム教育が全国的に認められるようになっている。

¹⁸¹ 小野沢正喜（1985）「タイにおける文化的同化政策の展開と少数民族のエスニック・アイデンティティー—南タイ・イスラーム社会の教育体系の変容を中心として—」『多文化教育の比較研究—教育における文化的同化と多様化—』231～257頁、253頁。村田前掲書、186頁

1998年、政府は私立イスラーム大学の開設を許可した。イスラーム開発銀行の支援の下で設立されたヤラーイスラーム大学（現在のファートニー大学）は、タイで初めてのイスラーム大学である。ソクラーナカリン大学パッターニー校のイスラーム学研究所、ラーチャパットヤラー大学のイスラーム学科、そしてヤラーイスラーム大学が、イスラーム学の高等教育を提供するようになった。2005年には、ナラティワート県のナラティワートラーチャナカリン大学にアラブ学研究所が設立され、次第に深南部におけるイスラーム高等教育の環境も整備されてきている。

1990年代、タイ政府は深南部における教育の質の向上を目指して、クルータヤットプログラム（Khronkan Khru Thayat）を開始し、教員を目指す学生に対する奨学金の支給を行っている。1994年から1996年の間に、2900万バーツの予算が割かれ、1100の奨学金が支給された。このうち、90の奨学金がイスラーム学を学ぶ学生に支給されている。¹⁸²1999年10月から2000年4月までの間に私立イスラーム学校に対して支給された補助金の額は、210,359,605バーツ（日本円で6億円以上）に及ぶ。

タイの学校制度が適用される以前、深南部におけるイスラーム教育機関としては、ポーノとマドラサ（アラビア語で学校）が存在した。ポーノは、寄宿型の宗教塾でクラスや進級制度を取っていない。マドラサは中東留学経験者によって設立されており、クラス・進級制度が導入されていた。マドラサにおける講義は主にパタニ・マレー語とアラビア語で行われており、マドラサによっては数学や天文学などの講義も行われていたという。¹⁸³イスラーム教育の10級システム（4イプティダイ、3ムタワシット、3サナウイ）は、このマドラサシステムから引き継がれたものであるとされる。

深南部の私立イスラーム学校では、2つの異なるシステムが1つの学校で実施されている。一つはタイ語による普通科目教育である。政府によって策定されたものでタイ語の教科書を用い、タイ語で教授される。いま一つはパタニ・マレー語によって行われる宗教科目教育である。深南部における多くの私立イスラーム学校が、伝統的イスラーム教育機関、ポーノとしての伝統を持っている。深南部のみならず、イスラーム教育で教えられる科目や科目内容は、科目数に多少の前後があるとはいえ共通している。宗教科目教育についてはポーノにおける教育を引き継いだ学校、オリジナルのカリキュラムを実施している学校など、それぞれの学校で特色ある教育が実施されている。深南部における私立イスラーム学校は、タイ政府によるイスラーム教育の管理統制の歴史の中でポーノの教育制度を受け継ぎながらも、政府のカリキュラムを受け入れるという形式を採用することとなったといえよう。

¹⁸² Noi Wong, 172.

¹⁸³ アブドゥルラフマン・サラエ氏に対するインタビュー、パッターニー県サイブリ郡、2015年8月7日。サラエ氏は1979年に設立された私立イスラーム学校、ラップラチャヌクロ校の校長である。ラップラチャヌクロ校は、サウジアラビアで7年、スーダンの大学でシャリーア法を4年学んで帰国した氏の父によって伝統的なポーノとして設立された。タイ政府の管理下に入る以前は、アラビア語で普通科目、数学、科学、地理の教育を行っていた。

第四節 学校教育と安全保障

2001年9月11日、アメリカで生じた同時多発テロ以降、イスラームをめぐる世界情勢が大きく変化した。同時多発テロが東南アジアに及ぼした影響の大きさについては、論者によって意見が分かれている。しかし、同時多発テロを契機として、イスラーム教育に対する見直しが東南アジア各国で行われたことは確かである。タイでは、各宗教間の平和的共生や、グローバルな視野に立ったイスラームをめぐる問題に対する認識と行動の必要性が主張された。

2004年以降の紛争の激化は、深南部の教育に大きな影響を及ぼした。2004年1月4日、ナラティワート県の軍基地から大量の銃器が略奪される事件を境として深南部におけるタイ政府と反政府武装組織の間での抗争は激化し、事件件数、死傷者数共に増加の一途をたどっている。既に、市民を含む1万人以上が犠牲となっており、死者数は6千人を超えた。¹⁸⁴2004年から2007年には、アフガニスタンとイラクに次ぐ激しい紛争地域であるともいわれた¹⁸⁵。紛争激化の結果、教員や学校職員が武装組織の標的となり、学校は事件が生じる度に休校になった。深南部情勢の深刻化を受けて、深南部におけるイスラーム教育機関に対するタイ政府の政策は、管理統制の側面が強くなった。タイ政府によって、ポーノや私立イスラーム学校が再び安全保障上の脅威であるとみなされるようになったためである。

1999年国家教育法の制定に基づき2000年以降、各種の教育改革が実施されてきた。初等教育委員会は廃止され、初等教育と中等教育の両方を管理・運営する基礎教育委員会が国家レベルで設置された。地方には教育地区(Khet Phuentsi Kansueksa)が設置され、基礎教育、中等教育の管理・運営を担当することとなった(1999年国家教育法第38条)。第40条では、公立学校および私立学校における基礎学校運営委員会の設置が規定されている。2003年に公布された教育省組織法が制定され、教育省の機構が改編されている。

2002年4月、イスラーム教育の全国での統一の実施が検討されることとなった。協議会には、教育省各部署の代表者、深南部のムスリム有識者およびイスラーム教育関係者のみならず、タイ・イスラーム中央委員会など全国のイスラーム組織が参加し官民一体でイスラーム教育改革に取り組んだ。こうしたプロセスを経て、主たるものだけでも①国会議員教育小委員会案、②国家初等教育委員会事務局案、③第2教育管区教育・宗教・文化開発事務局・私学教育委員会事務局合同案、④南部私立イスラーム学校協会案、

¹⁸⁴ Srisompob Jitpiromsri, "9 Months into the 9th Year: Amidst the enigmatic violence, the Pa(t)tani Peace Process still Keep on Moving," <http://www.deepsouthwatch.org/node/3803> (Accessed June 3, 2016)

¹⁸⁵ David Kilcullen, *The Accidental Guerrilla: Fighting Small Wars in the Midst of a Big One*. (New York: Oxford University Press, 2009), 121.

の4つが提示された。¹⁸⁶

2003年8月に「仏歴2544(2001)年基礎教育カリキュラムに基づく社会科・宗教・文化学習内容グループにおけるイスラーム教育の学習内容」が告示され、イスラーム教育は最終的に「社会・宗教・文化」学習内容グループの一部として実施されることとなった。全国共通の教育内容としての実施が構想されており、全国の学校に配布された。学校にムスリム児童が1人でもいればイスラーム教育を実施することが望ましいという理念を反映した措置、であるとされる。¹⁸⁷

しかし、こうした措置に対して私立イスラーム学校側は、学習内容や時間数の少なさに対して難色を示した。私立イスラーム学校が独自のイスラーム教育カリキュラムを実施することとなったため、イスラーム教育の全国的な統一が実現されることはなかった。私立イスラーム学校に関しては、私立イスラーム学校協会が主体となって作成したが、認可交渉にあたっては、南部を所管する第2教育管区のムスリム行政官が私立イスラーム学校側と中央との仲介に尽力し、特別専門教育カリキュラムとして認可を得るに至っている。現在、私立イスラーム学校で用いられているカリキュラムは、「仏歴2546(2003)年私立イスラーム学校におけるイスラーム教育カリキュラム」である。

学習内容が体系化される一方で、基礎教育カリキュラムの指針を踏まえ、「2003年私立学校カリキュラム」に示されている目標、学習内容、および学習水準といった項目は、最低限の内容を示した大綱的なものとなっている。「2001年イスラーム学習内容」とは異なり、各学校が実質的な「教育機関別カリキュラム」を編成できるように配慮されている。

長年タイにおけるイスラーム研究を行ってきた鈴木は、イスラーム教育の問題について、以下の指摘している。第一に、学習権としてのイスラーム学習の全国実施が、マイノリティの教育保障という観点から意義をもつ一方で、その学習内容が限定的かつ皮相的なものとして示されることによって、専門的なイスラーム教育を望むムスリムには受け入れられなかった。第二に、こうした全国実施措置そのものが、ムスリムの求める専門的なイスラーム教育を排除する働きを促した。つまり、基礎教育改革こそが、従来「教育の質向上」スローガンのもとで目標とされてきた普通教育と宗教教育との統合策を頓挫させる結果を招いたのであり、指摘されてきた児童生徒の負担も解消されないままとなっている。

基礎教育改革の結果、ムスリムの求める専門的なイスラーム教育が排除された、又は阻害されたとすることには問題が伴う。また、政府や多くの教育研究者が想定するように、宗教科目と普通科目の双方を学ばねばならないため児童の負担が大きく、それが学力の低さに結びついているというのは必ずしも当たっていない。深南部では、長らく普通科目教育と宗教教育を行ってきたのであり、急に負担が増えたという訳ではない。イ

¹⁸⁶ 鈴木、2005、125頁。

¹⁸⁷ 前掲、126頁。

スラーム教育の質の低下は、言語、教育行政、学校行政を始めとして様々な要因が絡み合ったものではあるが、以下のような変化を指摘することは可能であろう。①教員の質、教育の機会が増大し教員の数が増えた一方で、パタニ・マレー語、アラビア語の読み書きが不十分な教員が多くなった、②教育制度改革の結果、プログラムベースの教育方針が取られ、教員が教育に時間と労力を割くことができなくなった、③教育制度、現行システムでは年齢に応じて修了させることを優先するため、児童の学力が不十分であっても進級させる、④インターネットやタブレットの普及による集中力の低下、といった点である。

また、これまでの歴史を見れば理解できるように、公的なイスラーム教育政策は深南部のマレームスリムをターゲットとして実施されてきた。一つにはマレームスリムの同化・統合を目指したためであるものの、実際にムスリム児童が多数を占める地域が深南部であったためである。現在に至るまで、深南部以外の地域におけるイスラーム教育のニーズは、それほど高いものであるとはいえないのが事実である。

現在、私立イスラーム学校、公立学校の双方で統合カリキュラム (Laksut Baep Buranakan) の試験的な導入がなされている。1988年頃からマレームスリム学生の学習の負担を減らす統合カリキュラムについて議論がなされるようになったといわれる。¹⁸⁸ 宗教教育と普通教育の統合と言った場合、様々なレベルにおける統合が論理的には考えられる。例えば、教室で教えるレベルにおける統合、学校行政レベルにおける統合、カリキュラムレベルにおける統合といったものである。統合カリキュラムが導入されなかった大きな理由としては、統合カリキュラムを導入するためには、教員側の宗教科目と普通科目双方の知識の保有が不可欠となり、学校側、教員側に多大な労力が必要となることが挙げられる。

ここでの統合カリキュラムとは、宗教科目と普通科目を統合させたもので、それによって学生の負担を減らすことが可能となる。現在、教育省諸機関、大学等で統合カリキュラムの策定が試みられている。保健体育、科学など特定の普通科目教育にイスラーム教育を合わせたカリキュラムを用いる学校も存在するが、現在ヤラー県所在の私立学校教育管理事務所で準備されている「統合カリキュラム」では、普通科目とイスラーム科目の統合ではなく、イスラーム科目内部の統合が進められている。これまでの8つの学習科目を4つに再編成し、教育者、児童、双方の負担の減少を目的にしたものである。

189

公立学校におけるイスラーム教育の拡充は、通称イスラーム・ベープケム (Islam Baep Khem, イスラーム強化方式) と呼ばれ、イスラームを私立イスラーム学校並に実施する重点カリキュラムの導入を機に生じている。イスラーム・ベープケムは、仏歴 2549

¹⁸⁸ ソンクラナカリン大学パッターニー校イスラーム学研究所イブラヒム・ナロンラクサケート准教授へのインタビュー (パッターニー県ムアン・パッターニー、2016年2月18日)

189

(2006)年に、地域の実情に合わせた教育を実施するという目的で導入された。現地レベルにおいては、政府によるイスラーム・ベープケムの導入は、2004年の紛争の激化が原因であるという捉えられ方が一般的である。¹⁹⁰深南部地域、南部国境県は、教育特別開発地域に指定されている(表4)。2006年には142校が、2009年には276校が登録された。現在は350校がベープケム校として認可されている(表5)。

表4 南部国境県特別開発区における教育

	学区	郡	小学校	機会増進校	高校	合計
1	パッターニー第1	ムアン・パッターニー/ノンチック/ヤリン/パナレ	123	16		139
2	パッターニー第2	コックポー/ヤラン/マヨ/メーラーン	102	13		115
3	パッターニー第3	サイブリ/トゥンヤーンデーン/マイケーン/カポー	62	5		67
4	ヤラー第1	ムアン・ヤラー/ラーマン/クロンピナン	102	9		111
5	ヤラー第2	バナンスター/ヤハー/カーパン	60	8		68
6	ヤラー第3	ベートン/ターントー	26	7		33
7	ナラティワート第1	ムアン・ナラティワート/ルソ/バチヨ/インゴ/シーサコン	134	15		149
8	ナラティワート第2	スンガイコーロック/スンガイパーディ/ウエーン/タークバイ/スキリン	100	18		118
9	ナラティワート第3	ランゲ/チャネ/チョアイローン	58	17		75
10	ソクラー第3	ナータウィ/テーパー/チャナ/サバーヨーイ	127	33		160
11	サトゥン県	ムアン・サトゥン/ラグー/クワンカーロン/クワンドーン/ターペー/トゥンワー/マナン	119	42		161
12	第15	ナラティワート/パッターニー/ヤラー			46	
13	第16	チャナ/ナータウィ/テーパー/サバーヨーイ			22	
合計			1,013	183	68	1,264

出典：Office of the Basic Education Commission, 2016 より筆者作成

¹⁹⁰ 公立学校におけるイスラーム・ベープケムのカリキュラム作成を担当した教育省基礎教育委員会担当官、ファティナー・ウォンウィカー氏はインタビューに際して、個人的にはイスラーム・ベープケムが政府によって導入された背景には紛争の激化があると考えているとしていた。バンコク、2016年9月5日。

表 5 南部国境県の公立学校におけるイスラーム教育支援プログラム

学区	学校数	教室数	教員数	学生数	
プラトムスクサー（小学校レベル）					
1.	パッターニー第 1	44	430	201	10,803
2.	パッターニー第 2	36	339	113	7,409
3.	パッターニー第 3	26	230	90	6,179
4.	ヤラー第 1	35	292	112	7,452
5.	ヤラー第 2	42	354	144	9,946
6.	ヤラー第 3	12	121	53	6,509
7.	ナラティワート第 1	40	330	133	9,835
8.	ナラティワート第 2	31	311	135	8,225
9.	ナラティワート第 3	35	357	147	9,825
10.	ソクラー第 3	20	168	79	5,510
11.	サトゥン	2	12	5	361
マタヨムスクサー（中学校・高校レベル）					
12.	第 15	23	248	112	6,332
13.	第 16	4	15	12	234
合計		350	3,207	1,336	88,620

出典： Office of the Basic Education Commission, 2016 より筆者作成

教育省では、私立イスラーム学校のカリキュラムや全国統一試験の内容を踏まえて、より包括的なイスラーム教育カリキュラムを作成している。本カリキュラムでは、イスラームを教える教員に対して、どのような科目を週に何時間教えるか、といった詳細を定めており、全国統一イスラーム試験の内容とも合わせられている。仏歴 2560 (2017) 年の実施を目途に準備が進められており、2016 年 8 月の時点において、教育省の委員会レベルにおける採択はなされている。

1921 年に義務教育法が制定されてから、およそ 100 年の月日が過ぎた。19 世紀後半に近代教育が導入され、義務教育法制定されてからも長らく、タイによる国民教育に対して深南部のマレームスリムから好意的な反応を得られなかった。一部のいわば上層の人々以外にとっては、普通科目の教育を実施する公立学校を卒業することはキャリアにとってほとんど意味のないことに映ったのである。¹⁹¹深南部の公立学校に実際に通っていたのは、タイ人官吏の子弟とパタニ王国時代の貴族階級の子弟であったともいわれる。政府は、公立学校におけるマレームスリム教員によるマレー語教育の導入を実施してい

¹⁹¹ 刈谷剛彦 (1991) 「タイにおける近代教育制度の発展と公開大学」『タイ社会の変貌と遠隔高等教育の展開 アジア・太平洋地域における遠隔教育の実証的研究 調査報告 (2)』、29 頁。

たものの、多くの親たちはタイの学校教育に対して疑念を持ち続けていた。さらに、義務教育途中で家業の手伝いをさせる、あるいはポーノに送ることは、戦後しばらくは、一般的であった。¹⁹²タイ公立学校の設立を始めとして、パタニ王国のタイへの編入以降様々な同化政策が実施されてきたが、パタニの人々は伝統的なイスラーム教育機関であるポーノを「学校」に置き換えることを望んではいなかったのである。

タイにおける国民教育は、仏教寺院内に設置された寺院学校から始まった。深南部のマレームスリム地域で人々は、時には暴力を用いて、多くは学校へ行くこと自体を拒否するという形で政府の教育政策に対する反対の意思を示した。深南部において初等教育が本当の意味で拡大するのは、第二次世界大戦後である。1950年代以降は、タイの国家カリキュラムの実施は中等教育レベルにまで拡大された。タイの政治体制は、1973年から1976年の間を除いて、1990年代に至るまでほとんどの期間が、軍の影響下にあった。深南部における教育問題は、その始まりから安全保障と密接に関わってきたといえる。軍事政権下ではなおさら、教育は国家安全保障と結びつく形で展開していった。

民主化期を経た現在の公的イスラーム教育の問題点は、政府による明確なビジョンが提示されていないことである。これまで対処療法的に実施されてきたが故に、政府レベルにおける統一的な政策がなく、イスラーム教育の目的とするものも曖昧である。さらに、イスラーム教育を実施するための人材が十分ではない点が挙げられる。

2003年のイスラーム教育カリキュラムの導入は、1990年代以降の教育改革とその結晶である1999年国家教育法の流れの延長線上において理解する必要がある。政府によって1970年代から漸進的に実施されてきたイスラーム教育は、深南部マレームスリムの社会統合を進めるための、同化・統合政策の一環であったことは明らかである。政府によるイスラーム教育のカリキュラムの策定は、一方ではイスラーム教育に対して、国家がイスラーム自体を脅威だとはみなしておらず、公式的に認知がなされたことを示している。一方では、タイと深南部のこれまでの歴史が示すように、政府による深南部のイスラーム教育に対する疑念とそれに裏打ちされた管理統制をも同時に意味していた。

とくに2001年の同時多発テロ以降、イスラーム教育が再び脚光を浴びることとなった。そして、深南部の2004年以降の紛争の激化に際しては、ポーノや私立イスラーム学校における宗教指導者・学生と暴力との繋がりが疑われ、管理統制の側面がより顕著になった。いかにイスラーム教育を安全保障にかなう形で管理統制していくか、という点が主眼に置かれるようになり、政府によるポーノの学生に対する軍事教練が行われるなど、間接的な統制を超えて直接的な介入も見られるようになった。¹⁹³

一方で、これまでのタイ政府と深南部とのダイナミックな相互作用の中で、深南部のイスラーム教育自体は大きく変化を遂げている。タイが国家としてイスラーム教育を阻

¹⁹² Sachakul, 222.

¹⁹³ ムハンマド・ルヤニ・バカ博士インタビュー、南部国境県私立教育監督事務所係官（2016年8月31日インタビュー、ムアンヤラー、ヤラー県）

害するのではない限りにおいて、イスラーム的には闘う理由は存在しない。タイ政府が長らくイスラーム教育自体を標的とする政策を行ってきたことが、深南部の人々の不信感を醸成すると共に、社会統合をも遅らせてきた原因であった。タイにおけるムスリム人口のほとんどが、南部国境県に居住していたため、必然的にイスラーム教育は深南部を念頭に置いた政策となってきた。イスラーム教育が国家として認められるようになった現在、イスラーム教育を敵視するような政策はもはや取られてはいない。教育政策の観点からイスラーム教育を考察した場合、タイ政府は深南部マレームスリム人口の包摂を試みてきたことは事実である。反対に、深南部のイスラーム教育機関及びマレームスリム側も独自にイニシアティブを取り、政府と協力する形で学校制度やカリキュラムを変化させてきたといえよう。

第四章 タイの南、マレーシアの北

第一節 パタニ地域

深南部に関する研究は、主にパッターニー県のソクラーナカリン大学パッターニー校を中心として展開されている。ソクラーナカリン大学パッターニー校は、コミュニケーション科学学部、教育学部、美術工芸学部、人間社会科学部、看護学部、政治学部、科学テクノロジー学部、イスラーム学研究所を擁する国立の総合大学である。¹⁹⁴南部国境3県のみならず、アッパーサウスの仏教徒の学生も多く学んでいる。とくに、大学内に設置する形で置かれているディープサウスウォッチ (Deep South Watch: DSW) ¹⁹⁵がハブとしての役割を果たす形で、多くの NGO が各種セミナーやプロジェクトを実施している。内容は、平和構築、エンパワーメントといったテーマに集中している。

2004 年の紛争激化後、DSW を中心に、数々の研究プロジェクトが実施されてきた。紛争、平和構築、正義、エンパワーメント等に関する膨大な量の質的・量的研究が積み重ねられているものの、いずれもパッターニーを中心として実施されている。農村部からインフォーマントを 200 パーツから 300 パーツ程度 (1,000 円弱) 支払って大学に招待し、インフォーマントに研究者が講義を行う形式でデータ収集を行っているケースもみられた。データを利用する際は、注意する必要がある。パッターニーを中心とした紛争関連の研究の劇的な増加は、まさしく「平和産業」、「セミナー産業」と呼びうるほどの規模となっている。日本からは、笹川平和財団が 2005 年以降、DSW や草の根 NGO であるピープルズ・カレッジ (People's College) との協力のもと、平和構築や現地 NGO のエンパワーメントに対する支援を継続的に実施している。

果たして、こうした活動が草の根まで届いているのかと問われると、人々に認知されているとは言い難い。世界銀行をはじめ、様々な国際機関からの支援を受けたセミナーや研究に懐疑的である、あるいは、その存在さえ知らない一般市民も多い。研究者や現地有力者などエリートによって構成される活動が存在する一方で、草の根のエンパワーメントを地道に行う市民団体も一部存在する。しかし、NGO 同士の連携が取れているとは言い難く、むしろ組織間の政治、利害関係から対立している事例もみられる。さらに、アクセスの困難性から政府によりレッドゾーン (Phuentsi Si Daeng) 指定された地域に直接データを取りに行く研究者は多くはない。

¹⁹⁴ ソクラーナカリン大学パッターニー校ホームページ。

http://www.pn.psu.ac.th/web2555/index_main.php。2016 年 1 月 20 日アクセス。

¹⁹⁵ Deep South Watch ホームページ(<http://www.deepsouthwatch.org/>)では、タイ語、パタニ・マレー語、英語の 3 か国語で、和平交渉関連のニュース、各種セミナー情報等が随時アップデートされている。

深南部の文化

パッターニー県、ヤラー県、ナラティワート県、ソクラー県西部、並びにマレーシア北部クランタン州は、かつてマレー系のスルタン王国パタニの故地である。深南部地域は歴史の中でランカスカ王国、シュリーヴィジャヤ王国、ナコンシータンマラート王国（マレー語でリゴール）などの影響下に置かれた。ヒンドゥー、仏教、マレー、タイからの影響が入り混じって、独特の文化を形成してきた。

マレーシアでもとくに保守的な地域として知られているクランタン州と深南部は、文化や慣習を共有している。¹⁹⁶女性には色鮮やかなヒジャブ（ヘッドスカーフ）と手首足首までを覆う丈の長いドレス、男性はコピヤ、ソングックと呼ばれる帽子、シャツとサロン、パンツといった服装をするのが一般的である。ヒジャブを被らない女性は仏教徒、非イスラーム教徒であるとみなされ、実際にそうである場合がほとんどである。

深南部がタイのその他の地域とは大きく異なることがよくわかる時期が、ラマダン月である。ラマダンはバンコクにあるタイのイスラーム行政機関であるチュラーラーチャモントリの計算に基づいて開始されるが、ラマダン期に深南部全体が包まれる祝祭的な雰囲気はバンコクや他の地域では見られないものである。ラマダンはムスリムにとって、重要な月である。ラマダン月には、世界で起こっている悲劇や恵まれない人々に思いを馳せ、自らの日々の行いを正し、家族や仲間との紐帯をいつも以上に大切にす月でもある。深南部では、この時期ムスリムの経営するレストランのほとんどが閉店する。ラマダン月にのみ売られるおかずや菓子も多く、ラマダン月のみに立てられる市場も存在する。夕方の5時ごろになると断食明けに飲む、サトウキビジュースやココナッツジュースを売る店が、市場の近くや大学前の目貫通りに立ち並ぶ光景がみられる。市場は、おかずや食材を買う老若男女で溢れかえる。毎日の断食明けが祭りの様相を呈している。

ラマダン月にムスリムは、日が昇ってから沈むまでの間一切の飲食が許されない。子供や老人、病人、旅人、妊娠中又は月経中の女性は断食を行う必要はない。子供は、家庭によって異なるが、10歳前後から大人と同様に断食できるようになるまで徐々に慣らしていく。旅行や月経と重なったことによって断食を行わなかった期間は、ラマダンが終わったのちに、追加で断食を行うことで清算される。

ラマダン明けのハリラヤ（Hari Raya）の日は、日本でいう正月のような日である。ハリラヤの日には親族を訪問し、文字通り朝から晩まで飲食を行う。ハリラヤの日にはココナッツミルクで煮たもち米をバナナの葉で巻き、蒸した「トゥパ」と呼ばれる粽と、米を発酵させた「タペ」と呼ばれる食べ物が必ず振る舞われる。農村地帯では、伝統的にハリラヤの日の早朝にクーボーと呼ばれる墓地に集まり、男性は墓の掃除を行う。その間女性は食事を準備し、昼頃コミュニティの人々が集まって飲食を共にする。さらに、

¹⁹⁶ クランタン州は、マレーシアで唯一、国政レベルで政権党である国民戦線（UNMO）ではなく、野党である全マレーシアイスラーム党（PAS）が政権を握る州である。

ハリラヤの日の6日後には現地でラーヨーネーと呼ばれるハリラヤ・エナム (Hari Raya Enam) を祝う風習が存在する。ラーヨーネーには、ハリラヤの日と同様に、朝から晩まで親族や友人・知人と飲食を共にする。クーボーで会食を行う事や、ラーヨーネーを祝うことは、サーイ・マイ (イスラーム改革派) の人々にとっては、非イスラーム的であるとして否定される傾向にある。

パッターニー

パッターニー県は、12のアムプー (Amphoe, 郡) と 115のタンボン (Tambon, 町)、629のムーバーン (Muban, 村) を擁する。パタニ王国時代の交易の要衝であり、宗教教育の中心地としても名を馳せていた。現在のパッターニー市街地から3キロほど離れた、かつてパタニ王国時代の中心地だった場所に、クルセ・モスクという400年以上の歴史をもつモスクが存在する。このモスクには、ある伝説が存在している。リムコウニャウという女性にまつわるものである。リムコウニャウは、兄を連れ戻すべく、中国からパタニ王国を訪れた。彼女の兄は、パタニで現地の女性と結婚し、イスラーム教徒に改宗していた。兄が帰郷の説得に応じることなく、中国に戻らないことを悟った彼女は、兄が建設を進めていたクルセ・モスクの近くの木で首をつって自殺を遂げた。このモスクが永遠に完成することのないように、と呪いの言葉を残して死んだとされる。

この後、彼女が自殺を遂げた場所に、兄が廟を建てた。この伝説とともに、彼女を祀る廟や彼女の墓とされるものは、華僑の間で信仰を集めるようになった。紛争が激化する前には、シンガポールやマレーシアからも観光客が多く訪れた。リムコウニャウの廟が、クルセ・モスクのすぐ隣にある。設立年については明らかになっていないが、仏歴2065年から仏歴2109年 (西暦1422年から西暦1556年) の間とされる。現在の廟は、パタニにおける華僑系の名家カナルラック家によって1864年に改築されたものである。¹⁹⁷今にも壊れそうな煉瓦作りの荘厳なクルセ・モスクとは対照的に、新しいカラフルな中国式の造形物に見える。モスクから見て、メッカの方向に建てられた廟は、地域のムスリムたちにとってはタイの植民地主義の象徴であり、屈辱的なものとして捉えられている。

クルセ・モスクには、今一つ深南部問題を語る際に欠かすことのできない象徴的なものがある。実物は、バンコクの防衛省に飾られている、パヤーターニー大砲である。パヤーターニー大砲はパタニ王国が1785年の戦役でシャム王国に負けた際に、パタニから持ち去られたものである。2013年6月2日にクルセ・モスクに設置されたレプリカ

¹⁹⁷ 「Kret Khwamru Kiawkap Sanchaome Limkoniaw (リムカウニャウ廟に関する歴史)」カナルラック家ホームページ。

<http://www.kananurak.com/mcontents/marticle.php?headtitle=mcontents&id=74894>。2016年1月19日アクセス。

は、2日後の6月4日に爆弾により破壊された。パヤーターニー大砲をめぐる逸話は、栄光のパタニ王国の歴史と、実物はバンコクの防衛省にあるという事実との間で、複雑な言説を構成している。

パッターニー市街地では、中国系のコミュニティの影響力が強い。クルセ・モスクの近くには、何世紀も前に移住してきてイスラームに改宗した中国系のムスリムもいるが、中国系の多くは近現代になって移住しておりムスリムではない。パッターニーには、中華学校（北華中華学校）があり、中国語教育も行われている。市街地域には、仏教寺院や中国系の廟が多くあり、パッターニー出身のみならずアッパーサウス出身のタイ人仏教徒も多く住んでいる。

仏教徒の間で信仰を集めているのが、チャンハイ寺である。300年以上の歴史をもち、仏歴2480年（西暦1937年）に拡大されたこの寺は、パッターニーのみならず、僧侶が奇蹟を行う寺院としてタイ全土に名を馳せている。興味深いのは、かつてタイ王国の教育制度がまだ整っていなかった時代には、この寺の仏教僧たちはパタニのマドラサで学んでいた、という話が語られることである。クルアーンを読むことができる仏教僧、これがムスリム側の対抗言説なのか、事実だったのかを調べることはかなり困難である。

パッターニー市街地域には、タイ王国随一の美しさを誇るセントラルモスクがある。このモスクは、1954年にプーミポン国王からムスリム市民に贈られたモスクである。タージマハルを彷彿とさせるシンメトリカルな建築となっており、モスクの前には水をたたえた池が設えられている。ラマダン期間中の夜間特別礼拝の際には、他の地域からもムスリムが大勢集まり、無料の食事や飲み物も提供される。深南部のムスリム市民の信仰実践の中心となっている。

パッターニー市街地には、酒類や豚肉の入った食事を提供し、ライブミュージックを聴くことができるバーが何軒か存在し、売春婦がいる風俗店が並ぶ通りもある。市街とは時計台を挟んだ反対側の、サーイ・モー・オー（Sai Mor Or, 大学通り）と呼ばれる地域は、ソクラーナカリン大学パッターニー校の設立以降発達してきた地域である。この通りには、カフェや食堂、インターネットショップ、雑貨店などを中心とした店舗が並んでいる。

ヤラー

パッターニー市街地から路線バスでおよそ1時間の地点にある、ヤラー市街地は深南部の他の都市と全く異なっている。ヤラー市街地には、1970年代の政府による政策の一環で、土地を持たない東北地方やアッパーサウス出身者が移住してきた。仏教徒、中国系の人々の居住区域とマレームスリムの居住区域が別れており、都市の構成はかなり人工的である。ヤラー県には8つのアムプー、56のタンボン、そして341のムーバーンがある。ヤラー市内には、南部国境県行政センター（SBPAC）をはじめ、政府諸機関

が密集している。政府機関が集まった地域、広大な公園、市民のためのスポーツセンターや図書館、南部3県で唯一映画館があるショッピングモール、カフェやレストランが点在し、一見すると他のタイの地方都市と変わらない。同時に、2004年の紛争激化以降、爆弾テロ事件が多発している地域でもある。他のテロ多発地域（レッドゾーン指定地域）は全て農村部であるため、唯一の都市部における事件多発地域である。

ヤラーには、教育機関も数多く存在する。1998年にイスラーム・ヤラー学校がイスラーム・ヤラー大学に昇格し、2007年にファートニー大学（Mahawitayalai Fatoni）に改名した。ファートニー大学は、タイで初めてイスラーム大学であり、学生にはクルアーンの学習が義務付けられている。¹⁹⁸イスラーム学部のみならず、教養社会学部、科学テクノロジー学部、外国語学部、教育学部を擁している。¹⁹⁹また、元々教員養成のために全国に設立されたラーチャパット大学のヤラー校がある。教育学部だけではなく、人間社会科学学部、マネジメント学部、科学・農業テクノロジー学部と南部国境開発研究所がある総合大学である。²⁰⁰

ヤラーには、タイ南部で最も規模の大きな私立イスラーム学校（中学・高校）である、タンマウィタヤー校（Rongrien Tamma Witya）がある。タンマウィタヤー校は女子教育を行う、サトリー・タンマウィタヤー校を保有している。タンマウィタヤー校は、1951年に伝統的なポーノとしてハジハラン・スロンによって設立された。ハジハラン・スロンは、深南部における有力な分離独立派組織であるBRNのメンバーとして知られた。パタニ地域のポーノで伝統教育を受けたのち、マレーシアのコタバル、サウジアラビアでイスラームについて学んだ後にタイに帰国した。タンマウィタヤーは、1984年に私立イスラーム学校として登録され、以後タイ語による普通科目の教育も併せて行っている。²⁰¹

2004年12月16日、タンマウィタヤー校の教員4名が、BRNコーディネーター派に関与した容疑で逮捕された。タンマウィタヤー校の校長であったサパイン・バソは、BRNの代表格として2004年1月4日のナラティワートにおける軍基地の襲撃と武器の奪取に関わったとされたが、捜査を逃れている。この武器収奪事件は、深南部における紛争の激化のきっかけとして、象徴的な事件である。タイ当局によって、タンマウィタヤー校の教員21名が容疑者としてリストアップされ、現在もまだ指名手配中の者がいる。

タイ当局の動きが、全く根拠の無い話とはいえないのも事実である。タンマウィタヤー校にはかつて、宗教教育を一定レベル以上修了した学生を対象に軍事教練が行われて

¹⁹⁸ 現在、ファートニー大学はパッターニーとヤラーの県境に位置し、パッターニー県とヤラー県の双方にキャンパスを擁している。

¹⁹⁹ ファートニー大学ホームページ。<http://www.ftu.ac.th/main/th>。2016年1月20日アクセス。

²⁰⁰ ラーチャパットヤラー大学ホームページ。<http://www.yru.ac.th/web54/frontpage>。2016年1月20日アクセス。

²⁰¹ Samnakgaan Suksaatikaan Paak12 Yala, *Chak Pono su Roongrian [From Pono to School]*, 28-29.

いた。²⁰²そして、タンマウィタヤー校が、マレームスリムとしてのアイデンティティを強調していることは確かである。パタニ地域の歴史に関する勉強会が開催されていたことは確認されており、マレームスリムとしての伝統を否定する傾向のあるワッハーブ派からは教員を受け入れていない。²⁰³とくに、サウジアラビア留学経験者を受け入れていないのである。

ナラティワート

本研究における、主たる調査地であるナラティワートはマレーシアとの国境に位置するタイ最南端の県であり、南部3県の間では最も貧しく、最も保守的であるとされている。ナラティワートのタンジョンマツ山には、1973年にプーミポン王によって建設されたタイ王室の離宮であるタクシン・ラーチャニウェート宮がある。ナラティワートを流れるタンジョンマツ川の河口部分は、かつて、克蘭タン、トレンガヌ、シンガポールを結ぶ港として知られていた。現在、ナラティワート県には、13のアムプー、77のタンボン、589のムーバーンがある。南部3県のうちナラティワートにのみ国際空港が存在している。

ナラティワートには、イスラーム諸国からの援助を受けて2005年に設立されたナラティワートラーチャナカリン大学があり、工業技術、農業技術、IT、看護などの学科を擁している。イスラーム学もあるものの、技術系を中心に構成されており、パッターニーのソクラーナカリン大学や、ヤラーのラーチャパット大学のように社会科学系の学術研究の中心とはなっていない。ナラティワート市街地から農村部へのアクセスは困難であり、海にも面するが県の面積の多くを山林とゴム林が占めている。かつてランゲ王国時代にスズ鉱山で栄えた同県タンジョンマツ市は、現在は果物ロンコンの産地として有名である。

風土の違いは、人々の性格に大きな影響を与えている。歴史的にも、ヒラール(Hirar)とダラット(Darat)という呼び分けが存在したように、いわゆる海の民と山の民は区別されてきた。ヒラールは都会的なもの、ダラットは農村的なものと結びつけられる。ヒラールは行政上の中心地を代表し、ダラットは辺境地帯を示した。そしてヒラールは貴族文化と結びつけられ、ダラットは大衆並びに農村の文化と結びつけられたのである。²⁰⁴現在でもこうした気質の違いは人々によって語られる。ある現地有識者はこのように説明している。

²⁰² T氏インタビュー、36歳男性、タンマウィタヤー校出身(ヤラー県、ムアン・ヤラー2015年7月15日)

²⁰³ S氏インタビュー、40歳男性、タンマウィタヤー校創立者の親族(ヤラー県、ムアン・ヤラー、2015年8月18日)

²⁰⁴ Mala Rajo Sathian, "Economic Change in the Pattani Region 1880-1930: Tin and Cattle in the Era of Siam's Administrative Reform," PhD dissertation, National University of Singapore, 2004, 8.

「海の人 (Khon Tale) は、開放的で商売人気質、都会的ではあるけれど、あまり信用できない。お金をすぐに使ってしまう人も多い。我々のような山の者 (Khon Phukhao) は、あまり外の人に心を開くことはないが、裏切ることもしない。お金を貯めて子孫のために土地を買う人が多い。私たちは、パッターニーの人たち、海の人たちとは違う。外から来た人たちはパッターニーの人たちに話を聞いて、この地域のことを全て分かったかのように語っている。南部3県は、土地によって気質も違えば文化も違う」。²⁰⁵

こうした分析はある程度は当てはまるものの、進学や就職等の理由で人の移動がかつとと比較して複雑化し、グローバル化やテクノロジーの進化からの影響をも受けている現在、人々の気質も徐々に変化してきている。

ナラティワートには、プサカ (Pusaka) と呼ばれるイスラーム教育財団があり、この組織は軍事部門を擁しているといわれている。プサカは、1994年にナジムディン・ウマル (Najimudin Umal) によって設立されたイスラーム教育財団である。ナジムディン・ウマルは、政治組織であるワダ・グループの一員であった。プサカ財団は、深南部の100校のタディカの支援を行っており、そのうち56校はナラティワート県下のタディカであった。当局は、BRN コーディネート派のメンバーであるマセー・ウセンとプサカとの関係を突き止め、公式的な組織であるプサカは分離独立派組織との協力関係を疑われることとなる。ナジムディン・ウマルに対する起訴は証拠不十分で却下されているが、真相はいまだ明らかとなっていない。²⁰⁶

第二節 教育機関の多様性

① 公立学校 (Rongrien Rattaban)

タイの公立学校は全て国立であり、全国共通の教育省制定のカリキュラムを用いる。公立学校の教員は、国家公務員であり、政府から直接給与が支払われる。加えて、児童一人当たり、高校レベルで年間3,800バーツ、中学校レベルで3,500バーツ、小学校レベルでは1,600バーツが支援される。一週間のうち2時間が宗教教育に充てられ、子供たちは仏教又はイスラームの授業に参加する。この場合、イスラームについてタイ語で教授される。深南部では2004年の紛争激化以後、村落部における教員を含む仏教徒、中国人のほとんどが県外に移住していった。その結果、ムスリム住民が100パーセントを占める地域が出てきた。

紛争の激化に際して対応を迫られた政府は、公立学校でもイスラーム教育を重点的に行うという試みを始めた。²⁰⁷地域に即した教育の普及を目的とするベープケムと呼ばれ、

²⁰⁵ N氏インタビュー、48歳男性、ナラティワート県の現地知識人 (ナラティワート県シーサコン郡、2015年6月18日)。

²⁰⁶ Joseph Chinyong Liow, *Islam, Education and Reform in Southern Thailand Tradition & Transformation*. (Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2004), 38.

²⁰⁷ S氏インタビュー、35歳男性、公立学校宗教教員 (サマツキー町、2015年8月3日)。

学校によっては、合計 12 時間のイスラーム教育を実施している。調査地では、週 2 時間の基本教育に加えて、7 時間のパタニ・マレー語によるイスラーム教育が実施されている学校と、キロアティと呼ばれるクルアーン教育を加えて合計 12 時間のイスラーム教育が行われている学校が存在した。ムスリムの学童が 50 パーセントを超える学校は、政府に対してベープケムの導入を申請することが可能となる。導入に関しては、学校長の意向による部分が多い。

公立学校を選択する理由としては、親の経済的状況や交通の便などの理由による事がほとんどであるが、積極的に公立学校に通わせる親もいる。公立学校は政府からの補助金が得られるため、学校によっては設備が充実している点や、進学や就職という観点からも、タイ語による普通科目の教育が充実している方が有利であると判断するためである。

② 私立イスラーム学校 (Rongrien Ekachon Son Sasana Islam)

私立イスラーム学校には、幼稚園、初等教育を行う学校もあるが、多くが中等教育レベルの学校である。深南部には現在、私立イスラーム学校は 299 校存在する。法律上、私立学校には 2 つの類型があり、基金 (Mulniti) を設置し政府の統制下に入っている学校 (私立学校法 15 条第 1 項学校) と基金を設置しない代わりに政府の統制を免れている学校 (私立学校法 15 条第 2 項学校) が存在する。政府の統制の程度に応じて、補助金の額も決まる。第 2 項学校はほとんど存在しない。第 1 項学校はさらに、学生の人数に応じて 3 つに分類されている。800 人以下を小規模学校、800-1,000 人を中規模学校、そして 1,000 人以上が大規模学校である。

伝統的なポーノとしての歴史をもつ学校もあり、深南部の人々はポーノといった場合私立イスラーム学校を思い浮かべる人がほとんどである。日常会話においては、ポーノは私立イスラーム学校を指している。一方で、伝統的なポーノは、元々のポーノ (Pono Dang Doem) と区別して言われる。深南部においては、1960 年代以降タイ語による普通科目教育を併せて実施する私立イスラーム学校への登録変更の流れがあったものの、実際に私立学校が増えたのは 2000 年代以降である。タックシン政権下で開始された、私立学校の学生一人当たり年間 15,000 バーツの補助金を与えるという政策による部分が多い。この政策は、私立学校教育及びイスラーム教育への支援を目的としたものではあったが、深南部においては結果として教育機関の増加と学校間の学生獲得競争の激化につながっている。さらに、非宗教教員に対して、年間 10,000 バーツ支給されており、児童に対する補助金と併せて、宗教教員の給与に充当されている。

私立イスラーム学校 (第 1 項学校) では、イスラーム教育とともに政府のカリキュラムに基づくコースワークが提供される。タイ語を用いた普通科目の教育とパタニ・マレー語を用いたイスラーム教育という 2 本柱で運営されている。午前中に普通科目の教育を行い、午後に宗教科目の教育を実施する場合がほとんどである。学校によっては、学

生のために寄宿舎を設け、早朝と夕方以降に特別なイスラーム教育を提供している。私立イスラーム学校における宗教教育は、伝統的なポーノにおけるイスラーム教育を引き継いだものであるが、クラス・進級制度が設けられており、ポーノにはない入学試験や進級試験が存在する。

私立イスラーム学校の学生は、公立学校の学生と比較して最低でも 10 時間は多く宗教について学んでいる。私立イスラーム学校の卒業生は、中等教育に加え宗教教育の修了資格が与えられるため、ポーノと比較するとタイ国内外における高等教育機関への進学に大きな道が開ける。研究者によっては、深南部からの大学合格者のうち 80 パーセントが私立イスラーム学校の卒業生だと見積もる者もいる。²⁰⁸

③ 私立学校 (Rongrien Ekachon)

深南部には、イスラーム教育を実施しない、普通私立学校もある。私立学校も私立イスラーム学校と同様、私立学校法によって管轄されている。児童一人当たり年間 15,000 バーツが支給され、教員に対して 10,000 バーツ支援される。公立学校における教育の質の低下に伴い、宗教教育を行わない私立学校に通うムスリム学生も増加している。公立学校に通うことのメリットの一つは、タイ語の運用能力と進学のお機会の増大にある。普通科目の割合が多いという観点からは公立学校と似ているものの、私立学校は公立学校とは異なり学校を経営しなくてはならない。学校の目標を設定し、その目標を達成する必要もある。そのため、教育の質に関しては、私立学校の方が良いという印象が抱かれている場合がある。

深南部では紛争激化後の 10 年の間に、多くの仏教徒が域外へと去っていった。学生のマジョリティも、ムスリムが占めるようになった。こうした情勢の変化から、かつてはイスラーム教育を実施していなかった私立学校においても、イスラーム基礎教育が導入されるケースが増えている。しかし、イスラーム教育に関しては、私立イスラーム学校が人材、カリキュラムともに圧倒的に充実しており歴史も長いため、今後の普通私立学校の生き残りは学生たちの進学率にかかってくることが予想される。

④ ポーノ (Pono)

ポーノの歴史

ポーノとは、インドネシア、マレーシアでポンドック、プサントレンと呼ばれる伝統的なイスラーム教育機関のことである。ポンドックという呼称も用いられるが、深南部では一般的にポーノと呼ばれる。ポンドックは、アラビア語で宿、ホテルを意味するフオンドックに由来する。宗教指導者の家の周囲に掘立小屋を建てて住まうのが通常であったため、ポンドックが宗教教育施設の意味をも示すようになった。ポーノは 17 世紀頃から存在するとされているが、ポーノの起源について、詳しいことは明らかとはなっ

²⁰⁸ Liow, *Islam, Education and Reform*, 60.

ていない。いくつかのソースを辿ってみると、タイで初のポンドックは、現在のナラティワート県のタロック・マノックに設立されたものであるとされる。²⁰⁹

パタニは、17世紀にアチェが果たしていた役割を引き継ぐ形で、19世紀から20世紀にかけてイスラーム教育の中心地としての役割を担った。メッカとの直接的な関係のもとで、マレー半島におけるアラビア語イスラーム教育の重要な場として知られるようになっていったのである。

キターブのほとんどが、アラビア語のものである。パタニにおいては、ヤーウィで記されたキターブ・ヤーウィがアラビア語のものとして併せて用いられてきた。²¹⁰現在、インドネシア、マレーシアではローマ字化されたルーミーが用いられているが、ヤーウィはかつて東南アジアのマレー世界の公用語であった。アラビア語のアルファベット 28 字に、さらに3つのアルファベットが加わったもので、イスラーム教育の現場では、ヤーウィを用いる際に記述されるのはパタニ・マレー語ではなくマレーシア語である。

ポーノにおける教育

ポーノでは、トク・クルー (Tok Khru) 又はバーボーと呼ばれる宗教指導者が、老若男女問わず全員に教授している。マーマーと呼ばれる、バーボーの配偶者が女性への指導を担う事もある。ポーノの学生は今でも、バーボーの家の近くに建てられた掘立小屋に住まうのが通常である。

ポーノは男性のみのものがほとんどであるが、女性を受け入れているポーノも存在する。ポーノでは、男女は同席することなく、カーテン等の仕切りが設置され、主に男性側から教授されている。年長者や知識を多くもつ者は、年少者や知識の少ない者を助ける。ポーノで学ぶにあたって、特定の要件はなく、入学試験も進級試験も存在しない。自分で自分の面倒を見られるようになれば、すなわち大人であるとみなされる者であれば、自分が学びたいと思うバーボーのいるポーノに寄宿し学ぶことができる。ポーノでは、食べるものは自分で用意し、学生たちは共同生活を送る。大抵の場合、バーボーが土地を所有しそこから収入を得ることで、ポーノの経営を支えている。最低で12歳ごろ、だいたい15歳前後からポーノに寄宿し10年以上にわたって学ぶ。ポーノを出て家業を継ぐ者がほとんどだが、30代から40代にかけて自立し、その後新たなポーノを開く者もいる。

政府からの圧力が大きくなった2000年以降も、ポーノの数は増え続けている。新世代のポーノの多くは、深南部のポーノで学んだバーボーによって設立されており、海外留学経験者は少ない。新しいポーノの中には、家族が土地を保有していることなどにより裕福なバーボーが自分の生まれ育った村に知識を還元することを目的としたもの、バ

²⁰⁹ Ibid, 53.

²¹⁰ ヤーウィは、アラビア語のジャワの形容詞型であり、ジャワは東南アジアから人々を指す言葉として使われてきた。

一ボーとの婚姻関係を持った裕福な家庭出身の女性が徳を積む目的でポーノの建設を行う事例が存在した。宗教教育への投資は、コミュニティへの奉仕を重要な要素するイスラームの教えからも、徳の高い行為とみなされる。タイ語の仏教用語として用いられるタムブン（徳を積む）という言葉が、ムスリムの間でも用いられている。

⑤ タディカ/スコラ・マラユ (Tadika/ Sekolah Malayu)

タディカは、その多くがモスク付属で、宗教教育のみを行う小学校である。マレーシア語のタマン (Taman, 園) ディディカン (Didikan, 教育) カナック・カナック (Kanak Kanak, 子供) という言葉から来ており、子供のためにイスラームの基礎教育を行う場所を指している。タディカは 1950 年代から 60 年代に、タイ政府による 7 歳から 12 歳までの児童を対象とした義務教育の拡充政策と軌を一にするように増加した。²¹¹

タディカという呼称はマレーシアからの影響である。ただ、マレーシアではカナック (Kanak, 子供) は、3 歳から 5 歳前後を指すが、深南部では 5 歳から 12 歳ころまでを示すという違いが存在する。この呼称が普及する以前は、タイの公立学校のことをスコラ・シーエ (Sekolah Sie, タイ学校)、パタニ・マレー語でイスラームについて学ぶ学校のことをスコラ・マラユ (Sekolah Melayu, マレー学校) と呼んで区別していた。少なくとも第二次世界大戦後しばらくは、タイの公教育は相変わらずタイ人のためのものとみなされていたことが、こうした呼称からもわかる。現在でも、タイデカのことをスコラ・マラユと呼ぶ人が多く、公立学校がスコラ・シーエと表現される事もある。

タディカは、小学校 1 年から 6 年までの初等宗教教育を担っており、2003 年以降教育カリキュラムは教育省によって管轄されている。教育省管轄下に入る前は、タディカによって日時は異なっており、金曜日以外の毎夕に開講されていたケースも聞かれる。タディカは長らく政府による支援・統制を受けることがなく、コミュニティの人々の尽力によって、維持され発展されてきたといえる。現在、タディカは土曜日、日曜日に開講され、平日は公立学校、私立学校に通う学生も、最寄りのタディカに学びに行く。深南部には、およそ 1,600 のタディカがあるとされており、1 つの村に最低 1 つのタディカが存在しているといってもよい。

タディカでは、朝の 8 時頃から夕方 16 時ごろまで、クルアーンやアラビア語、そしてイスラームに関する基本的な知識を学ぶ。タディカの教員に対しては、政府から月 3,000 バーツ (10,000 円程度) の給与が支払われる。さらに、タディカごとに年に一度 10,000~20,000 バーツの支援が行われる場合があり、教科書、文房具、ボール等のスポーツ用品などが支給される。教科書は、教育省が認可したものをを用いるが、場所によってはパッターニー県で印刷された教科書を用いるタディカもある。ただ、パッターニーで印刷された教科書のうちいくつかは、政府の認可を得ていないため使用することは違法である。

²¹¹ Haymasae, Malay-Muslim Educational Institutions, 246.

マレームスリム独自のアイデンティティの維持・継承に果たした役割が大きいのが、イスラーム教育機関であるポーノとタディカ（スコーラ・マラク）である。これらの教育機関は、いわば緩衝帯としての役割を果たし、タイ仏教文化からの影響を緩和する役割を果たしてきた。

第三節 レッドゾーン・ヤバ

ルソ郡は、ナラティワート市内、パッターニーの古都であるサイブリ市、ヤラー市内全てから 40 キロ程度の地点に位置する。隣接するのはバチョ、インゴ、ランゲ、シーサコン郡（ナラティワート県）とバナンスター、ラーマン郡（ヤラー県）である。

調査の拠点としたタイ国鉄ルソ駅までは、ソクラーナカリン大学パッターニー校のある地域から、遅れが無ければ 2 時間前後で到着する。パッターニーからは乗合タクシーで近距離バスが発着するバス停に向かい、ヤラー行バスで約 1 時間、ヤラー駅からマレーシア国境のスガイコーロック行き普通列車で約 40 分程度である。

ルソ駅前には、ルソ郡で最も大きなモスクであるモスク・ジュミヤがある。中央モスク（Masjid Klan）、大モスク（Masjid Yai）とも呼ばれる。現地調査の拠点は、ルソ駅から徒歩圏内であること、ルソ郡の行政機関などが集まる中心地にも近いことから、モスク・ジュミヤ前の集合住宅のうちの一軒に置いた。モスク側のルソオーク町地域の治安は比較的良好である。しかし、線路を挟んだ反対側のルソ町は、深いゴム林に囲まれており、分離独立派組織の影響力が強い地域とされている。2004 年以降、ルソ郡では襲撃事件や爆弾テロ事件が多発し、政府・軍にレッドゾーン（Phuenti Si Daeng）指定され、現在に至っている。紛争の激化によって、中国系タイ人、タイ人仏教徒のほとんどがこの地を去っていったため、現在は住民の 9 割以上がマレームスリムである。

ルソ（Ruso）は、ある種類の木を示すパタニ・マレー語である。マレームスリムの間では、一般的にヤバ（Jaba）と呼ばれる。ヤバとは、手と手を結ぶ、という意味である。この地域は、歴史的にはラーマン王国の周縁に位置しており、ランゲ王国とラーマン王国の政治的バッファゾーンでもあった。ジャングルとゴム林に囲まれているものの、古くから交易の中継地点となってきた地域でもある。

1920 年代にタイ国鉄が建設されると、鉄道を通してより多くの人や物が行き交うようになった。かつては、布製品を売買するパキスタン系、雑貨や食料品を売買する中国系の商人で賑わったとされる。ルソの人々の顔つきからは、アラブ系、南アジア系、マレー系、中国系、タイ系、様々な背景が読み取れる。ルソ駅前には、モスク・ジュ

ミヤのほかに、マスジッド・パキスタンという名のモスクがある。パキスタンから来たパターン人は、ここに集って礼拝を行っていた。パターン人人口の減少と、イマームの体調不良のため、このモスクは現在あまり使われていない。ルソには何世紀も前に、イエメンから移民してきた者、第二次世界大戦中に来た日本兵の子孫もいる。こうした多様性から、海と山を、そしてマレー半島においてタイとマレーシア、シンガポールをつなぐ場としての歴史も垣間見ることができる。

古い移民のみならず、冷戦期に逃れてきたコミュニスト、ミャンマーから逃れてきたロヒンギャも住んでいる。ロヒンギャの兄弟は20年ほど前からローティ（クレープ状の菓子・軽食）を売って生計を立てているという。現在、英語教育の必要性から、アフリカ系の教員、フィリピン人の教員も住むようになってきた。ルソ郡内ではフィリピン人教員1名、カメルーン人教員3名が英語教育に携わっている。

ルソは歴史的には、パタニ王国下の7属国、パタニ、ノーンチック、ヤリン、サイブリ、ヤラー、ランゲ、ラーマンのうち、ラーマン王国の周縁に位置づけられる。ラーマン王国は、スズ鉱山によって栄えた地域である。スズ鉱山は、現在のヤラー県、とくにラーマン、バナンスター、ベートンに集中していた。ラーマンを除いて、中国人がスズ鉱山経営を担っていた。スズ鉱山に関わった中国系のうち、最も有名なのはパタニのカナルラック家である。

一方、ラーマン王国では、長らく王族が鉱山経営に関わってきた。中国系が全く関わっていなかった訳ではない。この地域の鉱山はラーマン王国のラジャによって保有されていたが、実際の組織運営を行っていたのは中国人であった。1900年、イギリス保護領下にあったペラのスルタンと、サイアム王国支配下のラーマンの間でスズ鉱山の所有権問題が生じた。イギリスはラーマンのラジャの訴えを認めることはなかった。この問題に際して、シャム王国とイギリスの間で領土確定交渉が行われ、かつてのラーマン王国の一部地域はイギリス領となった。領土確定交渉以降、ラーマンは欧米の資本を惹きつけるようになる。この頃に設立されたラーマン・スズ会社は、ラーマンで製造されたスズをケダへとスズを運ぶための道路の建設を行っている。

シャム王国支配地域におけるスズ鉱山の多くは、中国系によって所有、経営されていた。ラーマ5世王（チュラロンコーン）とダムロン王子には、中国系を支援することによって、イギリスからの経済的影響力を防ぐという思惑があったのである。²¹²ラーマンが特徴的なのは、この点においてである。中国系ではなくマレームスリムの王族が鉱山経営に携わっていたという点、そしてタイ政府が避けようとしていた欧米資本が投資を行っており、英領マラヤ連邦との経済関係が強い地域であった点である。ラーマンはしばしば、バンコクからの徴税を免れている、反政府的であるとして非難された。ペラ川を利用して、英国保護領ペナンにスズを輸出する独自のルートを持っていたためである。

²¹² Jannifer Cushman, *Family and State: The Formation of a Sino-Thai Tin-mining Dynasty 1797-1932*. (Singapore: Oxford University Press, 1991), 48.

ラーマンは、南部マレー諸侯国の中でもとくに、バンコクに疑念をもってみられてきた地域であるといえよう。²¹³

現在のルソは、ラロ町のあたりに存在した小王国の管轄下にあった。ラロは、タンジョンマットのランゲ王国を通して、マレーシアのコタバルとの関係を持っていた。一方で、ラーマン王国を通じた、ペラやケダとの関係も深かった。現在でも、マレーシアに親族をもつ人々が多くいることから、ルソとマレーシアの歴史的な繋がりや強さをうかがうことができる。

現在、ルソ郡には、9つのタンボン、71のムーバーンがある。ルソは、山の民の住む場所である。ルソは一般の人々の間でも教育、とくにイスラーム教育の程度が高い地域とされている。戦間期から第二次世界大戦後にかけて、ゴム経済の高揚で財産を築いた人々の多くが、教育に投資したのが一因であると考えられる。²¹⁴メッカなど海外に留学した者の多くが、第二次世界大戦後に学校を開いた。ルソ郡内だけでも、このような経緯をもつ私立学校が3校存在している。イスラーム教育を実施しないシータクシン校、イスラーム教育と普通科目教育の双方を実施するダル・アンワル校 (Rongrien Dar Al-Anwar)、そしてイスラーム教育のみ実施するムイカーン校 (Muikan Wittaya) である。いずれも、学生は全てムスリムである。ルソのみならず、深南部では伝統的なエリート層が教育機関を保有している。私立イスラーム学校、私立学校、ポーノはほぼ全て家族経営である。設立者一族について知ることは、深南部問題を教育から分析するにあたって、見逃すことのできない点となってくる所以でもある。

多くの人の間でルソの名が知られている最も大きな理由は、深南部において最も影響力がある分離独立派組織である民族革命戦線 (Barisan Revolusi Nasional: 以下 BRN) が設立された地域であるということから来ている。1970～1980年代頃インドネシアに留学した学生によってルソで設立された BRN は、紛争激化の背景にある組織であるとされており、今でも政府との交渉にあたって重要な役割を果たしている。ルソオーク町にある私立イスラーム学校であるナフドゥルスバーン校 ((Rongrien Nahdatul Shubban)) は、BRN の設立者が関わった学校である。

興味深いことに、BRN は、イスラーム社会主義の影響を強く受けており、エリートによる支配、エリートという概念を否定する革命思想に彩られた理念をもっている。一方、海に面したパタニ王国の古都サイブリで、旧パタニ王国時代の支配階級を中心に結成された PULO は、エリートによる支配を是としている。PULO は 80 年代終わりには勢力を失い、現在はほぼ影響力がない。一方の BRN は 1960 年に設立されて以降、現在は第二世代によって構成される BRN コーディネート派が政治部門、渉外部門に加えて

²¹³ Sathian, 131.

²¹⁴ ルソ郡内の私立イスラーム学校の設立者一族に対するインタビュー調査の結果、現在の校長クラス (40代～60代) の父親、祖父の代に、メッカやインドネシア留学経験者が多いことが判明した。

武装闘争部門である RKK(Runda Kumpulan Kecil, 小パトロール隊)を擁している。深南部における主要な事件は主に BRN と RKK によって実行されているといわれている。

ルソは、プラトム (小学校レベル) が 38 校、マタヨム (中学・高校レベル) が 2 校、私立学校はタディカが 81 校、私立学校が 6 校、私立イスラーム学校が 4 校、学校教育制度外の私立学校が 1 校存在する (付表 1~3)。私立学校は全て小学校レベルであり、私立イスラーム学校のほとんどが高校レベルまでの教育課程を準備している。²¹⁵制度外の私立学校はサマッキー町にあるムイカーン校であり、私立イスラーム学校としての登録は行っているものの普通科目の教育を行っておらず、実態はポーノと同じである。伝統的なポーノは、8 校ある。政府からの補助金を得る目的で名前のみ登録されているポーノもある。サマッキー町に 2014 年に設立されたばかりの伝統的なポーノが確認されているが、2015 年 10 月の時点で行政上は未登録となっている。

私立学校に関しては、全てインタビュー調査の対象とした (付表 1)。公立学校を選択については、ルソ郡内に 2 校しかないマタヨムレベルの学校は全て対象とした。小学校レベルについて、①イスラーム教育実施の時間 (イスラーム教育を重点的に行っている学校か否か)²¹⁶、②地理的な条件 (市内へのアクセスの容易さ、山に囲まれているか)、③人々の移動の状況 (県外やマレーシアへの出稼ぎが多いか) の 3 つの点を参考にしながら 10 校選択した (付表 3)。うち、5 校は普通宗教教育を行っており、残りの 5 校は重点教育を行っている。私立のイスラーム初等教育機関であるタディカに関しても、①地理的な条件、②人々の移動の状況を参考にし、ルソ市街地域にある学校から 2 校、後は訪問した公立学校のある地域のタディカを 7 校訪問した (付表 2)。

第四節 調査内容、問題と解決方法

本研究における調査プロセスは、クヴェール (Steinar Kvale) らの提唱している、①主題設定、②調査デザイン、③実査、④文字起こし、⑤分析、⑥検証、⑦報告の 7 段階を参考に実施した。インタビューに先立って、研究の目的とテーマを明確にする段階では、第一章で検討を行った先行研究の評価に基づいて、「現地のイスラーム教育制度はマレームスリム社会の変容をどのように反映しているのか」を検討することを目的として設定した。深南部における教育は上からの国家統合の一環としての教育政策とともに、下からの社会改革が合わさって進展してきたものである。ある意味で、深南部におけるイスラーム教育はマレームスリムのタイへの統合を進展させたのではないかと、そしてそ

²¹⁵ サワンウィタヤカーン校 (Rongrien Sawanwithayakhan) はプラトム 6 (小学校) まで、ダル・アンワル校はマタヨム 3 (中学校) レベルのみとなっている。

²¹⁶ ベープケム、すなわちイスラーム教育を重点的に行う公立学校の導入については、第三章参照。公立学校には、1 週間に 1 時間の宗教教育のみを行うタムマダー (Thammada, 普通) 校と 1 週間に 12 時間程度の宗教教育を行うベープケム (Baep Khem, 強化方式) 校が存在している。

れこそが深南部問題が泥沼に陥っている背景にあるのではないか、という仮説に基づいている。そこで、タイの教育政策の現地における展開を通じてマレームスリム社会の実態を調べるために、対象は教員を中心とする教育関係者に絞り、教育に対する意識調査を行った。

調査デザインの段階では、このリサーチ・クエスチョンに基づいて調査計画を作成した。実査の段階において、2015年のラマダン月と重なることが想定されたため、深南部に滞在する期間を6か月とし、調査対象地域をナラティワート県ルソ郡に設定した。用いる技法は、ルソ郡の公立、私立学校の教育関係者に対する半構造インタビューとし、以下に記す質問事項を策定した。

インタビュー調査は、構造化の度合いによって3つに分類することができる。すなわち、構造化インタビュー、非構造化インタビュー、半構造化インタビューである。構造化インタビューは、質問票調査に代表されるように、全ての質問事項を固定する方法である。半構造的インタビューでは、あらかじめ質問する項目は統一しながらも、相手に応じて話す内容や質問の順序等を臨機応変に変えながら進めていく。本研究では、実査を行う前の調査計画段階において、パッターニーとバンコクにおいて教員に対するパイロット・インタビューを行い、インタビューの訓練を行った。実査では「タイの教育政策とイスラーム教育の関係についての調査」と題してインタビューを実施した。全てのインフォーマントに質問した項目は以下の通りである。

1. 学校の歴史、教育方針、カリキュラム
2. 教員の文化、社会、教育的背景
3. 留学経験
4. サーイ・マイ（イスラーム改革派）とサーイ・カオ（伝統派）
5. 教育政策、カリキュラムに対する意見
6. 深南部における教育の問題点
7. 地域に即した教育の必要性
8. イスラーム教育の問題点
9. セキュラー教育とイスラーム教育の関係
10. グローバル化と国際関係

全てのインタビューは、学校の名称、所在地、歴史、教育方針、カリキュラム、とくに宗教教育のカリキュラムについて尋ねるところから始めた。続いて、教員個人の民族、母語、学歴に関する質問項目を続けた。教員の教育背景について、タディカ、ポーノにおける教育の有無を知ることが不可欠である。南部3県では、しばしば私立イスラーム学校のことがポーノと呼ばれる。私立イスラーム学校のうち以前は伝統的なポーノであった学校が人々の間でポーノと呼ばれているが、私立イスラーム学校は厳密には普通科

目の教育を併せて実施する機関である。

伝統的なポーノで教育を受けたものが、学校で教えている事例は明らかに少ない。インフォーマントの中では、私立イスラーム学校の宗教教員2名、コーソーノと呼ばれる学校外のノンフォーマル教育における教員1名のみである。伝統的なポーノにおける教育では、トク・クルーと呼ばれる宗教指導者が重要な役割を果たしている。伝統的なポーノにおける教育は、このトク・クルー個人の思想に依る部分が多い。伝統教育機関が政府によって、安全保障上の脅威とみなされた理由はここに存在している。

同様に、政府によって安全保障上の脅威として認識されているのが、イスラーム諸国への海外留学経験の有無である。また、イスラーム諸国をめぐる国際情勢、サウジアラビアにおける政治体制の変化、ワッハーブ派の影響の拡大という観点から、いつ留学したのかが重要となってくる。海外留学の経験は、個々人の思想形成に対する影響が大きく、どの国に留学したのかという点もかなり重要な要素である。深南部における留学経験者のほとんどがイスラーム学で学位を取っているものの、イスラーム学以外で学位を取得している者もいる。イスラーム学を学んだのか否かについても重要なデータとなるため、必ず質問を行うようにした。

サーイ・マイ（イスラーム改革派）とサーイ・カオ（伝統派）についての質問の際は、イスラーム改革派に分類されるワッハーブ派、タブリーギー・ジャマアトとは何なのか、それぞれについてどう思うかについてのインフォーマントの説明を行ってもらったところから始めた。インフォーマントの説明を聞く過程で、本人がサーイ・マイに近い考えをする人物かどうか、について判断を行うことを目的とした。サーイ・マイとサーイ・カオは、本研究においても重要なキーワードとなる概念である。そのため、価値判断を挟むことなく、インフォーマントによる概念の説明という方法を採用した。

教員の教育政策やカリキュラムに対する考え方と深南部における教育の問題点については、1999年国家教育法の制定を一つの指標として掲げた。これ以降の教育改革の影響について、紛争が激化した2004年前後からの政府による教育政策の方向性を中心に質問を行った。教育予算、経済状況、学校の設定ラッシュと競争の激化、学校行政、教員の給与、教員の教授能力、子供の理解能力、言語、インフラストラクチャーなど、どういった点に問題があると考えているかについて質問し、教育をめぐる問題に対する認識を問うた。政府は長期的な観点からは深南部における教育問題を解決することができるか、他国の教育制度と比較しても、タイの教育制度はうまく機能していると思うか、政府の教育政策の方向性は正しいと思うか、である。

言語は、深南部におけるマレームスリムのアイデンティティをめぐる問題を論じる際に避けることのできない問題である。教員として、学校ではどの言語を最もよく用いているか。家庭では、どの言語で話をしているか。友人と話をするときは、どの言語を用いているかについてたずねた。深南部における言語に対する人々の価値観は多様である。学校でも日常生活でもタイ語を話す人々が増えている。村落部ではパタニ・マレー語が

主に話されており、パタニ・マレー語のことをイスラームの言葉という者もいる。パタニ・マレー語に関しては宗教と切り離せない言語である。地域に即した教育の必要性については、ヤーウィを用いた教育の必要性と可能性について質問を行った。

さらに、教育と言語の関係性を明らかにする目的で、教員がパタニ・マレー語を用いて子供に対して十分なイスラーム／普通科目教育を実施することができるか、タイ語を用いて子供に対して十分なイスラーム／普通科目教育を実施することができるかについて尋ねた。これらの質問については、教員の自身の言語能力と教授能力に関する認識を知ることが目的としている。例えば、マレー語もタイ語も同様に母語として話す能力があったとしても、イスラームの知識をタイ語で伝える自信があるかどうかはまた別の話である。同様に、普通科目の知識をパタニ・マレー語で伝える自信があるかどうかも異なる。これは教員自身が受けてきた教育的背景にもよるが、タイ語が浸透した現在でも、タイ語を用いた宗教教育に対する抵抗があるといった事実を知ることが可能となる。

伝統的な教育を含めたイスラーム教育について、以前（とくに教員自身が学生だった時代）とどのように変わったか、イスラーム教育の何が問題だと感じているか、という点について質問を行った。タイ政府はこの地域のイスラーム教育のことを理解している、政府のカリキュラムはイスラームに関する知識を伝えるのに十分である。タディカ・システムは宗教カリキュラムを教えるのに効率的なシステムである、伝統的なポーノのシステムは宗教のカリキュラムを教えるのに効率的なシステムである。試験といった評価システムはイスラーム学にとって重要である、イスラームの知識は試験では測ることができない、という点についての考えを聞いた。

イスラーム教育とセキユラー教育の関係について、どのような教育制度が理想的だと思うかという質問を行った。さらに学校で用いられる教授言語としては、タイ語のみ、パタニ・マレー語のみ、タイ語とパタニ・マレー語双方、いずれがよいか、どの教育形態がこの地域に相応しいと思うか、一番相応しいと思う一般科目と宗教科目の割合についても質問を行った。

グローバル化と国際関係について質問を行ったのは、深南部では、多くのムスリムが海外留学を経験しているためである。また、グローバル化からの影響は当該地域でも例外ではない。国際関係からの影響に関しては、言うまでもない。深南部の地理的位置づけ、そして歴史からもわかるように、深南部の教育は、マレーシア、インドネシアの関係と切り離すことはできない。ASEAN 共同体結成を視野に入れ、広域のアジアにおける国際関係、そして中東地域や欧米諸国との国際関係に関する考え方についての質問を適宜行った。

質的インタビュー調査に関わる問題に対応するにあたって、結果の信頼性について読み手が判断できる、ということが重要になってくる。先に結論づけてしまうと、本研究では調査プロセスのできるだけ詳細な情報開示を行うことで、こうした問題に対応することを目指してきた。質的インタビュー調査に関わる問題について、ここでは改めてポ

ジショナリティ、言語、調査の質の確保、検証作業にわけて検討を行う。

本調査では、紛争地域における調査であることを強く意識したうえで、質問項目は教育に限定し、技術的な部分を中心としたインタビューを実施した。自身のポジションは、この点において有利に働いた。外国人であるということと、タイにおいてもイスラーム世界においてもあまり敵意を持たれていない日本人であるという点から導かれるものである。また、タイ人が調査を行う場合と比較すると、政府側のスパイ扱いをされる危険性は格段に低くなる。しかし、インフォーマントの安全の問題も鑑み、インフォーマントが自発的に話題にした場合を除いて、紛争や分離独立派組織との関連など安全保障、政治問題については避けた。

本調査における大きな問題が、使用言語である。深南部では、人々はタイ語の他にパタニ・マレー語を母語としている。伝統的な教育機関であるポーノや、イスラーム初等教育を行うタディカでは、例外なくパタニ・マレー語を用いて教授されている。タイ語は、ある意味彼らにとっても自分自身にとっても「外国語」である。この事実はテクニカルな部分への質問を中心に質問を実施したという点も含めて、インタビューにおいては結果的に良い方向に作用したといえる。

インタビューは、インフォーマントが英語で実施を指定した場合以外は全てタイ語で行った。筆者のタイ語は中級レベルであるが、パタニ・マレー語を話すことはできない。学校訪問に際しては、最低1名の現地マレームスリムのアシスタントの同行が妥当であると考えた。マレームスリムであり、大学卒の資格を持っていること、タイ語、マレー語を母語とし、英語を用いた最低限のコミュニケーションが可能である、という条件を設定し、アシスタントの選定を行った。

ルソにおいて、全ての調査に同行したアシスタントは、ルソ出身、ソクラーナカリン大学パターニー校の日本語学科卒業、34歳のマレームスリムの女性である。私立イスラーム学校における教授経験をもつが、現在は主婦をしており親族には伝統的なポーノ、私立イスラーム学校の関係者が多数存在する。父はタイ政府側の役人を務めた人物であり、タイ、マレーの双方のアイデンティティに対して中立的な立場を取っている。特定の政治的主張はなく、タイ側、マレー側双方にコネクションをもっていることから相応しい人物であると判断した。タイ語が堪能ではない宗教教員との間の通訳や、マレー文化に関する背景知識に関する補足は、主にこのアシスタントに依っている。伝統教育機関であるポーノへの訪問の際、男性の同行が必要であると判断した場合は、その都度アシスタント、インフォーマントの知人、親族等から男性の同行をお願いした。

実査において生じた技術的な問題と解決方法は、以下である。南部3県における教育関係者の多くは、母語がタイ語ではなくマレー語であることに加え、当該地域はマレー系のみならず、中国系、パキスタン系などのバックグラウンドを持つ人々によって構成されている。そのため、民族、国籍双方について質問を行った。しかし、民族(Chueachat)と国籍(Sanchat)を示すタイ語に対する人々の概念の混乱から、エスニシティに関し

でもタイと答えるケースが多発した。こうしたケースについては、マレー語を母語とし、ムスリムであるという回答があった際、民族としてはマレーと捉えることとした。

次にサーイ・マイ（イスラーム改革派）とサーイ・カオ（伝統派）という、本研究における重要なキーワードとなる言葉についてである。ワッハーブ派とは他称であり、自らをワッハーブ派であると主張するケースはほぼない。インタビュー内でワッハーブ派という言葉を用いた理由は、深南部では①ワッハーブ派という言葉がサーイ・マイを表す言葉として普及している、そして②否定的な意味を伴うものの、一つの集団として認識されているためである。改革派の人々が自称する場合は、アハリ・スンナ（スンナの徒）やサラフィーといった呼称が用いられる。

サーイ・マイに近い考え方をする個人か否かについては、どのモスクに行っているか、礼拝の所作、マウリド（Mawrid, 預言者の生誕祭）や墓参りといった伝統行事に対する認識から判別可能である。インタビュー時において、サーイ・マイか否かを知るにあたっての指標としては、①マレーの土着文化を非イスラーム的と見做しているか、②パタニ・マレー語をイスラームの教授言語として重視している否か、すなわち言語に関してはタイ語、英語等でもイスラームに関する知識の伝授が可能であるとしているか、③何をビドア（イスラームからの逸脱）とするか、たとえば普通科目を教えることを宗教的に問題としているか否か、④イスラームの知識を得る際に何（誰）を参照しているか、クルアーンとハディースのみ、もしくはイスマイル・ルトゥフィ博士をはじめとするサーイ・マイの学者をモデルとしているか、という4点にまとめられる。

ダッワ運動は、タブリーギー・ジャマアト（以下タブリーグ）と呼ばれる北インドを本拠とするイスラーム改革運動である。ヤラーに拠点を置いており、主に農村部を中心とした布教活動を行っている。ワッハーブ派とタブリーグはほとんど重なっておらず、しばしば対立関係にある。タブリーグは政治に関わらないことから、害があると見做されることも少ないため、ワッハーブ派を軸としてインタビューを進めた。

検証作業については、必ずしも分析の後に行われるべきものではないため、それぞれの段階で調査の妥当性についての検証作業を行っている。妥当性の確認については、調査対象者、研究者、学会などを通じて行った。客観的現実に基づく検証ではなく、反証可能性と弁護可能性といったプロセスを経て、生き残った言明が相対的な妥当性を持つこととした。

調査プロセスの最終段階に位置づけられる執筆報告については、極度の経験主義に陥ることのないよう、解釈という観点を意識して、意味縮約の手法を用いたストーリーの再構成を行った。意味縮約とは、対象者の発言の意味を簡略化して表現する方法である。データを数量化することなく、日常言語により表現されたままの状態を体系的に扱う。通常①インタビュー記録の全体を通読してその意味を理解したうえで、②回答の「自然な単位」を区分し、③その単位ごとの中心的テーマを簡略化して記述する。そして、④意味の単位を研究目的に応じて詳しく検討し、⑤インタビュー全体の本質的なテーマと

記述的説明を結びつける、というステップを踏む。次章では、本節で検討した内容並びに手法で実施したインタビュー調査で得られたデータの分析を行っていく。

第五章 アイデンティティのスペクトル

第一節 イスラーム教育と帰属意識

「あなたはまた、タイにはいないのね。怖くないの?」。バンコクの大学院生に、深南部に調査に行くことを伝えた時に言われた言葉である。深南部は、タイではない。バンコクの人々の間で、このような認識がごく普通に共有されている事実に驚くことがよくある。タイ人の仏教徒にとって、ムスリムの存在自体が依然としてケーキ（客人、外から来た人）であるとみなされていることも珍しくはない。加えて、深南部のマレームスリムは、他の地域のムスリムと異なって、融通が利かず、タイに反旗を翻し続ける、いつまでも同化しないムスリムである、という認識も根強い。マレームスリムがタイにおいて周縁化され続けてきた原因でもある。

首都バンコクから約 1000 キロ離れた場所に位置する深南部の場合は、物理的な距離からくる管理・統制の困難さという点も加味する必要がある。ナラティワートからは、バンコクに行くよりもマレーシアに行く方が容易である。加えて、ナラティワート県ルソ郡は第四章で検討したように、パタニ民族解放戦線（BRN）の勢力が強かった地域でもあり、現在でも政府からレッドゾーン指定を受けている。BRN は、1960 年 3 月にハジアブドゥル・カリム・ビン・ハッサン（Haji Abdul Karim bin Hassan）、ハジハルン・スロン（Haji Harun Sulong）らによって結成され、1981 年に解散された後、1980 年代、BRN コングレス派、BRN ウラマー派と BRN コーディネート派に分かれている。BRN コーディネート派は、その中でも最も影響力があるとされる。毛沢東やチェ・ゲバラなど冷戦期の社会主義陣営の思想から影響を受けており、革命的な理念を掲げている。とくに、毛沢東の「持久戦」の概念は、BRN のみならず、深南部における反政府運動の中心的な戦略として残っていると見える。²¹⁷興味深いことに、パッターニー県のサイブリで結成され、パタニ王国時代の旧支配者階級から構成されていた PULO は、エリートによる支配を是としており、理念の面ではエリートを否定する BRN とは対照的である。

しかし現在、タイ政府側に賛同している・同化している、分離独立派組織側に賛同している・同化していない、という問題ではなくなりつつある。政府側も、分離独立派側も、今となっては「人々」を取り込むことに必死である。どちらも「人々」のためという言葉を掲げながらも、どちらにも欠けているのがその「人々」である。曲がりなりにも民主主義が進展した今、たとえ軍事政権であっても、人々からの支持を欠かすことはできない。深南部における現地調査から見えてきたものとは、政治の世界に翻弄されながら、プラグマティックに動く人々の姿であった。深南部に関わる数々の研究やレポ

²¹⁷ Sascha Helbardt, *Deciphering Southern Thailand's Violence: Organization and Insurgent Practices of BRN-Coordinate* (Singapore: ISEAS Publishing, 2015), 30.

ートに見られるように、マレームスリムのマジョリティが独立を望んでいるといった言説や、反対にタイに属していることタイ人であることに満足しているといった言説は、一面では真実を表している。自らの人生をつつましく生きる人々は、分離独立派の掲げる理想でもなく、政府の掲げる理想でもない、現実を生きている。

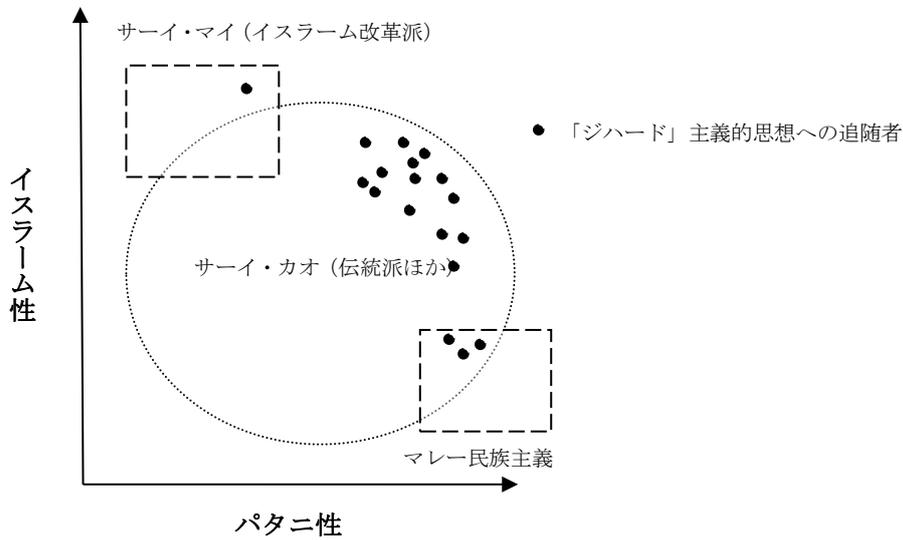
ルソの人々は、その高いイスラーム教育で知られ、深南部でもとくにマレー・ナショナリズムの意識と、エリートによる支配構造を否定する思想が強いとされる。本章では、ルソにおけるイスラーム教育を事例に、タイの近代化／国家統合とマレームスリム社会との関係を、イスラーム教育と帰属意識、サーイ・マイとサーイ・カオ、2つの母語、イスラームを学ぶということ、紛争が教育に及ぼした影響という、5つのテーマ毎に再構成しながら描く。

2004年以降、政府と非政府組織との両者の狭間で犠牲となってきた人々に共通することは、暴力を用いる主体に対する恐怖、疑念と被害者意識である。紛争が激化した後、反政府組織側によるとみられる教育関係者、町長、村長など一般市民に対する攻撃が増加した。同様に、政府側による市民の超法規的な拘束、拷問も増加した。政治的主張を伴った暴力である事もあるが、宗教や政治的主張とは関係なく権力をめぐる個人的な欲や私怨に基づく場合も同様に多かった。家族の命を奪った武装組織への恨みから政府の治安部隊の一員となった人もいれば、タイ政府に対する憎しみから反政府武装組織への加入を決めた者もいる。しかし、自分自身の命、家族、そしてコミュニティの秩序を守らなくてはならないという意識から、多くの人々が選んだ道は沈黙することであった。

この集団的な被害者意識をもつ人々は、地域でいうと圧倒的に農村部に集中している。期せずして、伝統的な教育機関で教育を受ける人々と、暴力の被害を受ける人々が重なる状況となった。反対に、高等教育を受けた（都市）中間層を中心とするイスラーム改革派は、他のイスラーム諸国においてイスラーム改革派がテロを起こす主体となっているのとは対照的に、タイの深南部ではこうした暴力からもっとも遠い存在となっている。可能性としてはサーイ・マイ（イスラーム改革派）のジハードイストが存在し得るとしても、現時点においていわゆる「ジハード」主義的な思想に共鳴しうるのは、サーイ・カオ（伝統派）と呼ばれる人々である（図2・3）。また、暴力を正当化する際にイスラーム的な言葉が用いられていたとしても、イスラームの知識に基づく主義であるとは言いがたい。先行研究でも明らかにされているように、たとえイスラームやジハード主義的な言説によって正当化されていたとしても、深南部において生じている暴力は当該地域に限定されたものであり、グローバルなジハード主義とは異なっている。²¹⁸

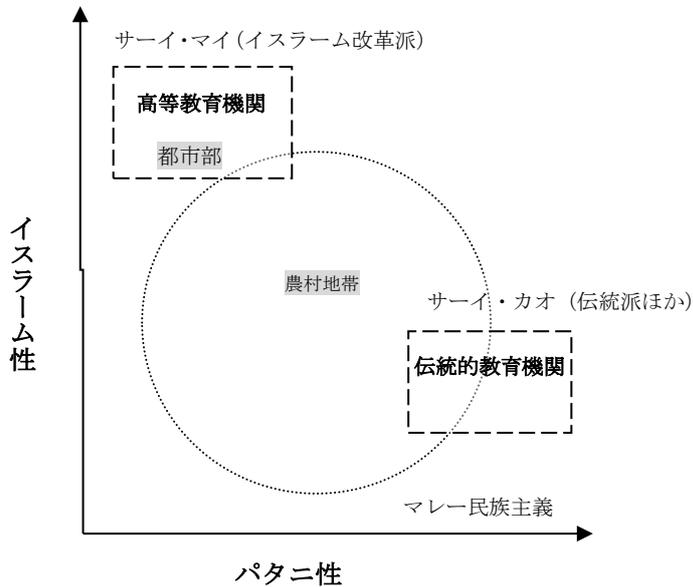
²¹⁸ 2016年8月、タイ南部において一連の爆破事件が生じており、分離独立派組織の一つであるBRNの犯行によることがほぼ明らかとなっている。これまで、BRNを始めとする分離独立派や反政府組織は、深南部地域に限定した活動を行ってきた。正統性の根拠は、パタニ・ダルサラームの故地である深南部における闘争という正確に由来する部分が大きかったものの、状況が変わりつつあることを内外に知らしめることとなった。今回の爆破事件については、政府側及び、政府側と交渉を進めるMARA Pataniに対して賛同しないという

図2 アイデンティティのスペクトル



出典：筆者作成

図3 教育機関との関係



出典：筆者作成

意思表示であるとされているが真相は曖昧なままである。反政府組織内部で和平交渉に対する温度差があることは事実であり、それに伴うBRN内部の組織改革が進められているとみられており、今後の動向を注視する必要がある。

本章では、とくに断りの無い限り調査地であるナラティワート県ルソ郡内の公立学校、私立学校、私立イスラーム学校、ポーノ、タディカで実施されたインタビューのデータに基づいている。タイの教育政策が実際に深南部でどのように展開されているのかを知ることが、タイの国民教育の理念がどのように、又、どの程度実現されているのかを知ることでもある。政策決定過程において、教育改革、教育の質の向上を目指して行われたものであったとしても、実際の現場でその思惑通りに改革が進む訳ではないということは容易に想像できることである。教育現場の状況は、政府によって作成された理念型としての教育政策とは全く異なるものである。これは、深南部に限った問題ではないものの、イスラーム教育という観点から見ると、事態はより複雑である。

第二節 サイ・マイとサイ・カオ

深南部におけるイスラーム社会を考えるにあたって、タイ政府からの抑圧という視点だけでは理解することが困難な点が多くある。第二章でも言及したように、サイ・マイ（改革派）とサイ・カオ（伝統派）の対立という観点を強調することだけでは誤解を生じさせる。サイ・マイが必ずしも、伝統的な文化や慣習を否定している訳でもなく、サイ・カオが伝統に固執している訳でもない。人々にとって、「イスラーム」や「マレー」の意味するものは、少しずつ違っている。

同じ家族の中であっても、家族のイスラームに対する価値観は大きく異なっている。ラロ町のある村では、ポーノで学びかつて私立イスラーム学校で教えていた両親はサイ・カオ、3人の子供のうち、長男はチュラロンコーン大学を卒業してバンコクで働いており、長女はソクラーナカリン大学パッターニー校を卒業してルソに住んでおり、次男がソクラーナカリン大学パッターニー校を卒業してパッターニーで働いている。バンコクとルソにいる兄妹は、サイ・マイから距離を取っているが、ファートニー大学で働いている弟はサイ・マイとなった。

象徴的な事例としては、父親がパタニ独立のために戦った PULO の幹部であった家族である。6人の子供のうち4人がサイ・マイとなった。いずれも、ファートニー大学を修了している。サイ・マイは若い世代に多く、教育と深い関わりがある。その村では、同一箇所に隣接して2つのモスクが建設されており、一つがサイ・カオ、もう一つがサイ・マイのモスクとなっている。父親は前者で、子供らは後者で礼拝を行っている。イスラーム初等教育機関であるタディカも最近2つに分かれた。「親の世代やサイ・カオの人たちは、ワッハーブ主義が何かも理解しないで批判だけです。彼らの考え方は、現代に合っていないし、とても古い (Kao Mak) と感じます」。²¹⁹

深南部研究者の間では、村落レベルではサイ・マイの影響はかなり限定されている、もしくは無いという認識が共有されている。しかし、調査で明らかとなったようにサイ

²¹⁹ K氏インタビュー、26歳男性（ヤラー県ラーマン郡タロハロ町、2016年2月14日）。

イ・マイの影響は村落レベルにおいても徐々に増加している。深南部のイスラーム社会には、サーイ・マイやサーイ・カオといった分類では描き切れない多様性があり、誤解を生じさせてしまう可能性がある。ここでは、あえてサーイ・マイとサーイ・カオという表現を用いてスペクトルの両極を描くことで、現地におけるイスラーム社会の多様性と複雑さの指標となる視点を構築する。

サーイ・マイ（イスラーム改革派）

現在では、村落レベルにおけるイスラーム社会を考えるにあたって、サーイ・マイ（イスラーム改革派）について知ることが不可欠となっている。フィールドでサーイ・マイと呼ばれる人々の実態とは、とくにファートニー大学のイスマイル・ルトウフィ・チャパキヤ博士（Islamil Lutfy Japakiya）から影響を受けた人々のことを指している。1989年にサウジアラビア留学を終えて帰国したイスマイル・ルトウフィ氏は、王室との関係が深いことでも知られており、サウジアラビアをはじめとする湾岸諸国からの支援を得て、タイで初のイスラーム大学であるヤラーイスラーム大学（現ファートニー大学）を建設した。

サーイ・マイの特徴としては、まずパタニ・マレーの土着文化をイスラーム的ではないとして否定する傾向にある点である。例えば、墓地へ行くこと、預言者の生誕祭を祝うこと、聖者廟へ参拝すること、死者に対する儀式を行うことが問題とされる。また、イスラーム教授言語としてのパタニ・マレー語に対して、重きを置かない点である。さらに、西欧を起源とする近代テクノロジー教育をビドア（Bid'ah、イスラームにおいて禁止されているイスラームの教えに新たなものを付け加える行為）と捉えず、イスラーム的観点からも肯定的に見る点である。知識のイスラーム化、あるいはイスラーム的に読み替える作業を経ることによって、理論的・感情的に矛盾を来すことなく西欧（もしくはタイにおける近代システム）に参入、対抗していこうとする思想が背景にあると考えられる。最後に、民衆レベルにおいては、イスマイル・ルトウフィ博士を筆頭にファートニー大学などのイスラーム学者をモデルとしているかで、サーイ・マイか否かを知ることが可能となる。

すなわち、サーイ・マイか否かを知るにあたっての指標としては、①マレーの土着文化に対する認識、②パタニ・マレー語に対する認識、③何をビドアとするか、④イスラームの知識を得る際に何（誰）を参照しているか、という4点にまとめられる。

サーイ・マイは、主に高等教育機関で大きな影響力を持っている。ルソの私立イスラーム学校やタディカにおける影響も確認できるが、ナラティワート県では、ナラティワート市内のアッタルキヤ・イスラーミヤ学校（Rongrien Attarkiah Islamiah）がサーイ・マイの影響が強い私立イスラーム学校として知られている。イスラーム教育カリキュラムを策定する教育省や地方教育行政に携わっている者の中には、サーイ・マイ的な考え方がしばしば見られる。教育省などの支援のもと、セキュラー教育と宗教教育を統合し

た統合カリキュラムが編成されており、タイ南部5県では15校の私立イスラーム学校と2つのポーノがパイロット校として統合カリキュラムを実施している。タイ語によって、イスラームに関する知識の教授が十分可能になるとの想定がなされている。²²⁰

サーイ・マイに共通することは、インターネットとくにYouTubeからタイ語でイスラームに関する知識を得ていることである。ポーノにおける何十年にも及ぶ教育については、時代遅れであるという意識をもつ事例がみられる。また、ポーノではキターブだけ勉強しており、知識が狭いと考える者もいる。ポーノでのみ教育を受けた人のほとんどがタイ語を十分に話すことができない。一方で、サーイ・マイの多くは、タイ並びに海外の大学を修了している。

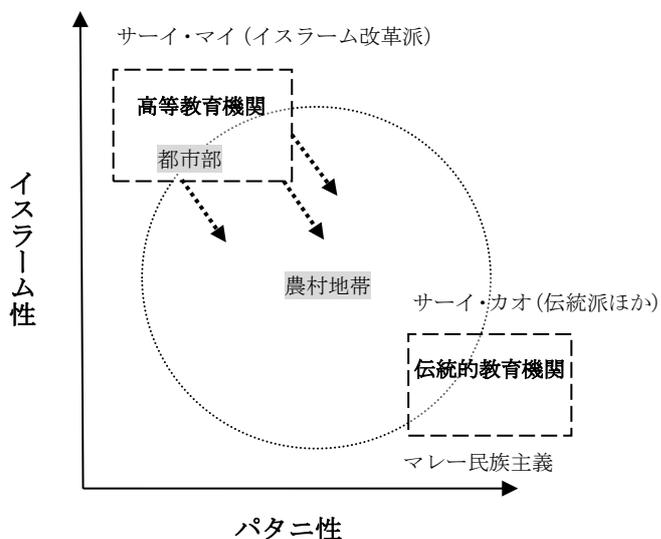
インターネットによる知識の伝達が行われるのと同時に登場したのが、「アイドル・イマーム」とも呼べる宗教指導者あるいは知識人である。サーイ・マイの影響を受けた者の中でしばしば言及される人気のイマームがいる。インドのザキール・ナイック博士である。サーイ・カオの間でも博士の講演を視聴している者もいるが、圧倒的にサーイ・マイの間で支持を集めている。

深南部におけるサーイ・マイの影響は、「都市」中間層の現象である。「都市」とする理由は、必ずしも都市部に在住している訳ではないものの、農業従事者ではない、車を保有している、といった共通点がみられるためである。一般的にワッハーブ派は思想的な特徴のみならず、髭（顎鬚をたくわえている）、衣服（伝統的な丈の長い白い衣装）、礼拝の作法（とくに礼拝の動作の中で手を置く位置）、礼拝に行くモスク等で見分けることが可能であり、ルソも例外ではない。ルソにおけるサーイ・マイの影響は90年代以降、とくに近年広まって来たとされる。この時期はマレームスリムの経済的地位や政治的地位が上昇してきた時期である。タイへの同化・統合が進んだと言われた時期でもあった。中間層の間に広まったサーイ・マイの影響は、今や村落レベルのタディカ教育やポーノの教育にも広まっている。極端なまでにサーイ・マイを嫌う伝統派がいる一方で、サーイ・マイの影響は人々の間にも広まりつつあるのである（図5）。

サーイ・マイはある意味で、現代的な合理性を兼ね備えた存在であるともいえよう。現時点においてサーイ・マイの影響力は、ルトゥフィ氏のカリスマ性に大きく依る部分が多く、後継者と目される人物はいない。サーイ・マイは影響力を農村部にも広げているとはいえ、圧倒的に都市・中間層的な現象であり、その影響力は高等教育機関に集中している。深南部マレームスリム社会において、これからも影響力を拡大し続けられるかどうかは定かではない。

²²⁰ ムハンマド・ルヤニ・バカ博士インタビュー、南部国境県私立教育監督事務所係官（ヤラー県ムアン・ヤラー、2015年7月25日）。ナラティワート県ルソ郡の私立イスラーム校であるトンタンジョン校訪問の際、ナジーブ・ムナディ校長より統合カリキュラム並びにパイロット校に関するデータを得た（ルソ町、2015年9月7日）。

図4 サーチ・マイの影響力の拡大



出典：筆者作成

サーイ・カオ（伝統派）

サーイ・カオ（伝統派）は、サーイ・マイに対応する用語である。サーイ・カオに属すとされる人は、伝統的な教育機関の関係者である。サーイ・マイに属さない人のことをサーイ・カオだとも定義できるが、サーイ・クランを自称する者が散見された。伝統派と中立派はほぼ重なりあっている状況である。サーイ・カオの人々は、サーイ・マイのことを良く思っていないという共通点が挙げられるが、最も大きな特徴としてはマレーの伝統に重きを置いているという点である。パタニ地域では、ラマダン月の終わりのハリラヤ（Hari Raya）は、マレー語でクーボーと呼ばれる墓地を訪れて皆で食事をしたり、親類縁者の家を訪ねて共食し、ハリラヤの前後3日程度は休暇を取って家族で過ごす。そして、ハリラヤの1週間後、現地でラーヨーネー（Hari Raya Enam）と呼ばれる日も祝われるのが一般的である。このラーヨーネーに関しては、現地の習俗であり、サーイ・マイからはイスラーム的ではないとみなされている。しかし、サーイ・カオの人々は、イスラームの根本的な教えに反していない限り、イスラームにはない現地の風習や習慣を実践することは構わないと考える。²²¹

唯一神信仰、魂や来世の問題としての宗教と、この世で生きていくための手段としての教育や勤労、こうした考えはどちらも共通している。宗教上の対立は無いものの、明らかにサーイ・カオの間ではサーイ・マイに対する否定的な感情がある。ある意味、サーイ・カオの人々のサーイ・マイ嫌いは、サーイ・マイの政治的経済的地位と、彼らの

²²¹ ただ、墓地や聖者廟に「参拝」することについては、イスラームの歴史の中でも非常に大きな論点となっているため注意を要する。

サーイ・マイ「でない」者に対する態度への対抗として捉えることが可能であろう。

「サーイ・マイは、私たちの社会を壊そう (Tamlai) としていると思います。彼らは、私たちのことを遅れている (Tokrung) とか古い (Boran) と言います」。²²²

ポーノやタディカに関わる人々は、サーイ・カオに分類されている。伝統的なイスラーム教育機関は、近代教育システムとは全く異なるシステムである。ポーノに対する政府の統制が強化されたのは、1960年代以降であった。2003年以降、政府による現地教育機関の登録強化の流れを受けて、今ではほぼ全てのポーノが登録されている。ポーノ教育を受けたものに特徴的なことは、その強いマレー・ナショナリズムの意識である。ポーノでは、宗教以外のことが教えられることは無いにも関わらず、ポーノで学ぶ若者には自分たちはタイ人とは異なる、という意識を共有している。

この事実は、ポーノが置かれて来た状況を反映している。ポーノには、学級やテストは存在しない。修了しても修了証がもらえる訳ではない。政府は、ポーノに対して、年間3,000バーツ（約10,000円程度）の支援を行っている。ポーノによっては、コースロー（政府によるノン・フォーマル教育）からポーノ専属の教員が出向いて、学生に対して小・中学校卒業資格を得るための基礎教育と職業教育を行っている所もある。いずれにせよ、ポーノで学んだ場合、公的機関や一般企業で働くことは不可能である。

ポーノやタディカに関わる人々がサーイ・マイを語る時、サーイ・マイは軽薄であるというニュアンスを含んでいる。サーイ・マイの人々は、イスラームのことを正しく理解していない、格好だけである、にも関わらず押しつけがましいという語られ方がなされる。イスラーム的ではないと他のムスリムを批判したり、非イスラーム教徒を改宗させようとしたりするの、サーイ・マイが中途半端である証拠であるとしている。確かに、ワッハーブ派に代表されるサラフィー主義は、クルアーンや一定のハディースのみに従うことを是とし、その後長きにわたって積み重ねられてきた歴史性を否定する。イスラームに関して独学で十分学ぶことができると考える傾向があり、そしてそれに応じて勉強量は必然的に減るとはいえる。長い歴史の中で蓄積されてきたものを否定するかのような行動は、伝統的な教育機関に携わる者にとっては軽率な行為にみえるのだろう。

ただ、サーイ・カオの中にも、原理主義的な思想を持つ者がいることは注意しなくてはならない。イスラームをめぐる世界の混沌とした状況を解決するには、もはやムハンマドの時代に戻るしかない、という考えである。²²³この場合、可能性としてはサラフィ

²²² N氏インタビュー、54歳女性、元タディカ・マスジッド・ジュミヤ教員（ルソ・オーク町、2016年2月21日）。

²²³ Muhammad Ilyas Yahprung, "Reformist-modernist Ulama's Reconstruction of Islamic Interpretation on Social Change: A Study of Archan (Teacher) Direk Kulsirisawas (Ibrahim Kurashi) (1922-2005) and his Reformist-modernist's networks in Bangkok, Paper presented at the Asia Pacific Sociological Association (APSA) International Conference. 'Transforming Societies: Contestations and Convergence in Asia and the Pacific', Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University, Thailand, February 15-16, 2014, 5.

一主義以上に過激となりうる。サーイ・マイはイスラームの文脈における近代主義者であるともいえるものの、サーイ・カオ側における原点回帰は、近代との妥協の余地のない回帰となってしまうためである。

庶民のプラグマティズム

深南部では、小学校レベルからイスラーム教育を強化して行う私立イスラーム学校がある。深南部の教育に関する研究では、マレームスリムの親は公立学校を極力避け、私立イスラーム学校を好むと結論付けている。深南部における教育研究の第一人者でもあるイブラヒム・ナロンラクサケート（ソクラーナカリン大学パッターニー校・イスラーム学研究所准教授）は、ムスリムの親は全てのムスリムにとっての義務である宗教教育を重視しているため、セキュラー教育と共にイスラーム教育を行う私立イスラーム学校が最も好まれるとしている。²²⁴

深南部は、圧倒的に農村社会である。多数の人々が油やし、ゴムの栽培・採取や畑作を営む農民か、漁業を営んでいる。ルソのある村の一日は、夜明け前の礼拝から始まる。礼拝と軽い朝食を済ませたら、ゴム園へ行き、ゴムの採取を行う。昼前には帰ってきて休憩してから、家事や畑の手入れをする。村には日用品や菓子類を売る家、ローティを売る家、そしておかずを売る家もあるが、ほとんどがゴム園からの収入で生活している。

「毎日ゴムを取りに行っても、良くて一週間に 500 バーツ（1,500 円程度）稼げるかどうか。雨が降ったら、収入は無い。今は、1 キロ 12 バーツよ。5 年前は良かった。40 バーツで売れた」。²²⁵

ゴム価格の値下がりによって子供を私立イスラーム学校に送ることができない親も増えた。たとえ学費無料を謳う私立イスラーム学校であっても、制服を始め課外活動の費用等の出費が重なるため、紛争激化後、一時期激減していた公立学校への進学者は増えている。公立学校では、全てが無料で提供されるためである。とくに、困難な家庭の子供に対する教育の機会の付与を目指して設立された、カヤーイオーカート（Khayay Okat, 機会増進）学校は、農村部の貧困状況を表している。親があまり面倒を見ることができない子供も多く、靴を履いていない、制服が汚れている、といった児童が目立つ。

50 代～60 代のほとんどが、小学校 4 年生レベルの義務教育を終えた後は、学校教育を受けることは無かった。村ではタイ語を話すことが無いが、1990 年代以降のテレビ

²²⁴ 例えば、Ibrahim Narongraksakhet. “Educational Change for Building Peace in Southern Border Provinces of Thailand”, in *Understanding Conflict and Approaching Peace in Southern Thailand* edited by L.Schmidt and Imitiyaz Yusuf, 128-47 (Bangkok: Konrad Adenauer Stiftung, 2007) イブラヒム・ナロンラクサケート教授は、パッターニー校のイスラーム研究所の准教授である。アソシエーション加盟校では、平和教育が重点的に行われている。インタビューの際、子供たちの将来を考える親は、タイ語によるアカデミック教育とイスラーム教育を両方向う私立イスラーム校が一番良いと考えているという（ムアン・パッターニー、2015 年 5 月 21 日）。

²²⁵ I 氏インタビュー、58 歳女性（ラロ町、2015 年 9 月 6 日）。

の普及によって、どの家庭もテレビを保有している。タイ語の番組を視聴しているため、タイ語は理解できる。こうした環境では、大学で学ぶような知識が必要だという認識も、必然的に低くなる。現在では、農村部であっても経済的に可能であれば子弟に大学教育まで受けさせる家庭が一般的である。30代以下の世代は、最低でも義務教育である中学、ほとんどが高校レベルまで教育を受けている。

村は、モスクを中心として成り立っている。モスクには、タディカが付属している。イスラーム教育は、ムスリムとして生まれたからには欠かすことができない。タディカでの教育は、ムスリムとして生きるための最低限の基礎知識を得るためのものとして認識される。一方、イスラーム高等教育を行うポーノは、死んだ後の次の世界の準備をするための存在として認識される。どのような職業に就いていようが人々の心の中には、いつかは自分が死んだ後の世界のためにポーノで学びたい、という思いがある。「私はいつか、自分もポーノで学びたいと思っています。子供が大きくなって、自分の時間が持てるようになったら、ポーノでイスラームを学んで平和に暮らしながら天国に行く準備をしたいと考えています」。²²⁶

また、ポーノはイスラーム的な慈善活動を体現した機関でもあり、貧しい家庭の子供で学びたい者に対し、生活の糧と教育の機会を提供している。ある意味、教育を受けた者が社会に還元するという意味でノブリス・オブリージュの側面があり、私立イスラーム学校も同様に家族経営である。一般の人々にとってのポーノは、教育機関以上の意味を持つ存在であることは確かである。

一般の人々の間でも、サーイ・マイは伝統を軽視していると捉えられており、あまり良い印象を持たれていない。ただ、サーイ・マイがしばしば自称として用いる「アハリ・スンナ」に対してはワッハーブ派と区別されており、イスラームの伝統に適う理想的な姿として敬意の念をもって語られる。しかし、過激な武装闘争もワッハーブ派的なイスラーム改革も、人々の支持を受けているとはいえない。一般の人々を動かすのは日々の暮らしである。極端に言えば、誰が自分たちを支配しようが、どの国に属しようが、安全が保障され、十分に食べていくことができれば良いのである。逆に、日々の生活さえままならない状況にあっては、政治的な理念も宗教的な理想もどこか虚しく響く。彼らは頭ではなく、腹で考える人々である。

第三節 2つの母語

深南部研究の全てが、タイが推し進めてきた強度にタイ民族主義的な国家統合に対する、対抗言説としてのマレー・ナショナリズムを問題としている。第2章で明らかにしたように、現在の深南部において顕著なのが、マレームスリム市民をセキュリティ要員

²²⁶ N氏インタビュー、34歳女性、私立イスラーム学校元教師（ルソオーク町、2015年7月30日）。

としてリクルートするという政府の政策の結果、抑圧的なタイ政府と抑圧されるマレームスリムという構図は完全に崩れているという点である。結果として、戦闘員と非戦闘員の区別はつきにくくなっており、マレームスリム市民の犠牲者の増加という事実はこうした現状を反映したのものである。

タイ語を用いた一般教育科目の教授を受け入れた私立イスラーム学校の中には、リオウが指摘するようにナショナリズムの要素の強い教育を行う学校が多く、こうした学校がテロの温床になっている可能性は決して否定できない。²²⁷ルソにおける数少ない私立学校法第二項学校である、ムイカーン校²²⁸のバーボーは政府が深南部に対して持ち続けてきた敵意を問題にしている。「我々がタイ政府の支援を拒んでいるのではなく、政府がムルニティ（基金）の存在しない私立イスラーム校やポーノに対する支援をしないのです。政府は意図的にポーノに対する支援を行っていないといえます。政府が深南部におけるイスラーム教育を理解しているとは考えられません」。²²⁹

イプティダーウィタヤ校（Rongrien Ibtidaiwittaya）²³⁰の宗教教員は、タイの教育に対する不信感を隠さなかった。「数学やコンピューターといった一見中立的に見せかけた科目を子供たちに教えることで、タイ政府は徐々にマレームスリムの独自の文化を破壊し、植民地化（Tang Ananikhom）しようとしているのです」。²³¹

一方で、パキスタンに留学し英語を学んだ英語教員の考え方には、マレームスリムと

²²⁷ Liow, op cit, 35-41.

²²⁸ ムイカーン校は、1982年頃に宗教教育を行う私立小学校として現在のサマッキー町に設立された。創立者は、シータクシン校の創立者と同じ時期にメッカに留学し故郷に戻ってきた。シータクシン校とは対照的に、アラビア語で宗教教育を行う学校を創設した。ムイカーン校では、女性と男性は分離されており、バーボーが仕切りの前に立って男女双方に教えている。かつてセキュラー教育を行った時期もあったが、今は宗教教育のみをおこなっている。基金は設立していないため、政府からの支援はないものの、その代わりに政府のカリキュラムに従う必要もない。ムイカーン校は、数少ない私立学校法の規定する第二項学校のうちの一つである。現在学生は40名程度おり、全てが家から通っている。この点で、ポーノとは異なる。アラビア語の教科書を用い、アラビア語とパタニ・マレー語で教授する。教科書はパッターニーで印刷されたものを用いている。バーボーはパッターニーのポーノで17年間学んだ。宗教について8科目教えている。このポーノで学んだ学生の中には、他の私立イスラーム学校に進学するものもいるが、家に帰って仕事をする、もしくは結婚する者が多い。専任教員が3名おり、そのうち2名が女性である。後は、ヤラーのタンマウィタヤ校から来た学生が実習にきている。ムイカーン校のバーボーは、ト・イマムでもある。ト・イマムはモスクの長であり、コミュニティの指導者としての役割もっている。バーボーは学校のリーダーであり、学生に対する権威を持っている。

²²⁹ アッドゥナン・ハジマミン氏インタビュー、42歳男性、ムイカーン校バーボー（サマッキー町、2015年7月31日）。

²³⁰ 50年ほど前に、伝統的なポーノとして設立され、私立イスラーム学校として登録された。かつては、マタヨム3までしかなかったが、現在はマタヨム6までの教育課程もっている。2556（2013）年にはプラトムレベルも開設され、アヌバーンからマタヨム6までの教育が一貫で受けられるようになった。

²³¹ K氏インタビュー、イプティダーウィタヤ校宗教教員（ラロ町、2015年9月7日）。

してのナショナリズムと教育に対する現実的思考が共存している。「普通科目教育自体は、子供たちのために良いことです。宗教教員の多くが、宗教しか学んでいません。イスラーム諸国で、普通科目を学んできた者は少ないため、自分のような考えはあまり理解されないと感じています。さらに、タイ政府はイスラーム諸国で学んだ者に対して否定的です」。²³²

「私は、この地域が独立することは可能だと思っています。たとえタイ政府が電気を切ろうが、水道を止めようが、私たちはこれまでもつつましく生きてきたし、生きていくことはできるでしょう」。²³³

BRN の創始者が教えていたナフドゥルスバーン校²³⁴の校長である、アブドゥラ・ハジヤマ氏は、政府との関係は良好であると主張する。「政府は以前に比べてマレー地域の教育に対する理解するようになってきていると感じています。教育省にもマレームスリムが多く働くようになっており、大量の書類業務が教育に対して悪影響を及ぼしていることを除くと、政府との間に問題は全くありません」。²³⁵

ナショナリズムをめぐる問と最も関係が深いのが言語である。パタニ・マレー語を母語とするマレームスリムにとって、タイ語が外国語であることは既に述べた。パタニ・マレー語という用語法は、ここでは、パタニ・マレー方言 (Phasa Malayu)、トゥアキヤーウィ文字 (Tuakien Yawi) を示すものとして用いている。ヤーウィ文字で記述される際は、パタニ・マレー方言ではなく、標準マレーシア語で記述される。深南部では、学校教育においてトゥアキエンヤーウィが用いられることが多いが、ASEAN 経済共同体 (AEC) に合わせて、ルーミー文字 (Tuakien Rumi) を教える学校も増えてきている。

公立学校には、普通公立学校、カヤーイオーカート (機会増進) 学校があり、双方イスラーム教育を重点的に行うベープケム (強化方式) 学校とそうでない学校がある。公立学校の歴史は、私立イスラーム学校の歴史よりか長く、早いものでは戦前に設立され

²³² N氏インタビュー、イプティダーウィタヤ校教員 (ラロ町、2015年9月7日)。

²³³ N氏インタビュー、イプティダーウィタヤ校教員 (ラロ町、2015年9月18日)

²³⁴ ナフドゥルスバーン校は、仏歴 2506 (1963) 年伝統的なポーンとして設立された。当時の学生は全て男性であり、後に女性を受け入れるようになった。2516 (1973) 年、私立イスラーム学校として登録され、中学・高校レベルまでのアカデミック教育を併せて行うようになった。現在、教員は74名で、学校の出身者も多い。女子寮と男子寮があり、それぞれ30名、40名が共同生活を行っている。寮に住んでいる学生に対しては、朝と夕方に宗教の特別授業を行っているナフドゥルスバーン校では、現在でもサーイ・マイの影響が慎重に取り除かれている。現在の校長は、BRN コーディネート派と関係があったとして教員が逮捕される事件が起こったタンマウィタヤ校で英語教員を16年間務めていた。学校の教育理念は、神を畏れ、良きムスリムとなり、コミュニティに尽くす人材を育てることである。毎週金曜日には、学生を各村のモスクに派遣し、コミュニティへの奉仕活動を行っている。母語による教育を大切にしており、6年間の教育課程において、ヤーウィ文字を読み、書くことができるようになることを目指している。

²³⁵ アブドゥル・ハジヤマ氏インタビュー、ナフドゥルスバーン校校長 (ルソオーク町、2015年8月11日)。

ている。かつては、プラトム7までの課程があり、プラトム4までが義務教育とされていたため、現在の50代から60代にかけての世代はプラトム4修了者が圧倒的多数を占める。

イスラーム・ベープケム校では、私立イスラーム校のカリキュラムを参考にした教育が行われている。教育省が作成した教科書を用いている学校が多いが、教科書や教育内容に関しては親や村人たちを集めて諮問したうえで導入される。ベープケム校では、タイ語、英語、マレー語、アラビア語が教えられる。アラビア語の授業はアラビア語で、マレー語の授業はパタニ・マレー語ではなく標準マレーシア語で教授するように心がけられているものの、マレームスリム児童が100パーセントを占める学校では、パタニ・マレー語が補助的に、場合によってはメインで用いられているのが現実である。

1999年の教育改革以降、政府は数字を重視するようになった。各種プログラムや教員会議の頻度が増加した。また、年齢が重視されるようになり、学習内容を習得しているか否かに関わらず、一定の年齢で一定の学年に進級することが優先された。その結果、小学校6年レベルの教育を終えたものでも、タイ語の読み書きができない児童が増えている。

パタニ・マレー語は深南部のマレー系ムスリムにとって母語であり、宗教すなわちイスラームと切り離すことができない。ポーノやタディカはもちろん、私立イスラーム学校や公立のベープケム校でも、パタニ・マレー語を用いて、宗教について教授されている。「パタニ・マレー語は我々にとっての母語 (Phasa Mae) です。我々大人は、パタニ・マレー語を子供たちに教える責任があります。母語を失ってしまったら、私たちは私たちではなくなってしまうでしょう。我々の学校は、ヤーウィ文字を子供たちがきちんと書くことができるように教育しています」。²³⁶

ポーノやタディカの教員からは、私はタイ語を話すのが嫌いだ、という言葉をよく聞いた。タイ語を植民者の言語とみなすためタイ語自体が嫌いという例もあるが、タイ語を話すのが嫌いだという。「私は、タイ語を話すのが嫌い (Mai Chop) です。私たちの母語はマレー語なので、うまく話すことができませんし、村の生活でタイ語を話す必要もありません。とくに、イスラームに関する知識は、タイ語ではうまく伝えることはできません。パタニ・マレー語で学ぶ必要があるのです」。²³⁷

しかし、言語に関する認識にも温度差がある。パタニ・マレー語は母語であることに変わりないものの、イスラームのことを学ぶのに、必ずしもパタニ・マレー語を用いなくてはならないとは思わないという考え方も同様によく聞かれる。現在でも、地域によってはタイ語による教育は外国語による教育に近いものがある。タイ語の教育は、普通科目の教育と結びつけられ、良い大学へ行き、良い職業を得ることと繋げて考えられる。

「私たちの学校からは、多くの子供たちが国立大学に進学し、良い企業に就職してい

²³⁶ 同上。

²³⁷ O氏インタビュー、27歳男性、タディカ教員 (ラロ町、2015年9月19日)。

ます。CP²³⁸に就職した卒業生やエアアジアのパイロットになった卒業生もいます。私たちは、私立イスラーム学校に比べてマレー語や宗教の学習は劣るかもしれませんが、タイ語の教育には自信をもっています」。²³⁹

ラロ町のある村の公立学校で初めてのマレームスリム校長は、イスラームと言語の問題についてこう述べている。「私たちの生きている世界では、この地はタイに属しています。タイ語を学ぶことは、この世を生きるためには必要なことです。それだけではなく、タイ語を使ったからといって、イスラームの事を学ぶことができないなどと言えるのでしょうか。この地域の人々の多くは勘違いをしています。言葉は関係ないのです。イスラーム教徒であるために学ぶ必要があるのはアラビア語でしょう」。²⁴⁰

現在は、20代の若い世代の教員が増えている。インラック政権による、私立学校の学生1人あたり15,000バーツ支援するという政策によって、私立学校の数は増え続けている。深南部における私立学校の中には、イスラーム学習が公立学校並あるいはそれより少ない。私立イスラーム学校で教育を受けており、イスラーム教育レベル10の修了証を保有している必要はあるものの、教員もイスラーム学を修了した者ばかりではなく、英語や音楽などの学士を持つ教員が宗教を教えている。

「パタニ・マレー語を学ぶより先に、子供たちはタイ語を学ぶべきです。パタニ・マレー語はタイ語がきちんとできるようになってから、学ばばいいと思います。タイ語を学ぶ方が、子供たちのためには良いことだと思います」。²⁴¹この女性教員のように考える若年層も一方では増えているのである。

「パタニ・マレー語を学ぶ必要が無いとは思いません。私たちの母語ですから。しかし、テレビでもSNSでも使うのはタイ語です。タイ語がこれだけ溢れかえっている現在、ヤーウィ文字はあと数十年したら忘れ去られてしまうでしょう。とても難しいですし、子供たちにも学ぶ意欲がありません。タイ語を学ぶことが良いとか悪いとかいうことは決してありません。しかし、何百年も続いてきたヤーウィ文字の伝統が失われるのはとても残念です」。²⁴²

深南部において教育についての話がなされる際に、必ずといっていいほど言及されるのはマレー語が母語であることのメリットである。「ここの人々は、マレー語を母語としています。タイ人はタイ語しか話せませんし、タイ語はタイでしか通じません。マレー語が通じる地域は、ASEANの多くを占めています。子供たちにとっても機会が増えることでしょう」。²⁴³

²³⁸ タイ最大の財閥グループ、チャロン・ポカパン。

²³⁹ W氏インタビュー、45歳男性、公立学校校長（ルソオーク町、2016年2月15日）。

²⁴⁰ U氏インタビュー、53歳男性、公立学校校長（ラロ町、2015年9月7日）。

²⁴¹ E氏インタビュー、28歳女性、私立学校教員（ルソ町、2015年9月21日）。

²⁴² R氏インタビュー、46歳女性、サワンウィタヤカーン校教員（ルソ町、2015年9月22日）。

²⁴³ Y氏インタビュー、45歳男性、公立学校教員（ヨークサトー町、2015年9月17日）。

東南アジアにおいて、マレー語圏はインドネシア、マレーシア、ブルネイ、フィリピン南部など多くを占めている。マレー語が話せることによって、マレー語地域における就学、就職への道が開けるのである。AEC の議論を受けて、小学校レベルの教育からパタニ・マレー語ではなく標準マレーシア語を教える学校も出てきた。ASEAN の地域統合が深南部に及ぼす影響は無きに等しいものの、民衆レベルにおいても AEC といった言葉は周知されている。ASEAN 地域統合とはある意味、タイが政府として進めていることがらである。ASEAN の一員としてのタイ、というアイデンティティが押し出される時、タイのナショナル・アイデンティティに対立することなく、自らのナショナリズムを遂行することができる。とはいえ、マレー語が実際に使えるのかどうか、という点については疑問もある。「ここで話されているのは、現地語 (Phasa Thongthin) です。完全にマレーシアやインドネシアの人たちの言っていることが分かる訳ではありません。ASEAN ができて利益を得るのは、英語ができるエリートなのではないでしょうか」。²⁴⁴

トンタンジョン校 (Rongrien Tontanyon)²⁴⁵の校長であるナジブ・ムナディ・ハジダウ氏は、教育者として問題を捉えている。「子供たちに、できるだけたくさん選択肢を与えることが我々教育者の務めです。タイだけでなく、アラビア語圏で学びたい学生にはアラビア語を、英語圏で学びたい者には英語をきちんと教えたいのです。子供たちは広い世界に出ていくべきです。日本に行きたい子供たちのために、日本語を是非教えてください。皆勘違いをしていますが、マレー語が母語だからタイ語ができない、タイ語ができたならマレー語ができないという訳ではないのです。私たちの歴史は大切にすべきです。しかし、教育は政治の問題ではなくて、子供たちの将来の問題なのです」。²⁴⁶

²⁴⁴ L 氏インタビュー、29 歳男性、公立学校宗教教員 (サマッキー町、2015 年 8 月 3 日)。

²⁴⁵ トンタンジョン校は、2506 (1963) 年に伝統的なポーノとして始まった。現在 87 歳の学校長の父親は、パッターニーで学んだのちにポーノを開き、イスラーム教育を行っていたが、2544 (2001) 年から政府の統制下に入った。2545 (2002) 年、私立イスラーム学校として登録された。トンタンジョン校では、2552 (2009) 年からアカデミック教育の 8 科目に宗教科目を加えた、統合カリキュラムを用いている。深南部では、宗教とアカデミック教育を統合させた統合カリキュラムの導入が始まっており、15 の私立イスラーム学校と 2 のポーノが統合カリキュラムの導入を試みている。トンタンジョン校もそのうちの一つである。現在、アカデミック教育はタイ語で、宗教教育はパタニ・マレー語で教授されている。統合カリキュラムを用いることで、マタヨム 6 を終わると同時にサナウィ 3 を修了できる仕組みが構築されている。他の学校のように全く別の 2 つの体系を構築し、たとえばマタヨム 6 を終わっても、サナウィ 1 (レベル 8) しか終わっていないという状況にならないようにしている。さらに国際赤十字社のパッターニーオフィスが開催している平和教育プログラムに参加するなど、学校として独自の取り組みを続けている。これらのイニシアティブは、主に校長であるナジブ・ムナディ・ハジダウ氏の個人的な性質による部分が多い。

²⁴⁶ トンタンジョン校校長、ナジブ・ムナディ・ハジダウ氏インタビュー (ルソ町、2015 年 9 月 7 日)。

第四節 イスラームを「学ぶ」ということ

イスラーム教育にどのような問題があるのか、ルソオーク町にある私立イスラーム学校を経営するサーイ・カオ側のエリートはこのように説明している。「かつては学校ではイスラームの根本的な哲学が教えられていました。何をどう考えたらいいのか、教えの背景にある理念や哲学はどのようなものなのか、こうした点を伝えることに重きを置いていました。しかし、今は科学的な言説に彩られたルールを教え込むことに集中してしまっていると感じます。これはタイ政府の教育制度の導入と資本主義の浸透に深くかかわる問題だと思っています。セキュラーではありえないイスラームがセキュラーであろうとすると、いったい何が起こるのか。ただ、色々な言葉にイスラームの味付けをただけの表面的なものでしかなくなってしまいます」。²⁴⁷

サーイ・マイが影響力を持つ高等教育機関と比較して、ポーノを代表とする伝統的教育機関では近代的なテクノロジーは忌避される傾向がある。ポーノのほとんどが、スマートフォンの使用はもちろん、音楽を聞くことも禁止している。ある、サーイ・マイの大学教員によって、私に興味深い疑問が投げかけられた。「イスラームはセキュラーではありえないのに、ポーノの方こそセキュラリズムから影響を受けている、とは思いませんか」。²⁴⁸

サーイ・カオの側からすると、セキュラー教育を取り入れることがセキュラリズムだと捉えられる。サーイ・マイ側からすると、イスラームはセキュラーではありえず、新たなテクノロジーや学問を拒絶すること自体がセキュラリズムだとみなされる。セキュラーではありえないから、宗教以外のものを排除しなければならないという考えと、セキュラーではありえないから宗教以外のものを取り込まなくてはならないという考え、教育における宗教の在り方の合理化の仕方の違いが対立として現れている。

サマッキー町のある村のタディカ教員は、こうした点について一見、宗教に対する見方をめぐる対立に見えることが、政治的立場に深く関わるものであることを明らかにしている。この村はかつて、レッドゾーンとしてタイ軍の掃討作戦が行われ、村の全ての男性がジャングルへ逃げ隠れたという経験のある村である。

「イスラームは、ムスリムにとっての生活の全てです。この世界で生きていくための教育と、イスラーム教徒としての教育は分けることはできません。時代や場所に応じて、イスラーム教徒としての在り方は、変わるのは当然です。私は、幼少期から長らくサウジアラビアで過ごしたので、タイ語ができません。タイで暮らすのは、とても辛いです。アッラーのご加護があれば、エジプトかサウジアラビアで学びたいと考えています」。²⁴⁹

²⁴⁷ N氏インタビュー、47歳男性、シータクシン校創立者の親族（ルソオーク町、2015年7月22日）。

²⁴⁸ I氏インタビュー、43歳男性、大学教員（パッターニー県、ムアン・パッターニー、2015年2月18日）。

²⁴⁹ Y氏インタビュー、37歳男性、タディカ教員（サマッキー町、2015年10月9日）。

サーイ・カオの間では、サーイ・マイは安易で軽率であるという言い方がしばしば聞かれる。「サーイ・マイは良いところ取りをして、自分たちこそが本物のイスラームだと主張していますが、それは、天国への片道チケット（One way ticket to heaven）を手に入れようと楽をしているに過ぎないのです。イスラームを学ぶ道のりはそのように簡単なものではないのです」。²⁵⁰

ルソにおいて唯一の私立学校法第二項学校に分類されるムイカーン校の創始者の親族は、タイ政府の深南部の歴史への無理解に対して、苦言を呈した。私立学校法第二項学校では、政府からの援助を受けることができない代わりに、政府の統制を免れる。ムイカーン校では、バーボーと数名の教員によって宗教のみが教授されている。「バーボーとなるには、大学の修士や博士と違って、全てのことにする知識を持っていないのはなりません。自分の専門科目にだけ通じていたのではいけないのです。バーボーは、イスラームに関する全体的な知識が必要とされます。ポーノには、400年以上の歴史が存在するのです。イスラームの知識はテストで測ることのできるものではないですし、他の教育機関とは比べることはできません」。²⁵¹

また、サーイ・カオ側でよく聞かれる言説が、お金をもらってワッハーブ派になった、ワッハーブ派になったからお金をもらえた、というものである。シーア派の人々の事をイスラーム教徒ではないと一蹴するのは異なり、決してイスラーム教徒ではないという方法で批判をすることは無い。実際、深南部においてもサウジアラビアからの援助が行われているが、圧倒的にサーイ・マイに属する側が資金を受け取っている。サーイ・マイの特徴としては、一定レベル以上の所得を持っている人々で、農村部の貧しい人々でないことは確かである。貧しく、日々働かざるを得ない人々は、イスラームに関する知識のみならず、YouTube などへのアクセス量も必然的に減る。ワッハーブ派は、ある意味新しい、お洒落な存在として流行っている、という面も否めない。

サーイ・マイのアイドル的な存在が、イスマイル・ルトゥフィ博士とザキール・ナイック博士である。後者はインドのムンバイに拠点を置く、サラフィーの権威であり、その講演録はタイ語にも翻訳され YouTube で全て見られるようになっている。中間層のなかのサーイ・マイの影響は、YouTube から知識を得ているものと重なっている。

ラロ町のタディカ校長は、ルソ市内でビジネスをして財をなした。「クルアーンには全て書かれています。イスラームは全ての人を受け入れます。多くの非ムスリムの科学者が改宗していることからわかるでしょう？ 貴方もザキール・ナイックの講演を見なさい。私もよく YouTube で見えています」。²⁵²

サーイ・マイに共通するのが、①スーフィー、並びにシーア派をイスラームではない

²⁵⁰ アブドゥル・ハジヤマ氏インタビュー、ナフドゥルスバーン校校長（ルソオーク町、2015年8月11日）。

²⁵¹ H氏インタビュー、57歳男性、ムイカーン校創設者の親族（サマッキー町、2015年7月31日）。

²⁵² I氏インタビュー、55歳男性、タディカ教員（ラロ町、2016年2月13日）

とみなす、②イスラームは、万人を受け入れる、普遍的な真理であり、寛容と平和の宗教なのだという信念をもつ。③クルアーンに全てのことが記されているとする。実際の歴史において生じたことやこれから生じることは全てクルアーンに記されており、現実に西洋の科学者もその事実を受け入れて数多く改宗しているのだ、という言説を多用する点である。

ルソにおける私立イスラーム学校であるシータクシン校（Rongrien Sithaksin）の創立者の娘であるパットリヤ・アフマッド氏は、イスラームと教育をめぐる問題について、このように述べた。「シータクシン校は、サウジアラビアから帰国した私の父が、タイの領土にあるのだからタイ語を教育しなければならない、として初めからタイ語を教育する学校として始まりました。この学校では、ムスリムとしてというよりかはむしろ、この世の中で生きて行くための知恵やマナーを子供たちに身に付けさせることを目指しています」。「シータクシン校では、子供たち一人ひとりがタイ語できちんと読み書きできるようにすることを目標にしています。そのことが、アッラーに対して良い行いをしていることである、と考えています」。²⁵³

ポーノやタディカの文脈における理解では、ポーノがセキユラー教育を取り入れたとき、もはやポーノではなくなる。ポーノは、深南部において教育機関以上の存在であり、人々にとっては特別な存在であり続けている。サーイ・マイは、高等教育を受ける機会があった（都市）中間層や、高校レベル以上のイスラーム教育機関を中心として影響力を拡大している。サーイ・カオとされるポーノやタディカは一方で、深南部において都市部のみならず農村部を基盤としている。深南部の圧倒的多数を占めるのは農村地帯であり、分析上はサーイ・カオが多くを占めているのが現状である。結果として、高等教育機関とサーイ・マイが重なりあい、伝統教育機関とサーイ・カオが重なりあっている。

イスラーム教育が学校教育制度内で行われるようになった近代以降、イスラームを学ぶ、教えるということは大きく変化をしている。教科書やカリキュラムの作成、テストの実施といった要素は、イスラームにまつわる知識の規格化を必要としている。国家の枠組みの内部で制度化することに伴う必然的な結果である。同時に、学校教育制度の中でイスラーム教育が普及するに伴って、ポーノなどの伝統教育機関との差異が際立つこととなる。

ただ、イスラームの知識を持つ知識階級は、サーイ・マイかサーイ・カオか、貧しいか豊かかに関わらず、イスラームを掲げて相手の批判をすることは決してない。ムスリムコミュニティ内部の対立は、知識の格差による部分も大きいといえよう。本研究で設定したサーイ・マイの分析指標から見た場合、サーイ・カオと呼ばれる人々の間でマレー・ナショナリズム的な要素が優勢であるとは限らない。

村の暮らしは、都市の暮らしとは大きく異なっている。村落レベルの教育は、高等教育機関の教育と大きく異なる。人々の情報は、人づてによるものである。高等教育を受

²⁵³ N氏インタビュー、42歳女性、シータクシン校教員（ルソオーク町、2015年9月21日）。

けたものがコミュニティで教える、イスラームに関する知識は主に、個々の指導的立場にある個人による部分が大きいのである。深南部における知識の伝達は、村落レベルでは人を通じて行われている。一方で、高等教育を受けた中間層以上の人々の情報のソースは多様化しており、人だけでなく、YouTube 等からデータを得ている。サーイ・マイはタイ語による知識の伝達が行われており、サーイ・カオ側ではマレー語による知識の伝達が中心となっている。

サーイ・マイ側の知識人の間では、ASEAN 等より広域アジアにおけるイスラームの連帯という動きが観察される。サーイ・マイの代表ともいえるイスマイル・ルフティ博士は、しばしば非ムスリム社会におけるムスリムの共存という観点から、シンポジウム、学会等でイスラームは平和な宗教であるということを精力的に伝えている。東南アジアのムスリムは伝統に依拠しているため、イスラームのことを理解していないと、「イスラーム知識の危機的状況」を訴える一群の東南アジアの学者たちが存在している。例えば、ジハードの解釈にみられるように、現在のイスラーム世界の混迷は、中途半端な (Half-knowledge) イスラームの知識を持った人々によってもたらされている、とする。

「何にも知らないよりか、中途半端な知識がある方が危ないのです。伝統に対する知識のみならず、我々が住んでいる国や地域の文脈に対する知識が不可欠となります。そこで必要とされるのは、教育の私立化であると考えています。全ての基本は教育です。イスラームはムスリムだけのものではなく、非ムスリムとも共有しなくてはなりません」。²⁵⁴

こうした有識者の認識は、マイノリティ集団としてのムスリムが非イスラーム国に生きるにあたっての、エリート側からの応答でもある。こうした考え方は、東南アジアのマレー世界の中でも保守的とされる深南部においても支持されるようになってきている。

第五節 紛争の激化と教育

「私たちは、子供たちが良きムスリムとなるよう心を込めて教育しています。武器を持って戦え、などと教育したことはありません。紛争激化の後、公立学校はしょっちゅう休校になっていました。私たちの学校は、事件が起こったせいで教員が来ることができなくなっても、休むことはありませんでした」。²⁵⁵

ポーノは現在に至るまで、タイ政府から長きに亘って疑いの目で見られてきた。タイ人に理解できない言葉を教えている、タイ政府に歯向かうように子供を教育している、

²⁵⁴ Speech by Associate Professor Dr. Khairuddin Aljunied, Department of Malay Studies, National University of Singapore at International Conference on Muslim Societies, Knowledge and Peacebuilding in Southeast Asia, September 30, 2015.

²⁵⁵ Y 氏インタビュー、33 歳女性、サワンウィタヤカーン学校宗教教員 (ルソオーク町、2015 年 9 月 22 日)。

といった疑念から安全保障上の脅威とみなされてきたのである。ルソにおいても、パタニの歴史を子供たちに教えていたという教員が逮捕されたり、イマームやウスタズが殺害されたりする事件が起こった。しかし興味深いことに、実際に分離独立派組織に関わりがあったとされる人々は、ほぼ例外なく私立イスラーム学校の関係者であり、ポーノの関係者ではない。

2000年以降もポーノの数は増え続けている。私立イスラーム学校の増加に関わらず、ポーノで学習するものの数は決して減っている訳ではない。タディカに対する政府の支援と統制が始まっている現在、タディカで教える教員に対してもイスラームの学位（レベル10）が求められることになった。とくに農村部のタディカにおいて、20代から30代にかけての若い世代で、高等教育をある程度受けることができた若者たちが、次の世代の子供たちの教育を担うようになってきている。こうした若者のうち、ポーノで教育を受けた人々、宗教教育をメインに受けた人々の中には、イスラーム国としてのパタニ・ダルサラームの復興、あるいは、パタニの独立は可能だと考えている人も少なくはない。

ポーノの学生の間でよく聞かれる言説がある。「パタニには、全てがある（Patani Mi Thuksing Thukyng）。金も、鉱石も、石油も出る。パタニ人は、タイから独立しても十分にやっていくことができる。しかし、政府はこれらの資源を全て奪い取り、人々に還元することはない。彼らは植民地主義者だ」。²⁵⁶

彼らは、サーイ・マイの影響を受けている若者と同様に、Facebook や YouTube から情報を得ているが、主にマレー語のソースから得ているという違いがある。マレー語のソースには、パタニ・メルデカ（パタニ独立）やサトゥ・パタニ（一つのパタニ）といった言説であふれている。

ルソ郡にも駐在していた経験がある元軍人によると、「軍や警察の中では、安全保障（Khwammankhong）、テロリスト（Phukokanray）、支持者（Naew Ruam）を分けて考えている。クワマンコンは主にポーノのバーボーをターゲットにした政治思想に関わる問題で、プーコーカンラーイは爆弾を仕掛けたり銃撃をしたり実際の刑事事件に関わる問題を指している。政府が一番恐れているのは、ネオルアムと呼ばれる人々で、分離独立主義に賛同している一般の人々のことを指している。とりわけルソは、BRN が設立された場所でもあり、ルソの教育機関について軍はかなり警戒している」。²⁵⁷

ネオルアムとは、「支持者」の意味で、分離独立派組織や反政府運動に対して積極的にはではないものの、支持をしている人々のことを指す用語である。政府が最も恐れるのは、これらの見えない支持者たちである。「朝になって村の中の高い木の間には、軍事政権とは話し合いをするな、といったような反政府のバナーが掲げられていることもあります。そういうことができるのは、村の中の人物しかいないとわかっています。でも誰

²⁵⁶ I氏インタビュー、27歳男性、ポーノ学生（バトン町、2015年9月5日）。

²⁵⁷ S氏インタビュー、32歳男性、元タイ王国兵士（ルソオーク町、2015年9月3日）。

がやったかはわからないし、たとえ知っていたとしても言わない。こういう行動を支持しているかと問われると、皆言わないだけでマレームスリム (Khon Nayu) はほとんど全員が、大なり小なり支持していると思います」。²⁵⁸

農村部において、BRN の軍事部門である RKK が仏教徒や政府側とみなすイスラーム教徒の殺害を行っていた時期 (2007 年から 2011 年頃)、ポーノやタディカの教員がこのような暴力行為に反対したが故に、組織のメンバーによって殺害される事件が生じていた。BRN の戦略の変化 (反対するイスラーム教徒のターゲット化) は、世代の変化にも裏打ちされていた。RKK の小隊は主に教育改革以降に教育を受けてきた、10 代から 20 代の若者によって構成されている。こうした村の若者たちの行為に良い顔をしなかった宗教教員が、殺害されるというケースが生じたのである。2016 年現在は、事件件数が減少している。BRN は市民をターゲットにするという戦略によって民間からの支持を失うことを懸念し、戦略の変更と組織改革が行っている最中であるとされている。

259

2004 年の紛争激化後、公立学校の学生は減り続けた。公立学校が武装組織の標的とされたこと、休校しがちになったこと、学校教育の質が落ち込んだことが挙げられる。教育改革以降、教員の負担は大きくなり、会議やセミナーで校長が学校にいない、教員も書類作成に追われ子供への教育に時間が割けないという事態も増えた。しかし、公立学校は食事、制服、教科書全てが無料で提供されるため、貧困家庭の子供たちの受け皿となっている。

公立学校の教育について、しばしば聞かれるのがこのような問題である。「公立学校は企業とは異なり、質を気にしなくても良いといえます。働いても働かなくても一度教員や職員になれば、政府から賃金を受け取ることは可能です。改革以前は、地域ごとに視察をする公務員がいました。今はいなくなり、教師は何をしても、誰も咎めることがありません。彼らは子供たちの時間を盗んで (Khamoy Wela) います。Facebook や LINE で遊ぶ教員や勉強しない子供が沢山います。学校行政が問題だと感じています。公立学校の子供には、家庭に問題を抱える者も多いのです」。²⁶⁰

公立学校は全て国立であり、教育省及び教育省の下部組織である県教育委員会の管理監督下にある。1999 年の国家教育法制定以後、教育行政制度も変わった。かつては、県毎の教育委員会が、全ての学校を小学校、中学校、高校のレベルに分けて監督していた。各学校は各郡に所属する形となっており、行政処理も郡毎に行われた。現在は、ナラティワート県が 3 つの教育エリアに分けられ、5~6 郡が一つのエリアとして管理されるようになっている。小中高といったレベルも分けられることなく、エリアごとの一

²⁵⁸ N 氏インタビュー、34 歳女性、元私立イスラーム学校教員 (ラロ町、2015 年 9 月 3 日)。

²⁵⁹ L 氏インタビュー、35 歳男性、活動家 (パッターニー県マイケーン町、2016 年 2 月 12 日)。

²⁶⁰ U 氏、42 歳女性、シータクシン校教員 (ルソオーク町、2015 年 9 月 21 日)。

括管理となっている。

インタビューを行った公立学校教員の全てが、教育改革の結果、教育の質が落ちていると感じており、例外なく昔のカリキュラムの方がよかった、昔のシステムの方が良かったと言っていた。現在は、ペートクルムウィチャー（8つのグループ科目）が全国統一カリキュラムとして設定されており、その設定の仕方も曖昧である。農村部に行けば行くほど、子供たちにとってタイ語の普及が遅れているのは事実である。「残念ながら、ここの子供たちにとって、タイ語はまだ外国語みたいなものなのです。家でタイ語を話すこともありません。紛争後、タイ人の教員は逃げていきました。教員のほとんども地元の者で、パタニ・マレー語が理解できます。子供のタイ語のレベルは、タイ人の教員から学んでいた私たちの世代と比べて落ちています」。²⁶¹

1999年の教育改革以降、公立学校の教員にも大学卒業レベル以上であることが求められるようになった。そして現在の20代後半以降の教員が教育を受けていた時代はタイ人教員がほとんどを占めていたということもあり、タイ語の運用にもとくに問題はない。汚職問題は教育でも例外ではなく、タクシン政権時代のタブレットの配布や様々なプロジェクトの運用は、実際には汚職の温床となっていたとされる。また、深南部には、教育省ではなく軍の機関である南部国境県行政センター（SBPAC）が監督する学校も存在する。リエン町のカヤーイオーカート学校では、2014年からSBPACが教育省との間に立って礼拝施設の建設などの支援を行っているという。

圧倒的にマレームスリムが多数を占める環境において、公立学校においても宗教教育に関する関心は高い。公立学校においては、普通教育学校ではその他の地域と同様に一週間あたり2時間の教育が行われているが、ベープケム校では私立イスラーム学校と同様の教育が実施されている。公立学校教員の多くが、政策決定レベルで議論されている教育に関する内容について知らないか、関心がない。公立学校教員の中には、統合カリキュラムについて知っている者もいた。統合カリキュラムについての議論が長らくされてきたという事実は知っているものの、農村部の教員はこうした議論を現実的ではないとする。実際に教員に課せられた業務の多さから、教員が普通科目教育と宗教教育の双方の知識を得た上で教授しなくてはならない統合カリキュラムを用いることはかなり困難である。統合カリキュラムのみならず、一般的に政策決定レベル及び研究者間の議論は、現場では適用することができないという認識が共有されている。現場の教員の全員が、大学教員や政府関係者は考えるだけ（Khe Khit）で現場のことを分かっていると評価している。

タディカの制度も紛争後大きな変化を遂げている。深南部地域のタディカは2003年以降、教育省の管轄下に入り、各郡のソーチャー（Sor Chor, Samnakgan Khanakammakan Songsoerm Kansueksa Ekachon, 私立教育委員会）の管轄下に入った。ルソ郡内のタディ

²⁶¹ S氏インタビュー、32歳男性、カヤーイオーカート校教員（リエン町、2016年2月24日）。

カは、ソーチョーの管轄下に入る前までは、ナフドゥルスバーン校が作成した教科書とカリキュラムを用いた教育を行っていた。現在はソーチョーの教科書、最寄りの私立イスラーム学校によって作成された教科書を用いている。政府によって認可されていない教科書は使うことはできないものの、タディカにおける教育は一定の部分で管理統制を免れており、統一カリキュラムが実施されているというよりかは、タディカ毎に特色のある教育を行う余地がある。実際、ルソ市街地のタディカでは6科目しか教えられていないが、サマッキー町のある村では14科目が教授されており、さらにパッターニーで印刷された未認可教科書を用いている。カリキュラム以外の変化は、ルソ郡単位で行われていたタディカ間のスポーツ大会が、ソーチョーの管轄下では町（タンボン）単位で行われるようになってきていることである。

タディカの教員は、一般的に高等学校（マタヨム6）、イスラーム教育レベル10（サナウイ）を修了してタディカに赴任している。稀に、大学卒業者が教えている。2004年の紛争激化以降、タディカ教員の中には、マレーシアに逃げていった者もいる。タディカ教育は安全保障上の脅威とみなされたため、逮捕拘留あるいは軍によって殺害された者もいる。現在、タディカ教員は世代交代しており、主に20代から30代の若手の教員がほとんどを占める。

興味深い現象としては、村落部のタディカにおいてもサーイ・マイの影響がみられたことである。ここで、影響があるとするのは、本研究で設定したサーイ・マイの指標に当てはまる考えを持つことを指している。ルソでは、タディカ教員の中にサーイ・マイの影響がみられる場合と、タディカの校長がサーイ・マイの影響を受けている場合が存在した。一般的に、村落レベルでサーイ・マイの影響はかなり限定される、もしくは無いとみなされてきた。ポーノやタディカにはとくに、サーイ・マイからの影響力はないとされる。確かに、少ないことは確かである。しかし、村落レベルの宗教教育機関において、教員本人が認めるか否かはともかく、サーイ・マイに近い考えを持つ人々が存在することは明らかである。

終論

「私たちはタイの国民（Phonlamuean）です。でも、マレー人（Khon Nayu）です。独立したとして、彼ら（筆者注：分離独立派）はこの地域の人々をどうやって面倒みるのでしょうか。誰が支配するにしても、正義が無いところには、平和も訪れないでしょう？」。

262

タイにおいて近代教育が整備され始めてから、100年以上が経った。かつてのパタニ王国の故地であり「メッカのベランダ」と呼ばれた深南部地域では、パタニ・マレー語を用いた伝統的なイスラーム教育の歴史がある。1909年の英国シヤム条約により、深南部がタイの領土に編入されると、タイは多くのムスリム人口を抱えることとなった。周辺諸国が植民地化される中で、タイにとって近代国家の建設が喫緊の課題となった。タイ語による近代教育の普及は、既存の仏教寺院ネットワークを利用する形で、仏教寺院を拠点として導入された経緯が存在する。1921年に制定された義務教育法に対するマレームスリムの反発を受けて、パタニ・マレー語の教育の容認や、タイ語学習の強制緩和なども行われたが、公立学校における初等教育が普及したのは1950年代以降のことであった。

タイのイスラーム教育政策は、長らくマレームスリムの歴史、文化やイスラームという宗教に対する無理解とともに、タイの安全保障観を強く反映したものとして展開してきた。タイ政府による深南部の教育に対する管理・統制が、マレームスリムの反発の大きな原因の一つであったことは明らかである。1960年代以降の軍事政権下では、ポーノを代表とする伝統的教育機関に対して、イスラーム教育のみならずタイ語による普通科目教育を実施する私立イスラーム学校としての登録が推し進められた。これ以降、タイ政府に反対する人々によって数々の分離独立派組織が結成された一方で、政府の政策に応じ、私立イスラーム学校を志向する指導者によって様々な試みがなされ始めたのもこの時期であった。ポーノの伝統教育を午前中のみ限定し、午後はタイ語による一般科目の講義を行う学校、ポーノを維持しながらコーソーノー（学校外教育制度）のカリキュラムを用いた集中講義を行う学校などがみられた。次第に、タイの教育制度内で教育を受けたマレームスリムのタイへの社会統合が進展していった。

タイでは、2003年のイスラーム教育カリキュラムの導入によって、公立学校におけるイスラーム教育が公式的にかつ全国的に認められるようになった。イスラーム教育カリキュラムの導入は、1990年代以降の教育改革と、その結晶である1999年国家教育法の流れの延長線上において理解する必要がある。政府によって1970年代から漸進的に

²⁶² Y氏インタビュー、33歳女性、サワンウィタヤカーン学校宗教教員（ルソオーク町、2015年9月22日）。

実施されてきた公立学校におけるイスラーム教育は、深南部マレームスリムの統合を進めるための、同化・統合政策の一環であったことは明らかである。政府によるイスラーム教育のカリキュラムの策定は、一方で、タイがイスラーム教育並びにマレームスリムを脅威だとはみなしておらず、公式的に認知がなされたことを示している。他方では、タイと深南部のこれまでの歴史が示すように、政府によるイスラーム教育に対する管理統制を同時に意味した。

とくに 2001 年の同時多発テロ以降、イスラーム教育が再び脚光を浴びることとなった。そして、深南部の 2004 年以降の反政府武装組織とタイ政府との間での抗争の激化に際して、ポーノや私立イスラーム学校における宗教指導者・学生と暴力との繋がりが疑われると、政府によるポーノの登録がさらに強化されるなど、管理統制の側面が顕著になっている。

一方で、これまでのタイ政府と深南部との相互作用の中で、深南部のイスラーム教育自体が大きく変化を遂げている。タイが国家としてイスラーム教育を阻害するのではない限りにおいて、イスラーム的には闘う理由は存在しない。タイ政府が長らくイスラーム教育自体を標的とするかのような政策を行ってきたことが、深南部の人々の不信感を醸成してきた原因であった。タイにおけるムスリム人口のほとんどが、南部国境県に居住していたため、必然的にイスラーム教育は深南部を念頭に置いた政策となってきた。イスラーム教育が公式的に認められるようになった現在、イスラーム教育を敵視するかのような政策はもはや取られてはいない。教育政策の観点からイスラーム教育を考察した場合、タイ政府は深南部マレームスリム人口の包摂を試みてきたことは事実である。反対に、深南部のイスラーム教育機関、マレームスリム側も独自にイニシアティブを取り、政府と協力する形で学校制度やカリキュラムを変化させてきたといえよう。

この変化には、タイ政府による同化・統合政策のみならず、イスラーム内部の改革の動きが大きく影響している。1980 年代以降のイスラーム復興からの影響は、タイの国内でサーイ・マイあるいはワッハーブ派と呼ばれるグループの台頭をもたらした。主にサウジアラビアでイスラームを学び帰国した指導者によって高等教育機関の整備がされ始めたのが、1980 年代後半から 1990 年代にかけてであった。高等教育機関を中心とするサーイ・マイは、タイで高等教育を受ける機会を持つ若年層に大きな影響を与えている。彼らは、マレー系のムスリムであったとしても、多くがタイ語によって学校教育制度内でイスラームについての知識を学んでいる世代である。

ここで、タイという国家の属性をとりあえず脇に置いた上で、学校教育の制度内でイスラーム教育が行われる、ということにはいくつかの意味合いが存在する。まず、限られた時間、単位の範囲内で教育する必要性から、必然的に知識の規格化が進む点である。例えば、伝統的な教育機関であるポーノで 2~3 カ月かけて学ばれる内容が、大学の講義では 1 コマ分に収められている事も多々あるのである。タイ語に対する否定的感情が見られることは少ない一方で、イスラームの知識は判を押したように似通ったものとな

る。

学校教育制度内におけるイスラーム教育と親和性が大きかったのが、サーイ・マイ、イスラーム改革派であった。とくに、現代のタイにおけるイスラーム改革派の動きを理解するためには、この動きを牽引してきたイスマイル・ルトウフィ・チャパルキヤ氏の個人的な影響力を考察する必要がある。氏はタイ南部イスラーム教育基金の諮問委員会会長、90年代には国会議員を務め、タイ王国のアミール・ハッジ（Amir Haj, メッカ巡礼の引率者）を務めた経験も持つ。2004年以降の紛争の激化に際して、暴力への反対を明白に示している数少ない指導者であり、政府や王室との繋がりも強い。氏の思想は、サラフィー主義あるいは、ワッハーブ主義の流れを汲んでいる。ウラマーに関して人間であるウラマーが誤謬を犯すことが無いとは限らないとして、クルアーンとスンナに従うことを基本とすべきであるとしている点や、ムハンマドの知識や行為をできる限り反映するためのイスラーム教育の近代化といった点は、イスラーム改革派に特徴的な点である。サーイ・マイは、深南部におけるマレーの伝統から距離を置く、もしくはマレー・ナショナリズムに対して否定的な傾向がある。

ポーノやタディカといった伝統的教育機関における教育は、マレー・ナショナリズムを強く反映しているとされる。とはいえ、ポーノやタディカにおいて、必ずしも反政府、分離独立主義的な思想が教育されている訳ではない。例えば、ポーノでは、プーミポン国王の提唱した「セタキット・ポーピエン（足るを知る経済）」ならぬ、足るを知る（Phophiang）という概念が重視されている。沢山の物や金銭は必要ではなく、イスラームについて学ぶということは、「足るを知る」ということを学ぶ場でもある。こうした意味において、政府のポーノに対する抑圧政策は、決して的を得たものであったとは言い難い。

ただ実際に、ポーノ並びにタディカ教員の多くが、パタニ・マレー語でなくてはイスラームについて伝えることはできないと感じている。ヤーウィが分からなければ、イスラームのことは理解できない、他の宗教と変わらなくなると考える教員もいる。しかし、こうした教員の中でも、将来的にはヤーウィは消滅してしまうだろうという感覚が共有されている。主に挙げられる原因としては、テクノロジーの進化と社会変化による子供の学習能力の低下、タイ語教育からの影響である。

興味深い現象としては、村落部のタディカにおいてもサーイ・マイの影響がみられるようになってきたことである。ここで、影響があるとするのは、本研究で設定したサーイ・マイの指標に当てはまる考えを持つことを指している。タディカ教員の世代交代、タディカに対する統制が開始された時期とも重なり合っている。ルソでは、タディカ教員の中にサーイ・マイの影響がみられる場合と、タディカの校長がサーイ・マイの影響を受けている場合が存在した。一般的に、村落レベルでサーイ・マイの影響はかなり限定される、もしくは無いとみなされてきた。ポーノやタディカにはとくに、サーイ・マイからの影響力はないとされる。確かに、少ないことは確かである。しかし、村落レベ

ルの宗教教育機関において、教員当人が認めるか否かはともかく、サーイ・マイに近い考えを持つ人々が存在することは明らかである。

サーイ・マイはある意味で、現代的な合理性を兼ね備えた存在であるともいえよう。現時点においてサーイ・マイの影響力は、ルトゥフィ氏のカリスマ性に大きく依る部分が多く、後継者と目される人物はいない。サーイ・マイは影響力を農村部にも広げているとはいえ、圧倒的に都市・中間層的な現象であり、その影響力は高等教育機関に集中している。深南部マレームスリム社会において、これからも影響力を拡大し続けられるかどうかは定かではない。

マレームスリムの統合が確実に進んでいるものの、ポーノのみで学んだ者のタイにおける社会的地位は依然として変わらない。裕福な家庭に育ち、イスラーム指導者になる場合を除き、職業を筆頭に彼らの人生における選択肢は決して多くない。農業、漁業が主たる収入源である地域であるが故に、必ずしも科学的な知識やタイ語の能力が必要とはされないというのも一因である。タイの学校教育が普及しておらず、人々の社会経済的地位が比較的画一的であった時代と比較して、深南部におけるムスリムコミュニティは多様化しているといえよう。一方でタイ政府に対するジハードを主張する者がいれば、他方では完全にタイ・ムスリムとして生きる道を選んだムスリムもいる。タイ人とは異なっている、という感覚を共有しつつも、選ぶ生き方は多様化しているといえよう。ポーノは、依然として深南部のマレームスリムにとって重要な存在であることは確かである。ポーノの教育や宗教教育に介入することなく、支援を行うことによって、暴力という手段を選ぶ若者を減らすことができる可能性が十分にあるのである。

ナショナリズムに対して否定的なサーイ・マイであるが、サーイ・マイが必ずしも伝統を否定している訳ではない。クーボーなどの墓参りをイスラームではないとして否定したとしても、ヤーウィに関しては母語であるから、残していくように努力しなくてはならないと考えるサーイ・マイも多い。先行研究が想定するように、サーイ・マイが反伝統、反マレー民族主義という訳ではなく、実際はサーイ・マイ寄りの中立派かサーイ・カオ寄りの中立派が多数を占めている。サーイ・カオであったとしても、サーイ・マイを悪とするものはほとんどいない。農村部においては、サーイ・マイであるかサーイ・カオであるかは、日常生活において重要ではないためでもある。サーイ・マイであったとしても、サーイ・カオの人々に合わせて行動することができる。日常レベルにおいて、サーイ・マイやサーイ・カオは、個人の問題であり、時と場合に応じて変えられる類のものなのである。

分離独立主義者に代表される人々は、抑圧的な政府と蔓延する汚職、正義が確保されていない状況下で、タイ政府に対して武器を持って戦う道を選んだ。ルフティ氏に代表されるサーイ・マイは、マレームスリムの地位の向上という点において、タイ社会に溶け込む道を選んだ。タイでは、ワッハーブ派と呼ばれる人々は、タイ国家への参入を進めることによって、自らの権利を実現するという方向で動いてきたといえる。こうした

意味において、イスラーム改革派による、イスラーム教育制度の改革・発展は、マレームスリムのタイへの国家統合を進めてきた。ただ、統合が進んでいるという事実は決して、マレームスリムの中で、タイ人とは異なる、他者である、という感覚を減少させていることを意味しない点に留意する必要がある。

最後に、本研究では深南部における紛争を直接扱ってこなかった。深南部における紛争が泥沼化している背景には、イスラーム主義からの影響ではなく、治安部隊のオーバープレゼンス状態、並びにムスリムコミュニティ内部の対立がある。市民に武器を供与して治安部隊を組織するなど、政府側の治安部隊／一般人／分離独立派などの武装組織との境目は曖昧になっている。深南部では直接的にも間接的にも、学校教育と安全保障が密接に結びついてきた。この状況は、今でも続いており、むしろより見えやすくなっているといえる。深南部問題の解決を進めるためには、少なくとも深南部における治安部隊の解体と撤退が必要であることは明らかであろう。

タイにおける 1980 年代以降のイスラーム改革派の影響力の拡大は、マイノリティの社会統合を進める推進力となっており、グローバルなジハードイストの影響の拡大とは程遠いものであった。サーイ・マイ、サーイ・カオ内部の多様性を描くことを試みてきたものの、近年混迷するイスラーム世界の状況がマレームスリムに対してどのような影響を与えているか、また与えうるかという点は考察することができなかった。さらに、これから注意して見ていく必要があるのは、深南部では 2004 年以降人口構成が大きく変わっている点である。非ムスリム住民の域外への移住によって 100 パーセントムスリムの地域が増えており、たとえ仏教徒との関わりがあったとしても、そのほとんどが武器を携帯する軍人あるいは治安要員である。日常的に治安部隊のオーバープレゼンス状態にあること、紛争状態に置かれていることによって、人々の帰属意識の再生産プロセスも大きく影響を受けていると考えて間違いはない。グローバルなイスラーム主義やジハードイスト思想が、今後深南部マレームスリム社会にどのような影響を及ぼすのか、イスラーム教育はそこにおいてどのような役割を果たしうるのか、これらの点については今後の課題としたい。

参考文献

外国語文献

- Abuza, Zachary. "Tentacles of Terror: Al Qaeda's Southeast Asian Network." *Contemporary Southeast Asia* (2002): 427-465.
- . "Funding terrorism in Southeast Asia: the Financial Network of Al Qaeda and Jemaah Islamiya." *Contemporary Southeast Asia* (2003):169-199.
- . "The Islamist Insurgency in Thailand." *Current Trends in Islamist Ideology* 4 (2006): 89-98.
- . "Borderlands, Terrorism, and Insurgency in Southeast Asia." In *The Borderlands of Southeast Asia: Geopolitics, Terrorism, and Globalization*, ed. James Clad, Sean M. McDonald, and Bruce Vaughn, 89-106, Washington DC: National Defense University Press, 2011.
- . *The ongoing insurgency in Southern Thailand: Trends in Violence, Counterinsurgency Operations, and the Impact of National Politics*, Washington DC: National Defense University Press, 2011.
- Acharya, Amitav, and Arabinda Acharya. "The Myth of the Second Front: Localizing the 'War on Terror' in Southeast Asia." *Washington Quarterly* 30 (4) (2007):75-90.
- Al-Attas, Muhammad Naguib. *Preliminary Statement on a General Theory of the Islamization of the Malay-Indonesian Archipelago*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka, 1969.
- Albritton, Robert B. "Political diversity among Muslims in Thailand." *Asian Studies Review* 23 (2) (1999): 233-246.
- Albritton, Robert B. "Thailand in 2004: The "Crisis in the South"." *Asian Survey* 45 (1) (2005): 166-173.
- Albritton, Robert B, Pham-Ngam Gothamasan, Noree Jaisai, Manop Jitpoosa, Sunandpattira

- Nilchang, and Arin Sa-Idi. "Electoral Participation by Southern Thai Buddhists and Muslims." *South East Asia Research* 4(2) (1996):127-156.
- Ali, Jan. 2003. "Islamic Revivalism: The case of the Tablighi Jamaat." *Journal of Muslim Minority Affairs* 23 (1) (2003): 173-181.
- . "Tablīgh Jamā 'at: A Transnational Movement of Islamic Faith Regeneration." *European Journal of Economic and Political Studies* 3 (2010): 103-131.
- Anderson, Wannī Wibulswasdi. *Mapping Thai Muslims: Community Dynamics and Change on the Andaman Coast*. Chiang Mai: Silkworm Books, 2010.
- Andre, Virginie. "Southern Thailand: A Cosmic War?" In *Radicalisation Crossing Borders: New Directions in Islamist and Jihadist Political, Intellectual and Theological Thought and Practice Conference Proceeding*, 169-189, Monash University-School of Political & Social Inquiry-Global Terrorism Centre, 2008.
- Aphornsuvan, Thanet. 2003. "History and Politics of the Muslims in Thailand." *Thammasat University*. <http://seap.einaudi.cornell.edu/sites/seap/files/MuslimThailand.pdf>
- . *Rebellion in Southern Thailand: Contending Histories*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2007.
- . "Origins of Malay Muslim 'Separatism' in Southern Thailand." In *Thai South and Malay North: Ethnic Interactions on a Plural Peninsula* ed. Michael John Montesano and Patrick Jory, 91-123, Singapore: NUS Press, 2008.
- Apple, Michael W. *Ideology and curriculum*. New York: Routledge Falmer, 2004.
- Askew, Marc. *Conspiracy, Politics, and Disorderly Border: The Struggle to Comprehend Insurgency in Thailand's Deep South*, Washington: East-West Center, 2007.
- . "Landscapes of Fear, Horizons of Trust: Villagers Dealing with Danger in Thailand's Insurgent South." *Journal of Southeast Asian Studies* 40 (1) (2009): 59-86.
- . "Fighting with Ghosts: Querying Thailand's Southern fire?" *Contemporary Southeast*

- Asia: A Journal of International and Strategic Affairs* 32 (2) (2010):117-155.
- . “Insurgency and the Market for Violence in Southern Thailand.” *Asian Survey* 50 (6) (2010): 1107-1134.
- . “Insurgency Redux: Writings on Thailand's Ongoing Southern War.” *Journal of Southeast Asian Studies* 42 (1) (2011): 161-168.
- Askew, Marc, and Erik Cohen. “Pilgrimage and prostitution: Contrasting modes of border tourism in lower south Thailand.” *Tourism Recreation Research* 29 (2) (2004): 89-104.
- Askew, Marc, and Sascha Helbardt. “Becoming Patani Warriors: Individuals and the Insurgent Collective in Southern Thailand.” *Studies in Conflict & Terrorism* 35 (11) (2012): 779-809.
- Bajunid, Omar Farouk. “Islam, Nationalism, and the Thai State.” In *Dynamic diversity in southern Thailand*. Ed. Wattana Sugunnasil, 1-21. Chiang Mai: Silkworm Books, 2005.
- . “The Muslims in Thailand: A Review (< Special Issue> Islam in Southeast Asia).” *Southeast Asian Studies*, 37(2) (1999): 210-234.
- . “The Origins and Evolution of Malay-Muslim Ethnic Nationalism in Southern Thailand,” in *Islam and Society in Southeast Asia*. Ed. Taufik Abdullah and Sharon Siddique, Pasir Panjang: Institute of Southeast Asian Studies, 1988.
- Ball, Desmond, and Nicholas Farrelly. “Interpreting 10 Years of Violence in Thailand’s Deep South.” *Security Challenges* 8 (2) (2012): 1-18.
- Billig, Michael. *Banal Nationalism*. London: Sage, 1995.
- Bonura, Carlo. 2008. “Indeterminate Geographies of Political Violence in Southern Thailand.” *Alternatives: Global, Local, Political* 33 (4) (2008): 383-412.
- Brooks, Melanie C. “School Principals in Southern Thailand Exploring Trust with Community Leaders during Conflict.” *Educational Management Administration & Leadership* (2014): 1-21.

Brown, David. *The State and Ethnic Politics in Southeast Asia*, New York: Routledge Curzon, 1994.

Burr, Angela. "Religious Institutional Diversity—Social Structural and Conceptual Unity: Islam and Buddhism in a Southern Thai Coastal Fishing Village." *Journal of the Siam Society* 60 (2) (1972): 185-186.

Chalk, Peter. "Separatism and Southeast Asia: The Islamic Factor in Southern Thailand, Mindanao, and Aceh." *Studies in conflict and terrorism* 24 (4) (2001): 241-269.

———. *The Malay-Muslim Insurgency in Southern Thailand: Understanding the Conflict's Evolving Dynamic*. Vol. 198 Santa Monica: Rand Corporation, 2008.
http://www.rand.org/content/dam/rand/pubs/occasional_papers/2008/RAND_OP198.pdf
(Accessed December 10, 2015).

Chaloemtiarana, Thak. *Thailand: The politics of despotic paternalism*. Chiang Mai: Silkworm Books, 2007.

Chambers, Paul. *Civil-Military Relations in Thailand since the 2014 Coup*. Frankfurt: Peace Research Institute Frankfurt, 2015.

Chambers, Paul ed. *Knights of the Realm: Thailand's Military and Police, Then and Now*. Bangkok: White Lotus, 2013.

Chambers, Paul, and Napisa Waitoolkiat. "The Resilience of Monarchised Military in Thailand." *Journal of Contemporary Asia* 46 (3) (2016): 425-444.

Chatterjee, Partha. *The Nation and its Fragments: Colonial and Postcolonial Histories*. Princeton: Princeton University Press, 1993.

Chitmuat, Saowani. *Klum Chatphan: Chao Thai Muslim* [Ethnic Group: Thai Muslim People], Bangkok: Kongthun Sangaruchiraamphon, 1988.

Chongkittavorn, Kavi. "Thailand: International Terrorism and the Muslim South." *Southeast Asian Affairs* (2004): 267-275.

- Cushman, Jannifer. *Family and State: The Formation of a Sino-Thai Tin-mining Dynasty 1797-1932*. Singapore: Oxford University Press, 1991.
- Cohen, Jonathan. Thailand. Not Enough Graves: the War on Drugs HIV/AIDS and Violations of Human Rights. *Human Rights Watch*, Vol.16, No.8 (July, 2004), <https://www.hrw.org/report/2004/07/07/not-enough-graves/war-drugs-hiv/aids-and-violation-s-human-rights> (Accessed January 23).
- Coalition to Stop the Use of Child Soldiers, "Priority to Protect Preventing Children's Association with Village Defense Militias in Southern Thailand", http://www.child-soldiers.org/research_report_reader.php?id=291, (Accessed January 20, 2016).
- Connors, Michael K. "War on Error and the Southern Fire: How Terrorism Analysts Get it Wrong: Rohan Gunaratna, Arabinda Acharya, and Sabrina Chua. Conflict and Terrorism in Southern Thailand. Singapore: Marshall Cavendish, 2005. xii+ 211 pp." *Critical Asian Studies* 38 (1) (2006): 151-175.
- Croissant, Aurel. "Unrest in South Thailand: Contours, Causes, and Consequences since 2001." *Contemporary Southeast Asia*. (2005): 21-43.
- . "Muslim Insurgency, Political Violence, and Democracy in Thailand 1." *Terrorism and Political Violence* 19 (1) (2007): 1-18.
- Desker, Barry. "Islam in Southeast Asia: The Challenge of Radical Interpretations." *Cambridge Review of International Affairs* 16 (3) (2003): 415-428.
- Dorairajoo, Saroja D. "Peaceful Thai, Violent Malay (-Muslim): A Case Study of the "Problematic" Muslim citizens of Southern Thailand." *The Copenhagen Journal of Asian Studies* 27 (2) (2009): 61-83.
- . 2004. "Violence in the South of Thailand." *Inter-Asia Cultural Studies* 5 (3):465-471.
- Dulyakasem, Uthai. *Education and Ethnic Nationalism: A Study of the Muslim-Malays in Southern Siam*. PhD Dissertation, Stanford University, 1981.

- Forbes, Andrew DW. "Thailand's Muslim Minorities: Assimilation, Secession, or Coexistence?" *Asian Survey* (1982): 1056-1073.
- Funston, John. *Southern Thailand: The Dynamics of Conflict*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2008.
- . "Malaysia and Thailand's Southern Conflict: Reconciling Security and Ethnicity." *Contemporary Southeast Asia: A Journal of International and Strategic Affairs* 32 (2) (2010): 234-257.
- Gilquin, Michel, and Michael Smithies. *The Muslims of Thailand*. Chiang Mai: Silkworm Books, 2005.
- Glassman, Jim. 2005. "The "war on terrorism" comes to Southeast Asia." *Journal of Contemporary Asia* 35 (1):3-28.
- Golomb, Louis. *An Anthropology of Curing in Multiethnic Thailand*. Urbana: University of Illinois Press, 1985.
- Gowing, Peter G. "Moros and Khaek: the position of Muslim Minorities in the Philippines and Thailand." *Southeast Asian Affairs*. (1975): 27-40.
- Gross, Max L. *A Muslim Archipelago: Islam and Politics in Southeast Asia*: Washington DC: National Defense Intelligence College, 2007.
- Gunaratna, Rohan, and Muh Taufiqurrohman. 2014. "Insurgency and Terrorism in ASEAN Region: The Threat and Response." In *Globalization, Development and Security in Asia: Vol. 1*, edited by Benny Teh Cheng Guan, 235-256. Singapore: World Scientific, 2014.
- Haemindra, Nantawan. "The problem of the Thai-Muslims in the four southern provinces of Thailand (Part one)." *Journal of Southeast Asian Studies* 7 (2) (1976): 197-225.
- . "The Problem of the Thai-Muslims in the Four Southern Provinces of Thailand (Part two)." *Journal of Southeast Asian Studies* 8 (1) (1977): 85-105.

- Hamid, Ahmad Fauzi Abdul. "The impact of Sufism on Muslims in Pre-Colonial Malaysia: An Overview of Interpretations." *Islamic Studies* 41 (3) (2002): 467-493.
- Handley, Paul. "Princes, Politicians, Bureaucrats, Generals: The Evolution of the Privy Council under the Constitutional Monarchy", Paper for the 10th International Conference on Thai Studies, Thammasat University, Bangkok, January 9-11, 2008.
- Harish, SP. 2006. "Ethnic or Religious Cleavage? Investigating the Nature of the Conflict in Southern Thailand." *Contemporary Southeast Asia: A Journal of International and Strategic Affairs* 28 (1) (2006): 48-69.
- Helbardt, Sascha. *Deciphering Southern Thailand's Violence: Organization and Insurgent Practices of BRN-Coordinate*. Singapore: ISEAS-Yusof Ishak Institute, 2015.
- Horstmann, Alexander. "Ethnohistorical Perspectives on Buddhist-Muslim Relations and Coexistence in Southern Thailand: from Shared Cosmos to the Emergence of Hatred?" *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia*. 19(1) (2004): 76-99.
- . "The Inculturation of a Transnational Islamic Missionary Movement: Tablighi Jamaat al-Dawa and Muslim Society in Southern Thailand." *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia* 22 (1) (2007):107-130.
- . 2007. "The Tablighi Jama'at, Transnational Islam, and the Transformation of the Self between Southern Thailand and South Asia." *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East* 27 (1) (2007): 26-40.
- . "Living together: The transformation of multi-religious coexistence in southern Thailand." *Journal of Southeast Asian Studies* 42 (3) (2011): 487-510.
- International Crises Group, "Thailand, the Evolving Conflict in the South", <http://www.crisisgroup.org/~media/Files/asia/south-east-asia/thailand/241-thailand-the-evolving-conflict-in-the-south.pdf> (Accessed May 19, 2016).
- Islam, Syed Serajul. "The Islamic Independence Movements in Patani of Thailand and Mindanao of the Philippines." *Asian Survey* 38 (5) (1998): 441-456.

- . “Ethno-Religious Conflict and Political Violence in Southern Thailand: Climax in the Early Twenty First Century.” In *The Politics of Death. Political Violence in Southeast Asia*, ed. Aurel Croissant, Beate Martin, Sascha Kneip, 37-7, Munster, LIT Verlag, 2006.
- Japakiya, Ismail Lufty, “Status and Roles of Ulama in the Holy Qur’an and Sunna.” In *Holding Fast to the Ideology of Harmony among Thais*, ed. Maulid Klang Organizing Committee of Thailand. Bangkok: Islamic Committee of Thailand, 2006.
- Jerryson, Michael K. *Buddhist fury: Religion and violence in southern Thailand*. New York: Oxford University Press, 2011.
- Srisompob Jitpiromsri, “9 Months into the 9th Year: Amidst the enigmatic violence, the Pa(t)tani Peace Process still Keep on Moving,” <http://www.deepsouthwatch.org/node/3803> (Accessed June 3, 2016).
- Jitpiromrsi, Srisompob and Duncan McCargo. “A Ministry for the South: New Governance Proposals for Thailand's Southern Region.” *Contemporary Southeast Asia: A Journal of International and Strategic Affairs* 30 (3) (2008):403-428.
- . “The southern Thai conflict six years on: insurgency, not just crime.” *Contemporary Southeast Asia: A Journal of International and Strategic Affairs* 32 (2) (2010): 156-183.
- Jitpiromsri, Srisompob and Sobhonvasu Panyasak. “Unpacking Thailand's Southern Conflict: The Poverty of Structural Explanations.” *Critical asian studies* 38 (1) (2006): 95-117.
- Johns, Anthony H. “The role of Sufism in the spread of Islam to Malaya and Indonesia.” *Journal of the Pakistan Historical Society* 9 (3) (1961): 143.
- Joll, Christopher M. “Religion and conflict in Southern Thailand: Beyond rounding up the usual suspects.” *Contemporary Southeast Asia: A Journal of International and Strategic Affairs* 32 (2) (2010): 258-279.
- . *Muslim Merit-making in Thailand's Far-south*. Springer Science & Business Media, 2011.
- . “Making Sense of Thailand's “Merit-Making” Muslims: Adoption and Adaption of the

- Indic in the Creation of Islamicate Southern Thailand.” *Islam and Christian–Muslim Relations* 25 (3) (2014): 303-320.
- . “Thailand’s Sufi Networks: New Perspectives on Islamic Diversity and Muslim Marginality.” Conference Paper at Transforming Societies: Contestations and Convergences in Asia and the Pacific, At Chiang Mai University, 2014.
- Jory, Patrick. “Political Decentralisation and the Resurgence of National Identities in Thailand.” *The Australian Journal of Social Issues* 34 (4) (1999): 338-352.
- . “From Melayu Patani to Thai Muslim: The Spectre of ethnic identity in southern Thailand.” *South East Asia Research* 15 (2) (2007): 255-279.
- Kadir, Suzaina. “Mapping Muslim Politics in Southeast Asia After September 11.” *The Pacific Review* 17 (2) (2004): 199-222.
- Kaewdeang, Rung. *Patiwat Kaansuksaa Thai 2540* [Educational Revolution of Thailand 2540 (1997)].
- Kilcullen, David. *The Accidental Guerrilla: Fighting Small Wars in the Midst of a Big One*. New York: Oxford University Press, 2009.
- Kraus, Werner. “Islam in Thailand: Notes on the history of Muslim provinces, Thai Islamic Modernism and the Separatist Movement in the South.” *Journal Institute of Muslim Minority Affairs* 5 (2) (1984): 410-425.
- Kvale, Steinar. *InterViews. An Introduction to Qualitative Research Writing*. Thousand Oaks: Sage Publications, 1996.
- Liow, Joseph Chinyong. “Speaking Freely: The Truth about Pondok Schools in Thailand.” *Asia Times*, 3 Sep. 2004.
- . “The Security Situation in Southern Thailand: Toward an Understanding of Domestic and International Dimensions.” *Studies in Conflict and Terrorism* 27 (6) (2004): 531-548.
- . *Islam, education, and reform in Southern Thailand: tradition & transformation*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 2009.

- . “Local Networks and Transnational Islam in Thailand (with emphasis on the southernmost provinces).” *Transnational Islam in South and Southeast Asia: Movements, Networks, and Conflict Dynamics*, edited by RW Hefner, Seattle, 189-208, Washington DC: The National Bureau of Asian Research, 2009.
- . “Religious Education and Reformist Islam in Thailand's Southern Border Provinces: The Roles of Haji Sulong Abdul Kadir and Ismail Lutfi Japakiya.” *Journal of Islamic Studies* 21 (1) (2010): 29-58.
- Liow, Joseph Chingyong and Don Pathan. *Confronting Ghosts: Thailand's Shapeless Southern Insurgency*. Sydney: Lowy Institute for International Policy, 2010.
- Lobe, Thomas. *United States national security policy and aid to the Thailand police*. Denver: Graduate School of International Studies, University of Denver, 1977.
- Loos, Tamara Lynn. *Subject Siam: Family, law, and colonial modernity in Thailand*. Ithaca: Cornell University Press, 2006.
- Madmarn, Hasan. “Pondok and change in South Thailand.” In *Aspects of developments: Islamic education in Thailand and Malaysia*, ed. Raymond Scupin, 47-92, Selangor: Institut Bahasa, Kesusasteraan dan Kebudayaan Melayu, Universiti Kebangsaan Malaysia, 1989.
- . “Traditonal Muslim Institutions in Southern Thailand: A Critical Study of Islamic Education and Aravic Influence in the Pondok and Madrasah Systems of Patani.” PhD Dissertation, University of Utah, 1990.
- . “Secular Education, Values and Development in the Context of Islam in Thailand: An Outlook on Muslim Attitudes toward Thai Educational Policy.” In *Asian Interfaith Dialogue. Perspectives on Religion, Education and Social Cohesion*, ed. Alatas, Syed Farid, Lim Teck Ghee, Kazuhide Kuroda, 66-77, Singapore: Center for Research on Islamic and Malay Affairs and the World Bank. 2003.
- Mahakanjana, Chandra-nuj. *Decentralization, Local Government, and Socio-Political Conflict in Southern Thailand*, Washington DC: East-West Center, 2006.

- Maluleem, Imron. *Wikrok Kwam Khatyaek Rawang Rathaban Thai kap Muslim nai Prathet Thai [Analysis on the Conflict between Thai Government and Muslim in Thailand]*. Bangkok: Islamic Academy, 1995.
- Man, Wan Kadir Che. "The Malay-Muslims of Southern Thailand." *Journal Institute of Muslim Minority Affairs* 6 (1) (1985): 98-112.
- . *Muslim Separatism: the Moros in Southern Philippines and the Malays in Southern Thailand*. Singapore: Oxford University Press, 1990.
- . "The Thai Government and Islamic Institutions in the Four Southern Muslim Provinces of Thailand." *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia*. (1990): 255-282.
- . "Patani: from Sovereign Sultanate to Subnation (private)." *Journal Institute of Muslim Minority Affairs* 14 (1-2) (1993): 116-123.
- . "Democratization and National Integration: Malay Muslim Community in Southern Thailand." *Intellectual Discourse* 11 (1) (2003): 1-26.
- McCargo, Duncan. 2004. *Southern Thai Politics: A preliminary Overview*: POLIS.
- . *Rethinking Thailand's southern violence*. Singapore: NUS Press, 2007.
- . *Tearing apart the land: Islam and legitimacy in Southern Thailand*. Ithaca: Cornell University Press, 2008.
- . "The Politics of Buddhist identity in Thailand's deep south: The Demise of Civil Religion." *Journal of Southeast Asian Studies* 40 (1) (2009): 11-32.
- . "Thai Buddhism, Thai Buddhists and the Southern Conflict." *Journal of Southeast Asian Studies* 40 (1) (2009): 1-10.
- . "Autonomy for Southern Thailand: Thinking the Unthinkable?" *Pacific Affairs* 83 (2) (2010): 261-281.

- . “Co-optation and Resistance in Thailand’s Muslim South: The Changing Role of Islamic Council Elections.” *Government and Opposition* 45 (1) (2010): 93-113.
- . “Informal Citizens: Graduated Citizenship in Southern Thailand.” *Ethnic and racial studies* 34 (5) (2011): 833-849.
- . *Mapping national anxieties: Thailand’s Southern Conflict*. Copenhagen: NIAS Press, 2012.
- Medrano, Anthony David. ‘Education Creates Unrest’: State Schooling and Muslim Society in Thailand and the Philippines. Master Thesis, University of Hawaii, 2007.
- Melvin, Neil J. “Conflict in Southern Thailand, Islamism, Violence, and the State in the Patani Insurgency,” SIPRI Policy Paper No.20, Stockholm: International Peace Research Institute, 2007.
- Moawad, Darwish. “Southernmost Thailand Violence: Illiteracy, Poverty, Politics, Illicit Drugs Trafficking, Smuggling and Nationalist Separatists-not Religions and Cultures-the Issue.” Paper Presented at UNESCO Conference on “Religion in Peace and Conflict,” Melbourne, Australia, 12 April 2005.
- Mutalib, Hussin. “Islamic Revivalism in ASEAN States: Political Implications.” *Asian Survey* 30 (9) (1990):877-891.
- Narongraksakhet, Ibrahim. *Pracha Kaansuksaa Islam* [Philosophy of Islamic Education], 2015
- . “Educational Change for Building Peace in Southern Border Provinces of Thailand”, in *Understanding Conflict and Approaching Peace in Southern Thailand* ed. L.Schmidt and Imityaz Yusuf, 128-47, Bangkok: Konrad Adenauer Stiftung, 2007
- . *Trisadeemai Sataaban kaansuksaa Muslim Changwat Chaaideen Paak Taai* [New Theory on Islamic Education Institution in Southern Thailand], 2000.
- Noiwong, Ornanong. Political Integration Policies and Strategies of the Thai Government toward the Malay-Muslims of Southernmost Thailand (1973-2000). PhD Dissertation, Northern Illinois University, 2001.

Noor, A. 2007. "Pathans to the east! The development of the Tablighi Jama'at movement in Northern Malaysia and Southern Thailand." *Comparative Studies of South Asia, Africa and the Middle East* 27 (1) (2007): 7-25.

Office of the Basic Education Commission, *Raygan Phonkan Damnoe-ngan Khrongkaan Phatana Rup Baep Kanchatkansueksa nai Khet Phatana Phiset Chapo Kit Changwat Chaidaeen Pak Tai Pracham Pi Ngoppraman Po So 2558* [Performance Report: Education Development of the Special Development Area of Southern Border Provinces, Fiscal Year 2558 (2015)], Bangkok: Office of the Basic Education Commission, 2016.

Office of Private Education, Yala Province, *Chak Pono su Rongrian* [From Pono to School]

Office of Private Education, Ruso District, *Khomun Phuenthan Kharachakan/ Phanakngan Rachakan/ Khana Kammakan Prasan-ngan Sun Tadika/ Khana Kammakan Chomrom Khrueakai Tadika/ Rongrian Ekhachon nai Rabop/ nok Rabop/ Sataban Sasana Pono/ Sun Tadika Amphoe Ruso Changwat Narathiwat Pi Kansueksa 2558* [Basic Information on Government Official/ Government Employee/ Tadika Coordinate Committee/ Tadika Network Association Committee/ Private School within school system/ outside school system/ Pono Religious School/ Tadika in Ruso District, Narathiwat Province, Schoolyear 2558 (2015)], 2015

———. *Khomun Phuenthan Satabansueksa Pono Amphoe Ruso Changwat Narathiwat Pracham pi 2558* [Basic Information of Pono School, Ruso District, Narathiwat Province, 2558 (2015)], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Anuban Ruso, Tambon Ruso, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Anubaaan Ruso School, Ruso Town, Ruso District, Narathiwat Province], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Srithaksin, Tambon Rusook, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Srithaksin School, Rusook Town, Ruso District, Narathiwat Province], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Patriya Anuban, Tambon Rusook, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Patriya Anuban School, Rusook Town, Ruso

District, Narathiwat Province], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Sawanwityakhan,, Tambon Ruso, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Sawanwityakhan School, Ruso Town, Ruso District, Narathiwat Province], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Ruso Witya, Tambon Rusook, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Ruso Witya School, Rusook Town, Ruso District, Narathiwat Province], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Darulanwar, Tambon Sawo, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Darulanwar School, Sawo Town, Ruso District, Narathiwat Province], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Nahdatulshuban, Tambon Rusook, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Nahdatulshuban School, Rusook Town, Ruso District, Narathiwat Province], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Tontanyon, Tambon Ruso, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Tontanyon School, Ruso Town, Ruso District, Narathiwat Province], 2015

———. *Khomun Phuentan Rongrian Darululoum, Tambon Rian, Amphoe Ruso, Changwat Narathiwat* [Basic Information of Darululoum School,, Rian Town, Ruso District, Narathiwat Province], 2015

Othman, Azam, and Natyada Wanlabe. "Teachers' perspectives on leadership Practices and Motivation in Islamic Private Schools, Southern Thailand." *Asian Education and Development Studies* 1 (3) (2012): 237-250.

Patani Forum. *Kan Cenraca Santiphap Rawang Muslim Mayayu le Rat Thai* [Negotiating a Peaceful Coexistence between the Malays of Patani and the Thai State], Patani: Patani Forum, 2012.

Pathmanand, Ukrist. "Thaksin's Achilles' Heel: The Failure of Hawkish Approaches in the Thai South." *Critical Asian Studies* 38 (1) (2006): 73-93.

- Pitsuwan, Surin. *Islam and Malay Nationalism: A Case Study of Malay-Muslims of Southern Thailand*: Thai Khadi Research Institute Thammasat University, 1985.
- Pollachom, Taweeluck. "Comparing Pathways and Outcome for Patani Muslim Women of Different Education Systems since 1959." *Islam Realitas: Journal of Islamic & Social Studies* 1 (2) (2015):129-144.
- Poocharoen, Ora-Orn. "The Bureaucracy: Problem or Solution to Thailand's Far South Flames?" *Contemporary Southeast Asia: A Journal of International and Strategic Affairs* 32 (2) (2010): 184-207.
- Porath, Nathan. "Muslim Schools (Pondok) in the South of Thailand: Balancing Piety on a Tightrope of National Civility, Prejudice and Violence." *South East Asia Research* 22 (3) (2014): 303-319.
- Reid, Anthony, Barbara Watson Andaya, Geoff Wade, Azyumardi Azra, Numan Hayimasae, Christopher Joll, Francis R Bradley, Philip King, Dennis Walker, and Kobkua Suwannathat-Pian. *Ghosts of the Past in Southern Thailand: Essays on the History and Historiography of Patani*. Singapore: NUS Press, 2013.
- Richardson, Laurel, NK Denzin, and YS Lincoln. *The Sage Handbook of Qualitative Research*. Thousand Oaks: Sage Publication, 2000.
- Sachakul, Kanniga. "Education as a Means for National Integration: Historical and Comparative Study of Chinese and Muslim Assimilation in Thailand." PhD Dissertation, University of Michigan, 1984.
- Sarosi, Diana, and Janjira Sombutpoonsiri. *Back to Rule by the Gun, Armed Civilians and Firearm Proliferation in Southern Thailand*. Bangkok: Nonviolence International Southeast Asia, 2009.
- Satha-Anand, Chaiwat. "Buranakarn Thang Sangkhom Kab Khwam Mankhong Khong Rath[Social Integration and National Security]" in *Roirauw Nai Sangkhom Thai? Buranakarn Kab Khwam Mankhong Khong Chart[Cleavage in Thai Society?Integration and National Security]* , ed. Khusuma Sanitwong Na Ayudhya, Bangkok: Faculty of Political Science,

1988.

———. “Pattani in the 1980s: Academic literature and political stories.” *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia*, 7(1) (1992): 1-38.

———. “Kru-ze: A Theatre for Renegotiating Muslim Identity.” *Sojourn: Journal of Social Issues in Southeast Asia*, 8(1) (1993): 195-218.

———. “Hijab and Moments of Legitimation.” In *Asian Visions of Authority: Religion and the Modern States of East and Southeast Asia*, eds. Charles F. Keyes, Laurel Kendall and Helen Hardacre, 279-300, Honolulu: University of Hawaii Press, 1994.

———. “Praying in the Rain: the Politics of Engaged Muslims in Anti-War Protest in Thai Society.” *Global Change, Peace & Security* 16 (2) (2004): 151-167.

Sathian, Mala Rajo. “Economic Change in the Pattani Region 1880-1930: Tin and Cattle in the Era of Siam’s Administrative Reform,” PhD dissertation, National University of Singapore, 2004.

Scupin, Raymond. “Islam in Thailand before the Bangkok Period.” *Journal of the Siam Society* 68 (1) (1980): 55-71.

———. “Islamic Reformism in Thailand.” *Journal of the Siam Society* 68 (2) (1980): 1-10.

———. “The Politics of Islamic Reformism in Thailand.” *Asian Survey* 20 (12) (1980): 1223-1235.

———. “Interpreting Islamic movements in Thailand.” *Crossroads: An Interdisciplinary Journal of Southeast Asian Studies* 3 (2/3) (1980): 78-93.

———. “Thailand as a Plural Society: Ethnic Interaction in a Buddhist Kingdom”. *Crossroads* Vol. 2, No.2 (1986): 115-140.

———. “Language, Hierarchy and Hegemony: Thai Muslim Discourse Strategies.” *Language Sciences* 10 (2) (1988): 331-351.

- . “Muslim accommodation in Thai society.” *Journal of Islamic Studies* 9 (2) (1998): 229-258.
- . “Parallels between Buddhist and Islamic Movements in Thailand.” *Prajna Vihara* 2 (1) (2001): 105-138.
- Stifel, Laurence D. “The growth of the Rubber Economy of Southern Thailand.” *Journal of Southeast Asian Studies* 4 (1) (1973):107-132.
- Streicher, Ruth. “Fashioning the Gentlemanly State: The Curious Charm of the Military Uniform in Southern Thailand.” *International Feminist Journal of Politics* 14 (4) (2012): 470-488.
- Suhrke, Astri. “Irredentism Contained: the Thai-Muslim Case.” *Comparative Politics* 7 (2) (1975): 187-203.
- . “Loyalists and Separatists: The Muslims in Southern Thailand.” *Asian Survey* 17 (3) (1977): 237-250.
- Suwannathat-Pian, Kobukua. *Thailand's Durable Premier: Phibun through Three Decades, 1932-1957*. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Syukri, Ibrahim *Sejarah Kerajaan Melayu Patani* [History of Malay Kingdom of Patani], Chiang Mai: Silkworm Books, 1985.
- Tambiah, Stanley Jeyaraja. *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background*. Cambridge: Cambridge University Press, 1976.
- Tan, Andrew. “Armed Muslim separatist rebellion in Southeast Asia: Persistence, prospects, and implications.” *Studies in Conflict and Terrorism* 23 (4) (2000): 267-288.
- Tawil, Sobhi and Alexandra Harley eds., “Education and Identity Based Conflict: Assessing Policy for Social and Civic Reconstruction”, in *Education Conflict and Social Cohesion*, UNESCO International Bureau of Education, Geneva 2004, http://www.ibe.unesco.org/conflict/educ_ind_01.pdf (Accessed September 23, 2016).

- Thai Royal Army. *Udomkan Kampangphon Kongthapbok*. [Ideology of Royal Thai Army] 2009.
- Thomas, M Ladd. *Political Violence in the Muslim Provinces of Southern Thailand*. Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, 1975.
- UNICEF East Asia and Pacific Regional Office. *Thailand Case Study in Education, Conflict and Social Cohesion*, 2012.
http://learningforpeace.unicef.org/wp-content/uploads/2015/01/PBEA_Thailand-Case-Study.pdf (Accessed May 20, 2016)
- UNGEGN Working Group on Romanization Systems. 2013. "Report on the Current Status of United Nations Romanization Systems for Geographical Names"
- Vella, Walter Francis, and Dorothy B Vella. *Chaiyo! : King Vajiravudh and the development of Thai Nationalism*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1987.
- Von Feigenblatt, Otto Federico. "The Muslim Malay Community in Southern Thailand: A 'Small People' Facing Existential Uncertainty." *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 27 (2010): 53-63.
- Von Feigenblatt, Otto F, Vannapond Suttichujit, Md Shukri Shuib, Mohamad Faisol Keling, and Mohd Na'eim Ajis. "Weapons of Mass Assimilation: A Critical Analysis of the Use of Education in Thailand." *Journal of Asia Pacific Studies* 1 (2) (2010): 292-311.
- Warnk, Holger. "Alternative Education or Teaching Radicalism? New Literature on Islamic Education in Southeast Asia." *Journal of Current Southeast Asian Affairs* 28 (4) 2010: 111-132.
- Watson, Keith. *Educational Development in Thailand*. Singapore: Heinemann Asia, 1980.
- Wattana, Sugunnasil. "Islam, Radicalism, and Violence in Southern Thailand: Berjihad di Patani and the 28 April 2004 Attacks." *Critical Asian Studies* 38 (1) (2006):119-144.
- Wells, Kenneth E. *History of Protestant Work in Thailand 1828-1958*. Bangkok: Church of Christ in Thailand, 1958

- Williams, Timothy. "Beyond Development and Counter-Insurgency. Searching for a Political Solution to the Malay Secessionist Conflict in Southern Thailand." LSE Asia Research Centre (ARC)-Thailand Government Scholarship Final Report, <http://www.lse.ac.uk/asiaResearchCentre/files/ThaiGovScholarTimothyWilliams.pdf> (Accessed December 15, 2015).
- Winichakul, Thongchai. *Siam Mapped: A History of the Geo-body of a Nation*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1994
- Wolters, Oliver William. *History, Culture and Region in Southeast Asian Perspectives*. Ithaca: Cornell University Press, 1982.
- Wyatt, David K. *Thailand: A Short History* (New Heaven: Yale University Press, 1984).
- Yahprung, Muhammad Ilyas. "Reformist-modernist Ulama's Reconstruction of Islamic Interpretation on Social Change: A Study of Archan (Teacher) Direk Kulsirisawas (Ibrahim Kurashi) (1922-2005) and his Reformist-modernist's networks in Bangkok, Paper presented at the Asia Pacific Sociological Association (APSA) International Conference. 'Transforming Societies: Contestations and Convergence in Asia and the Pacific', Faculty of Social Sciences, Chiang Mai University, Thailand, February 15-16, 2014.
- Yusuf, Imtiyaz. "Islam and Democracy in Thailand: Reforming the Office of *Chularajmontri/Shaikh Al-Islām*." *Journal of Islamic Studies* 9 (2) (1998): 277-298.
- . "Religious Diversity in a Buddhist Majority Country: the Case of Islam in Thailand." *International Journal of Buddhist Thought and Culture* 3 (2003): 131-43.
- . "The Southern Thailand Conflict and the Muslim World." *Journal of Muslim Minority Affairs* 27 (2) (2007): 319-339.
- . "Ethno-religious and political dimensions of the southern Thailand conflict." *Islam and Politics: Renewal and Resistance in the Muslim World*, eds Amit Pandya, and Ellen Laipson, 43-55, Islamabad: Institute of Policy Studies, 2009
- Zawacki, Benjamin. "Politically Inconvenient, Legally Correct: a Non-International Armed Conflict in Southern Thailand." *Journal of Conflict and Security Law* 18 (1) (2013): 151-179.

邦語文献

赤木攻『タイの政治文化—剛と柔—』勁草書房、1989.

アサワラシヤン、ピヤワン「ピブーン政権期（1938~44年）における服装政策」、『アジア・アフリカ地域研究』第6-2号、2007.

アンダーソン、ベネディクト『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』NTT 出版、1997.

石井米雄「国家と宗教にかんする一考察: ラーマ 1 世における仏教の「擁護」」『東南アジア研究』7巻4号（1970）:442-461.

————「タイ国における国民統合と仏教サンガの役割」『東南アジア研究』11巻3号（1973）:338-359.

————『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』創文社、1975.

————『タイ国: ひとつの稲作社会』創文社、1975.

————「タイ国における「イスラームの擁護」についての覚え書」『東南アジア研究』15巻3号（1977）:347-361.

————『タイ仏教入門』めこん、1991.

————「《宗教の擁護者》としての国王: タイ王国における民族と宗教（1993 年度 春期東洋学講座講演要旨）」『東洋学報』74巻1号（1993）:117-119.

伊藤勇「質的インタビュー調査の再概念化」『福井大学教育地域科学部紀要』64巻（2009）:1-30.

今泉慎也「第8章 タイ司法裁判所におけるダト・ユティタム（イスラーム法裁判官）の役割」『アジア諸国の紛争処理制度』（2003）:225-256.

ウィニッチャクン、トンチャイ『地図がつくったタイ——国民国家誕生の歴史』石井米雄
(訳) 明石書店、2003.

大澤真幸『ナショナリズムの由来』講談社、2007.

尾中文哉『地域文化と学校: 三つのタイ農村における「進学」の比較社会学』北樹出版、
2002.

小野沢正喜「タイにおける文化的同化政策の展開と少数民族のエスニック・アイデンティ
ティ—南タイ・イスラム社会の教育体系の変容を中心として—」『多文化教育の比較
研究—教育における文化的同化と多様化—』(1985) : 231-257.

刈谷剛彦「タイにおける近代教育制度の発展と公開大学」『タイ社会の変貌と遠隔高等教育
の展開 アジア・太平洋地域における遠隔教育の実証的研究 調査報告(2)』、1991.

グリーン、アンディ『教育・グローバリゼーション・国民国家』大田直子(訳) 東京都
立大学出版会、2000.

黒田景子「ソンクラの発展とパタニの衰退—19世紀におけるマレー半島部港市の淘汰と
海路の再編—」『鹿児島大学文学部紀要人文科学論集』79号(2014) : 9-26.

柴山昌山・菊池城司・竹内洋『教育社会学』有斐閣ブックス、1992.

柴山信二郎「タイ深南部における教育機関の多様化とムスリム学生の価値観」早稲田大学
大学院人間科学研究科博士学位論文、2009.

清水耕介『寛容と暴力 国際関係における自由主義』ナカニシヤ出版、2013.

玉田芳史『民主化の虚像と実像—タイ現代政治変動のメカニズム』京都大学学術出版会、
2003.

玉田芳史・船津鶴代編『タイ政治・行政の変革1991—2006年』アジア経済研究所、2008.

多和田裕司「「イスラーム化」と社会変化: マレー村落の事例から」『民族学研究』58
巻2号(1993) : 121-141.

————「現代マレーシアにおける「イスラーム化」の展開: クランタン州における「イスラーム化」政策と政治対立」長崎大学教養部創立 30 周年記念論文集 (1995): 103-126.

チャルムティアロン、タック『タイ—独裁的温情主義の政治』玉田芳史 (訳)、勁草書房、1989.

内藤正典、中田考『イスラームとの講和 文明の共存をめざして』集英社新書、2016.

中田考『イスラーム法とは何か?』作品社、2016.

バーンステイン、バジル『〈教育〉の社会学理論: 象徴統制、〈教育〉の言説、アイデンティティ』久富善之、長谷川裕、山崎鎮親、小玉重夫、小沢浩明 (訳) 法政大学出版社、2011.

橋本卓 (1987) 「タイ南部国境県問題とマレー・ムスリム統合政策」『東南アジア研究』25 巻2号

————「南タイ国境県におけるムスリム社会の変容と政治: 経済発展とマス・メディアの影響 (1)」、『北九州大学法政論集』19巻2号、1991

————「南タイ国境県におけるムスリム社会の変容と政治: 経済発展とマス・メディアの影響 (2)」、『北九州大学法政論集』19巻3号、1992

————「南タイ国境県におけるムスリム社会の変容と政治: 経済発展とマス・メディアの影響 (3)」、『北九州大学法政論集』19巻4号、1992

長谷川啓之、上原秀樹『現代アジア事典』、2009.

バリバール、エティエンヌ、イマニュエル・ウォーラステイン『人種・国民・階級-揺らぐアイデンティティ』若森章孝他 (訳)、大村書店、1997.

平田利文「第三世界のカリキュラム改革—タイの場合」『比較教育学』1989巻15号 (1989): 47-61.

見市建「インドネシアにおける「イスラーム市民社会論」」『国際協力論集』8巻2号（2000）：
159 -179.

水谷康弘「タイ近代国家の蹉跌：人民党政権による警察改革の試みをめぐって」『東南アジア研究』43巻2号（2005）：191-209.

村田翼夫編著『東南アジア諸国の国民統合と教育—多民族社会における葛藤』東信堂、2000.

村田翼夫『タイにおける教育発展 国民統合・文化・教育協力』東信堂、2007.

矢野秀武「タイを流れる欧米宗教学の微風 サーサナー（宗教）とReligionをめぐるタイ宗
教学の模索」『東京大学・宗教学年報』XXX号（特別号）（2013）：51-70.

————「タイにおける宗教研究の光と影：文明化される「宗教」と不在化する「宗
教学」」『駒沢大学文化』32号（2014）：144-115.

————「「宗教学」の不在とサーサナー（宗教）：タイにおける宗教研究」『宗教研究』
別冊 87号（2014）：34-35.

鈴木康郎「南部タイの国公立小学校・中等学校におけるイスラム教育の試み」『比較教育
学研究』25巻（1999）：97-115.

————「タイの基礎教育改革におけるイスラームへの対応」『比較教育学研究』31巻
（2005）：118-137.

村嶋英治「タイにおける華僑・華人問題」『アジア太平洋討究』第四巻（2002）：33-47.

参照URL

Deep South Watch (<http://www.deepsouthwatch.org/>)

ファトニー大学 <http://www.ftu.ac.th/main/th>

カナルラック家

<http://www.kananurak.com/mcontents/marticle.php?headtitle=mcontents&id=74894>

教育省 <http://www.moe.go.th/moe/th/home/>

ソンクラーナカリン大学 http://www.pn.psu.ac.th/web2555/index_main.php

ナラティワートラーチャナカリン大学 <http://www.pnu.ac.th/>

ラージャパットヤラー大学 <http://www.yru.ac.th/web54/frontpage>

付表 1

学校名	フネージャー			普通科目教員		宗教科目教員		学生数	所在地	設立年	学校区分	規模	
	男性	女性	合計	男性	女性	男性	女性						合計
1 アヌバーン・ルソ	1	1	2	5	46	0	0	0	1709	ルソ町	2001年	私立学校	大
2 シータクソソ	1	2	3	1	13	0	0	0	328	ルソオーク町	1964年	私立学校	小
3 パトリヤーアヌバーン	0	2	2	1	7	0	0	0	243	ルソオーク町	1981年	私立学校	小
4 サクソ・ウイタカソソ	0	1	1	1	11	0	0	3	377	ルソ町	2008年	私立学校※	小
5 ルソ・ウイタカソソ	1	1	2	5	24	0	0	0	437	ルソオーク町	2001年	私立学校	小
6 ダル・アソソール	1	0	1	1	17	0	1	4	513	サークオーク町	2007年	私立学校※	中
7 ナソソールヌバーン	2	0	2	11	20	27	10	37	605	ルソオーク町	1963年	私立学校	中
8 トソソソソソ	5	0	5	6	21	19	12	31	523	ルソ町	1972年	私立学校	中

รายงานข้อมูล ๑๐ มิถุนายน ประจำปีงบประมาณ ๒๕๕๙
สำนักงานการศึกษาเอกชนอำเภอ.....ร้อยเอ็ด.....

ที่	ศูนย์การศึกษาอิสลาม	ประจำมัสยิด	ที่ตั้ง			ผู้สอน			นักเรียน			จำนวนเงิน		การบริหาร มัสยิด (2,000 ต่อศูนย์)	ค่าตอบแทน (3,000 ต่อคน)	รวมเงิน อุดหนุนต่อ เดือน
			หมู่	ตำบล	อำเภอ	ชาย	หญิง	รวม	ชาย	หญิง	รวม	เล็ก	ใหญ่			
1	อับนาซีฮีน	คะลีมัตดีนิงยะห์	2	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	1	5	6	39	34	73		/	2,000	18,000	20,000
2	ซอลาคดียะห์	ซอลาคดียะห์	3	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	6	6	59	49	108		/	2,000	18,000	20,000
3	นุรลอิสลาม	รียาคุดซอลิซัน	3	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	4	2	6	37	29	66		/	2,000	18,000	20,000
4	อิสลามบาบุลอิสลามียะห์	อิสลามบาบุลอิสลามียะห์	4	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	2	4	6	30	32	62		/	2,000	18,000	20,000
5	คารูลอฆาล	คารูลอฆาล	4	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	6	6	44	48	92		/	2,000	18,000	20,000
6	รอฮิมะห์	รอฮิมะห์	5	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	6	6	41	39	80		/	2,000	18,000	20,000
7	จะห์ยอฆุรณี	นุรลอินชาน	5	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	6	6	55	48	103		/	2,000	18,000	20,000
8	บ็อดย็อลลาหมัน	บ็อดย็อลลาหมัน	5	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	1	5	6	53	40	93		/	2,000	18,000	20,000
9	นุรลซุคา	นุรลซุคา	6	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	4	4	23	22	45	/	/	2,000	12,000	14,000
10	นุรลซุคา(ซาหฺอ)	นุรลซุคา	7	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	2	4	6	58	43	101		/	2,000	18,000	20,000
11	มุฮัมมาดียะห์	มุฮัมมาดียะห์	7	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	5	1	6	83	104	187		/	2,000	18,000	20,000
12	คารูลฟิรดาส	คารูลฟิรดาส	8	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	4	4	26	17	43	/	/	2,000	12,000	14,000
13	นุรลญูฮาด ปราลี	นุรลญูฮาด	10	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	2	4	6	47	34	81		/	2,000	18,000	20,000
14	เรากูอศุลยัมมะห์	เรากูอศุลยัมมะห์	10	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	6	6	47	39	86		/	2,000	18,000	20,000
15	กียามุดดีน	สื่อมะนะ	1	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	6	6	41	22	63		/	2,000	18,000	20,000
16	นุรลซายีน(สื่อมุห์)	นุรลซายีน	1	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	1	3	4	19	23	42	/	/	2,000	12,000	14,000
17	คารูลซาลิม	คารูลซาลิม	2	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	1	5	6	48	53	101		/	2,000	18,000	20,000
18	ศรับียาตุลลียาน	รารากูอศุลนาอิม	3	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	6	6	51	31	82		/	2,000	18,000	20,000
19	คารูลสลาม	คารูลสลาม	4	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	0	6	6	78	52	130		/	2,000	18,000	20,000
20	คารูลอฆาน	คารูลอฆาน	5	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	2	4	6	34	33	67		/	2,000	18,000	20,000
21	วาตกาบียะห์อิสลามียะห์	วาตกาบียะห์อิสลามียะห์	6	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	1	5	6	30	32	62		/	2,000	18,000	20,000
22	นุรลอิสละตาระ	นุรลอิสละตาระ	6	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	3	3	6	30	33	63		/	2,000	18,000	20,000
23	อัลเราะหฺมาน	บางโป้ไล่"รอมาล"	7	ร้อยเอ็ด	ร้อยเอ็ด	1	5	6	50	56	106		/	2,000	18,000	20,000

รายงานข้อมูล ๑๐ มิถุนายน ประจำปีงบประมาณ ๒๕๕๙

สำนักงานการศึกษาเอกชนอำเภอ.....ร้อยละ.....

ที่	ศูนย์การศึกษาอิสลาม	ประจำมัสยิด	ที่ตั้ง			ผู้สอน			นักเรียน			จำนวนเงิน		ค่าบริหาร มัสยิด (2,000ต่อศูนย์)	ค่าตอบแทน (3,000 ต่อคน)	รวมเงิน อุดหนุนต่อ เดือน
			หมู่	ตำบล	อำเภอ	ชาย	หญิง	รวม	ชาย	หญิง	รวม	เล็ก	ใหญ่			
24	อิสติกอมะห์	อิสติกอมะห์	8	เรียง	เรียง	1	5	6	53	29	82		/	2,000	18,000	20,000
(25)	บุรุษฟาละห์	บุรุษฟาละห์	8	เรียง	เรียง	2	4	6	22	42	64		/	2,000	18,000	20,000
25	ศรัทธาตุลอิสลาม	บ้านป้อมแดง	1	ลาโละ	เรียง	3	3	6	67	69	136		/	2,000	18,000	20,000
27	บุรุษอิซฮาน	บุรุษอิซฮาน	2	ลาโละ	เรียง	1	5	6	48	45	93		/	2,000	18,000	20,000
(28)	บุรุษคิน	บ้านอินท	3	ลาโละ	เรียง	2	4	6	64	37	101		/	2,000	18,000	20,000
29	บุรุษยากิน	บุรุษยากิน	4	ลาโละ	เรียง	2	4	6	91	77	168		/	2,000	18,000	20,000
30	ชอบบารียะห์	ชอบบารียะห์	4	ลาโละ	เรียง	3	3	6	62	72	134		/	2,000	18,000	20,000
31	ลาโละตูวอ	ลาโละตูวอ	5	ลาโละ	เรียง	2	4	6	72	66	138		/	2,000	18,000	20,000
32	อัคร์ปิยะห์อิสลามียะห์	ไอบูโละ	6	ลาโละ	เรียง	1	5	6	55	51	106		/	2,000	18,000	20,000
33	กาออปอ์	กาออปอ์	7	ลาโละ	เรียง	2	4	6	66	60	126		/	2,000	18,000	20,000
34	นัสร์ียะห์	นัสร์ียะห์	8	ลาโละ	เรียง	5	1	6	59	25	84		/	2,000	18,000	20,000
(35)	บุรุษอิสลามีย์	บุรุษอิสลาม	9	ลาโละ	เรียง	0	6	6	46	53	99		/	2,000	18,000	20,000
36	คารุณีสาน	คารุณีสาน	1	สามัคคี	เรียง	1	5	6	75	72	147		/	2,000	18,000	20,000
37	คารุณอมรอน	คารุณอมรอน	2	สามัคคี	เรียง	2	4	6	59	52	111		/	2,000	18,000	20,000
38	ฮาตาตุลตีนิยะห์	ฮาตาตุลตีนิยะห์	3	สามัคคี	เรียง	1	5	6	59	43	102		/	2,000	18,000	20,000
39	คารุณาควะห์	คารุณาควะห์	4	สามัคคี	เรียง	2	4	6	67	57	124		/	2,000	18,000	20,000
40	อัคร์เราะห์มานียะห์	ดีลอฆาน	5	สามัคคี	เรียง	1	5	6	71	84	155		/	2,000	18,000	20,000
(41)	ราฎอ์ตุลอิสลาม	โตะเนปา	6	สามัคคี	เรียง	2	4	6	44	41	85		/	2,000	18,000	20,000
42	อัลอิดูวาตุลอิสลามียะห์	อัลอิดูวาตุลอิสลามียะห์	7	สามัคคี	เรียง	3	3	6	36	34	70		/	2,000	18,000	20,000
43	คารุณะรุฟ	คารุณะรุฟ	8	สามัคคี	เรียง	3	3	6	32	33	65		/	2,000	18,000	20,000
44	คารุณนาอิม	คารุณนาอิม	9	สามัคคี	เรียง	1	5	6	38	33	71		/	2,000	18,000	20,000
45	ยุเมอียะห์	ยุเมอียะห์	1	เรียง	เรียง	2	4	6	102	97	199		/	2,000	18,000	20,000
46	อัลฆานา์	อัลฆานา์	1	เรียง	เรียง	0	6	6	67	52	119		/	2,000	18,000	20,000

รายงานข้อมูล ๑๐ มิถุนายน ประจำปีงบประมาณ ๒๕๕๙

สำนักงานการศึกษาเอกชนอำเภอ..... รือเสาะ.....

ที่	ศูนย์การศึกษาอิสลาม	ประจำมัสยิด	ที่ตั้ง			ผู้สอน			นักเรียน			จำนวนเงิน		ค่าบริหาร มัสยิด (2,000 ต่อศูนย์)	ค่าตอบแทน (3,000 ต่อคน)	รวมเงิน อุดหนุนต่อ เดือน
			หมู่	ตำบล	อำเภอ	ชาย	หญิง	รวม	ชาย	หญิง	รวม	เล็ก	ใหญ่			
47	อัลอิสติกอมาหะ	อัลอิสติกอมาหะ	2	รือเสาะออก	รือเสาะ	1	5	6	55	47	102		/	2,000	18,000	20,000
48	นุรุลยาเกีน	นุรุลยาเกีน	2	รือเสาะออก	รือเสาะ	0	4	4	28	25	53	/	/	2,000	12,000	14,000
(49)	อัลฮิคาเยหะ	อัลฮิคาเยหะ	2	รือเสาะออก	รือเสาะ	3	3	6	47	34	81	/	/	2,000	18,000	20,000
50	ศรีปายาตุลอะตฟาละ	กามะอะฮิละรี	3	รือเสาะออก	รือเสาะ	1	5	6	72	79	151	/	/	2,000	18,000	20,000
51	ตามันฮิคาเยหะ	กาไค๊ะ	4	รือเสาะออก	รือเสาะ	1	5	6	72	52	124	/	/	2,000	18,000	20,000
52	นุรุลยาเกีน	บ้านกามะอะฮุละ	5	รือเสาะออก	รือเสาะ	3	3	6	96	76	172	/	/	2,000	18,000	20,000
53	ศรีปายาตุลอะตฟาละ	ตือบิงตัง	1	บาคง	รือเสาะ	1	5	6	47	62	109	/	/	2,000	18,000	20,000
54	คารุสซาลาม	คารุสซาลาม	2	บาคง	รือเสาะ	1	5	6	39	40	79	/	/	2,000	18,000	20,000
55	ลือตือรือจายอ	บือตง	3	บาคง	รือเสาะ	0	6	6	60	51	111	/	/	2,000	18,000	20,000
56	อาฮูฮันฮารบีน	คารุสซาลาม	4	บาคง	รือเสาะ	2	4	6	61	67	128	/	/	2,000	18,000	20,000
57	ศุน์ฮารบีน	คารุสซาลาม	5	บาคง	รือเสาะ	2	4	6	65	41	106	/	/	2,000	18,000	20,000
58	อัลหะลาละียะหะ	อัลหะลาละียะหะ	8	บาคง	รือเสาะ	2	4	6	63	89	152	/	/	2,000	18,000	20,000
59	คารุสซาลาม	คารุสซาลาม	8	บาคง	รือเสาะ	4	2	6	43	26	69	/	/	2,000	18,000	20,000
60	คาอิมุญญะมาฮะ อิสลามียะหะ(คาซา)	นุรุลยะเราะห์มัต	1	ศุวารี	รือเสาะ	1	5	6	75	57	132	/	/	2,000	18,000	20,000
61	อ็รเราะห์มาเนียหะ	ตึบโลก(อ็รเราะห์มาเนียหะ)	2	ศุวารี	รือเสาะ	1	5	6	99	89	188	/	/	2,000	18,000	20,000
62	อ็ตศรีบียะฮิลาละียะหะ	ยามาอ็ต	3	ศุวารี	รือเสาะ	2	4	6	103	96	199	/	/	2,000	18,000	20,000
63	คารุสซาลาม	คารุสซาลาม	3	ศุวารี	รือเสาะ	0	6	6	41	36	77	/	/	2,000	18,000	20,000
64	คารุสซาลาม	คารุสซาลาม	3	ศุวารี	รือเสาะ	4	2	6	34	40	74	/	/	2,000	18,000	20,000
65	คารุสซาลาม	บือรือเล็ง	4	ศุวารี	รือเสาะ	2	4	6	55	54	109	/	/	2,000	18,000	20,000
66	นุรุลยะมาลา	นุรุลยะมาลา	7	ศุวารี	รือเสาะ	3	3	6	48	39	87	/	/	2,000	18,000	20,000
67	ราฎอตุลอะนนะหะ	นุรุลศักวา	8	ศุวารี	รือเสาะ	2	4	6	28	33	61	/	/	2,000	18,000	20,000
68	อัลฮาบูกะหะฟะ	อัลฮาบูกะหะฟะ	1	โคกสะตอ	รือเสาะ	2	4	6	59	62	121	/	/	2,000	18,000	20,000
69	คารุสซาลาม	คารุสซาลาม	2	โคกสะตอ	รือเสาะ	0	6	6	62	58	120	/	/	2,000	18,000	20,000

รายงานข้อมูล ๑๐ มิถุนายน ประจำปีงบประมาณ ๒๕๕๙

สำนักงานการศึกษาเอกชนอำเภอ.....รือเสาะ.....

ที่	ศูนย์การศึกษาอิสลาม	ประจำมัสยิด	ที่ตั้ง			ผู้สอน			นักเรียน			จำนวนเงิน		ค่าบริหาร มัสยิด (2,000ต่อศูนย์)	ค่าตอบแทน (3,000 ต่อคน)	รวมเงิน อุดหนุนต่อ เดือน
			หมู่	ตำบล	อำเภอ	ชาย	หญิง	รวม	ชาย	หญิง	รวม	เล็ก	ใหญ่			
70	นุรุลอิหม่าม	กือบงซีเร๊ะห์	3	โคกสะตอ	รือเสาะ	1	5	6	77	78	155	/	/	2,000	18,000	20,000
71	คารุณามาน	คารุณามาน	5	โคกสะตอ	รือเสาะ	2	4	6	43	27	70	/	/	2,000	18,000	20,000
72	คารุณายาบาล	คารุณายาบาล	6	โคกสะตอ	รือเสาะ	2	4	6	32	40	72	/	/	2,000	18,000	20,000
73	คารุณามะมูร์	คารุณามะมูร์	7	โคกสะตอ	รือเสาะ	2	4	6	38	26	64	/	/	2,000	18,000	20,000
74	คารุณอิหม่าม	คารุณอิหม่าม	8	โคกสะตอ	รือเสาะ	4	2	6	49	59	108	/	/	2,000	18,000	20,000
75	ฮิเตายาตุลมุสลิม	ฮิเตายาตุลมุสลิม	1	สาวอ	รือเสาะ	1	5	6	53	54	107	/	/	2,000	18,000	20,000
76	นุรุลฮุตา	นุรุลฮุตา	2	สาวอ	รือเสาะ	1	5	6	30	34	64	/	/	2,000	18,000	20,000
77	อูบุดียะห์	อูบุดียะห์	3	สาวอ	รือเสาะ	2	4	6	64	55	119	/	/	2,000	18,000	20,000
78	คารุณอิสลาม	บ้านบูเรียน	4	สาวอ	รือเสาะ	2	4	6	55	38	93	/	/	2,000	18,000	20,000
79	ศรัปียาคุดอิลลาหียะห์	บ้านบือเงาะ	5	สาวอ	รือเสาะ	0	6	6	75	50	125	/	/	2,000	18,000	20,000
80	คารุณศาลิม	คารุณศาลิม	6	สาวอ	รือเสาะ	1	5	6	67	54	121	/	/	2,000	18,000	20,000
81	รากนุคตึน	บือเล๊ะห์	7	สาวอ	รือเสาะ	4	2	6	40	24	64	/	/	2,000	18,000	20,000
			รวมทั้งสิ้น			128	350	478	4,357	3,929	8,286			162,000	1,434,000	1,596,000

ข้อมูลจำนวนนักเรียน แยกชั้น แยกเพศ ประจำปีการศึกษา 2558 ภาคเรียนที่ 1
สำนักงานเขตพื้นที่การศึกษาประถมศึกษาปทุมธานี เขต 1

ข้อมูล ณ วันที่ 10 มิถุนายน 2558

ที่	รหัส SMIS	ชื่อโรงเรียน	เพศ	อ.1	อ.2	รวม	ป.1	ป.2	ป.3	ป.4	ป.5	ป.6	รวม	ม.1	ม.2	ม.3	รวม	รวมทั้งสิ้น
91	96010092	บ้านกาแร	ชาย	11	6	17	20	10	11	11	15	10	77	0	0	0	0	94
			หญิง	15	10	25	9	8	13	9	7	11	57	0	0	0	0	82
			รวม	26	16	42	29	18	24	20	22	21	134	0	0	0	0	176
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
92	96010134	บ้านบางปะแต	ชาย	10	20	30	28	21	31	27	14	19	140	14	7	8	29	199
			หญิง	19	20	39	20	21	13	24	15	9	102	12	13	8	33	174
			รวม	29	40	69	48	42	44	51	29	28	242	26	0	16	62	373
			ห้อง	1	2	3	1	1	1	2	1	1	7	1	1	1	3	13
93	96010135	บ้านสายน้ำทิพย์	ชาย	9	11	20	11	12	9	3	10	8	53	0	0	0	0	73
			หญิง	10	8	18	7	7	3	7	8	13	45	0	0	0	0	63
			รวม	19	19	38	18	19	12	10	18	21	98	0	0	0	0	136
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
94	96010136	บ้านสวนพฤก	ชาย	11	11	22	20	21	23	19	18	12	113	6	0	0	6	141
			หญิง	10	6	16	9	12	10	15	25	19	90	9	7	10	26	132
			รวม	21	17	38	29	33	33	34	43	31	203	15	0	10	32	273
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	1	1	1	3	11
95	96010137	บ้านธรรมเจริญ	ชาย	6	6	12	6	8	5	8	6	4	37	0	0	0	0	49
			หญิง	7	3	10	10	9	7	7	0	5	38	0	0	0	0	48
			รวม	13	9	22	16	17	12	15	6	9	75	0	0	0	0	97
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
96	96010138	บ้านบุตุกาศีเล	ชาย	9	11	20	11	10	17	11	10	12	71	0	0	0	0	91
			หญิง	7	11	18	15	8	13	20	12	17	85	0	0	0	0	103
			รวม	16	22	38	26	18	30	31	22	29	156	0	0	0	0	194
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8

ข้อมูลจำนวนนักเรียน แยกชั้น แยกเพศ ประจำปีการศึกษา 2558 ภาคเรียนที่ 1
 สำนักงานเขตพื้นที่การศึกษาประถมศึกษาปทุมธานี เขต 1

ข้อมูล ณ วันที่ 10 มิถุนายน 2558

ที่	รหัส SMS	ชื่อโรงเรียน	เพศ	อ.1	อ.2	รวม	ป.1	ป.2	ป.3	ป.4	ป.5	ป.6	รวม	ม.1	ม.2	ม.3	รวม	รวมทั้งสิ้น
97	96010139	ประชาพัฒนา	ชาย	3	4	7	11	6	10	6	13	8	54	0	0	0	0	61
			หญิง	2	7	9	4	6	11	9	7	7	44	0	0	0	0	53
			รวม	5	11	16	15	12	21	15	20	15	98	0	0	0	0	114
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
98	96010140	บ้านพนาภิรมย์	ชาย	11	9	20	9	12	16	9	13	15	74	11	8	9	28	122
			หญิง	11	11	22	9	22	22	12	8	15	88	6	3	6	15	125
			รวม	22	20	42	18	34	38	21	21	30	162	17	0	15	43	247
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	1	1	1	3	11
99	96010141	บ้านบางตง	ชาย	13	15	28	12	10	11	9	16	13	71	0	0	0	0	99
			หญิง	5	9	14	7	10	10	12	10	4	53	0	0	0	0	67
			รวม	18	24	42	19	20	21	21	26	17	124	0	0	0	0	166
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
100	96010142	วัดราชบุรุษมิตร (โพธิ์งามวิทยา)	ชาย	24	14	38	30	35	38	33	35	33	204	0	0	0	0	242
			หญิง	16	19	35	23	26	23	32	20	24	148	0	0	0	0	183
			รวม	40	33	73	53	61	61	65	55	57	352	0	0	0	0	425
			ห้อง	2	1	3	2	2	2	2	2	2	12	0	0	0	0	15
101	96010143	บ้านนาคา	ชาย	8	15	23	20	20	28	12	20	22	122	0	0	0	0	145
			หญิง	15	10	25	16	12	23	12	20	13	96	0	0	0	0	121
			รวม	23	25	48	36	32	51	24	40	35	218	0	0	0	0	266
			ห้อง	1	1	2	1	1	2	1	1	1	7	0	0	0	0	9
102	96010144	บ้านเรือเสาะ	ชาย	10	6	16	10	6	6	7	8	9	46	0	0	0	0	62
			หญิง	10	8	18	7	9	5	8	5	9	43	0	0	0	0	61
			รวม	20	14	34	17	15	11	15	13	18	89	0	0	0	0	123
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8

ข้อมูลจำนวนนักเรียน แยกชั้น แยกเพศ ประจำปีการศึกษา 2558 ภาคเรียนที่ 1
 สำนักงานเขตพื้นที่การศึกษาระยองศึกษาธิการจังหวัดระยอง เขต 1

ข้อมูล ณ วันที่ 10 มิถุนายน 2558

ที่	รหัส SMIS	ชื่อโรงเรียน	เพศ	อ.1	อ.2	รวม	ป.1	ป.2	ป.3	ป.4	ป.5	ป.6	รวม	ม.1	ม.2	ม.3	รวม	รวมทั้งสิ้น
103	96010145	บ้านยาแลบ๊ะ	ชาย	4	6	10	8	3	7	6	5	6	35	0	0	0	0	45
			หญิง	5	6	11	4	6	1	4	1	6	22	0	0	0	0	33
			รวม	9	12	21	12	9	8	10	6	12	57	0	0	0	0	78
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
104	96010146	บ้านบางก	ชาย	13	12	25	15	17	17	16	10	13	88	0	0	0	0	113
			หญิง	8	7	15	16	17	12	8	19	11	83	0	0	0	0	98
			รวม	21	19	40	31	34	29	24	29	24	171	0	0	0	0	211
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
105	96010147	บ้านนาโอน	ชาย	2	4	6	9	6	5	5	3	6	34	0	0	0	0	40
			หญิง	5	5	10	4	3	1	2	6	4	20	0	0	0	0	30
			รวม	7	9	16	13	9	6	7	9	10	54	0	0	0	0	70
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
106	96010148	บ้านบุ๊คชัยแร	ชาย	17	18	35	18	32	28	31	33	22	164	0	0	0	0	199
			หญิง	15	17	32	23	33	17	20	21	16	130	0	0	0	0	162
			รวม	32	35	67	41	65	45	51	54	38	294	0	0	0	0	361
			ห้อง	1	1	2	2	2	2	2	2	1	11	0	0	0	0	13
107	96010149	บ้านปลุกกา	ชาย	7	3	10	7	1	4	6	6	3	27	0	0	0	0	37
			หญิง	1	1	2	7	8	3	5	3	1	27	0	0	0	0	29
			รวม	8	4	12	14	9	7	11	9	4	54	0	0	0	0	66
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
108	96010150	บ้านชะมะ(อุปการะวิทยา)	ชาย	17	30	47	47	36	38	39	43	16	219	0	0	0	0	266
			หญิง	20	27	47	34	29	31	25	26	36	181	0	0	0	0	228
			รวม	37	57	94	81	65	69	64	69	52	400	0	0	0	0	494
			ห้อง	2	2	4	2	2	2	2	2	2	12	0	0	0	0	16

ข้อมูลจำนวนนักเรียน แยกชั้น แยกเพศ ประจำปีการศึกษา 2558 ภาคเรียนที่ 1
สำนักงานเขตพื้นที่การศึกษาประถมศึกษาปทุมธานี เขต 1

ข้อมูล ณ วันที่ 10 มิถุนายน 2558

ที่	รหัส SMS	ชื่อโรงเรียน	เพศ	อ.1	อ.2	รวม	ป.1	ป.2	ป.3	ป.4	ป.5	ป.6	รวม	ม.1	ม.2	ม.3	รวม	รวมทั้งสิ้น
109	96010151	บ้านกาโบดะ	ชาย	11	19	30	16	13	7	12	19	8	75	0	0	0	0	105
			หญิง	18	11	29	7	12	14	14	9	9	65	0	0	0	0	94
			รวม	29	30	59	23	25	21	26	28	17	140	0	0	0	0	199
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
110	96010152	บ้านตาเมาะ	ชาย	6	11	17	11	12	8	12	14	8	65	0	0	0	0	82
			หญิง	8	9	17	20	13	6	11	8	10	68	0	0	0	0	85
			รวม	14	20	34	31	25	14	23	22	18	133	0	0	0	0	167
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
111	96010153	บ้านตาเมาะฮิล	ชาย	5	8	13	16	11	14	15	10	7	73	0	0	0	0	86
			หญิง	7	11	18	13	9	8	13	10	7	60	0	0	0	0	78
			รวม	12	19	31	29	20	22	28	20	14	133	0	0	0	0	164
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
112	96010154	บ้านตะแบงะ	ชาย	5	1	6	8	6	8	5	2	5	34	0	0	0	0	40
			หญิง	3	10	13	5	3	1	6	8	10	33	0	0	0	0	46
			รวม	8	11	19	13	9	9	11	10	15	67	0	0	0	0	86
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
113	96010155	บ้านสุเน๊ะ	ชาย	8	6	14	7	4	10	9	9	4	43	0	0	0	0	57
			หญิง	5	9	14	15	6	5	11	11	11	59	0	0	0	0	73
			รวม	13	15	28	22	10	15	20	20	15	102	0	0	0	0	130
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
114	96010156	บ้านซ้อเอาะ	ชาย	5	18	23	10	10	21	12	9	9	71	0	0	0	0	94
			หญิง	10	11	21	1	8	12	7	10	11	49	0	0	0	0	70
			รวม	15	29	44	11	18	33	19	19	20	120	0	0	0	0	164
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8

ข้อมูลจำนวนนักเรียน แยกชั้น แยกเพศ ประจำปีการศึกษา 2558 ภาคเรียนที่ 1
สำนักงานเขตพัฒนาการศึกษาประถมศึกษาประถมศึกษาปทุมธานี เขต 1

ข้อมูล ณ วันที่ 10 มิถุนายน 2558

ที่	รหัส SMIS	ชื่อโรงเรียน	เพศ	อ.1						อ.2						รวม	ป.1						ป.2						ป.3						ป.4						ป.5						ป.6						รวม	ม.1	ม.2	ม.3	รวม	รวมทั้งสิ้น
				ชาย	หญิง	รวม		ชาย	หญิง	รวม																																																
115	96010157	บ้านสุโษะบุโธ	ชาย	18	9	27	18	14	32	14	16	30	12	18	30	14	14	28	10	12	22	12	11	23	10	10	20	12	12	24	13	23	36	12	11	23	12	11	23	121	0	0	0	0	148													
			หญิง	9	15	24	14	12	26	18	13	31	18	23	41	16	17	33	12	17	29	14	14	28	14	14	28	10	10	20	13	23	36	12	11	23	102	0	0	0	0	126																
			รวม	27	24	51	32	26	58	32	29	61	30	34	64	26	29	55	22	29	51	26	25	51	24	24	48	22	22	44	26	36	62	24	22	46	223	0	0	0	0	274																
			ห้อง	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	6	0	0	0	0	8																			
116	96010158	บ้านอินท	ชาย	1	11	12	18	19	37	19	21	40	14	14	28	10	12	22	12	12	24	11	11	22	10	10	20	12	11	23	18	18	36	9	0	0	0	0	110																			
			หญิง	6	5	11	12	14	26	14	14	28	10	14	24	8	8	16	12	12	24	10	10	20	12	12	24	10	10	20	13	13	26	7	0	0	0	0	81																			
			รวม	7	16	23	30	33	63	33	35	68	24	28	52	20	22	42	22	24	46	21	21	42	22	22	44	22	21	43	31	31	62	16	0	0	0	0	191																			
			ห้อง	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	6	0	0	0	0	8																						
117	96010159	บ้านคู	ชาย	33	19	52	23	26	49	26	30	56	12	11	23	11	11	22	11	11	22	8	8	16	10	10	20	12	11	23	17	17	34	12	0	0	0	0	179																			
			หญิง	37	15	52	30	26	56	26	20	46	23	17	40	14	17	31	17	17	34	11	11	22	17	17	34	14	14	28	14	14	28	7	0	0	0	0	193																			
			รวม	70	34	104	53	52	105	52	50	102	35	28	63	25	28	53	28	28	56	19	19	38	27	27	54	24	24	48	31	31	62	19	0	0	0	0	372																			
			ห้อง	2	1	3	2	2	4	2	2	4	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	10	0	0	0	0	13																						
118	96010160	บ้านปริษ	ชาย	7	10	17	6	12	18	12	20	14	9	8	17	8	8	16	11	11	22	6	6	12	10	10	20	12	11	23	18	18	36	12	6	7	25	111																				
			หญิง	5	13	18	4	9	13	4	4	11	11	11	11	11	11	22	11	11	22	7	7	14	5	5	10	7	7	14	4	4	8	7	4	17	85																					
			รวม	12	23	35	10	21	31	16	24	25	20	19	19	19	19	38	22	22	44	13	13	26	15	15	30	13	12	25	22	22	44	19	11	42	196																					
			ห้อง	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	6	1	1	3	11																							
119	96010161	บ้านป้อม	ชาย	7	6	13	12	11	23	16	16	32	18	15	33	9	9	18	15	14	29	6	6	12	10	10	20	12	11	23	17	17	34	9	0	0	0	0	108																			
			หญิง	12	9	21	12	12	24	9	12	21	9	14	23	9	9	18	14	14	28	6	6	12	10	10	20	12	11	23	16	16	32	0	0	0	0	89																				
			รวม	19	15	34	24	23	47	25	28	53	27	29	56	15	18	33	29	28	57	12	12	24	20	24	44	24	22	46	33	33	66	9	0	0	0	197																				
			ห้อง	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	6	0	0	0	0	8																						
120	96010162	ชุมชนสัมพันธ์บ้าน	ชาย	12	15	27	19	20	39	16	18	34	12	11	23	9	9	18	11	11	22	6	6	12	10	10	20	12	11	23	17	17	34	9	0	0	0	0	123																			
			หญิง	14	10	24	16	17	33	15	9	24	16	14	30	8	8	16	14	14	28	6	6	12	10	10	20	12	11	23	16	16	32	0	0	0	0	111																				
			รวม	26	25	51	35	37	72	31	27	58	28	25	53	24	23	47	24	25	49	12	12	24	20	20	40	24	22	46	33	33	66	9	0	0	0	234																				
			ห้อง	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	6	0	0	0	0	8																						

ข้อมูลจำนวนนักเรียน แยกชั้น แยกเพศ ประจำปีการศึกษา 2558 ภาคเรียนที่ 1
สำนักงานเขตพื้นที่การศึกษาประถมศึกษาปทุมธานี เขต 1

ข้อมูล ณ วันที่ 10 มิถุนายน 2558

ที่	รหัส SMS	ชื่อโรงเรียน	เพศ	อ.1	อ.2	รวม	ป.1	ป.2	ป.3	ป.4	ป.5	ป.6	รวม	ม.1	ม.2	ม.3	รวม	รวมทั้งสิ้น
121	96010163	บ้านมะม่วงป้อม	ชาย	11	10	21	13	14	12	18	9	17	83	21	10	6	37	141
			หญิง	10	8	18	4	16	7	14	4	9	54	13	14	7	34	106
			รวม	21	18	39	17	30	19	32	13	26	137	34	0	13	71	247
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	1	1	1	3	11
122	96010164	บ้านบางปูละ	ชาย	21	22	43	34	20	19	16	23	26	138	0	0	0	0	181
			หญิง	33	22	55	27	29	19	28	20	26	149	0	0	0	0	204
			รวม	54	44	98	61	49	38	44	43	52	287	0	0	0	0	385
			ห้อง	2	2	4	2	1	1	1	2	1	8	0	0	0	0	12
123	96010165	บ้านสะพาน	ชาย	8	5	13	21	9	15	19	16	15	95	0	0	0	0	108
			หญิง	8	12	20	7	21	8	21	10	19	86	0	0	0	0	106
			รวม	16	17	33	28	30	23	40	26	34	181	0	0	0	0	214
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
124	96010166	บ้านตอแย	ชาย	6	9	15	10	3	5	6	8	1	33	0	0	0	0	48
			หญิง	5	4	9	4	2	2	3	2	4	17	0	0	0	0	26
			รวม	11	13	24	14	5	7	9	10	5	50	0	0	0	0	74
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
125	96010167	บ้านสาอา	ชาย	6	2	8	9	5	13	7	10	15	59	0	0	0	0	67
			หญิง	2	3	5	4	9	3	6	4	7	33	0	0	0	0	38
			รวม	8	5	13	13	14	16	13	14	22	92	0	0	0	0	105
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
126	96010168	บ้านจือแร	ชาย	7	12	19	13	12	17	13	8	11	74	0	0	0	0	93
			หญิง	8	7	15	12	5	13	9	8	4	51	0	0	0	0	66
			รวม	15	19	34	25	17	30	22	16	15	125	0	0	0	0	159
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8

ข้อมูลจำนวนนักเรียน แยกชั้น แยกเพศ ประจำปีการศึกษา 2558 ภาคเรียนที่ 1
 สำนักงานเขตพื้นที่การศึกษาระยองศึกษาธิการจังหวัดระยอง เขต 1

ข้อมูล ณ วันที่ 10 มิถุนายน 2558

ที่	รหัส SMIS	ชื่อโรงเรียน	เพศ	อ.1	อ.2	รวม	ป.1	ป.2	ป.3	ป.4	ป.5	ป.6	รวม	ม.1	ม.2	ม.3	รวม	รวมทั้งสิ้น
127	96010169	บ้านมือและห้	ชาย	7	6	13	14	7	7	6	5	9	48	0	0	0	0	61
			หญิง	7	9	16	7	8	5	11	9	7	47	0	0	0	0	63
			รวม	14	15	29	21	15	12	17	14	16	95	0	0	0	0	124
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
128	96010170	บ้านตาซา	ชาย	14	15	29	17	15	19	16	10	18	95	0	0	0	0	124
			หญิง	8	20	28	12	23	15	19	12	16	97	0	0	0	0	125
			รวม	22	35	57	29	38	34	35	22	34	192	0	0	0	0	249
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
129	96010171	บ้านยี่ถาแป	ชาย	16	18	34	47	30	18	32	26	41	194	0	0	0	0	228
			หญิง	14	25	39	37	31	23	31	15	25	162	0	0	0	0	201
			รวม	30	43	73	84	61	41	63	41	66	356	0	0	0	0	429
			ห้อง	1	2	3	2	2	1	2	1	2	10	0	0	0	0	13
130	96010172	บ้านต้อมพะยี่	ชาย	18	18	36	21	23	27	17	28	16	132	0	0	0	0	168
			หญิง	18	15	33	24	19	13	14	20	15	105	0	0	0	0	138
			รวม	36	33	69	45	42	40	31	48	31	237	0	0	0	0	306
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
131	96010173	บ้านป้อมสิงห์	ชาย	4	5	9	5	6	9	12	4	12	48	0	0	0	0	57
			หญิง	3	3	6	7	8	6	11	8	6	46	0	0	0	0	52
			รวม	7	8	15	12	14	15	23	12	18	94	0	0	0	0	109
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8
132	96010174	ประจักษ์วิทยารังสรรค์	ชาย	12	11	23	14	14	15	18	16	14	91	0	0	0	0	114
			หญิง	9	10	19	19	12	10	15	13	11	80	0	0	0	0	99
			รวม	21	21	42	33	26	25	33	29	25	171	0	0	0	0	213
			ห้อง	1	1	2	1	1	1	1	1	1	6	0	0	0	0	8

謝辞

本研究は、著者が同志社大学大学院グローバル・スタディーズ研究科博士後期課程在学中に、同大学院内藤正典教授の指導のもと、中西久枝教授、小山田英治教授を副査として行われました。

この博士論文をまとめるにあたり、数えきれない方々のご支援とご協力を賜りました。チュラロンコーン大学人口学研究所のパッチャラワライ・ウォンブーシン教授には、タイ留学時に受入れていただいたのみならず、日本に帰国した後の博士論文執筆時に至るまで、公私ともに大きく支えていただきました。同研究所のモンタカーン・チンマミー博士とニケイア・カシエ博士は、常に優しさと厳しさをもってアドバイスをくださり、目標とすべき素晴らしい研究者に出会えたことを有り難く感じています。

深南部における現地調査は困難続きでしたが、多くの出会いによって実り多いものとなりました。ソクラーナカリン大学イスラーム学研究所のダルウィッシュ・モワアド先生、ムスリマ・モワアド先生ご夫妻の支援により、パッターニーでの暮らしをスムーズに始めることができました。同研究所のイスラーム教育の専門家であるイブラヒム・ナロンラクサケット教授は、深南部のイスラーム教育をよく理解していない私に対して、質問に行くたびに丁寧に指導をしてくださいました。また、パッターニーの大学前通りを自転車で走っていた時に偶然出会ったケンブリッジ大学の大学院生パッカモル・シリワット氏とは、テーマも関心も似ていることもあり、多くのことを語り合い、刺激を受けることができました。ナラティワート県ルソで調査のアシスタントを引き受けてくださった、ニウェサ・ニンゴさんの助力が無ければ、ルソでの現地調査をすることができませんでした。調査で出会ったたくさんの方々のお顔を思い出しながら、ここに名前を記すことができなかつた方々にも、謹んで御礼申し上げます。

最後に、このテーマで調査をするきっかけを与えてくださった橋本卓・泰子教授、法学部の先輩方、素晴らしい友人たち、そして何も言わずに応援してくれた両親の存在なくしては、この論文を書くことができなかつたことは明らかです。ここに研究者としてのスタート地点に立てたことに感謝すると共に、これからも精進していくことを約束して謝辞に代えさせていただきます。

2016年11月 京都にて
西 直美